

谷内遺跡

—県営畑地帯総合整備事業（舟山地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2019

新潟県魚沼市教育委員会

谷^や内^ち遺跡

—県営畑地帯総合整備事業（舟山地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2 0 1 9

新潟県魚沼市教育委員会



調査区全景 南から



調査区全景 北から



SK406 遺物出土状況 南西から



SK406 出土土器 (左から 300・297・299)



頁岩

160



頁岩

154



頁岩

161



頁岩

165



頁岩

212



頁岩

203



頁岩

197



頁岩

412



珪質頁岩

171



凝灰岩

263



砂岩

217



砂岩

441



チャート

164



チャート

337



チャート

193



珪化岩

391



珪化岩

407



鉄石英(赤)

390



鉄石英(赤)

410



鉄石英(黄)

414



163

黒曜石(星ヶ塔産)



黒曜石(大白川産)



206

無斑晶ガラス質安山岩



432

無斑晶ガラス質安山岩



179

安山岩



183

安山岩



234

安山岩



242

多孔質安山岩



439

多孔質安山岩



167

石英含有輝石安山岩



181

石英含有輝石安山岩



211

流紋岩



426

流紋岩



182

緑色片岩



195

緑色片岩



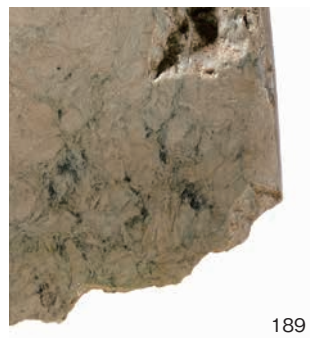
422

変斑レイ岩



266

緑泥片岩



189

蛇紋岩類



190

蛇紋岩類



267

ヒスイ

序

新潟県魚沼市は、県の南東部、福島県との県境地域に位置し、破間川と魚野川が貫流しています。両河川によって形成された河岸段丘、沖積地及び中山間地には旧石器時代～近世に至るまで 291 遺跡が所在しています。

魚沼市教育委員会では、県営圃場整備事業をはじめ開発行為に伴い、失われていく埋蔵文化財の保存と保護に努めております。本書は、事業に伴って実施した「谷内遺跡」の発掘調査報告書です。

谷内遺跡は、平成 26 年度に調査した縄文時代中期末葉～後期前葉を中心とした集落遺跡で、大量の遺構・遺物が発掘されました。主な遺構では堅穴住居や、堀立柱建物、土坑などが多く検出され、遺物では、在地の沖ノ原式、三十稲場式をはじめ、関東、中部高地、東北地方の縄文土器と、信州産黒曜石を用いた石鏃や翡翠製の石製品、土偶や三角形土製品などが出土しました。また、地元大白川産黒曜石の破片も出土し、これらの資料は他地域との交流や当時の人々の生活様式を知るうえで重要です。

文化遺産を記録・保存し未来に継承することは、現代に生きる我々に課せられた責務です。本書が文化財保護に対する理解を広め、地域の歴史を解明するための資料として広く活用していただければ幸いです。

最後に、炎天下の中、献身的に発掘作業をして頂いた作業員の方々と整理作業から報告書編集で御協力頂いた関係各位に感謝申し上げます。また、発掘調査の計画段階から実施に至るまで、格別の御配慮を賜った新潟県魚沼地域振興局農業振興部に対しまして、ここに深甚なる謝意を申し上げます。

平成 31 年 3 月

魚沼市教育委員会

教育長 梅 田 勝

例 言

1. 本書は、新潟県魚沼市吉水字谷内 1942 番地ほかに所在する谷内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県営畑地帯総合整備事業に伴い、新潟県教育庁文化行政課から御指導を頂き、魚沼市教育委員会が新潟県魚沼地域振興局農業振興部と魚沼市役所農林課及び魚沼市土地改良区の協力を得て実施した。
3. 魚沼市教育委員会は、直営で掘削作業等を行い、2014（平成 26）年度に発掘調査を実施した。発掘調査面積は、655㎡である。
4. 確認調査、発掘調査ならびに出土品整理作業の期間は次の通りである。

確認調査 2012 年（平成 24）年 11 月 4 日、5 日

2013 年（平成 25）年 10 月 7 日～9 日、11 月 6 日～15 日

2014 年（平成 26）年 6 月 2 日～4 日、8 月 4 日～12 日、10 月 8 日～16 日

発掘調査 2014 年（平成 26）年 6 月 5 日～9 月 27 日

整理作業 2014 年（平成 26）年 6 月 6 日～2015 年（平成 27）年 3 月 6 日

2015 年（平成 27）年 4 月 22 日～2016 年（平成 28）年 3 月 11 日

2016 年（平成 28）年 4 月 25 日～2017 年（平成 29）年 3 月 10 日

2017 年（平成 29）年 5 月 10 日～2018 年（平成 30）年 3 月 9 日

2018 年（平成 30）年 5 月 16 日～2019 年（平成 31）年 3 月 8 日

5. 遺跡発掘調査の組織は、次の通りである。

＜確認調査（平成 24 年度）＞

調 査 主 体 魚沼市教育委員会 教 育 長 松原 道子（～平成 25 年 2 月 24 日）

教育長職務代理 富永 弘（平成 25 年 2 月 25 日～3 月 31 日）

事 務 局 魚沼市教育委員会生涯学習課（課長 小林 雅巳）

調 査 担 当 高木 公輔 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 主任

調査補助員 江端 恵理

調査作業員 石塚 久吉 今村 朱 金沢 幹雄 平井 猛夫 星 昌利

整理作業員 大桃恵里菜 桑原真由美 鈴木美香子 武藤 智子

＜確認調査（平成 25 年度）＞

調 査 主 体 魚沼市教育委員会 教 育 長 星 勉（平成 25 年 4 月 1 日～）

事 務 局 魚沼市教育委員会生涯学習課（課長 小林 雅巳）

調 査 担 当 高木 公輔 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 主任

調 査 員 江端 恵理 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 非常勤職員

調査作業員 石塚 久吉 柘桂 紳吾 平井 猛夫 星 昌利 山本 信夫

整理作業員 今村 朱 大桃恵里菜

＜確認調査（平成 26 年度）＞

調 査 主 体 魚沼市教育委員会 教 育 長 星 勉

事 務 局 魚沼市教育委員会生涯学習課（課長 八海 昭夫）

調 査 担 当 高木 公輔 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 主任

調 査 員 江端 恵理 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 非常勤職員

調査作業員 穴沢 武雄 石塚 久吉 大屋 篤史 金沢 幹雄 上村 真也 上村 知之

佐藤 豊彦 滝沢 敏夫 登坂 良太 人見 優太 星 昌利 八木 孝運

八木 将晴 柳瀬 昭平

整理作業員 石塚美千代 今村 朱 大桃恵里菜 櫻井 妙子 神保 友子 橘 千鶴

橘 尚枝 橘 美子 外山 緑

＜発掘調査（平成 26 年度）＞

調査主体 魚沼市教育委員会 教 育 長 星 勉
 事 務 局 魚沼市教育委員会生涯学習課（課長 八海 昭夫）
 調査担当 高木 公輔 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 主任
 調査員 桑原 健 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 非常勤職員
 江端 恵理 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 非常勤職員
 調査作業員 穴沢 武雄 大屋 篤史 金沢 幹雄 上村 真也 上村 知之 櫻井 妙子
 佐藤 彰 佐藤 豊彦 滝沢 敏夫 橘 千鶴 橘 尚枝 登坂 良太
 菰沢 達也 人見 優太 星 昌利 星 武 星野 幸一 八木 孝運
 八木 将晴 柳瀬 昭平
 調査補助員 今井 朱 橘 美子
 整理作業員 穴沢 忍 石塚美千代 今村 朱 大桃恵理菜 櫻井 妙子 橘 千鶴
 橘 尚枝 外山 縁

整理作業および報告書作成

<第1次整理作業（平成27年度）>

調査主体 魚沼市教育委員会 教 育 長 星 勉
 事 務 局 魚沼市教育委員会生涯学習課（課長 星野 隆）
 整理担当 高木 公輔 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 主任
 整理調査員 桑原 健 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 非常勤職員
 整理作業員 今村 朱 桃沢 碧 上村 知之 橘 千鶴 橘 尚枝 橘 美子
 外山 縁 星 昌利 森山 信江

<第2次整理作業（平成28年度）>

調査主体 魚沼市教育委員会 教 育 長 星 勉（平成28年4月1日～12月31日）
 教育長職務代理 橘 裕一（平成29年1月1日～3月31日）
 事 務 局 魚沼市教育委員会生涯学習課（課長 星野 隆）
 整理担当 高木 公輔 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 主任
 整理調査員 桑原 健 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 非常勤職員
 整理作業員 大屋 篤史 上村 知之 橘 美子 星 昌利

<第3次整理作業（平成29年度）>

調査主体 魚沼市教育委員会 教 育 長 梅田 勝（平成29年4月1日～）
 事 務 局 魚沼市教育委員会生涯学習課（課長 星 敏夫）
 整理担当 高木 公輔 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 主任
 整理調査員 桑原 健 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 非常勤職員

<第4次整理作業（平成30年度）>

整理主体 魚沼市教育委員会 教 育 長 梅田 勝
 事 務 局 魚沼市教育委員会生涯学習課（課長 星 敏夫）
 整理担当 高木 公輔 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 主任
 整理調査員 桑原 健 魚沼市教育委員会生涯学習課文化財係 非常勤職員
 整理作業員 石塚美千代 橘 美子 星 昌利 森山 信江

6. 出土遺物と発掘調査に関する図面・写真記録等は、すべて魚沼市教育委員会が保管している。
7. 遺物の注記は、谷内遺跡をカタカナで「ヤチ」とした。また、出土地点および層位を併記した。
8. 縄文土器（報告番号322）の付着物に関して、沢田 敦氏（（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団）を通し分析を依頼した。その成果は「沢田2018」で公表されており、ここではその成果を引用した。
9. 調査区のグリッド設定は、（株）米山測量設計に委託し、また遺跡の空中写真撮影については、（株）イビソクに委託した。
10. 縄文土器の実測・トレース・写真撮影は（株）大石組に委託した。石器の実測・トレースは、（株）シン技術コン

サル及び藤村ヒューム管（株）に委託し、一部を桑原 健が行った。石器の写真撮影は（株）シン技術コンサルに委託した。

11. 本書の編集は、デジタル編集とし、平成 29 年度に（株）大石組に委託した。編集は南波 守（株大石組）が行い、高木公輔・桑原 健が総括した。

12. 本書の執筆は、高木公輔・桑原 健が行った。執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章 高木公輔

第Ⅱ～Ⅶ章、第Ⅷ章 桑原 健

なお、第Ⅳ章第 2 節は、桑原と南波が協議し桑原が執筆した。

13. 自然科学分析（第Ⅶ章）は、パリノ・サーヴェイ（株）に委託して行った。なお原稿の一部については魚沼市教育委員会が加筆修正したため、文責は全て魚沼市教育委員会にある。

14. 図版中の方位は、特に示さない限り、真上が北である。

15. 発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の皆様並びに機関から御指導と御協力をいただいた。ここに記して御礼申し上げます。

（敬称略）

安立 聡	阿部 昭典	阿部 敬	石岡 智武	石坂 圭介	今井 哲哉	岩瀬 彬
大久保 聡	小熊 博史	長田 友也	織笠 明子	笠井 洋祐	加藤 学	勝山 百合
鹿又 喜隆	河手美綾子	木島 勉	久保田健太郎	熊木 里子	倉石 広大	坂本 勝一
佐藤 信之	佐藤 雅一	沢田 敦	渋谷賢太郎	白井 雅明	菅沼 亘	鈴木 俊成
高橋 保	高橋 春栄	高橋 保雄	竹之内 耕	谷口 康浩	千葉 博俊	鶴田 浩規
寺崎 裕助	土橋由理子	中村 由克	萩谷 千明	秦 昭繁	森先 一貴	吉井 雅勇

（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 新潟県魚沼地域振興局 （株）井上土建 （株）イビソク
（株）大石組 （株）シン技術コンサル パリノ・サーヴェイ（株） 藤村ヒューム管（株）
（株）米山測量設計 （有）向田農園






凡 例

1. 遺構図・遺物図中のスクリーントーン・記号は以下のものを指す。

遺構図版： 地山  炉（焼土）  炭化物 ● 土器ドット ○ 石器ドット

遺物図版

土器： 赤彩  剥落 土製品： 研磨痕

石器： 節理面  敲打痕  磨痕・研磨痕・使用痕  被熱痕  付着物

2. 遺物の番号および縮尺は、図面図版と写真図版で統一してある。

3. 土層および遺物の色調観察は、『新版 標準土色帖』1998・2004 年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を用いた。

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡周辺の地理的環境と歴史的環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の経緯と概要	8
1 確認調査	8
2 本調査	8
A A 区	8
B B 区	10
3 グリッドの設定と基本層序	10
4 検出遺構と出土遺物の概要	12
第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物の分類	13
1 検出遺構の分類	13
A 記述の方法	13
B 遺構の分類	13
1) 竪穴住居 (SI)	13
2) 掘立柱建物 (SB)	13
3) 埋設土器 (SH)	13
4) 自然流路 (SD)	13
5) 土坑 (SK)・ピット (P)	14
6) 性格不明遺構 (SX)	14
2 土器・土製品の分類	15
A 概要	15
B 資料の抽出および図化方法	15
1) 資料の抽出	15
2) 図化方法	15
C 観察表項目	16
D 土器の分類	18
1) 器種および器形	18
2) 系統と時期	20
E 土製品の分類	22
3 石器・石製品と石材の分類	23
A 資料の提示方法	23
B 用語について	23
C 石器の分類	23
1) 石 鎌	25
2) 尖頭器	26
3) 石 錐	26
4) 板状石器	26
5) 両極石器	27
6) 打製石斧	27
7) 磨製石斧	27
8) 不定形石器	28
9) 石 核	29
10) 礫 器	29
11) 石 錘	30
12) 磨石類	30
13) 石 皿	30
14) 台 石	31

15) 砥 石	32	16) 石 棒	32
17) 石 製 品	32	18) 不明石器	33
D 石器石材について	33		
1) 石材分類について	33	2) 田河川流域の石材環境について	33
3) 小結 ―石材調査のまとめ―	34		

第Ⅴ章 A 区

1 検出遺構	37
A 概 要	37
B 竪穴住居	37
C 掘立柱建物	38
D 埋設土器	38
E 土 坑	38
F ピ ッ ト	39
G 自然流路	39
2 出土遺物	40
A 土 器	40
1) 概 要	40
2) 各 説	40
B 土 製 品	44
C 石器・石製品	45
1) 概 要	45
2) 各 説	45

第Ⅵ章 B 区

1 検出遺構	57
A 概 要	57
B 竪穴住居	57
C 掘立柱建物	57
D 土 坑	58
E ピ ッ ト	58
2 出土遺物	59
A 土 器	59
1) 概 要	59
2) 各 説	59
B 土 製 品	63
C 石器・石製品	64
1) 概 要	64
2) 各 説	64

第Ⅶ章 自然科学分析

1 種実遺体同定	73
A 試 料	73
B 分析方法	73
C 結 果	73
D 考 察	75
2 骨 同 定	76
A 試 料	76

B 分析方法	76
C 結 果	76
1) SI333 炉	76
2) SK406	76
D 考 察	77
3 黒曜石産地推定	77
A 試 料	77
B 分析方法	78
1) エネルギー分散型蛍光X線分析装置 (EDX) による測定	78
2) 産地推定方法	78
C 結 果	81
第Ⅳ章 ま と め	87
1 谷内遺跡出土土器の編年的位置付け	87
A 各時期の様相	87
B 小 結	92
2 谷内遺跡の石材利用について	93
A 出土石器の石材利用について	93
B 小 結	94
3 総 括	95
《引用・参考文献》	96
《観察表》	99
遺構観察表	99
土器・土製品観察表	103
石器・石製品観察表	122

挿 図 目 次

第 1 図 谷内遺跡の位置 (S=1/6,000)	1	第 16 図 石器の分類 (1)	24
第 2 図 遺跡周辺の段丘分布図	2	第 17 図 石器の分類 (2)	25
第 3 図 谷内遺跡周辺の地質	3	第 18 図 石鏃の分類	26
第 4 図 遺跡周辺の段丘対比表	5	第 19 図 石錐の分類	26
第 5 図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/100,000)	6	第 20 図 板状石器の分類	27
第 6 図 谷内遺跡確認調査位置図 (S=1/3,000)	9	第 21 図 両極石器の分類	27
第 7 図 グリッド設定と基本層序位置図 (S=1/1,500)	11	第 22 図 打製石斧の分類	28
第 8 図 基本層序 (S=1/40)	11	第 23 図 磨製石斧の分類	28
第 9 図 土坑・ピット平面・断面形態分類図	14	第 24 図 不定形石器の分類	29
第 10 図 主な実測図の表現方法	15	第 25 図 石錘の分類	30
第 11 図 土器および土製品法量計測方法	16	第 26 図 磨石類の分類	31
第 12 図 本報告書で使用した主な文様名称	17	第 27 図 石皿の分類	31
第 13 図 器種の分類と部位名称	18	第 28 図 台石の分類	32
第 14 図 器形の分類	19	第 29 図 砥石の分類	32
第 15 図 計測部位	23	第 30 図 谷内遺跡周辺の石材調査地点	35
		第 31 図 調査地点別の河床礫分布状況	36

第 32 図	ピット法量分布図	39	第 46 図	両極石器分類・石材別法量分布図	67
第 33 図	石鏃分類・石材別法量分布図	46	第 47 図	石核石材別法量分布図	69
第 34 図	石錐分類・石材別法量分布図	47	第 48 図	石錘分類・石材別法量分布図	70
第 35 図	板状石器石材別法量分布図	48	第 49 図	磨石類分類・石材別法量分布図	71
第 36 図	両極石器分類・石材別法量分布図	49	第 50 図	黒曜石産地分布図	79
第 37 図	打製石斧分類・石材別法量分布図	50	第 51 図	黒曜石産地推定結果（1）	82
第 38 図	石核石材別法量分布図	52	第 52 図	黒曜石産地推定結果（2）	83
第 39 図	礫器石材別法量分布図	52	第 53 図	炭化種実	85
第 40 図	石錘分類・石材別法量分布図	53	第 54 図	出土骨	86
第 41 図	磨石類分類・石材別法量分布図	55	第 55 図	黒曜石産地推定試料	86
第 42 図	ピット法量分布図	58	第 56 図	谷内遺跡出土土器編年図（在地系）	88
第 43 図	石鏃分類・石材別法量分布図	65	第 57 図	谷内遺跡出土土器編年図（外来系）	89
第 44 図	石錐石材別法量分布図	66	第 58 図	SK406 主要遺物出土状況	91
第 45 図	板状石器分類・石材別法量分布図	67	第 59 図	谷内遺跡及び周辺遺跡出土の鉢（S=1/8）	92

表 目 次

第 1 表	遺跡一覧表	7	第 20 表	石鏃分類・石材別組成表	65
第 2 表	確認調査新旧トレンチ対応表	9	第 21 表	石錐分類・石材別組成表	66
第 3 表	本報告書で使用した主な文様名称一覧	17	第 22 表	板状石器分類・石材別組成表	66
第 4 表	系統および時期区分表	21	第 23 表	両極石器分類・石材別組成表	67
第 5 表	地点別採取石材一覧	34	第 24 表	打製石斧分類・石材別組成表	68
第 6 表	器種・石材組成表	45	第 25 表	磨製石斧分類・石材別組成表	68
第 7 表	石鏃分類・石材別組成表	46	第 26 表	不定形石器素材別・石材別分類組成表	68
第 8 表	石錐分類・石材別組成表	47	第 27 表	不定形石器加工別・石材別分類組成表	69
第 9 表	両極石器分類・石材別組成表	48	第 28 表	石錘分類・石材別組成表	70
第 10 表	打製石斧分類・石材別組成表	49	第 29 表	磨石類分類・石材別組成表	71
第 11 表	磨製石斧分類・石材別組成表	50	第 30 表	石皿分類・石材別組成表	72
第 12 表	不定形石器素材別・石材別分類組成表	51	第 31 表	台石分類・石材別組成表	72
第 13 表	不定形石器加工別・石材別分類組成表	51	第 32 表	砥石分類・石材別組成表	72
第 14 表	石錘分類・石材別組成表	53	第 33 表	種実遺体同定結果	75
第 15 表	磨石類分類・石材別組成表	54	第 34 表	骨同定結果	77
第 16 表	石皿分類・石材別組成表	55	第 35 表	黒曜石産地推定試料一覧	77
第 17 表	台石分類・石材別組成表	56	第 36 表	黒曜石原産地試料一覧	80
第 18 表	砥石分類・石材別組成表	56	第 37 表	元素 X 線強度（cps）と判別指標値	81
第 19 表	器種・石材組成表	64	第 38 表	判別分析結果	81

図版目次

図版 1	調査区全体図	図版 45	B区 出土石器 (1)
図版 2	A区 全体図	図版 46	B区 出土石器 (2)
図版 3	A区 分割図 (1)	図版 47	B区 出土石器 (3)
図版 4	A区 分割図 (2)	図版 48	航空写真
図版 5	A区 分割図 (3)	図版 49	A区 調査写真 (1)
図版 6	A区 分割図 (4)	図版 50	A区 調査写真 (2)
図版 7	A区 分割図 (5)	図版 51	A区 調査写真 (3)
図版 8	A区 分割図 (6)	図版 52	A区 調査写真 (4)
図版 9	A区 分割図 (7)	図版 53	A区 調査写真 (5)
図版 10	A区 遺構個別図 (1)	図版 54	A区 調査写真 (6)
図版 11	A区 遺構個別図 (2)	図版 55	A区 調査写真 (7)
図版 12	A区 遺構個別図 (3)	図版 56	B区 調査写真 (1)
図版 13	A区 遺構個別図 (4)	図版 57	B区 調査写真 (2)
図版 14	B区 全体図	図版 58	B区 調査写真 (3)
図版 15	B区 分割図 (1)	図版 59	B区 調査写真 (4)
図版 16	B区 分割図 (2)	図版 60	B区 調査写真 (5)
図版 17	B区 遺構個別図 (1)	図版 61	B区 調査写真 (6)
図版 18	B区 遺構個別図 (2)	図版 62	B区 調査写真 (7)
図版 19	B区 遺構個別図 (3)	図版 63	A区 遺構出土土器写真 (1)
図版 20	B区 遺構個別図 (4)	図版 64	A区 遺構出土土器写真 (2)
図版 21	B区 遺構個別図 (5)	図版 65	A区 遺構出土土器写真 (3)
図版 22	A区 遺構出土土器 (1)	図版 66	A区 遺構出土土器写真 (4)・包含層出土土器写真 (1)
図版 23	A区 遺構出土土器 (2)	図版 67	A区 包含層出土土器写真 (2)
図版 24	A区 遺構出土土器 (3)	図版 68	A区 包含層出土土器写真 (3)
図版 25	A区 遺構出土土器 (4)	図版 69	A区 包含層出土土器写真 (4)・出土土製品写真
図版 26	A区 遺構出土土器 (5)	図版 70	A区 出土石器写真 (1)
図版 27	A区 包含層出土土器 (1)	図版 71	A区 出土石器写真 (2)
図版 28	A区 包含層出土土器 (2)	図版 72	A区 出土石器写真 (3)
図版 29	A区 包含層出土土器 (3)	図版 73	A区 出土石器写真 (4)
図版 30	A区 包含層出土土器 (4)	図版 74	A区 出土石器写真 (5)
図版 31	A区 包含層出土土器 (5)・出土土製品	図版 75	A区 出土石器写真 (6)
図版 32	A区 出土石器 (1)	図版 76	A区 出土石器写真 (7)
図版 33	A区 出土石器 (2)	図版 77	B区 遺構出土土器写真 (1)
図版 34	A区 出土石器 (3)	図版 78	B区 遺構出土土器写真 (2)
図版 35	A区 出土石器 (4)	図版 79	B区 遺構出土土器写真 (3)
図版 36	A区 出土石器 (5)	図版 80	B区 遺構出土土器写真 (4)
図版 37	A区 出土石器 (6)	図版 81	B区 遺構出土土器写真 (5)・包含層出土土器写真・出土土製品写真・確認調査出土土器写真
図版 38	B区 遺構出土土器 (1)	図版 82	B区 出土石器写真 (1)
図版 39	B区 遺構出土土器 (2)	図版 83	B区 出土石器写真 (2)
図版 40	B区 遺構出土土器 (3)	図版 84	B区 出土石器写真 (3)
図版 41	B区 遺構出土土器 (4)	図版 85	B区 出土石器写真 (4)
図版 42	B区 遺構出土土器 (5)		
図版 43	B区 遺構出土土器 (6)		
図版 44	B区 包含層出土土器・出土土製品・確認調査出土土器		

第Ⅰ章 調査に至る経緯

魚沼市内では、農業生産の合理化・近代化を図るため、平成29年4月現在4地区で県営農業基盤整備事業〔圃場3件、畑地1件〕が実施されている。堀之内地区舟山地内では新潟県魚沼地域振興局農業振興部（以下農業振興部）による県営畑地帯総合整備事業が平成23年度に事業採択され、平成24年度以降から随時面工事に入る工程となった。本遺跡部分については平成26年度頃から本工事着手が予定された。

平成21年2月24日に、農業振興部・魚沼市土地改良区・魚沼市教育委員会（以下、市教委）の三者で、工事前の埋蔵文化財調査に関する事前協議が行われた。計画地内には谷内遺跡、谷内B遺跡、谷内塚、増沢の塚など縄文時代の集落遺跡や中世の塚が多く所在する。谷内遺跡では以前、農園保冷倉庫建設の際、多くの遺構・遺物が検出された記録がある。今後の調査により未周知の遺跡が発見される可能性があり、分布調査及び実施設計図が出来次第、確認調査が必要との判断を示し、試掘・確認調査の結果により再協議することで合意した。

平成23～24年度にかけて工事対象地〔畑地および山林〕を分布調査した。分布調査の結果に基づき平成24年度と25年度の2ヵ年で谷内遺跡の確認調査を行い、周知の範囲の比較的浅い深度で遺構・遺物が検出された。実施計画では密生した樹林を伐採し、新たに開拓され約10,000㎡が対象となったため、12月に市教委と農業振興部と二者協議を行った。協議は調査結果に基づき、遺跡周辺部の設計を変更し、木の伐採も根株を残し投棄処理で枯らし、現状保存することで合意した。しかし、パイプライン敷設箇所は破壊が免れないため本調査することになった。平成26年2月上旬に発掘調査計画書を提示し、調査体制として市教委が主体となって調査を実施すること、調査経費は、事業者で負担すること、平成26年の8月末までに現場での作業を終了することで両者合意した。新たに切り拓く山林の一部で木の抜根により遺跡が破壊される可能性があることから、平成26年6月2～4日、8月4～12日まで遺跡検出面までの深度等を把握するため再び確認調査を行った。

発掘調査は、平成26年6月5日より工事450㎡（A地区）に対して調査を開始した。隣接する倉庫裏を確認調査した結果、新たに掘削を受ける箇所が判明した。急遽、8月19日に農業振興部と協議を行い、増工分（B地区）205㎡の追加が認められ、調査は9月27日まで実施した。最終的に調査総面積は655㎡となった。遺構と遺物量・他の進捗から換算し発掘調査報告書の刊行は平成30年度に行うこととした。



第1図 谷内遺跡の位置（S = 1/6,000）

第Ⅱ章 遺跡周辺の地理的環境と歴史的環境

1 地理的環境

谷内遺跡は、魚沼市吉水字谷内 1942 番地ほかに所在する。魚沼市は新潟県の南東部に位置しており、北は福島県只見町と長岡市（旧古志郡山古志村）、東は福島県檜枝岐村と群馬県みなかみ町、南は南魚沼市、西は長岡市（旧北魚沼郡川口町）と十日町市に接する県境の自治体である。また当市は旧北魚沼郡にあたり、平成 16 年 11 月に旧川口町を除く近隣六町村（堀之内町・小出町・湯之谷村・広神村・守門村・入広瀬村）が合併し、魚沼市となった。この中で谷内遺跡は旧堀之内町に位置しており、ここでは旧堀之内町を中心とした地理的環境について触れていく。

当該地域は谷川連峰に源を発する魚野川が市内を貫くように北流し、そこに破間川や田河川などの河川が合流している。また地質環境は、新発田－小出構造線と、河岸段丘に特徴付けられる。新発田－小出構造線は魚野川、破間川沿いに北北東方向に走り、その構造線を境とした東西両側の地形が大きく異なっている。構造線の東側は越後山脈に代表される標高 1,500 ～ 2,000 m 級の山々が連なり、西側では 1,000m 以下の比較的低い丘陵地帯が続く。この丘陵地帯は旧堀之内町付近で魚野川によって分断され、その北側を東山丘陵、南側を魚沼丘陵と呼ぶことが多い。また河川の浸食や丘陵の隆起等で形成された河岸段丘も特徴の一つである。当該地域は 11 面（H₁ ～ H₁₁）の段丘に区分され、それぞれの段丘面が信濃川流域の各段丘と対比されている。これら地理的環境の中で、本遺跡は魚野川左岸地域で最も発達のよい H₃ 面（舟山面）上に立地している。

上述した段丘形成以前に堆積した魚沼層群も、当該地域の地質環境の特徴として挙げられる。魚沼層群は魚沼丘陵や東頸城丘陵に広く分布する鮮新世後期から更新世前期の地層で、新潟平野やその周辺の丘陵地帯にも広がっている。本遺跡が立地する田河川流域についても魚沼層群の堆積は顕著で、魚沼丘陵のほとんどを覆っている。この層群の構成物は、礫・砂・シルト・泥で、これらの構成物は越後山脈などの周辺地域からの供給によるものと考えられる。なお、魚沼層群に狹在する礫が石器石材として利用されている可能性があるため、遺跡付近を流れる田河川流域の石材調査を実施した。その調査成果は、第IV章第3節に後述する。



第2図 遺跡周辺の段丘分布図 [荒川 1997]



凡例

Tp 砂岩・礫岩	Nt 暗灰色泥岩・硬質頁岩	Nm 泥岩	Pc 粘板岩・砂岩
Ta 礫・砂	Tc 砂岩・礫岩	GR 花崗岩	SD デイサイト溶岩・火砕岩
Ss 砂質シルト岩	Qv 火山噴出物	QA 安山岩溶岩	Sm 黒色泥岩
Us 主に砂	SA 安山岩溶岩・火砕岩	ch チャート	Td 珪藻質泥岩・黒色泥岩
PG 斑状花崗岩	Ug 礫・砂・シルト互層	mGb 変斑れい岩	a 礫・砂・泥・腐植土
Ua 砂・泥・砂礫	R 流紋岩	NA 安山岩溶岩・火砕岩	Np 凝灰岩
Om 礫・砂・泥	tm 礫・砂・泥・褐色土	th 礫・砂・泥	d 礫・砂・泥
Na 砂岩泥岩互層	TR 流紋岩・デイサイト溶岩	UD デイサイト・安山岩溶岩・火砕岩	PC 粘板岩・砂岩

● 谷内遺跡

[原図:新潟県地質図(2000年版 1:200,000)を加筆修正]

第3図 谷内遺跡周辺の地質

2 歴史的環境

魚沼市では現在まで約 291 ヶ所の遺跡が見つかっており（平成 31 年 3 月現在）、その約半数が縄文時代に属する遺跡である。また先述の通り、当該地域では丘陵の隆起等に伴って多くの段丘が形成されており、段丘上に多くの遺跡が残されている。ここでは谷内遺跡に関連する旧石器時代から縄文時代草創期（以下、縄文時代は省略）と中・後期の遺跡について概観するとともに、それらの立地についても触れていく。

旧石器時代 ナイフ形石器を主体とする石器群では、田河川流域の上ノ原 A 遺跡や魚野川流域の瓜ヶ沢遺跡が挙げられる。上ノ原遺跡 A 地点は田河川左岸の上ノ原面（H4 面）に位置し、調査では当該期の石器は出土しなかったものの、大久保次男氏の地道な分布調査によって、ナイフ形石器や局部磨製石斧などが採集されている。瓜ヶ沢遺跡は魚野川右岸の柳平面（H6 面）に立地し、ナイフ形石器と礫器などが出土している。また構築時期は不明なものの、V 字状溝状遺構が検出されており、これらは陥穴として認識された例としては新潟県初例の資料とされている〔佐藤雅 1995〕。尖頭器石器群は旧堀之内町内では確認されておらず、旧広神村中平遺跡のみ高位段丘面の道光高原面（H1 面）から見つかっている。後続する細石刃石器群では、学史的に著名な月岡遺跡が挙げられる。月岡遺跡は更新世末に形成された月岡面（H7 面）に立地する遺跡で、そこから細石刃核や細石刃、荒屋型彫刻刀形石器を含む彫刻刀形石器、削器などが出土しており、更に下流の長岡市（旧川口町）荒屋遺跡と類似する石器群と考えられる。

草創期 権現平遺跡、布場平 D 遺跡、古長沢遺跡、清水上遺跡等の遺跡が当該地域に残されている。権現平遺跡は魚野川右岸の柳平面（H6 面）に対比される段丘面に立地し、尖頭器や斧状石器、石刃、搔器などが出土している。また石核と剥片の接合作業から、空白部の剥片を「欠失剥片」¹⁾と呼称し、その欠失剥片が他の遺跡にあるという想定のもと、遺跡と遺跡を有機的に結びつけ、一つの遺跡に止まらない構造的な遺跡の解釈を行う方向性が示された、学史的にも非常に重要な遺跡である〔佐藤雅 1995〕。布場平 D 遺跡は田河川右岸に広く形成された布場平面（H6 面）に対比される段丘面に立地しており、発掘調査の結果、尖頭器の再生品と考えられる資料と搔器が出土している。古長沢遺跡は魚野川左岸に広がる月岡面（H7 面）に立地し、月岡遺跡に隣接した場所に位置している。ここからは当該期の石器として、有舌尖頭器が 1 点出土している。清水上遺跡からは、当該期の資料と考えられる局部磨製石斧が 1 点出土している。この他に、詳細な採集地点は不明なものの、田川平遺跡から局部磨製石斧が 1 点採集されている。

中期 この時期は全国的にも遺跡数が増加する時期で、当該地域でもこの時期に属する遺跡は多い。魚野川本流域の清水上遺跡、古長沢遺跡や田河川流域の原居平遺跡、正安寺遺跡などの、調査面積が広く比較的規模の大きい遺跡と、瓜ヶ沢遺跡、布場平 D 遺跡、月岡遺跡などの調査面積が狭く小規模な遺跡がある。やや地域を異にするが、近年の調査成果として小出地域の魚野川流域からは町上遺跡が見つかる。清水上遺跡は魚野川右岸の高等学校面（H8 面）に対比される段丘上に立地しており、調査の結果、早期・前期・中期・後期の遺構・遺物が出土している。中でも中期前葉から中葉に形成された環状集落については全面調査をしており、当時の集落構造を考える上で非常に有益なデータが得られている。古長沢遺跡からは草創期から晩期までの遺物が出土しているが、中期中葉の資料が最も多い。原居平遺跡は田河川

1) 佐藤雅一氏の言う、「仮想剥片」である。これについて、「小規模活動痕跡を有機的に結びつけて、セトルメント研究に寄与するかを考え」〔佐藤雅 2017〕、遺跡間接合の可能性をこの時点で指摘している。この指摘は旧石器時代や草創期に限ったことではなく、縄文時代においても遺跡間の関連性を導き出す上で重要な指摘であると考えられる。

右岸の高等学校面（H₈面）に対比される段丘上に立地し、発掘調査から中期中葉から末葉の遺構・遺物が出土した。この遺跡については部分的な調査しか行っていないが、集落の構造は環状集落を呈するものと考えられる。正安寺遺跡は田河川右岸の高等学校面（H₈面）に立地し、中期中葉から後期前葉の遺構・遺物が出土している。調査区は細長く集落構造を把握できないが、竪穴住居や袋状土坑などの配置が規則的である点などから、おそらく環状集落を呈するものと考えられる。町上遺跡からは中期中葉から後期前葉の遺構・遺物が出土しているほか、土坑内（帰属時期は不明、後期前葉が下限か）からサケ科の椎骨が多量に見つかっている。また遺跡が扇状地内に立地する点は、他の遺跡と異なる。

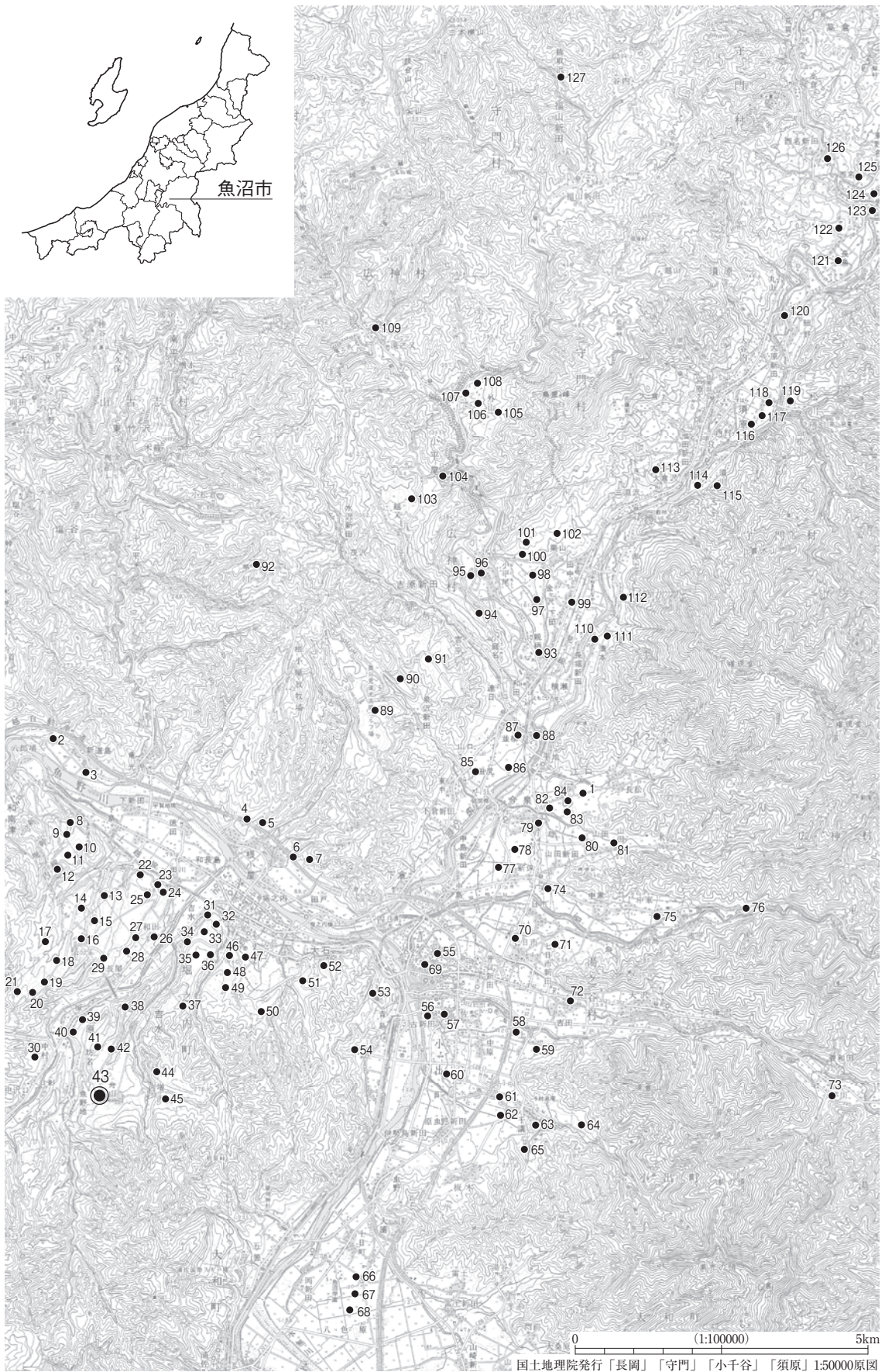
後期 清水上遺跡や正安寺遺跡、布場平D遺跡、町上遺跡などで当該期の遺構・遺物が出土している。清水上遺跡からは、土坑内から前葉（南三十稲場式期）の土器が出土している。正安寺遺跡からは、前葉から中葉の遺物が一定量出土している。布場平遺跡では、当該期の土坑内から炭化した栗の種子とその材質部が出土しており、「これらの同一遺構・同一層位からの出土は、学術的に貴重であり、今後の縄文文化における栗利用の問題にかかせない重要な資料」[佐藤雅 1995] に位置付けられている。

以上、時期別に周辺遺跡の様相について概観してきたが、ここで遺跡の立地について少し触れたい。旧石器時代や草創期の遺跡は、H₁面～H₇面に残されているが、中期・後期になるとそれらより更に新しいH₈面にも遺跡が残されるようになる。大まかな傾向として、時期が下るにつれ低い段丘面にも遺跡が形成されるようになる。その中で本遺跡（舟山面，H₃面）は比較的高い段丘面に立地しており、同時期の他の遺跡とやや異なった立地環境にある。ほぼ同時期の町上遺跡も扇状地内に立地し、他と立地環境が異なることから、当該地域の中期中葉から後期前葉の遺跡の立地について、段丘面ごとに遺跡の性格等と併せて考えていく必要がある。

地質年代		十日町盆地		堀之内町地域
		層序区分	鍵層	
紀世	完新世	氾濫原面 氾濫原堆積物		H ₁₁ 面 { 氾濫原 扇状地
		大割野Ⅱ面 大割野Ⅱ段丘堆積物		H ₁₀ 面 一日市面（町外） H ₉ 面 七日市面（町外）
	更新世	大割野Ⅰ面 大割野Ⅰ段丘堆積物	貝坂口Ⅰ	H ₈ 面 高等学校面（上ノ原面）
		正面面 正面段丘堆積物	ム	H ₇ 面 月岡面・大林面
		貝坂面 貝坂段丘堆積物	ミ	H ₆ 面 柳平面・布場平
			M ₇ M _{6.5} (Aso-4)	
			M ₆ M ₅ ・M ₄ M ₃ M ₂ M ₁	H ₅ 面 大平面
		朴ノ木坂面 朴ノ木坂段丘堆積物	米原口Ⅰム層	
		卯ノ木面 卯ノ木段丘堆積物		H ₄ 面 上ノ原面（大字下島）
		米原Ⅱ面 米原Ⅱ段丘堆積物	谷上	
	中世	米原Ⅰ面 米原Ⅰ段丘堆積物	バイ オ タ イロ トⅠ ム	H ₃ 面 { 中ノ段面（大字原） 牛ヶ首面・舟山面 上ノ段面
		谷上面 谷上段丘堆積物	層	H ₂ 面
		鷹羽面 鷹羽段丘堆積物	鷹羽ローム層	H ₁ 面 { 遺光高原面 根小屋牧場面 板木平面
	前期	魚沼層群	魚沼層群	魚沼層群

第4図 遺跡周辺の段丘対比表 [荒川 1995]

2 歴史的環境



第5図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/100,000)

No	遺跡名	所在地	時代
1	布場上ノ原	江口字上ノ原	縄文中・後
2	新道島	新道島字下山	縄
3	平	下新田字平, 新道島字上山	縄
4	清水上	根小屋字清水上	縄文前～後
5	水林	根小屋字寺屋敷	縄
6	権現平	根小屋字瓜ヶ沢	縄
7	瓜ヶ沢	根小屋字瓜ヶ沢	縄
8	上ノ原E	下島字上ノ原	縄
9	上ノ原A	下島字上ノ原	旧・縄
10	上ノ原D	下島字上ノ原	縄
11	上ノ原C	下島字上ノ原	縄
12	上ノ原B	下島字上ノ原	縄
13	下島大平	下島字大平	縄
14	牛ヶ首	下島字牛ヶ首	縄
15	下島	下島字牛ヶ首	縄
16	香ヶ平	田川字香ヶ平, 字中道	縄
17	滝ノ平	下島字月頭	縄
18	沢田	田川字中道	縄
19	原上ノ段A	原字上ノ段	縄
20	原上ノ段B	原字上ノ段, 字ヲソ沢	縄
21	原上ノ段C	原字上ノ段	縄
22	むじな平	田川字柳平	不明
23	田川稲荷平	田川字柳平	縄
24	柳平	田川字柳平	縄文中
25	飯盛山A	田川字柳平	縄
26	和田	吉水字和田原	縄
27	和田中段	吉水字和田原, 田川字柳平	縄
28	金塚	吉水字和田原	縄
29	下林	原字中ノ段	縄
30	井戸ノ平	原字タラス沢, 字井戸平	縄
31	正安寺	堀之内字春日平	縄文中・後
32	春日平	堀之内字春日平	縄文中・後
33	布場平A	堀之内字布場	縄
34	布場平D	堀之内字布場	縄
35	布場平B	堀之内字布場	縄
36	布場平C	堀之内字布場	縄
37	雨池平	堀之内字雨池	縄
38	原開墾地	吉水字沢田	縄
39	原居平	原字居平, 上ノ原	縄文中・後
40	倉下	原字倉下	縄文後
41	太平	原字カクシ平	縄
42	谷内B	吉水字沢田, 谷内	縄
43	谷内	吉水字谷内	縄文中・後
44	ソッワ沢平	吉水字板木平, ソッワ沢	縄
45	増沢中平	吉水字櫟ノ沢	縄
46	月岡公園	堀之内字上ノ原, 月岡	縄
47	堀之内 高校南	堀之内字上ノ原	縄
48	月岡	堀之内字月岡	旧・縄
49	古長沢	堀之内字月岡	縄文早～中
50	前見平	大石字前見平	縄
51	荳野立	大石字仮野立	縄
52	庄司平	大石字庄司平	縄
53	向山	青島字向山	縄
54	浦ノ山	青島字浦ノ山, 字上ノ山	縄
55	立ノ内	小出島字立ノ内	縄
56	古新田	古新田字居平	縄文晩
57	佐梨居平	佐梨字居平	縄文晩
58	上原	上原字小原	縄
59	宮下	上原字宮下	縄
60	長者林	中原字長者林	縄
61	針山	干溝字針山	縄
62	荒屋敷	干溝字荒屋敷	縄文晩
63	桜田	干溝字桜田	縄
64	十楽	干溝字山畑	縄
65	水頭	干溝字水頭	縄

No	遺跡名	所在地	時代
66	町上	大浦字八色原	縄文中～後
67	八色原北	十日町字八色原	縄文晩
68	八色原	十日町字八色原	縄
69	原	井口新田字清水上	縄
70	如来堂	七日市字如来堂	縄文中
71	七日市	七日市字姥石, 字慈眼寺	縄
72	吉田A	吉田字大田, 字十二田	縄文中
73	湯之谷芋川	湯之谷芋川字赤木, 後口田口	縄文中・後
74	東小学校脇	中家新田字トト道, 福原	縄文中
75	中家	中家字南原	縄文中・後
76	ホツヶ沢	中家字馬立場, 浮津	縄
77	新保家の浦	新保家ノ浦	縄・奈・平
78	石曾根	今泉字石曾根	縄文晩・平
79	日付原	今泉字日付原	縄
80	大原	山田字下原中切	縄文中
81	オの神	山田字オノ神	縄文晩
82	南谷地	江口字南谷地	縄文後・晩
83	いのくぼ	江口字イノクボ	縄文中～晩
84	江口上原	江口字上原	縄文中
85	田尻	田尻字家ノ浦	縄
86	黒鳥	田尻字谷内, 字向新田	縄
87	並柳	並柳	縄文中・後
88	三池	並柳	縄文中・後
89	道光	東中字三峰山, 字道光平	縄文中
90	泉沢中平	泉沢字中平	旧
91	上ッ原	山口字上原, 吉平字上原	縄
92	芋川	大芋川字カギ付	縄文中
93	親柄上ノ原	親柄字上ノ原, 沢田	縄文中
94	ソデ	吉平字赤坂	縄
95	碓沢	小平尾字種井測	縄文中
96	先平	小平尾種井測	縄文中・晩
97	上中山	小平尾字上中山	縄文中・後
98	上中山北	小平尾字上中山	縄文中
99	下ッ原	田中字森下	縄
100	小太郎山Ⅱ	小平尾字仲丸	縄
101	小太郎山	小平尾字仲丸	先?・縄
102	大清水	栗山字山田	縄文中・後
103	小金原	小平尾字兎沢, 小金原	縄
104	松ヶ城跡	小平尾字曲測	縄・室
105	オヤケ平	小平尾字外山	縄
106	刈野畠	小平尾字外山, 水上沢	縄
107	落合	小平尾字十二沢	縄
108	原平	小平尾字十二沢	縄
109	滝の又	小平尾字荒田	縄
110	清本白山 神社境内	清本字新地	縄文中・後
111	清本上屋敷	清本字上ノ山	縄文中・後
112	前田	赤土字南原	縄
113	長者屋敷	大倉沢字中山原	縄文中・後
114	狐原	須川字風下タ, 狐原	縄
115	前平	須川字大栗沢, 沢田	縄
116	腰巻	須原字腰巻	縄
117	腰巻第2地点	須原字腰巻	縄
118	前原	須原字下原, 前原	縄
119	上の山	松川字居平	縄
120	細野家の浦	細野字家ノ浦	縄
121	塩出谷地	長鳥字塩出谷地甲	縄
122	萱刈場	長鳥字萱刈場甲	縄
123	長鳥稲荷平 第2	長鳥字大口乙	縄
124	長鳥稲荷平	長鳥字下段乙	縄
125	諏訪平	宮椿新田字上原	縄
126	滝の上	西名新田字滝ノ上	縄
127	熊取沢	福山新田字熊取沢	縄

第1表 遺跡一覧表

第Ⅲ章 調査の経緯と概要

1 確認調査

県営畑地帯総合整備事業に伴い、平成 24 年度から平成 26 年度の 3 ヶ年に亘って確認調査を実施した。平成 24 年度は 2 日間で試掘坑 25 ヶ所を設定し、調査を行った。その結果、調査範囲の南側部分で遺構・遺物が検出された。遺構はピット 2 基が検出され、遺物は縄文土器 69 点、石器 16 点が出土している。また周辺の聞き取り調査によると、付近にある保冷库を建設した際に、遺構や土器・石器が多量に見つかったとの話があった。そのため平成 25・26 年度は、平成 24 年度に調査を行った部分より更に南側の、保冷库に近い箇所を中心に調査することとした。

平成 25・26 年度の確認調査では、2 ヶ年合計で 77 ヶ所の試掘坑を設定し、そのうち 64 ヶ所から遺構・遺物が検出された。遺構では竪穴住居 2 軒、炉跡 1 基、土坑 17 基、ピット 199 基、性格不明遺構 3 基が検出されている。遺物は縄文土器約 6,500 点、石器約 500 点が出土した。

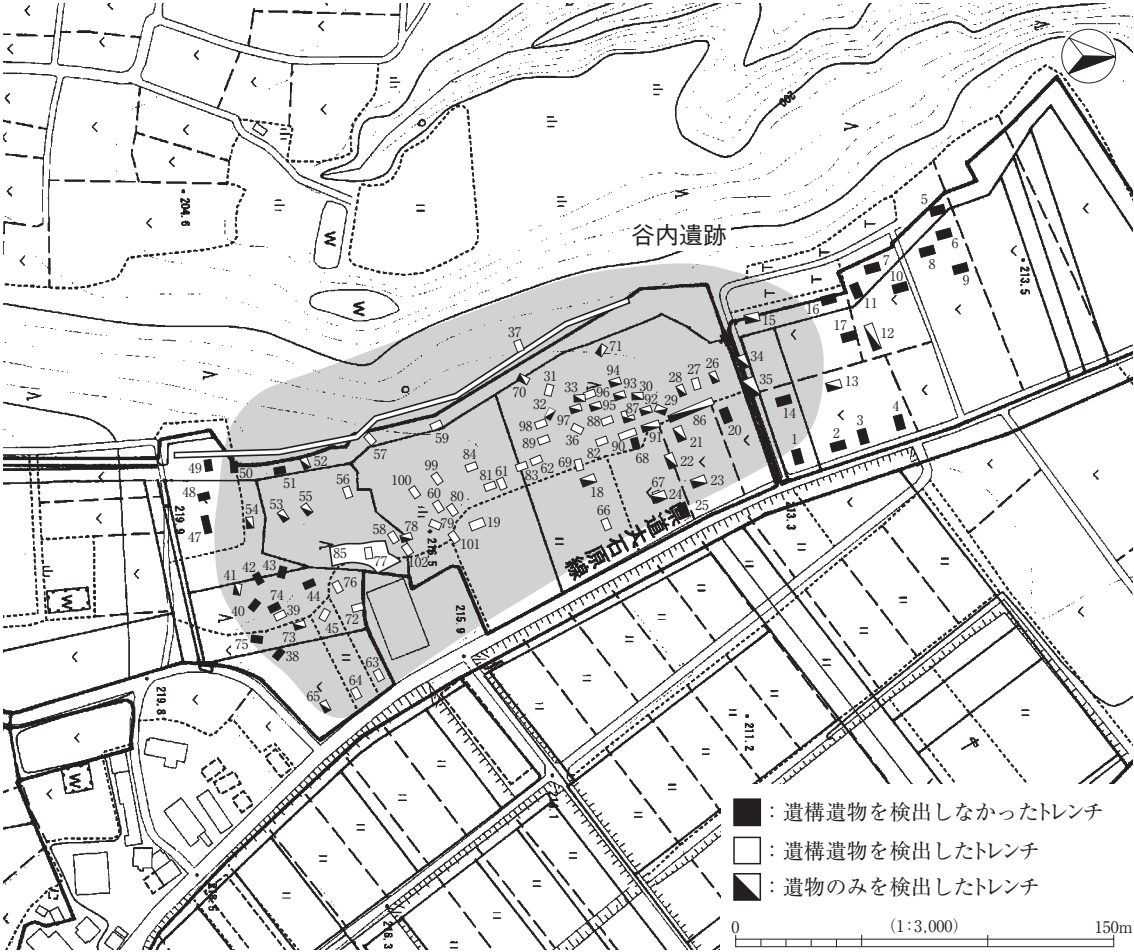
確認調査の結果から、遺跡が東西約 150m × 南北約 220m の範囲におよぶ集落遺跡であることが判明し、遺跡本体も比較的良好な形で遺存している。協議の結果、パイプライン敷設部分を中心に、本発掘調査を実施することとした。

2 本調査

確認調査の結果と開発計画を考慮し、本発掘調査区を設定した。また本発掘調査区の調査中に周辺の確認調査を併行して実施したが、切り株の抜き取り等の事情により、急遽確認調査の範囲を一部拡張して調査を行うこととなった。そのため、今回は本発掘調査区（A 区）と追加調査区（B 区）について、調査を行っている。以下に調査区ごとの調査経過を記す。

A A 区

6 月 5 日から機材・テント等を搬入し、6 月 9 日からはバックホー（0.45）による表土除去を行った。表土除去にあたっては、確認調査の結果に基づき、遺物の出土等に注意を払いながら遺物包含層（Ⅱ層）上面までを掘削した。その際に、土層観察用ベルトを残しながら表土除去を行った。また排土については、調査区外に仮置きした。6 月 16 日よりⅡ層と漸移層（Ⅲ層）を人力で掘削し、遺物の取り上げを随時行いながら遺構確認面（Ⅳ層上面）まで掘削を行った。その際に、自然流路である SD327 を確認している。なお排土は表土除去時と同様に、調査区外に搬出している。遺構の掘削は 7 月 23 日から開始し、作業にあたっては、平面プランを確認した後半截を行い土層堆積を確認し、必要に応じて断面図の作成や写真撮影を行った。写真撮影に際しては、35mm 版とデジタルカメラを併用し、35mm リバーサルフィルム及び JPG 形式で記録した。なお遺物の取り上げについては、包含層掘削時は小グリッド・層位単位で取り上げ、遺構内出土遺物については、測量業者による出土位置の記録後、番号を付して取り上げを行った。これらの作業が終了した後に、調査区の清掃を行い、8 月 21 日に空撮を行った。その後、各遺構の



第6図 谷内遺跡確認調査位置図 (S=1/3,000)

新番号	旧番号	遺構	遺物	新番号	旧番号	遺構	遺物	新番号	旧番号	遺構	遺物	新番号	旧番号	遺構	遺物
1	H24-1			27	H25-2	○	○	53	H25-28		○	79	H26-8	○	○
2	H24-2			28	H25-3		○	54	H25-29		○	80	H26-9	○	○
3	H24-3			29	H25-4		○	55	H25-30		○	81	H26-10	○	○
4	H24-4			30	H25-5		○	56	H25-31	○	○	82	H26-11	○	○
5	H24-5			31	H25-6	○	○	57	H25-32	○	○	83	H26-12	○	○
6	H24-6			32	H25-7		○	58	H25-33	○	○	84	H26-13	○	○
7	H24-7			33	H25-8		○	59	H25-34	○	○	85	H26-14	○	○
8	H24-8			34	H25-9		○	60	H25-35	○	○	86	H26-15		○
9	H24-9			35	H25-10		○	61	H25-36	○	○	87	H26-16		○
10	H24-10			36	H25-11	○	○	62	H25-37	○	○	88	H26-17	○	○
11	H24-11			37	H25-12	○	○	63	H25-38	○	○	89	H26-18	○	○
12	H24-12		○	38	H25-13	○	○	64	H25-39	○	○	90	H26-19	○	○
13	H24-13		○	39	H25-14	○	○	65	H25-40		○	91	H26-20		○
14	H24-14			40	H25-15			66	H25-41	○	○	92	H26-21		○
15	H24-15		○	41	H25-16		○	67	H25-42	○	○	93	H26-22		○
16	H24-16			42	H25-17			68	H25-43			94	H26-23		○
17	H24-17			43	H25-18			69	H25-44	○	○	95	H26-24		○
18	H24-18		○	44	H25-19			70	H25-45		○	96	H26-25	○	○
19	H24-19	○	○	45	H25-20		○	71	H25-46		○	97	H26-26		○
20	H24-20			46	H25-21			72	H26-1	○	○	98	H26-27	○	○
21	H24-21		○	47	H25-22			73	H26-2		○	99	H26-28	○	○
22	H24-22		○	48	H25-23			74	H26-3			100	H26-29	○	○
23	H24-23		○	49	H25-24			75	H26-4			101	H26-30	○	○
24	H24-24		○	50	H25-25			76	H26-5	○	○	102	H26-31	○	○
25	H24-25			51	H25-26			77	H26-6	○	○				
26	H25-1		○	52	H25-27		○	78	H26-7		○				

第2表 確認調査新旧トレンチ対応表

完掘写真や記録作業を完了させ、9月2日にA区の作業を終了した。

B B 区

B区については、一部A区と併行して作業を実施している。8月4日から確認調査のため、調査区内の掘削作業はバックホー（0.45）を用いてⅢ層上面まで実施し、Ⅰ・Ⅱ層からの遺物の出土に注意しながら行った。この際、SK406を確認していたが、当初は埋設土器もしくは堅穴住居と認識していた。重機による掘削の後、調査区内に残る切り株について抜き取りの必要が出てきたため、抜根による遺跡の破壊等を考慮し、本発掘調査に切り替えた。8月25日に切り株周辺の土を遺物の出土に注意しながら調査区内全体をⅣ層上面まで掘り進めた。その後、遺構検出を行い、9月3日より遺構掘削を開始した。調査方法はA区と同様である。

また調査区内を南北方向に貫くように、2条の溝が遺構検出時に確認された。調査区の南壁に断面が観察されたため、南壁の断面を確認したところ、Ⅱ層を掘り込んで形成されていることが判明した。この段階でこの2条の溝は縄文時代後期前葉（以下、特に断りがない限り縄文時代を省略）以降に形成されたものと判断したが、確証を得るため当該遺構の掘削を行った。その結果、遺構の覆土内から現代のガラス片等が出土したため、現代の溝として最終的に判断を下した。ガラス片以外にも縄文時代に帰属する遺物も出土しているが、それらの遺物は溝掘削時もしくは溝埋没時のⅠ・Ⅱ層からの混入と考えられる。

SK406以外の遺構掘削が全て完了した後、調査区内を清掃し9月20日に完掘写真を撮影した。撮影後にSK406の掘削及び記録作業を行い、SK406を完掘した。その後未検出の遺構の有無を確認するとともに、SK406の完掘写真を撮影し、9月27日にB区の作業を終了した。

3 グリッドの設定と基本層序（第7・8図）

本遺跡のグリッドは、当初A区のみを対象に設定していたが、先述した通りB区の調査の必要性から、最終的にB区も覆うように、南北200m×100mの範囲に設定した。大グリッドを10m×10mとし、さらに大グリッド内を2m×2mの小グリッドに25分割した。また大グリッドの呼称は、南北方向を算用数字、東西方向をアルファベットとし、その両者の組み合わせにより「13E」「16I」と表記した。小グリッドは1～25の算用数字で表し、北西端を1、南東端を25とし、「13E-1」「16I-6」のように大グリッドの後に小グリッドを付した。なおグリッドは、真北から約32度西偏する。

本遺跡の基本層序は、以下のⅠ～Ⅳ層に区分される。

Ⅰ 層：表土

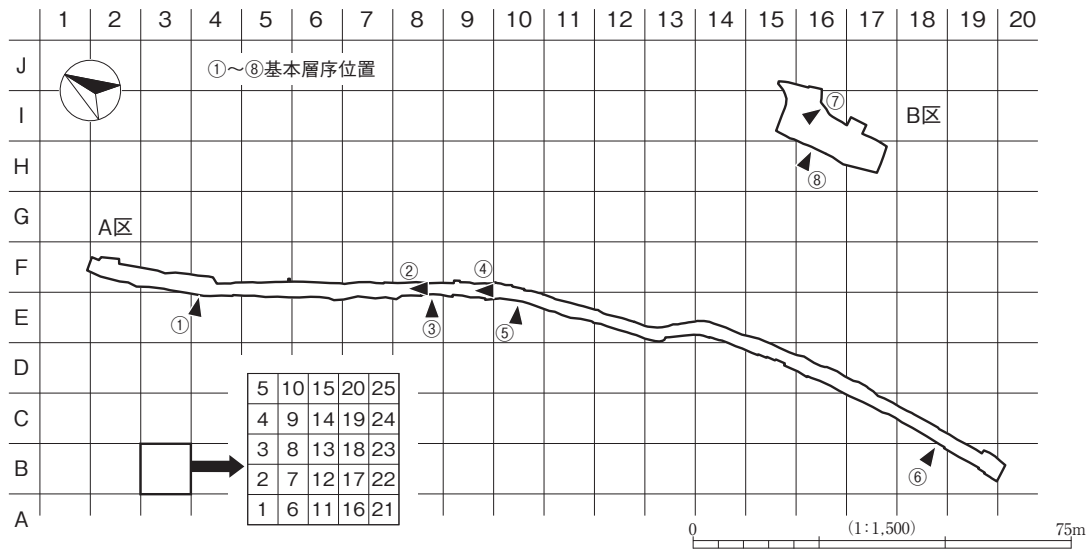
Ⅱ a 層：黒褐色粘質土（10YR3/1）粘性ややあり、しまりあり（遺物包含層）

Ⅱ b 層：黒褐色粘質土（10YR2/2）粘性あり、しまりあり（遺物包含層）

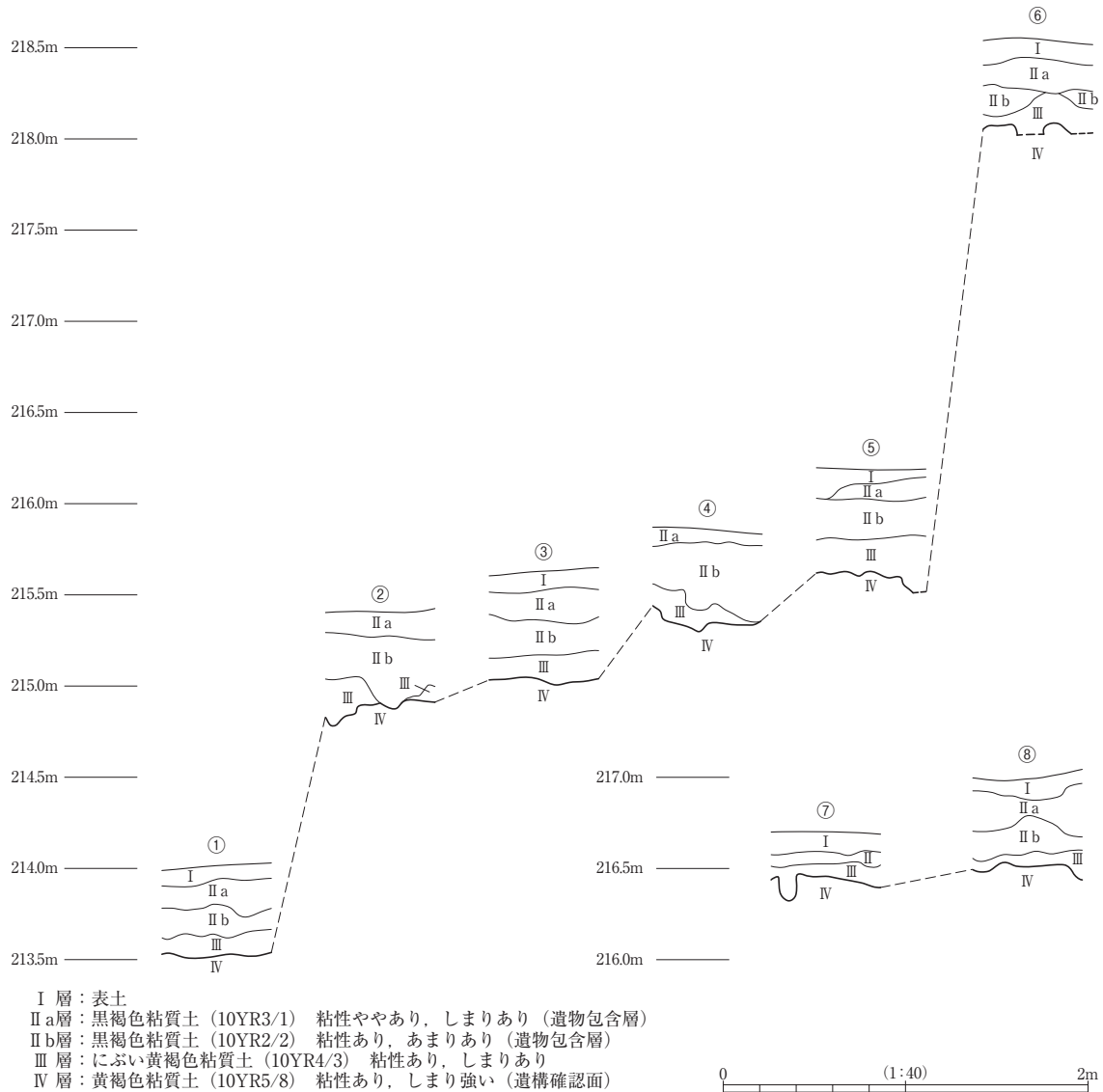
Ⅲ 層：にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）粘性あり、しまりあり

Ⅳ 層：黄褐色粘質土（10YR5/8）粘性あり、しまり強い（遺構確認面）

本遺跡の地形は、A区・B区ともに南側から北側に向かって緩やかに傾斜している。またA区は、20グリッドから17グリッドにかけてやや急な角度で傾斜し、16・15グリッドのSD327によって傾斜が急激に変化している。SD327を越えた14グリッド付近からは、北側に向かって緩やかに傾斜する。遺構の分布とあわせて考えると、緩やかな傾斜を示す14グリッドから9グリッドに集中しているため、周辺よ



第7図 グリッド設定と基本層序位置図 (S=1/1,500)



第8図 基本層序 (S=1/40)

りやや高く、傾斜の緩やかな地点を選んで遺構を構築したものと推定される。

4 検出遺構と出土遺物の概要

本遺跡の発掘調査では、中期中葉から後期前葉の遺構・遺物を検出しており、出土遺物から遺跡の中心時期は中期末葉から後期前葉と考えられる。遺構は両調査区合わせて、竪穴住居5軒、掘立柱建物4棟、埋設土器4基、土坑21基、性格不明遺構1基、自然流路1条とピットを多数検出した。A区では竪穴住居や掘立柱建物について調査区の幅が非常に狭く認定が困難であったが、柱穴の規模や炉の位置を参考に整理作業時に認定を行った。なお調査時に認定した竪穴住居は、SI333のみである。自然流路のSD327については当初廃棄帯と考えたが、遺物が出土するレベルのピークが周辺グリッドとさほど変わらないため、本遺跡が集落として存続していた時期には、ほぼ埋没していたものと考えられる。またこのSD327を境に、その南側については、遺構・遺物の密度が薄い。B区では先述の通り、当初確認調査として行っていたため、包含層はバックホーで除去した。そのため本調査については、遺構検出から行っている。調査区の一部は近現代の溝により攪乱を受けているものの、調査区の北側は比較的良好な状態で遺構が検出されている。南側からはやや大形の土坑（SK406）が検出され、ここからは逆位の状態で出土した南三十稲場式土器や多量の石鏃をはじめ、多くの遺物が出土した。

土器はコンテナ約92箱分が出土したが、そのほとんどが小破片で、復元資料は6点のみであった。土器の様相について見ると、中期末葉から後期初頭の城之腰類型や後期初頭の三十稲場式土器、前葉の南三十稲場式土器が定量出土し、そこに東北系、関東・中部高地系などの影響を受けた土器が少量組成している。土製品は点数は少ないものの、土偶2点、ミニチュア土器1点のほか、円板状土製品や三角形土製品も少量ながら出土した。

石器はコンテナ約50箱分が出土した。磨石類や不定形石器の出土点数が多いほか、石鏃は、B区のSK406から26点出土しており、一つの遺構から出土する点数としては多い。また石錘は両調査区合計で51点と、比較的多く出土している。その他、ヒスイ製の石製品が1点出土しているが、同石材の剥片が出土していないため、製品の状態で遺跡内に搬入されたものと考えられる。これら石器に利用されている石材については、付近を流れる田河川で採取できるものも定量確認できるが、鉄石英（赤・黄）や玉髄、流紋岩などは福島県境から流れ出る破間川流域で採取できるため、この流域から採取した可能性も考えられる。それ以外に、黒曜石や緑泥片岩、蛇紋岩類、ヒスイについては、遠隔地からの搬入と考えられる。また今回不明石器とした中に、後期旧石器時代の所産と考えられるナイフ形石器が1点ある。田河川流域周辺には後期旧石器時代の遺跡が点在しており、それらの遺跡を含めたこの地域の旧石器時代編年を考える上で、このナイフ形石器は重要な資料となり得る。

自然科学分析では、種実遺体同定と骨同定、また黒曜石の産地分析を行った。黒曜石の産地分析ではそのほとんどが星ヶ塔などの信州産であったが、市内の大白川産のものも出土している。これは湯沢町川久保遺跡に次いで、県内二例目である。

第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物の分類

1 検出遺構の分類

A 記述の方法

基本方針 本遺跡で検出した遺構を記載するにあたって、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いた。本文では図面図版・写真図版に掲載している遺構を中心に記述し、観察表もそれに準拠した形で記載している。なお、遺構の規模など観察表に記載されている項目は、重複を避けるため基本的に本文中で触れていない。またピットなど多数検出した遺構については、個々の遺構の記述は避け、傾向を抽出するよう努めた。図面図版では全体図が 1/150・1/400・1/800、分割図は 1/100 で掲載した。個別図では竪穴住居と掘立柱建物は 1/60、埋設土器・土坑・ピットは 1/40 で掲載している。

遺構種別と分類 本遺跡からは竪穴住居（SI）、掘立柱建物（SB）、埋設土器（SH）、自然流路（SD）、土坑（SK）、ピット（P）、性格不明遺構（SX）を検出した。これらの遺構の名称及び略称は、（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団発行の近年の報告書に倣った。また竪穴住居と掘立柱建物の認定については、柱穴の規模や深度、覆土を基に、周辺地域の様相を踏まえ、整理作業中に認定した。なお各遺構の分類は、検出数も少ないため細分は行っていない。

B 遺構の分類

1) 竪 穴 住 居（SI）

今回の調査で明確な掘り込みをもつものは検出できなかったが、柱穴の配列から平面形が円形もしくは楕円形を呈するものを竪穴住居とした。本来は住居形態や炉の形態・有無によって分類できるが、検出数も少ないため今回は各説において個々の記述にとどめる。

2) 掘 立 柱 建 物（SB）

柱穴の配列から平面形が長方形に近い形を成すものを、掘立柱建物とした。本遺構も竪穴住居同様、柱穴の配列等で分類できるが、今回細分は行っておらず、個々の記述にとどめた。

3) 埋 設 土 器（SH）

土器が正位・逆位の状態で地中に埋設されているものを埋設土器とした。本遺跡からは 4 基検出しているが、検出数が少ないため細分は行わなかった。

4) 自 然 流 路（SD）

当初廃棄帯と考えていたが、周辺グリッドとほぼ同一のレベルに遺物出土のピークがあることなどから、埋没した自然流路として認定した。A 区において、大形のもの 1 条を検出している。

5) 土坑 (SK)・ピット (P)

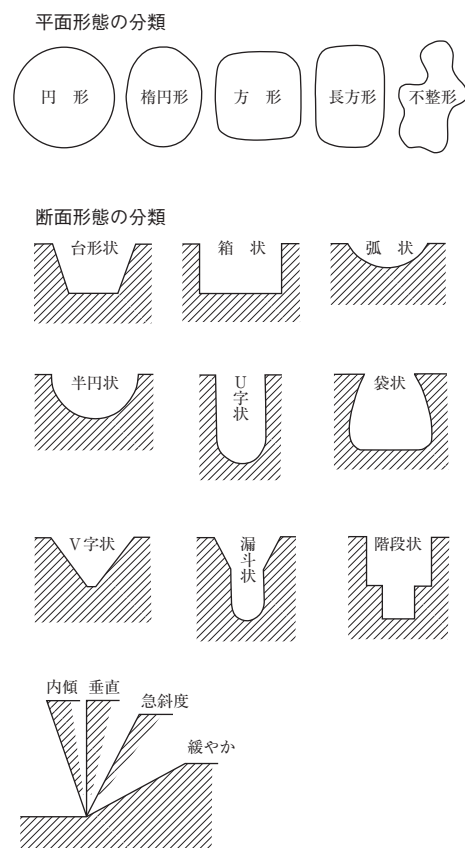
本遺跡からは21基の土坑と多数のピットを検出している。これらは形態・規模が様々であるため、ここでは便宜上、長軸1m以上のものを土坑、1m未満のものをピットとして扱った。また土坑の中には断面形が袋状を呈する袋状土坑があり、本遺跡からもそれに近い形態のものが検出されている。しかしながら、明瞭な袋状は呈していないため、ここでは土坑として一括で取り扱う。なお、土坑・ピットの平面形・断面形の形態分類については、妙高市(旧中郷村)和泉A遺跡の分類基準[加藤1999a]を採用した。以下に、その分類基準を引用する(第9図)。

①平面形

- 円形：長径が短径の1.2倍未満のもの。
- 楕円形：長径が短径の1.2倍以上のもの。
- 方形：長軸が短軸の1.2倍未満のもの。
- 長方形：長軸が短軸の1.2倍以上のもの。
- 不整形：凸凹で一定の平面形をもたないもの。

②断面形

- 台形状：底部に平坦面をもち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの。
- 箱状：底部に平坦面をもち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
- 弧状：底部に平坦面をもたない皿状で、緩やかに立ち上がるもの。
- 半円状：底部に平坦面をもたない碗状で、急斜度に立ち上がるもの。
- U字状：確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
- 袋状：確認面の径よりも底部の径が大きく、内傾して立ち上がるもの(袋状土坑)。
- V字状：点的な底部をもち、急斜度に立ち上がるもの。
- 漏斗状：下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの。
- 階段状：階段状の立ち上がりをもつもの。



第9図 土坑・ピット平面・断面形態分類図

6) 性格不明遺構 (SX)

上記1)～5)以外のものを、ここに一括した。本遺跡からは1基のみ検出している。

2 土器・土製品の分類

A 概 要

本遺跡から出土した土器・土製品は縄文時代中期中葉（以下、特に断りがない限り縄文時代を省略）から後期前葉のものが多数を占め、中でも中期末葉から後期前葉のものが主体となる。この他、陶磁器等が少量出土したのみで、図化はしていない。ここでは土器・土製品について、整理および記述の円滑化を目的とした分類を行う。分類はあくまで主観的判断に基づいて行った。この他に、本節では図化資料の抽出、図化方法、観察表項目等についても併せて記述する。

B 資料の抽出および図化方法

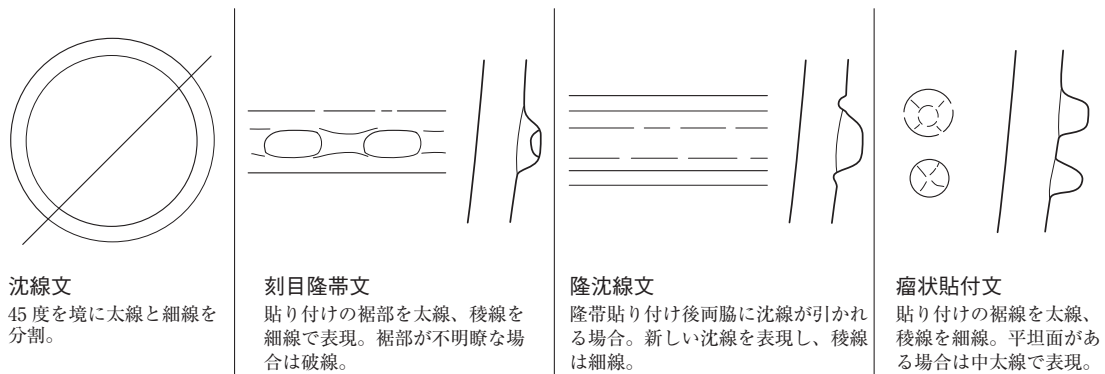
1) 資料の抽出

本遺跡からはコンテナ 92（A区 65、B区 27）箱分の土器・土製品が出土した。図化資料の抽出は紙幅の都合等から遺構出土資料を中心に行い、口縁部が遺存しているものや特徴的な文様を持つ資料を中心に行った。さらに系統や時期等でバラエティの抽出にも努めた。土製品についても遺構出土資料を中心に抽出し、破片資料であっても極力図化を行っている。

2) 図化方法

土器・土製品の実測では、手実測と写真実測を併用した。縄文のみが施文されている部位は、拓影を基本としている。沈線文と縄文が施文されている個体については、沈線文部分は極力図化し、縄文部分は拓影とした。接合点を持たない同一個体資料で、形状が想定できるものについては図上で復元している。

図化表現の中で隆帯や貼付文については、原則として貼付単位を強調線とし、稜線を弱線または破線でとした（第10図）。沈線文と縄文の前後関係が明確な資料では、拓影図に線を重ねて表現を強調しているものもある。断面表現の中で粘土紐の接合痕跡（輪積み痕）については、輪積み痕であると断定できたもののみ、断面内に点線で図示した。



第10図 主な実測図の表現方法

C 観 察 表 項 目

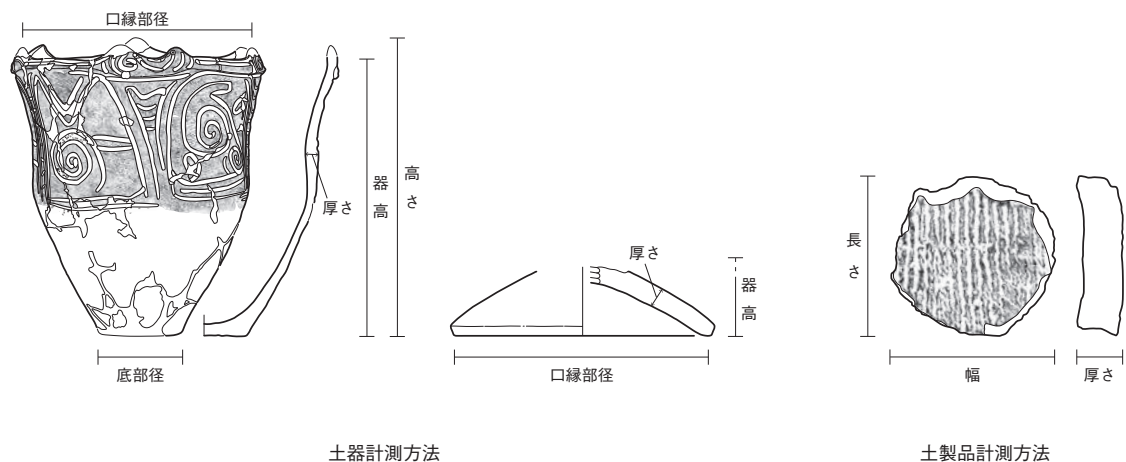
掲載遺物全点について詳細な記述を行うのは困難であったため、極力観察表に情報を載せることで簡略化を図った。観察表に掲載する項目は、土器では番号、出土位置、器種、器形、系統、時期、法量、文様等、含有物、色調、炭化物、備考である。土製品は基本的に土器の項目に倣ったが、器形と系統の項目については除外した。

番号 報告番号である。全掲載遺物で通し番号とした。

出土位置 グリッド、遺構、層位の3項目について記載した。炉に関わる遺物については、遺構の項目で「SI333 炉」等と記載した。包含層出土資料については、遺構出土資料との接合関係にあるものを除き、遺構欄を空欄としている。

器種、器形、系統、時期については次項で詳述する。

法量 土器については口縁部径（以下、口径と呼ぶ）、底部径（以下、底径と呼ぶ）、器高を計測した。なお計測に当たっては、第11図の基準で行った。また、完形品で波状口縁を呈するものや把手が付くものは、高さとは器高の2種を計測している。復元した値は、数値の後に（復）を付した。土製品は第11図の基準で長さ、幅、厚さを計測した。



土器計測方法

土製品計測方法

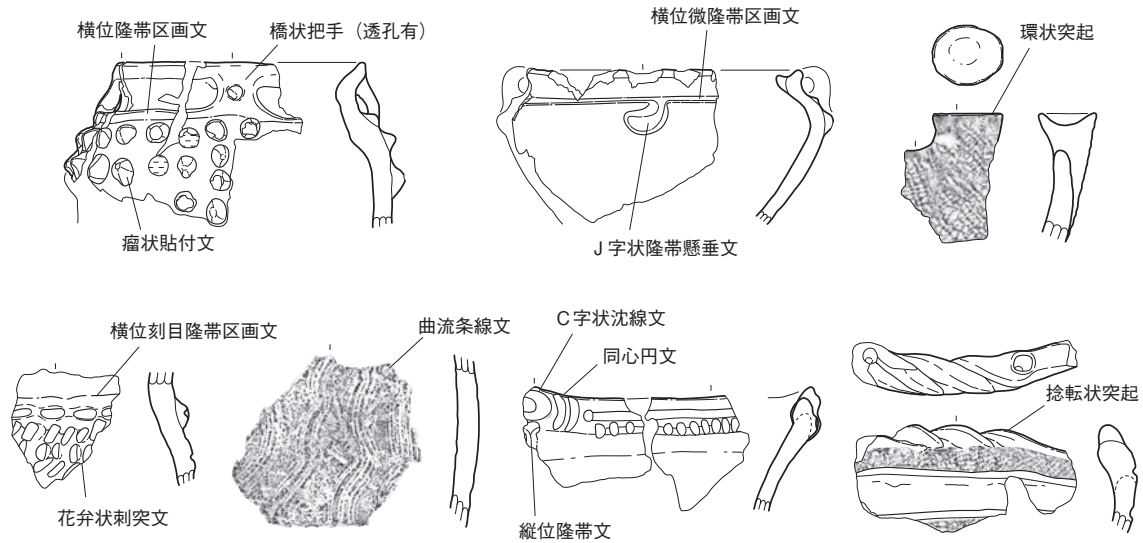
第11図 土器および土製品法量計測方法

文様等 文様は、土器では主に口縁部、頸部、胴部に分けて観察し、特徴的なものについて記載した（第12図・第3表）。文様の名称については、極力従来各型式において使用されているものを用いている。また施文工程が明確に確認できるものについては、「→」でその新旧関係を示した。

含有物 含有物は肉眼およびルーペによる観察を行い、以下の種類について記載した。確認できた含有物は石英、長石、雲母、角閃石、粘土粒子、土器片、砂粒、礫で、それぞれの頭文字を表記した。なお雲母のうち、金雲母と黒雲母の区別が出来たものについては、それぞれ「金雲」「黒雲」としている。粘土粒子は色調によって赤色粒子、黒色粒子、白色粒子、橙色粒子に分け、「赤粒」「白粒」等と表記した。砂粒と礫については、径2mm未満を砂粒、2mm以上を礫とした。

色調 観察は内外面で分け、風化や使用痕による影響がないと考えられる部分で行った。観察には『新版標準土色帖 2004年度版』（農林水産省農林水産技術会議事務局2004）を用い、色名のみを表記した。

炭化物 使用痕跡としての炭化物（スス・オコゲ）の有無を、内外面に分けて記載した。

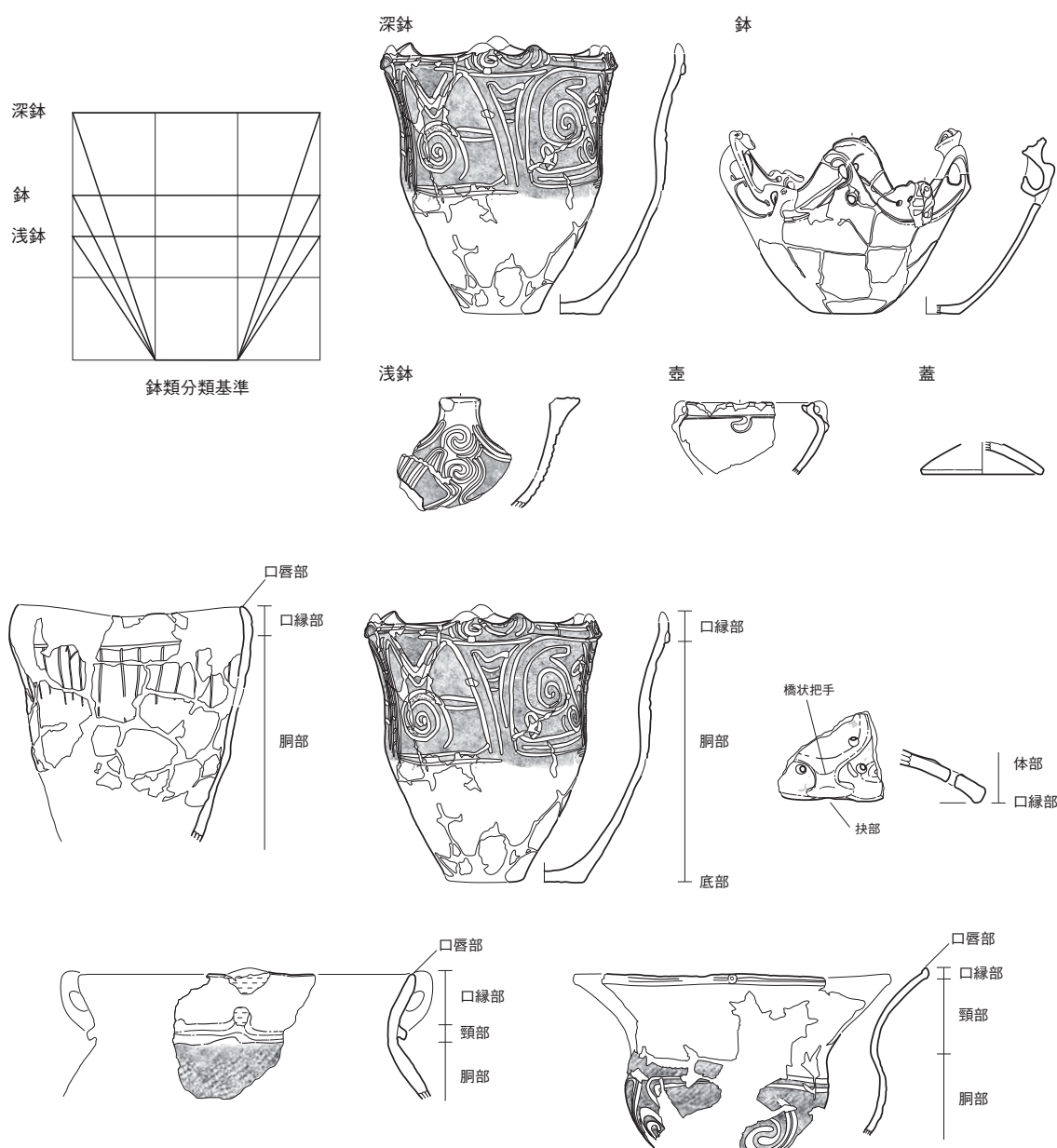


第 12 図 本報告書で使用した主な文様名称

突 起	主として波状を成す口縁部形状に使用した。形状によって環状突起、中空突起などがある。
橋状把手	後期初頭の深鉢や蓋に多い。形状によって S 字状橋状把手、渦巻状橋状把手、捻転状橋状把手などがある。
隆 帯 文	一定の高さを持つ粘土紐を帯状に貼り付けたもの。形状によって横位隆帯文、S 字状隆帯文、J 字状隆帯文などがある。区画を意識したものは隆帯区画文とした。
刻目隆帯文	隆帯上に刺突や刻目、圧痕などが加えられたものを一括した。鎖状隆帯文も含む。
蓋受状隆帯	口縁部内面に横位に巡る隆帯。中期末葉から後期初頭で認められる。
隆沈線文	隆帯の両脇（片脇）に沈線を伴ったもの。
微隆帯文	低い隆帯の貼り付けで、ミガキ調整が入るものやナデが入らない未調整のものもある。
沈 線 文	一定の溝幅を持つもので、形状によって横位沈線文、渦巻状沈線文、格子状沈線文などがある。
多状沈線文	2 本以上の沈線が平行しているもの。
横 線 文	横位に巡る沈線のうち通常の沈線文よりも溝幅の広いもの。
同心円文	括弧文とも。後期前葉に多い。
細沈線文	通常の沈線文よりも溝幅の狭いもの。
条 線 文	櫛歯状工具で施文されたもの。蛇行しているものは曲流条線文とした。
瘤状貼付文	粘土の塊を貼り付けたもの。中期末葉から後期初頭に多い。
環状貼付文	粘土を環状に貼り付けたもの。粘土塊を貼り付け、中心に刺突を入れたものも含む。
刺 突 文	使用する原体や刺突を入れる方向によって様々な形態が確認できる。
花卉状刺突文	刺突文のうち横方向からの刺突で、刺突によって盛り上がった粘土を指で押さえたもの。爪型刺突文も含む。
懸 垂 文	縦方向の文様のうち、ある文様から下方に垂下するもの。形状によって渦巻状懸垂文、J 字状懸垂文などがある。

第 3 表 本報告書で使用した主な文様名称一覧

備考 その他の使用痕跡や、付着物、赤彩等を記し、特筆すべき調整等があればそれについても記述している。また敷物圧痕（底部圧痕）が認められるものについてもここで記し、これらについては松永篤知氏の分類〔松永 2008〕に従い、網代圧痕、もじり編み圧痕、葉脈圧痕の 3 つに大別した。網代圧痕において編み方が断定できたものについては、超え・潜り・送りを「2・2・1」のように示した。葉脈圧痕は、葉脈の違いから網状葉脈と平行葉脈に細分している。



第 13 図 器種の分類と部位名称

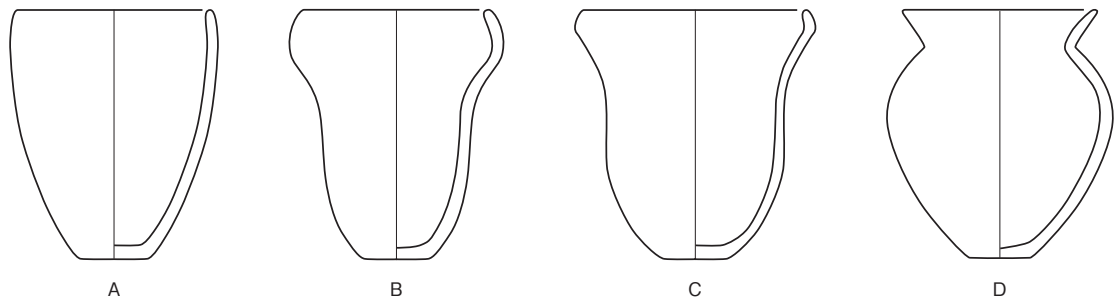
D 土器の分類

1) 器種および器形

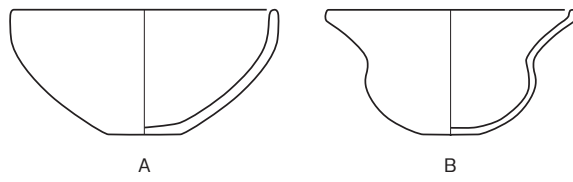
器種は深鉢形、鉢形、浅鉢形、蓋形、壺形（以下、形は省略）の5つに分けた。この他、注口土器が1点のみ認められる。鉢類は幅上遺跡の報告〔菅沼ほか2007〕に倣い、口径に対する器高がおおよそ3分の2以上のものを深鉢、2分の1未満を浅鉢、中間のものを鉢とした。掲載遺物の大半は深鉢に分類され、その他の器種は少ない。蓋はⅥ期（後期初頭）で一定量認められる。また器形は、主観的判断に基づき第14図のように分類した。

深鉢 破片資料が多く全体の形状が窺える資料が少ないため、主に口縁部から胴部の形態に注目し、分類を行った。また、口縁部の形態・形状についても分類を行っている。なお、この口縁部の形態・形状の分

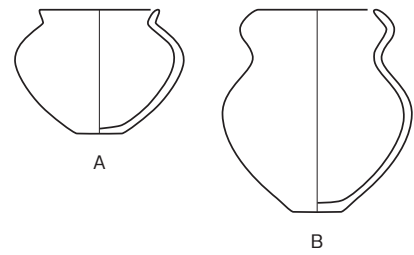
深鉢分類



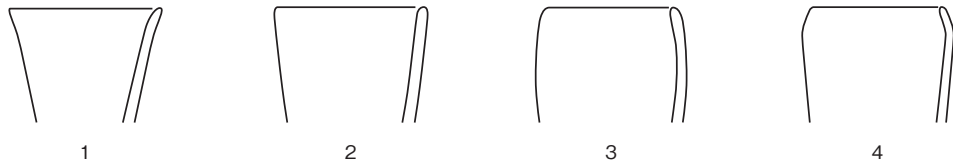
鉢・浅鉢分類



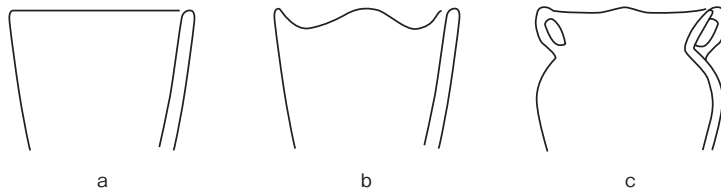
壺分類



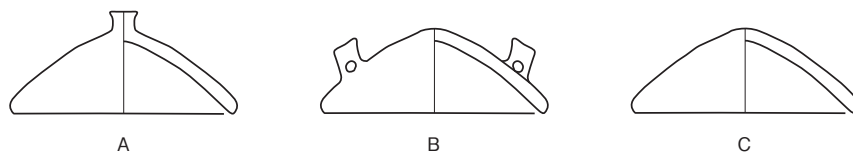
鉢・壺類口縁部形態



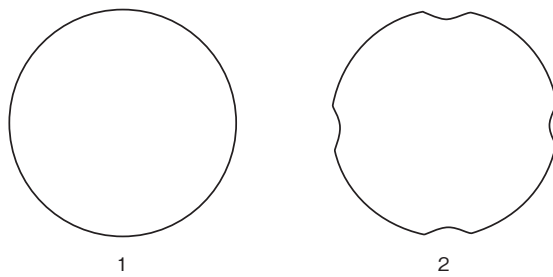
鉢・壺類口縁部形状



蓋分類



蓋類端部上面形態



第 14 図 器形の分類

類は、蓋を除く全ての器種に共通する分類である。破片資料については、不明瞭ながら本来波状口縁等を呈すると考えられるものについて「a」と付している。

A類：底部からほぼ直線状に開き、胴部が張らないもの。頸部が括れずバケツ形を呈するもので、口縁部は直立又は内湾するものが多い。中期末から後期初頭のいわゆる「城之腰類型」によく見られる。

B類：頸部が括れ、口縁部が内湾または内傾し、キャリパー形を呈するもの。

C類：頸部が緩やかに括れ、胴部が緩やかに張るもの。口縁部は内湾または内傾するものが多い。最大径が口径にある。南三十稲場式の典型例。

D類：頸部が括れ、胴部が張るもの。口縁部は外反または外傾するものが多い。最大径が胴部にある。三十稲場式の典型例。

口縁部形態

1類：外反または外傾するもの。

2類：直立するもの。

3類：内湾するもの。

4類：内傾するもの。

口縁形状

a類：平縁口縁のもの。

b類：波状口縁のもの。

c類：(橋状) 把手または突起が付くもの。

鉢・浅鉢 資料数が少なく、また全体形状が把握できる資料は少ない。頸部の形態に注目し分類した。

A類：底部から直線状に開くもの。頸部が括れず、ボウル形を呈する。

B類：頸部が括れ、胴部が張るもの。南三十稲場式（小仙塚類型）の典型例。

壺 鉢と同様に資料数は少ない。大きく次の2種に分類した。

A類：頸部が屈曲し、胴部が張るもの。口縁部は短く外反する。

B類：頸部が括れ、胴部が張るもの。口縁部は内傾する。いわゆる瓢形を呈するもの。

蓋 蓋については、つまみ・把手の有無と端部上面形の形態で分類した。

つまみ・把手の有無

A類：つまみを有するもの。

B類：把手や突起を有するもの。

C類：つまみ・把手等を持たないもの。

端部上面形態

1類：円形のもの

2類：4単位の挟りがあるもの

2) 系 統 と 時 期

各個体について、地域的な要素および時期的な要素を把握するために、地域系統分類および時期区分を行った（第4表）。地域系統については、在地系、東北系、関東・中部高地系（関東東部、関東北部・東北信、関東西部・中南信）、北陸系に大別した。在地系については本遺跡に関係が深いと考えられる信濃川上・中流域に中心を持つ型式について扱った。関東系と中部高地系は、明確に分離できないものもあるた

		谷内 (魚沼)	在地	東北	関東東部	関東北部 東北信	関東西部 中南信	北陸	布場上ノ原 (魚沼)	十三本塚北 (柏崎)	城之腰 (小千谷)	中島 (十日町)	堂平 (津南)			
縄 文 時 代 中 期	中 葉	-	馬高 (火災Ⅰ)	大木8a古	阿玉台Ⅲ	焼町	勝坂2 (藤内)	上山田 天神山	Ⅱ		Ⅲ 1	Ⅱ ①	1a			
				大木8a中	阿玉台Ⅳ		勝坂3 (井戸尻)						1b			
				大木8a新	加曾利 EⅠ		曾利Ⅰ						1c			
		Ⅲ	馬高 (火災Ⅱ)	大木8b古	加曾利 EⅡ	曾利 Ⅱ・Ⅲ	Ⅲ a		Ⅰ b		Ⅲ 2		2a			
				大木8b中										2b		
			栃倉	大木8b新							Ⅲ 3			2c		
		後 葉	Ⅳ	沖ノ原Ⅰ	大木9a	加曾利 EⅢ	郷土		曾利Ⅳ		串田新Ⅰ		Ⅳ	Ⅳ	Ⅱ ②	3a
					大木9b											
			Ⅴ a	沖ノ原Ⅱ	大木10a	加曾利 EⅣ	曾利Ⅴ		串田新Ⅱ		Ⅴ		Ⅰ c	Ⅴ 1	Ⅱ ③	3b
	初 頭	Ⅴ b	(城之腰)	大木10b	称名寺古					Ⅱ a1		Ⅴ 2	Ⅲ ①			
		Ⅵ a	三十稲場 古	(牛蛭)	称名寺中				前田 高波	Ⅵ	Ⅱ a2	Ⅵ 1		4a		
		Ⅵ b	三十稲場 中	網取Ⅰ	称名寺新						Ⅱ b	Ⅵ 2	Ⅲ ②			
		Ⅵ c	三十稲場 新	網取Ⅱ古	堀之内Ⅰ 古				気屋Ⅰ	Ⅶ	Ⅱ c	Ⅵ 3		4b		
		前 葉	Ⅶ a		南三十 稲場古	網取Ⅱ古	堀之内Ⅰ 中				気屋Ⅱ	Ⅶ	Ⅲ a		Ⅶ 1	Ⅲ ③
	Ⅶ b			南三十 稲場新			網取Ⅱ新	堀之内Ⅰ 新		Ⅲ b			Ⅶ 2			
			堀之内Ⅱ		Ⅳ a	Ⅲ ④		5b								
	中 葉	-	三仏生	宝ヶ峰	加曾利B		酒見 井口Ⅱ		-	Ⅴ	Ⅶ 2	Ⅲ ⑤	6			

2014『布場上ノ原遺跡』を加筆修正

この他に1991『城之腰遺跡』2001『十三本塚北遺跡』2006『中島遺跡』2011『堂平遺跡』を参考にした

第4表 系統および時期区分表

め、それらについては基本的に同系列で扱い、観察表では「関中」と表記した。また各地域の要素が変容して在地化している個体については「在地」とし、系譜が辿れるものはその基となった系統を記述した。

時期については、中期中葉から後期前葉までをⅢからⅦ期に分けた。また、ほぼ同時期の資料が出土している布場上ノ原遺跡の時期区分〔南波 2014〕と対比できるよう、一覧表に掲載している。なお時期細分に際し、近年の石坂圭介氏の論考〔石坂 2007・2008・2012〕を参考にした。

Ⅲ期 中期中葉にあたり、大木 8b 式併行期である。資料数は極めて少ない。

在地系－馬高式、栃倉式が少量認められる。

Ⅳ期 中期後葉の時期で、大木 9 式併行期である。Ⅲ期同様、資料は極少量である。

在地系－沖ノ原Ⅰ式がわずかに認められる。

V a 期 中期末葉の段階で、大木 10a 式併行期である。Ⅳ期に続き資料数は少ない。後続する V b 期との境界が明瞭でなく、城之腰類型の捉え方次第では同類型が V a 期に上がる可能性を残す。

在地系－沖ノ原Ⅱ式がある。

東北系－大木 10a 式がある。

関東・中部高地系－加曾利 EⅣ式が認められる。

V b 期 後期初頭段階で、中でも三十稲場式の成立前をこの段階に当てる。

在地系－いわゆる城之腰類型が定量認められる時期。典型的な三十稲場式土器は認められない。

関東・中部高地系－加曾利 EⅣ式の最終段階と称名寺式古段階が併存する時期か。

Ⅵ a 期 後期初頭段階で、三十稲場式古段階をこの段階に当てる。

在地系－典型的な三十稲場式の出現。城之腰類型も残る。

関東・中部高地系－称名寺式が認められる。

Ⅵ b 期 後期初頭段階で、三十稲場式中段階をこの段階に当てる。

在地系－三十稲場式の中段階である。

関東・中部高地系－称名寺式が認められる。

Ⅵ c 期 後期初頭段階で、三十稲場式新段階をこの段階に当てる。

在地系－三十稲場式の新段階である。

関東・中部高地系－信州の影響を受けた土器がある。

Ⅶ a 期 後期前葉で、南三十稲場式古段階。外来系の土器はほとんど認められず、関東・中部高地系が極少量ある程度である。

Ⅶ b 期 後期前葉で、南三十稲場式の新段階。

E 土製品の分類

土製品は出土量が極めて少ないため、器種の分類にとどめ、詳細は各説で記述することとした。器種は土偶、ミニチュア土器、円板状土製品、三角形土製品、不明土製品に分類した。ここで言う三角形土製品は、土器片を利用した三角形の土製品で、3点で支持する三角形土偶等とは区別している。またミニチュア土器は菅野智則氏の定義〔菅野 2008〕に従った。

3 石器・石製品と石材の分類

ここでは、資料の提示方法や計測方法、用語や器種分類について触れる。調査はA区・B区に分けて行ったため、石器の記述についても両者を分けて記載する。両調査区とも出土土器から、中期末葉～後期前葉が主体と考えられ、石器も同様である。ただし一部の石器で、時期が異なる可能性のあるものも出土している。それらについては、本文中もしくは観察表中に記載しているため、参照願いたい。

A 資料の提示方法

資料提示にあたっては、図面図版・写真図版・観察表を基本とし、それらで表現し得ないものを中心に、本文やグラフを用いて記述している。なお掲載順序は調査区ごとに分けたが、遺構出土・包含層出土を問わず器種ごとにまとめて掲載した。

B 用語について

本報告書を記述するにあたっては、津南町堂平遺跡発掘調査報告書〔倉石 2011〕の説明が明解であるため、そちらを引用した。以下、各用語について記述する。

素材 「剥片石器は主要剥離面の打点から遠位端の長さに対し、これに直交する最大幅が大きいものを横長剥片、小さいものを縦長剥片とした。また、器体の両面に自然面を残すものについては礫素材」とした。なお折れている資料について、元の形状を復元できるものについては、素材を断定して記述している。

使用痕・整形痕 以下に倉石 2011 文献の記述をそのまま引用する。

磨 痕：石材に含まれる鉱物の斑晶が平坦に摩滅し、その摩滅範囲

に一定の広がりがある痕跡。あるいは一定の方向性をもつ線状痕を伴う磨耗痕を指す。さらに、敲打によって平坦面を形成された後に磨面が残されたものも磨面とした。

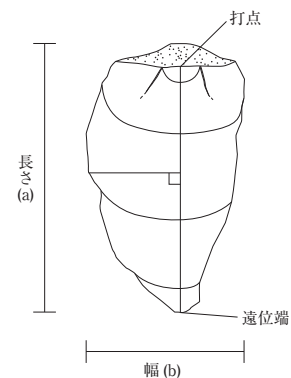
研磨痕：研磨工具と加工対象物との摩擦によって生じた磨耗痕を指し、研磨工具と加工対象物には相互の形状の痕跡が残される性質を持つ点で前記の磨痕とは区別される。研磨工具の研磨痕には溝や明瞭な擦痕、刃先痕などの加工対象物との接触によって生じた痕跡を残し、加工対象物の研磨痕には砥面の形状が転移した結果、稜によって区分される作業面が残される特徴を持つ。

敲打痕：敲打によって、器面が潰れた痕跡を指す。凹凸状に荒れたもの、面的になるものを含む。

凹 痕：敲打痕の重複によって、明瞭な凹状または浅い凹状となるものを指す。なお、磨石類で凹痕とした場合は、表裏面または側面に残された敲打痕跡、すなわち痘痕状に表面が荒れた状態のものを含む。

C 石 器 の 分 類

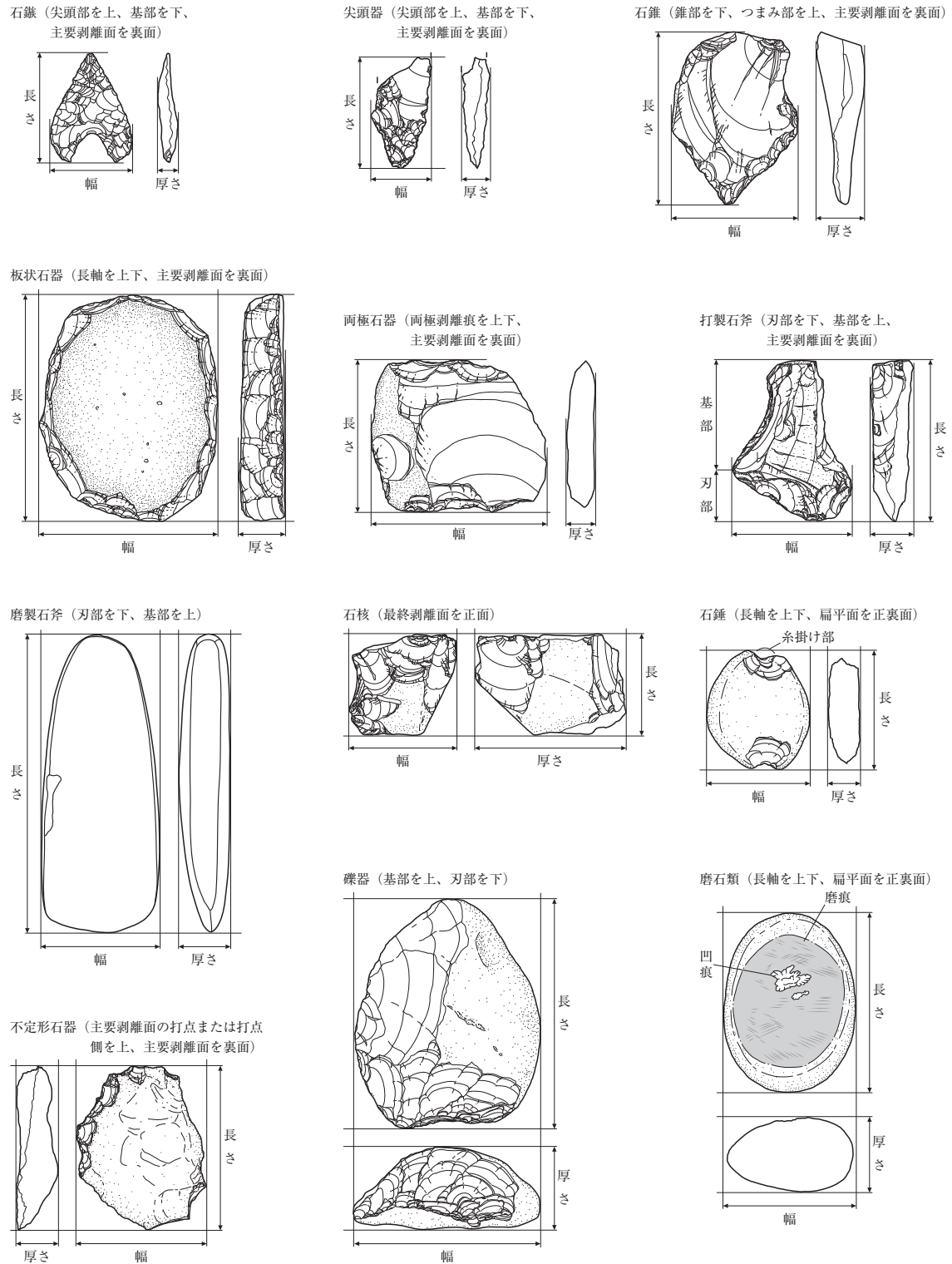
出土した石器を整理するにあたり、まず石器と礫の選別をし、その後に石器について器種分類を行った。点数の多い器種については、器種内で細分を行っている。なお分類や器種の名称については、周辺



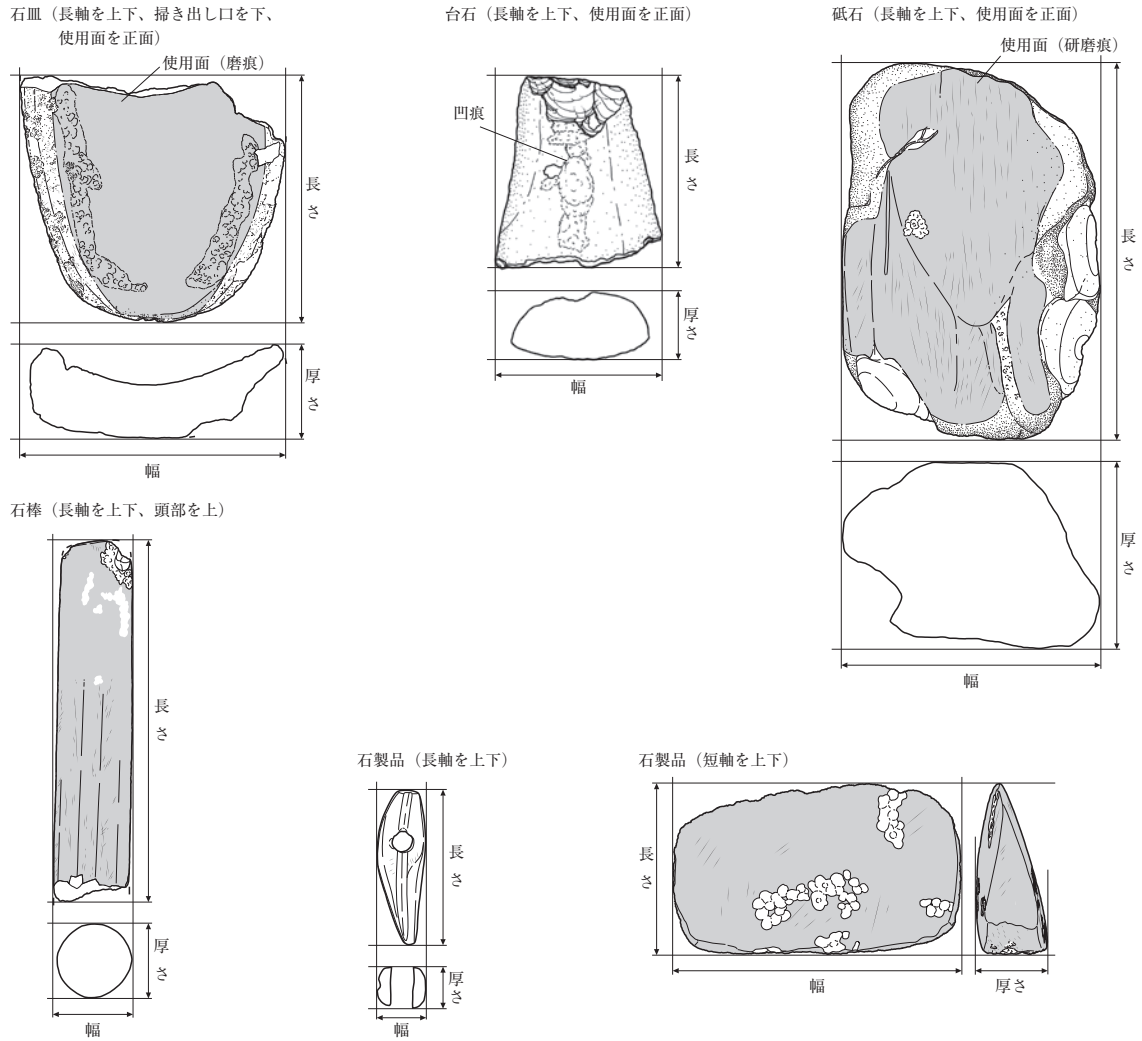
第 15 図 計測部位

3 石器・石製品と石材の分類

遺跡との比較を考慮し、『五丁歩遺跡・十二木遺跡』[高橋雄 1992]、『清水上遺跡』[高橋雄・鈴木俊 1990]、『清水上遺跡Ⅱ』[鈴木俊 1996]、『布場上ノ原遺跡』[桑原 2014] の魚野川流域の遺跡と、『道尻手遺跡』[倉石 2005]、『堂平遺跡』[倉石 2011]、『中島遺跡』[笠井 2006]、『内後遺跡』[桑原 2006]、『城之腰遺跡』[藤巻・田中 1991] の信濃川流域の遺跡の報告書等を参考にした。



第 16 図 石器の分類（1）



第 17 図 石器の分類 (2)

1) 石 鏃

「概ね左右線対称に先端部・基部が作出されているもの」[加藤 1999b] で、小形の剥離による両面加工を施したものを石鏃とした。断面形は概ねレンズ状を呈する。また、成品・未成品[加藤 1999b] の区別は、整形加工の進捗、平面形と側面形の対称・非対称で行った。器種内の細分は、以下の通りである。

A 類 基部が凹状のもの (凹基無茎鏃)。平面形から見た側縁の形状によって三細分した。

A1 類 側縁が直線状のもの。

A2 類 側縁が外湾するもの。

A3 類 側縁が内湾するもの。

B 類 基部が平坦なもの (平基無茎鏃)。平面形と基部形状の組み合わせによって三細分した。

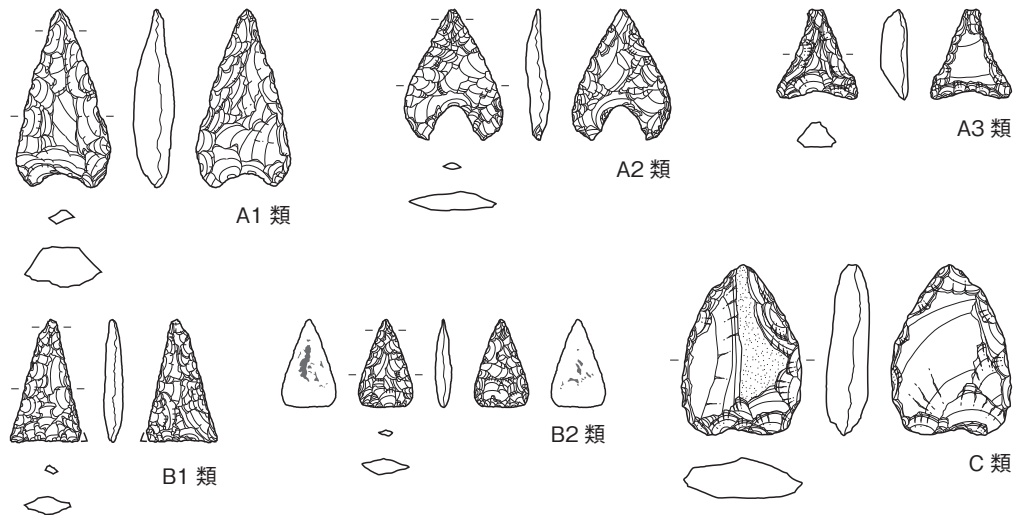
B1 類 基部が直線的で、平面形は三角形を呈するもの。

B2 類 基部が丸みを持ち、平面形は略三角形を呈するもの。

B3 類 基部が直線的で、平面形は五角形を呈するもの。

C 類 未成品。

D 類 欠損等で分類できないものをここに一括した。



第18図 石鏃の分類

2) 尖 頭 器

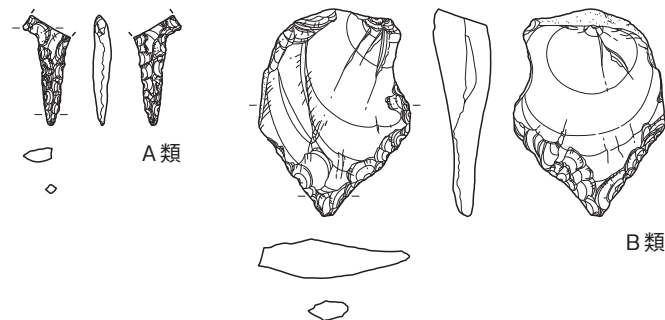
上下両端が尖り、両面に調整加工を施した石器を尖頭器とした。なお点数が1点と少ないため、細分は行っていない。

3) 石 錐

「一端に錐部と考えられる鋭角な先端部を二次調整によって作り出した石器」〔織笠1992〕を石錐とした。ここでは、二次加工の進度によって二細分している。

A類 押圧剥離等で、ほぼ全面に二次加工が及ぶもの。

B類 素材の一部に二次加工を加え、錐部を作出したもの。



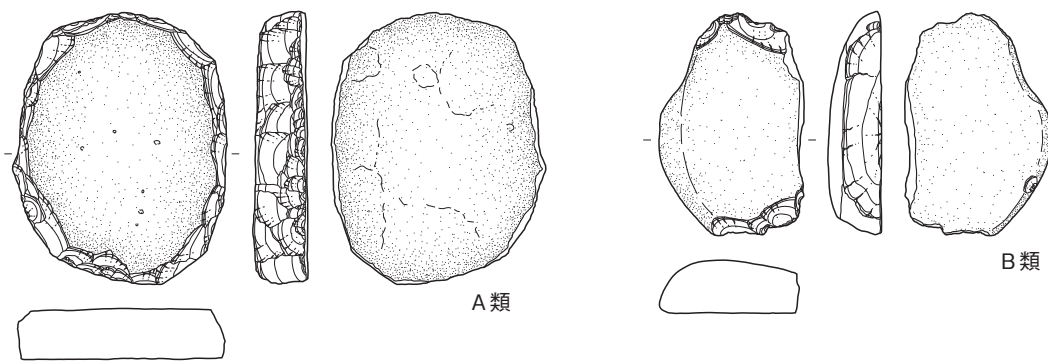
第19図 石錐の分類

4) 板 状 石 器

「扁平な自然礫または平板状の剥片を素材とし、裏面から表面にかけて全周またはそれに近い範囲で二次加工が施される平板状の石器」〔鈴木俊1996〕を板状石器とした。細分にあたっては、清水上遺跡〔高橋雄・鈴木俊1990〕と清水上遺跡Ⅱ〔鈴木俊1996〕を参考に、平面形によって二細分した。

A類 平面形が楕円形を呈するもの。

B類 平面形が不整形のもの。



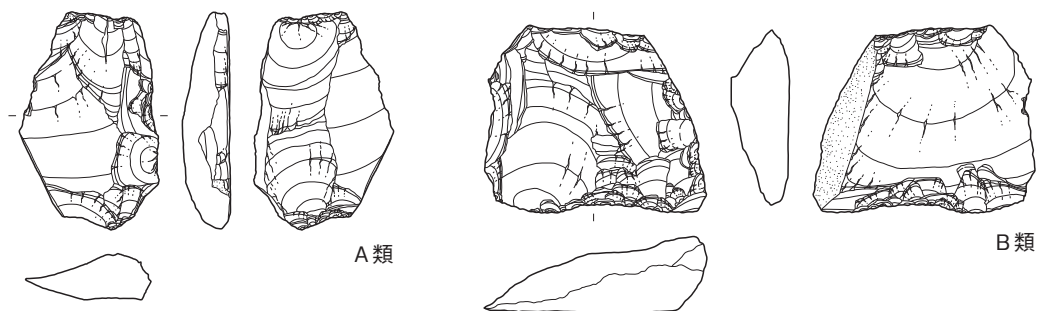
第20図 板状石器の分類

5) 両 極 石 器

「向かい合った2辺ないし4辺に階段状剥離が見られ、剥離の進行したものはバルバースカーがもう一端にまで達するものも存在する」[桑原 2006]。また、「縦断面形としばしば横断面形も凸レンズ状を呈する」[岡村 1976] ことも特徴として挙げられている。これらの特徴を有する石器を、両極石器とした。細分にあたっては、清水上遺跡[高橋雄・鈴木俊 1990]と清水上遺跡Ⅱ[鈴木俊 1996]を参考に、両極剥離痕の位置によって二細分した。

A類 2個1対の両極剥離痕をもつもの。

B類 4個2対の両極剥離痕をもつもの。



第21図 両極石器の分類

6) 打 製 石 斧

「礫もしくは剥片を素材とし、その素材に両面加工・片面加工を施し、斧形に仕上げられた石器」[桑原 2006]を打製石斧とした。なお、分類については、平面形状で三細分している。

A類 平面形が撥形を呈するもの。

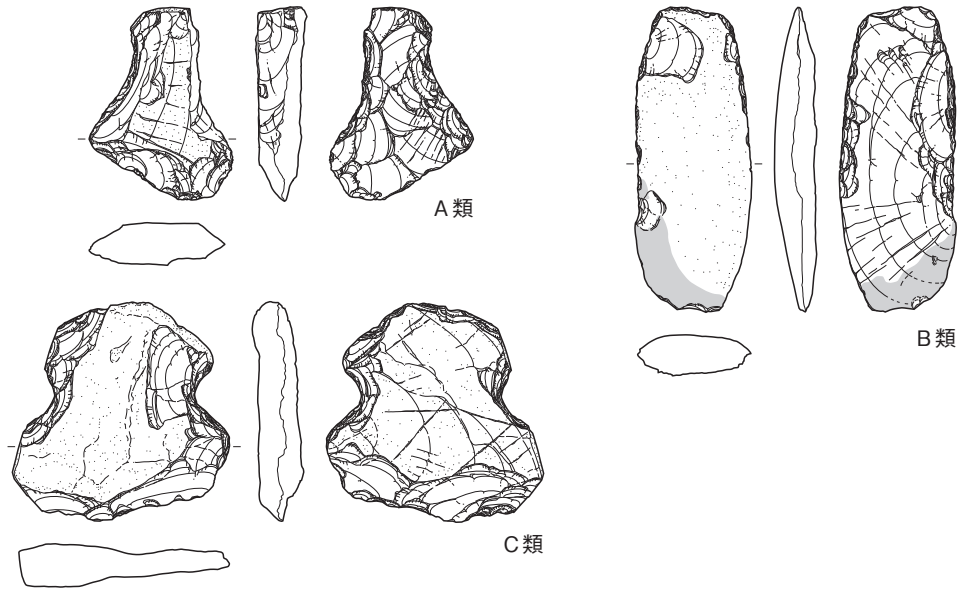
B類 平面形状が短冊形を呈するもの。

C類 平面形状が分銅形を呈するもの。

D類 欠損等で分類できないものをここに一括した。

7) 磨 製 石 斧

剥片や礫を素材とし、剥離・敲打・研磨によって斧形に仕上げられた石器を磨製石斧とした。また本器種には欠損品を磨石類に転用したものも含めている。なお分類は、形状や素材によって二細分している。



第 22 図 打製石斧の分類

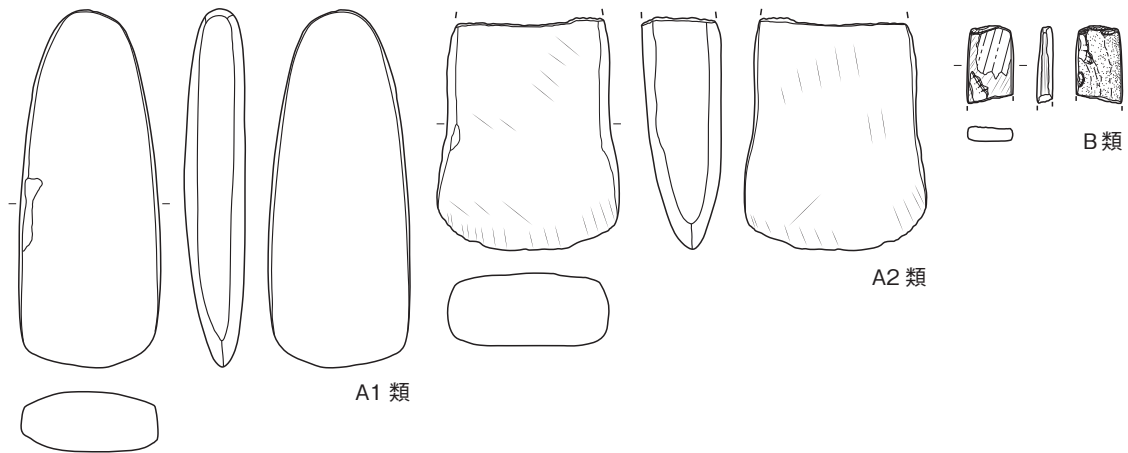
A類 定角式磨製石斧。刃部平面形によって二細分した。

A1類 刃部平面形が直線的になるもの。

A2類 刃部平面形がやや開くもの。

B類 やや薄手の素材を用い、全面に研磨が及ばないもの。

C類 欠損等で分類できないものをここに一括した。



第 23 図 磨製石斧の分類

8) 不定形石器

上記 1～6 の定形石器以外で、素材となる剥片・礫に二次加工や微細剥離痕が認められるものを不定形石器とした。本器種は「スクレイパー」「二次加工のある剥片」「微細剥離痕のある剥片」「両面加工石器」などにそれぞれ分類できるものも多く含まれるが、ここではそれらを一括して不定形石器とした。なお細分にあたっては、素材による分類と加工形状による分類を行い、それらの組み合わせによって、「ⅠA」「ⅡD」のように表記している。

素材による分類

I類：縦長剥片、II類：横長剥片、III類：礫、IV類：不明

二次加工による分類

A類 スクレイパー。急角度の連続的な剥離が施されているもの。

B類 鋸歯縁石器。二次加工によって加工部位が鋸歯状になるもの。

C類 鋭利な先端部を持ち、先端部から側縁に二次加工が施されているもの。

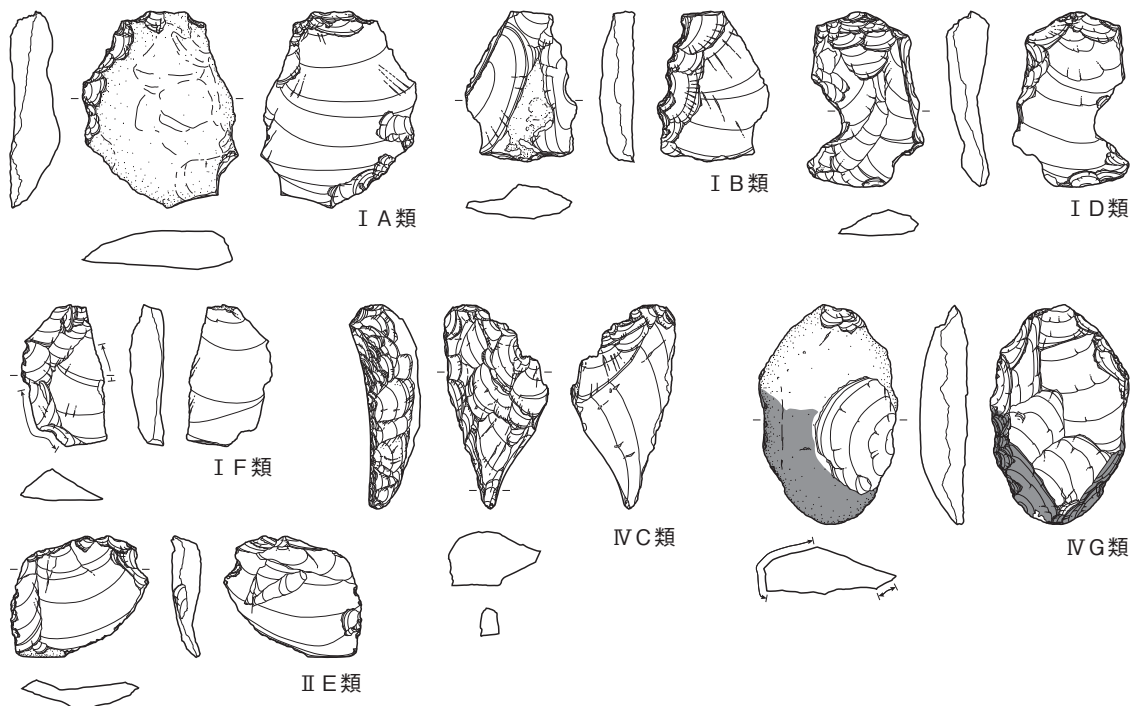
石錐とは、先端部の厚さで区別している。

D類 抉入石器。二次加工によって加工部位が内湾するもの。

E類 不連続な二次加工が施されているもの。

F類 微細剥離痕が確認できるもの。

G類 両面加工石器。器体の両面に二次加工が施されているもの。



第 24 図 不定形石器の分類

9) 石 核

「剥片を得るための素材、または剥片を得た残りの部分（残核）」[高橋雄 1992] を石核とした。一定量出土しているが、今回は細分は行っていない。

10) 礫 器

「礫または大型で厚手の剥片を素材とし、周縁の一部に片面または両面から大きな剥離を連続的に加えたもの」[鈴木俊 1996] を礫器とした。ここで、他器種との区別について少し触れたい。打製石斧は比較的定形的になる点で区別され、不定形石器とは素材の形状や二次加工の形状によって区別される。また石核との区別については、二次加工範囲にツブレが観察できるものを礫器として区別している。これらの区別についても、[鈴木俊 1996] 文献に倣った。なお、出土点数が少ないため細分は行っていない。

11) 石 錘

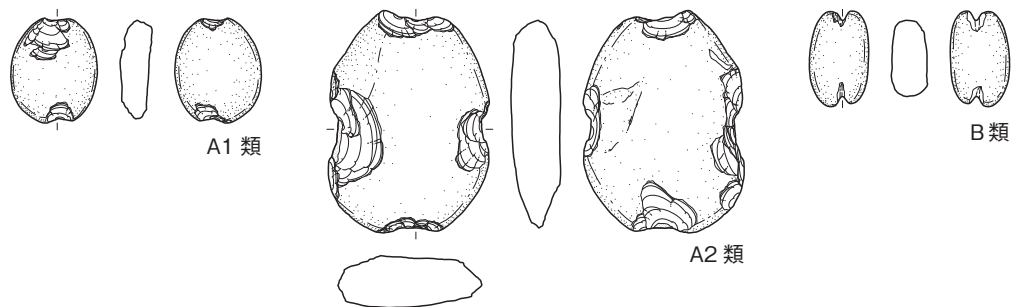
「礫もしくは剥片の両端に、2個1対もしくは4個2対の抉入部を作出したもの」[桑原2014]を石錘とした。抉入部の作出方法や作出部位によって細分している。

A類 抉入部を敲打によって作出したもの（礫石錘）。作出部位によって二細分した。

A1類 抉入部が2個1対、もしくはそれに準ずるもの。

A2類 抉入部が4個2対、もしくはそれに準ずるもの。

B類 抉入部を擦切りによって作出しているもの（切目石錘）。



第25図 石錘の分類

12) 磨 石 類

磨痕・敲打痕・凹痕が観察できるものを、磨石類として一括した。また本遺跡からは「多面体を呈する敲石」も出土しており、本器種に含めている。なお細分にあたっては、清水上遺跡[高橋雄・鈴木俊1990]を基本に、若干の変更を加えている。

A類 磨痕だけのもの。

B類 磨痕と凹痕が認められるもの。

C類 磨痕と敲打痕が認められるもの。

D類 磨痕と敲打痕と凹痕が認められるもの。

E類 凹痕だけのもの。

F類 敲打痕と凹痕が認められるもの。

G類 敲打痕だけのもの。「多面体を呈する敲石」は本類に含めた。

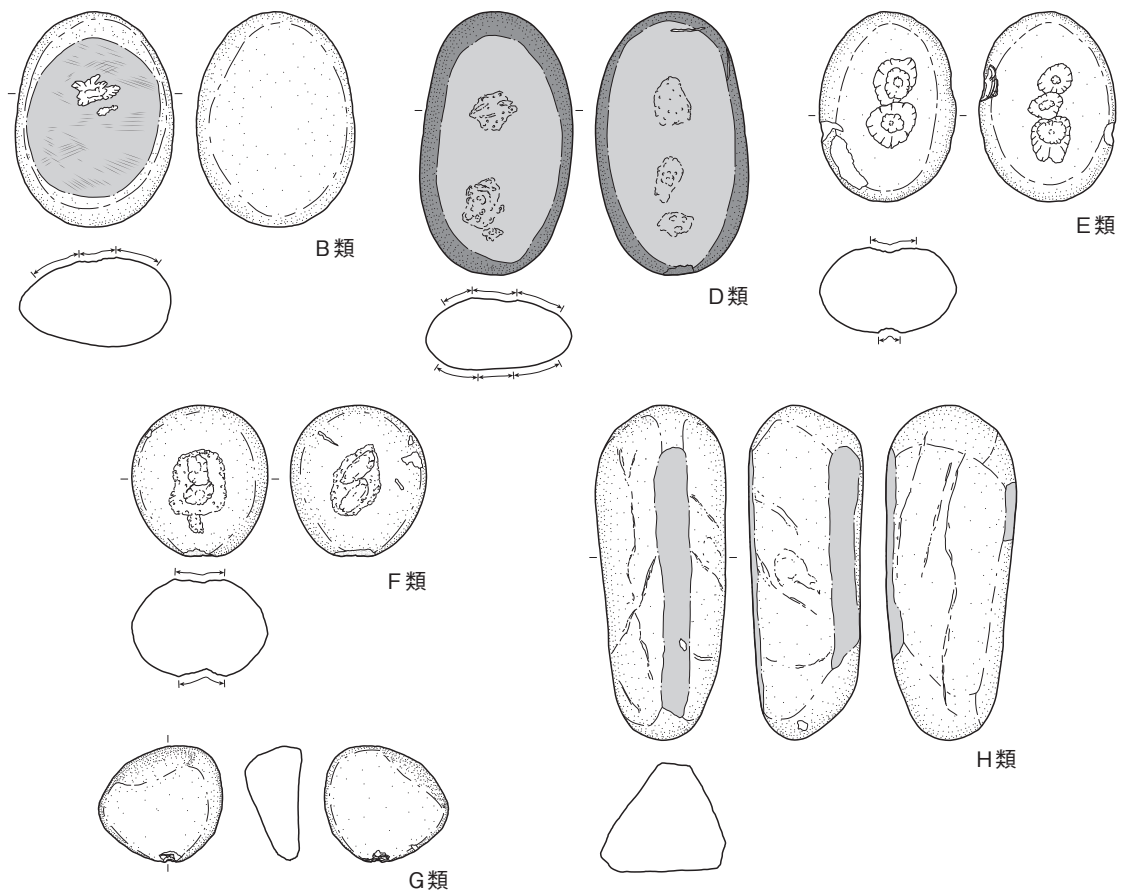
H類 特殊磨石（三稜磨石）。

13) 石 皿

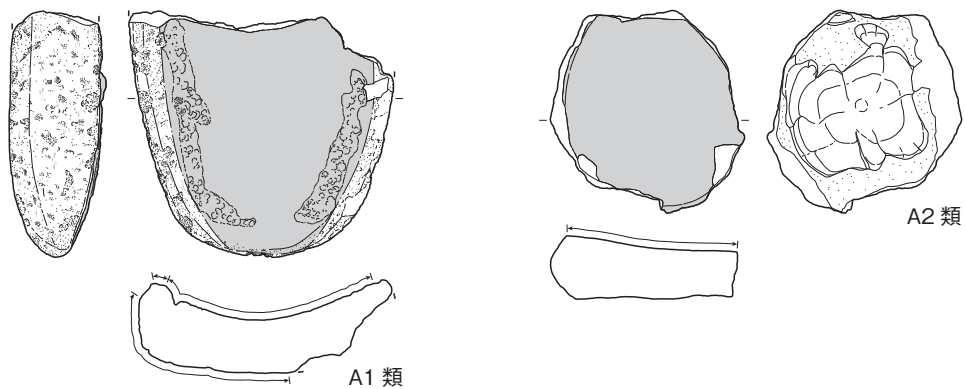
「扁平な礫の片面もしくは両面に、使用面と考えられる磨痕が観察されるもの」[桑原2014]を石皿とした。また磨石類・砥石との区別については、「砥石とは磨面のようなすや形状で異なり、磨石類とは大きさや形状で区別される」[高橋雄1992]の指摘があり、今回はそれに倣った。ただ台石との区別が困難であったが、今回は磨面と敲打痕が認められたものを台石、磨面のみのもを石皿とした。なお細分にあたっては、使用面の状態で細分している。

A類 使用面に加工のあるもの。使用面作出の状態によって細分した。

A1類 使用面・縁・掃き出し口が作出されているもの。



第 26 図 磨石類の分類



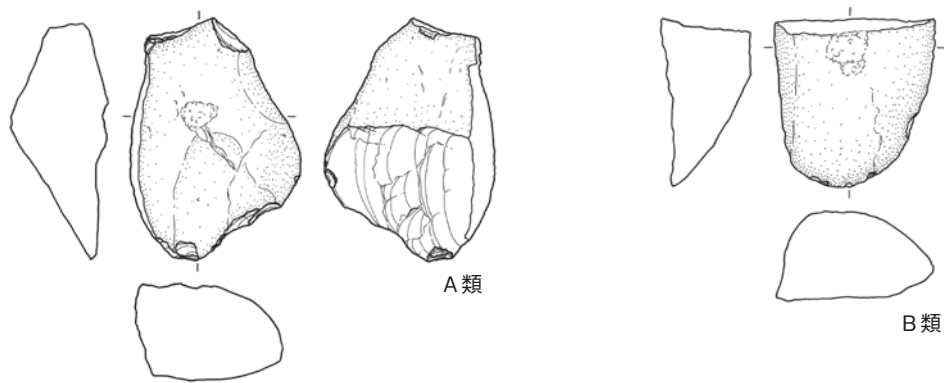
第 27 図 石皿の分類

- A2 類 使用面と考えられる凹みが作出されるが、磨痕が観察されないもの。未成品か。
 B 類 使用面が無加工のもの。
 C 類 欠損等で分類できないものを一括した。

14) 台 石

大形の礫の表面に敲打痕が認められるものを台石とした。敲打痕の位置によって細分している。

- A 類 広い平坦面に敲打痕が一部もしくは広い範囲に残るもの。
 B 類 突端部に敲打痕が残るもの。



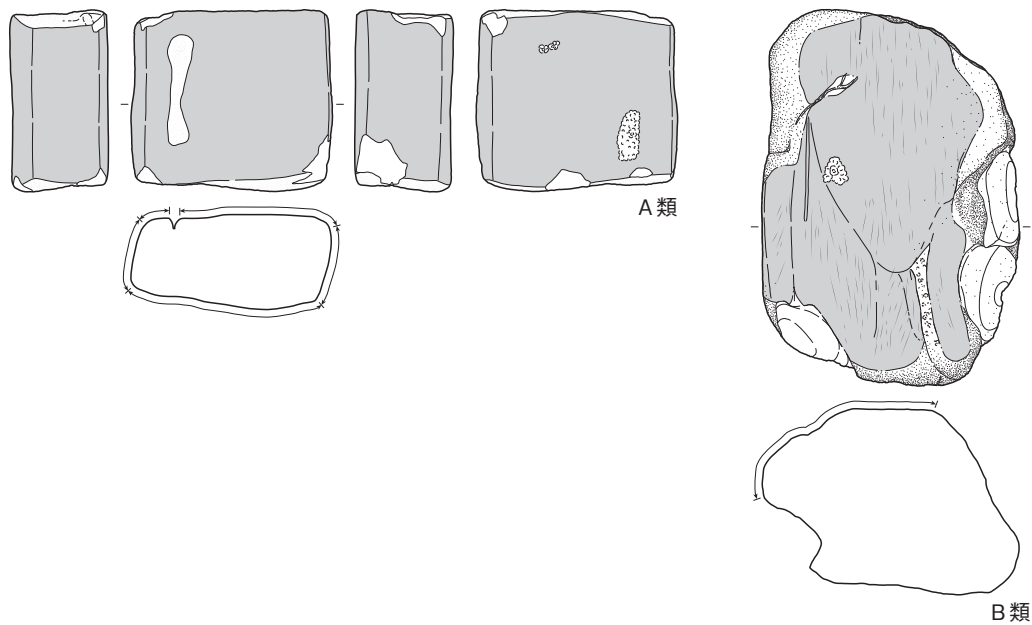
第28図 台石の分類

15) 砥 石

「礫表面に溝状・带状・平面状などの砥面と考えられる研磨痕が認められる石器」〔倉石2011〕を砥石とした。なお、形状によって細分を行っている。

A類 砥面の形成によって、断面形が方形になるもの。

B類 A類以外をここに一括した。



第29図 砥石の分類

16) 石 棒

「素材に敲打・研磨等の成形加工を加え、棒状の石器としたもの」〔桑原2014〕を石棒とした。なお、点数が少ないため、今回細分は行っていない。

17) 石 製 品

石棒以外の石製品をここに一括した。本遺跡からは三角罫形石製品や、一ヶ所穿孔されているヒスイ製の石製品が出土している。なお、点数が少ないためここでは細分は行っていない。

18) 不 明 石 器

1) ～17) に当てはまらず、従来の器種に該当しないものをここに一括した。

D 石器石材について

1) 石材分類について

本遺跡から出土した石器には 29 種類もの石材が使用されているが、それら全てについて厳密に分類する事は困難である。また、「岩石名を正しく分類しようとする」と石材名が多く乱立」[石橋 2011] との指摘もある。よって今回の報告では、岩石名を大枠で捉える方法を採用した。ただし一部の石材について細分を行っており、ここではそれらについて若干の説明を加える。

安山岩 安山岩、無斑晶ガラス質安山岩、石英含有輝石安山岩、多孔質安山岩の 4 種に分類した。無斑晶ガラス質安山岩は黒色で緻密のガラス質の安山岩で、剥片石器に利用されている。石英含有輝石安山岩は、表面が黄土色で赤褐色の節理面が発達している。その節理面を利用し板状に剥離されることから、板状石器や打製石斧に多用されている。多孔質安山岩は剥離性の乏しい粗粒の安山岩で、磨石類や石皿に多用される。そして、上記 3 種の安山岩に分類できなかったものを、安山岩として一括した。

緑色片岩と変ハンレイ岩 両石材については、鈴木俊成氏と桑原健が検討を加えている [鈴木・桑原 2015]。ここでは、両石材の特徴について記す。緑色片岩は色調が淡緑色～濃緑色で、板状に剥離しやすい性質を持つ。黒色の筋が表面に多く観察できる資料が多く、部分的に白色の含有物が認められる。変ハンレイ岩は濃緑色～暗褐色で、より硬質で板状に剥離しにくい。石質は繊維状で、白色の含有物や黒褐色の鉱物を多量に含む。周辺遺跡出土の緑色片岩製の石器表面に、変ハンレイ岩の特徴を持つものが確認された。産状は現段階で不明であるものの、両石材は同一の岩体である可能性も考えられる。

2) 田河川流域の石材環境について

当流域は魚沼層群が厚く堆積する地域で、他地域から流れ込んだ礫がその層群に含まれている。そのため当流域で採取できる石材は、魚沼層群を構成する礫が多く含まれていると考えられる。この点を踏まえた上で、当流域の石材環境を見ていく。なおここでは、[鈴木・桑原 2015] 文献をもとに、一部データを加えて報告する。

調査地点 1 (辻又川中流)

ここでは、頁岩・安山岩・チャート・変ハンレイ岩を採取できた。頁岩は径 10 ～ 15cm ほどで、内外面ともに黒色を呈し、比較的硬質で、石器製作に適している。安山岩は径 15 ～ 20cm のものがほとんどで、内外面ともに黒色である。斑晶が多く確認でき、輝石安山岩と考えられる。また頁岩同様、石器製作に適している。チャートは、白～灰色の径 15cm ほどのものが採取されたが、数量は 1 点と極めて少ない。変ハンレイ岩は、径 10 ～ 15cm のものがほとんどである。

調査地点 2 (魚野地川中流)

ここでは、チャート・石英含有輝石安山岩・緑色片岩・変ハンレイ岩を採取できた。チャートは径 15 ～ 20cm ほどのものを採取できたが、数量は極めて少ない。石英含有輝石安山岩は 20cm 以下のものがほとんどである。緑色片岩と変ハンレイ岩は径 5 ～ 20cm のものが採取できたが、緑色片岩については遺跡から出土したものとは、若干質感等が異なっている。

3 石器・石製品と石材の分類

調査地点3（魚野地川中～下流）

この地点では、チャート、石英含有輝石安山岩、緑色片岩・変ハンレイ岩が採取された。チャートは径5～10cmほどの小礫であるが、乳白色で比較的良質であり、石器製作に適していると考えられる。ただし、点数は極めて少ない。石英含有輝石安山岩は、径5～15cm程度のものが定量採取された。緑色片岩と変ハンレイ岩は調査地点2同様、5～20cmほどのものが採取された。

調査地点4（増沢川中～下流）

この地点では、変ハンレイ岩のみ確認できた。大きさは5～15cmほどのものがほとんどである。

調査地点5（田河川下流）

この地点では、頁岩・安山岩・石英含有輝石安山岩・チャート・鉄石英（赤）・変ハンレイ岩が採取された。頁岩と安山岩は調査地点1と同質のものと考えられ、径は10cmほどのものが少量確認できる程度であった。石英含有輝石安山岩は、5～20cmほどのものが比較的多く確認できた。またその中には、平板状に割れた小形の礫も定量確認できる。チャートは点数が極めて少ないが、5～10cmほどのものが採取された。鉄石英（赤）も点数は少なく、5cmほどの小形のものが採取された。なおこの石材は緻密ではあるものの、やや軟質である。変ハンレイ岩は、5～20cmほどのものが採取された。

3) 小結 ―石材調査のまとめ―

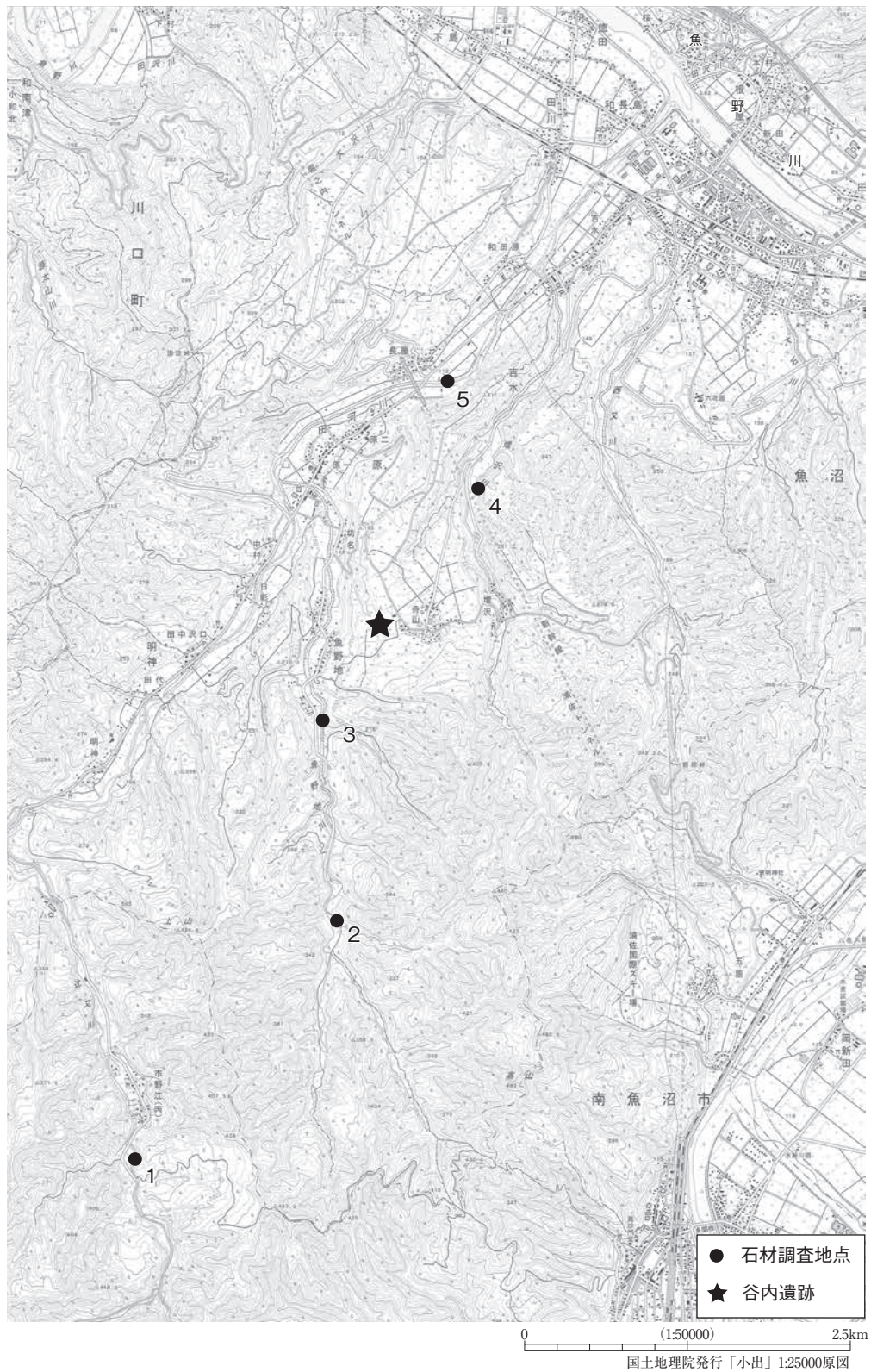
以上、遺跡周辺を流れる田河川流域の石材調査について記した。しかしながら、全ての石材について統一的に調査できず、各地点において確認できなかった石材が、今後の調査で見つかる可能性は充分考えられる。この点を踏まえた上で、以下に石材調査結果の要点を記す。

- ①石英含有輝石安山岩と変ハンレイ岩は、ほぼ全ての地点に安定的に認められる。
- ②緑色片岩は、魚野地川でのみ確認できた。しかし、遺跡から出土するものとは若干質感が異なる可能性がある。
- ③頁岩・安山岩はより上流部側の支流（辻又川）で確認できる。
- ④鉄石英（赤）は軟質で比重も軽い。流域は異なるが、破間川上流域で採取できる鉄石英（赤）は、硬質で比重も重い。遺跡から出土した資料を見ると、後者の可能性が考えられる。

今回得られたデータは、従来の知見を大きく変更するものではないが、少しずつ田河川流域の石材環境が分かってきている。今後は当流域に残された遺跡への石材供給を念頭に置きながら、周辺遺跡から出土した石器の使用石材をもとに、石材調査を行っていく必要がある。

石材名 調査地点	頁岩	鉄石英（赤）	チャート	安山岩	石英含有 輝石安山岩	緑色片岩	変ハンレイ岩
1	○		○	○			○
2			○		○	○	○
3			○		○	○	○
4							○
5	○	○	○	○	○		○

第5表 地点別採取石材一覧



第 30 図 谷内遺跡周辺の石材調査地点（鈴木・桑原 2015 に加筆修正）

3 石器・石製品と石材の分類



調査地点1 河床礫分布状況①



調査地点1 河床礫分布状況②



調査地点2 河床礫分布状況①



調査地点2 河床礫分布状況②



調査地点4 河床礫分布と礫層



礫層近景



調査地点5 河床礫分布状況



調査地点5 石材分布状況（変ハンレイ岩）

第31図 調査地点別の河床礫分布状況

第V章 A 区

1 検 出 遺 構

A 概 要

本調査区からは、竪穴住居3軒、掘立柱建物1棟、埋設土器4基、土坑15基、自然流路1条、性格不明遺構1基のほか、ピットを多数検出した。中には遺物が出土していない遺構も定量存在し、帰属時期が判然としない遺構が多いものの、出土遺物からV期（縄文時代中期末葉～後期初頭、以下、縄文時代は省略）～Ⅶ期（後期前葉）に帰属するものと考えられる。竪穴住居と掘立柱建物については、SI333を除き全て整理作業中に認定した。埋設土器は4基検出したが、SH348についての記録を行えなかったため、ここではそれ以外の3基について記述する。以下に、遺構種別ごとに記述を行う。

B 竪 穴 住 居

SI333（図版10・49）

13E・14Eグリッドの、SD327よりやや北側に位置しており、炉の存在から発掘調査中に認定した竪穴住居である。本遺構は東西両側が調査区外に延びているが、概ね楕円形を呈するものと考えられる。炉の周辺には、径40cmほどの石英含有輝石安産岩製の被熱した礫が配置されていたが、炉を構成する礫が他に出土していないことから、ここでは地床炉と考えておきたい。調査区内での柱穴は6基で、規模は径約30～80cm、深度は約20～50cmである。なお本遺構は、炉体土器（1）からⅦa期に帰属する。

SI1（図版10・50）

11E・12Eグリッドに位置する。本遺構は西側が調査区外に延びるが、平面形は概ね楕円形を呈するものと考えられる。炉は検出されなかったが、本遺構の範囲内にあるP138の覆土内からは焼土層が確認できた。しかしながら堆積は極めて薄く、炉体土器を伴わないことから、本遺構の焼土は風性堆積による周辺遺構からの流入と考えておきたい。よって、その周辺に炉があると考えられる。調査区内で確認できた柱穴は6基で、柱穴の規模は径約30～60cm、深度は約30～50cmである。なお本遺構の帰属時期は、出土遺物からVb期と考えられる。

SI2（図版11・50）

10E・11Eグリッドに位置し、先述のSI1と近接している。本遺構は西側が調査区外に延びるが、平面形は楕円形を呈するものと推定される。また本遺構からは炉は検出できず、調査区外に存在するものと考えられる。調査区内で確認できた柱穴は5基で、柱穴の規模は径約30～70cm、深度は約20～30cmである。なお帰属時期については、遺物が出土していないため不明である。

SI3（図版11・51）

9E・9F・10E・10Fグリッドに跨り、A区で最も北側に位置する竪穴住居である。本遺構は東側が調査区外に延びるが、他の竪穴住居と同様、楕円形を呈するものと考えられる。炉は調査区内で確認できていない。柱穴は8基で、柱穴の規模は径約30～60cm、深度は約15～20cmである。なお帰属時期については、遺物が出土していないため不明である。

C 掘立柱建物

SB1 (図版 11・50・51)

10E・10F・11E グリッドに位置する A 区で唯一の掘立柱建物である。調査区東側に延びるが、平面形は亀甲形を呈すると考えられる。本遺構を構成する柱穴は 5 基確認でき、柱穴の規模は径約 40～75cm、深度は約 30～60cm である。なお遺物は出土せず、帰属時期は不明である。

D 埋設土器

SH341 (図版 12・51)

14E グリッドの、SI333 南側に位置する。径 28cm、深度 72cm の掘り込みに正位の状態で胴部から底部まで残る深鉢が埋設されていた。口縁部もほぼ同じ位置から出土したが、遺構構築時に口縁部が残存していたか不明である。なお、帰属時期はⅦ a 期である。

SH346 (図版 12・52)

11E・12E グリッドに跨り、SI1 の範囲内に構築されている。径 44cm、深度 39cm の掘り込みに正位の状態で胴部から底部まで残る深鉢が埋設されていた。なお、帰属時期はⅦ a 期である。

SH347 (図版 12・52)

10E グリッドに位置し、SI3 付近に構築されている。径 56cm、深度 27cm の掘り込みに正位の状態で口縁部から胴部が埋設されていた。なお、帰属時期はⅤ期である。

E 土 坑

SK49 (図版 12・52)

14D グリッドに位置する土坑である。西側が調査区外に延びるが、平面形は楕円形を呈し、断面形は階段状を呈すると考えられる。土層断面の観察から、本遺構は遺物包含層であるⅡ b 層を掘り込んで構築されている。なお、帰属時期は出土遺物からⅤ b 期と考えられる。

SK54 (図版 12・52)

14E グリッドに位置する土坑である。東側が調査区外に延び、平面形は方形、断面形は箱状を呈する。断面図は作成できなかったが、写真や現場所見から、本遺構はⅢ層を掘り込んで構築されている。なお、帰属時期は出土遺物からⅥ期と考えられる。

SK67 (図版 12・52)

14E グリッドに位置する土坑である。西側が調査区外に延びるが、平面形は楕円形、断面形は U 字状、階段状を呈すると考えられる。SK68 と接しており、土層断面の観察から本遺構が新しい。同様の観察からは、本遺構はⅢ層を掘り込んで構築されている。なお、帰属時期については出土遺物が細かく時期判別が困難であったため、不明である。

SK90 (図版 13・53)

13E グリッドに位置する土坑である。東側が調査区外に延びるが、平面形は楕円形、断面形は浅い漏斗状をなすと考えられる。P89 と接しているが、土層断面の観察から P89 が新しい。なお、帰属時期は出土遺物からⅥ期と推定される。

SK95 (図版13・53)

13E グリッドに位置する土坑である。平面形は楕円形、断面形はV字状を呈する。なお、帰属時期は出土遺物からⅦ期と推定される。

SK150 (図版13・53)

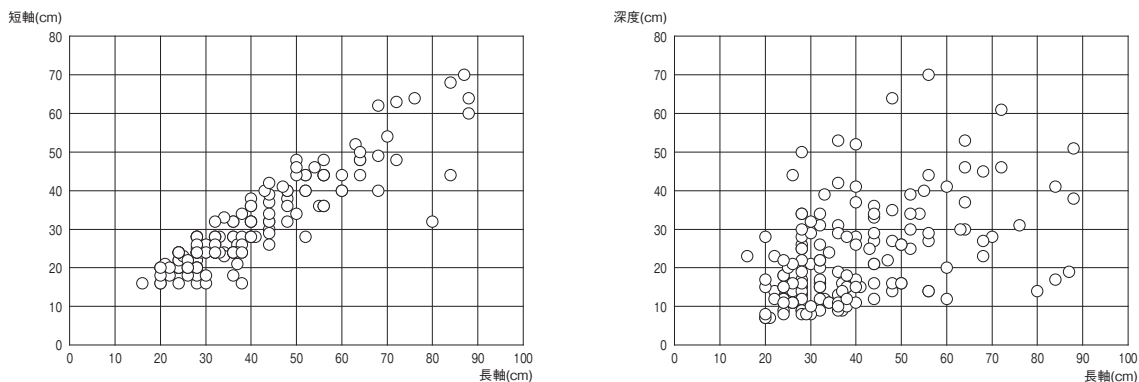
11E グリッドに位置する土坑である。東側が調査区外に延びるが、平面形は方形、断面形は階段状になるものと推測される。土層断面の観察から、本遺構はⅢ層を掘り込んで構築されている。

SK197 (図版13・53・54)

10E グリッドに位置する土坑である。西側が調査区外に延びるが、平面形は方形、断面形は箱状をなすものと推測される。断面図は作成できなかったが、写真や現場所見から、本遺構はⅡb層を掘り込んで構築されている。なお、帰属時期は出土遺物からⅥ期と考えられる。

F ピ ッ ト (図版13・53・54)

ピットについては個々には記載せず、第32図を用いて全体の概要を記載するにとどめる。まず規模について見ていくと、長軸16～88cm、短軸16～70cm、深度7～70cmの範囲に分布している。長軸と短軸は1:1～2:1の範囲にはほぼ収まるが、長軸と深度の関係をみると、相関関係は認められない。また、P108・P115・P123など規模の似通ったピットが規則的に配列しているが、周辺に類似したピットは検出できなかったため、今回これらを竪穴住居や掘立柱建物として認定しなかった。ここでは、それらに類似したピットが調査区外に存在する可能性を指摘するにとどめておきたい。P204については、土層観察や出土遺物から、近現代の遺構と考えられる。



第32図 ピット法量分布図

G 自然流路

SD327 (図版8・54)

15D グリッドに最深部をもち、最深部では120cmを測る。調査当初は本遺構を廃棄帯と考えたが、遺物出土のピークが周辺グリッドと同様にⅡb層にあり、Ⅱb層以降からは遺物がほとんど出土していない事などから、本遺跡が集落として存続していた頃にはほぼ埋没していたものと推定される。そのためここでは、廃棄帯として扱わず自然流路として取り扱うこととした。また覆土1～3は自然流路埋没後に掘り込まれた性格不明の遺構と考えられるが、2層に赤褐色土が観察されることから、竪穴住居に伴う炉の可能性も考えられる。なお本遺構は調査区外に延び、周辺地形の観察から、当時南東方向から北西方向に流れていたものと考えられる。

2 出土遺物

A 土 器

1) 概 要

A区からはコンテナ約65箱分の土器と土製品が出土した。分布は遺構密度の濃い10Eグリッドから15Dグリッドに分布する。土器は深鉢が主体で、他に鉢、浅鉢、蓋などが出土している。これらの資料の帰属時期はⅢ期～Ⅶb期で、主体はⅤb期～Ⅶ期である。

2) 各 説

SI333 (図版22・63)

本遺構を構成する柱穴からはほとんど遺物が出土しておらず、口縁部と胴部のそれぞれ一部が残る炉体土器1点を図化した。1は、Ⅶa期に帰属する南三十稲場式土器である。口縁部には同心円文、横線文、刺突文が、胴部には平行沈線文とRL縄文を施している。

SI1 (図版22・63)

2は深鉢の口縁部資料で、口縁部内側に蓋受状隆帯が巡り、口縁部はやや内傾する。外面には斜め方向に細沈線文が施されている。帰属時期はⅤb期と考えられる。

SH341 (図版22・63)

3は深鉢の口縁部と胴部～底部資料で、南三十稲場式の原山類型に分類される。口縁部は無文で、口唇部には楕円形の刺突文が施されている。頸部には、二条の沈線が巡り、口縁部と胴部を区画している。胴部は無文で、底部は網代痕が残る。帰属時期はⅦa期と考えられる。

SH346 (図版22・63)

4は深鉢の胴部から底部資料で、南三十稲場式土器である。胴部にはRL縄文とL縄文の二種の原体を用いた可能性が考えられるが、断定できない。帰属時期はⅦa期である。

SH347 (図版23・63)

5は深鉢の口縁部から胴部が残存する資料で、関東の加曾利EⅣ式に類する土器である。口縁部には横位の沈線が一条巡り、そこから縦方向の沈線が垂下する。帰属時期はⅤ期である。

SK49 (図版23・63)

6は深鉢の口縁部から胴部資料で、城之腰類型に分類されるものである。口縁部には一条の沈線が巡り、胴部には格子状沈線文が施される。帰属時期はⅤb期と考えられる。

SK54 (図版23・63)

7・8は深鉢の胴部資料で、花卉状刺突文を施す三十稲場式土器である。Ⅵ期の所産と考えられる。

SK90 (図版23・63)

9は深鉢の胴部資料で、花卉状刺突文を施す三十稲場式土器である。Ⅵ期の所産と考えられる。

SK95 (図版23・63)

10の器形は不明であるが、鉢と考えられる。胴部には、横位の沈線区画文と弧状沈線文が施されている。11は深鉢の頸部から胴部資料で、小仙塚類型に分類される資料である。頸部は無文帯で、頸部と胴

部を二条の沈線で区画している。胴部にはLR縄文を施した後、沈線が引かれる。帰属時期は10がⅦ期、11がⅦa期と考えられる。

SK197 (図版23・64)

12は深鉢の頸部から胴部資料である。頸部は無文帯で、その下に横位刻目隆帯が巡る。胴部は縄文と考えられる。Ⅶ期の所産か。13は蓋の破片である。縁部に刻目隆帯が巡り、体部には花卉状刺突文が施される。Ⅶ期に帰属する。

P100 (図版23・64)

14は深鉢の胴部破片である。縦位の沈線の間に雨垂状の刺突文が施される。Ⅴ期の所産か。

P137 (図版23・64)

15は深鉢の底部である。底部に残る網代痕は二種類確認でき、中央部付近のものはやや細い。

P173 (図版23・64)

16は深鉢の胴部破片で、L縄文(LR縄文か)ののち、弧状・連弧状の沈線が引かれる。帰属時期はⅦ期と考えられる。

P288 (図版24・64)

17は深鉢の口縁部から胴部資料である。口縁部形状は四単位の突起を持ち、突起は透孔を持つ環状突起である。その下部には横位の刻目隆帯が巡る。称名寺式新段階の関沢類型で、Ⅵb期に帰属する。

SD327 (図版24～26・64～66)

本遺構から出土した土器は、Ⅴb期からⅦ期と多時期に亘る。

18は細別時期は不明だが、Ⅳ期に帰属すると考えられる土器である。

19から31はⅤb期に帰属する一群である。19はR縄文ののち、円環状の突起が張り付けられる。20から27は城之腰類型の破片資料で、口縁部付近の刻目隆帯は、直線的なもの、C字状のもの、ノ字状のもの等が付されている。28は壺の破片資料である。口縁部の内側には蓋受状の隆帯が付され、外側には二単位の橋状把手が付くと考えられる。Ⅴb期に遡るか。29は全て同一個体と考えられる鉢である。口縁部に付く突起は山形を成すが、詳細な形状は不明である。胴部にはR撚糸文(絡条体か)が付され、沈線で区画される。なお、原体は押圧の可能性がある。Ⅵa期まで降るか。30は口縁部に環状の突起が付される。31は口縁部内側に蓋受状の隆帯が貼り付けられ、三十稲場式直前の資料と考えられる。

32から41はⅤb～Ⅵa期に帰属し、そのほとんどが三十稲場式古段階の資料である。32・33は深鉢で、四単位の橋状把手が口縁部に付される。また口縁部と胴部の区画は一条の刻目隆帯が巡り、32の隆帯の施文具は内部が中空のものと推定される。34は口縁部に瘤状の貼付があり、内側は蓋受状の隆帯が巡る。35から37は四単位の橋状把手が付き、胴部は花卉状の刺突が施される。38・39は口縁部破片で、透孔が孔けられる。40・41は橋状把手の破片で、40にも透孔が孔けられる。

42・43はⅤb～Ⅵa期に帰属し、43は時期が降る可能性を残す。42は口縁部に透孔を持つ橋状把手が付けられ、胴部には環状の貼瘤文が付される。43は42に比べ口縁部内側が張り出さない。頸部には一条の隆帯が巡り、胴部はLR縄文が付されている。

44はⅥb～Ⅵc期に帰属する深鉢である。口縁部にはS字状の橋状把手が付けられ、口縁部と胴部は一条の隆帯(刻目隆帯か)が巡る。

45から48はⅦ期に帰属する一群で、45のみⅦb期に位置付けられる。45は深鉢の口縁部破片で、内側に低い隆帯が付されている。46は浅鉢の口縁部破片である。47は深鉢の口縁部破片で、波状口縁を成

す。48 は外面は無文帯であるが、口唇部には渦巻状の沈線と二条の平行した沈線が巡る。

49 から 54 は、時期・系統共に不明な一群である。49 は深鉢で、口縁部に舌状の突起が付けられる。その突起から伸びるように沈線が一条巡り、胴部は鱗状の条線文が施される。50 は深鉢の破片で、蛇行沈線文が施される。51 から 53 は同一個体と考えられ、胴部には横ハ字状の細沈線文が施されている。54 は浅鉢で、口縁部無文帯の下部に RL 縄文を付し、逆 J 字状の沈線文を施す。東北系の可能性がある。55 は底部破片で、敷物圧痕は網代痕である。

56 から 59 は蓋である。56 は内外面とも無文である。57・58 には橋状把手が付けられる。59 は外縁の一部に挾部がある。

包含層出土資料（図版 27～31・66～69）

ⅢからⅦ b 期までの資料が出土しており、ⅤからⅦ a 期の資料が多い。

60 から 66 はⅢ期に帰属する一群である。60 は馬高式（火焰型土器）の鶏頭冠突起の鶏頭部分である。61 から 66 は枳倉式期に帰属する。61 は渦巻状の沈線が描かれた突起が張り出す。62 は口縁部の突起部分で、渦巻状の突起が付される。63 は縦位の多条沈線文の間に綾杉状沈線文が描かれる。64・65 は LR 縄文のあと多条沈線文や渦巻状沈線文が描かれる。東北系か。66 は深鉢の口縁部破片で、剥落しているが渦巻状の突起が付けられるものと推定される。また頸部には、横位の綾杉状沈線文が描かれる。

67 は鉢の口縁部破片で、四単位の橋状把手が付くものである。帰属時期はⅤ b 期か。

68 も鉢の口縁部破片で、無文帯の口縁部の下部に刻目隆帯が巡る。

69 は沖ノ原Ⅰ式の深鉢で、横位の楕円文の間に短い沈線が描かれる。帰属時期はⅣ期か。

70 はⅤ a 期に帰属する資料で、沖ノ原Ⅱ式の反里口類型に分類されるものである。横ハ字状の沈線文が胴部に付される。

71 から 83 はⅤ b 期の深鉢である。口縁部に付される隆帯にはバラエティが認められ、71 のように縦位に垂下する隆帯文と接続するもの、73 のように隆帯が繋がらず開口部を持つもの、74 のようにノ字状の隆帯と繋がるもの、80 のように環状の隆帯が付されるもの、82 のように刻目隆帯ではなく、縄文が隆帯状に付けられるものなど様々である。また、隆帯ではなく、83 のように沈線が巡るものもある。

84 は深鉢と考えたが、鉢の可能性も想定される。この資料の口縁部には二条の刻目隆帯が巡り、胴部には R 熱糸文が付けられる。長岡市多賀屋敷遺跡〔新田・石坂 2014〕に類例がある。帰属時期はⅥ期か。

85 は深鉢の胴部破片で、沈線で区画された範囲外に刺突文が付されている。Ⅴ期の所産か。

86 は鉢の底部付近の破片資料で、楕円形に区画された範囲外に刺突文が施されている。Ⅴ期に帰属する資料である。

87 は鉢の口縁部破片で、二条の横位隆帯区画文が巡る。帰属時期はⅥ a 期である。88 は深鉢の口縁部資料で、口縁に沿って刺突列が並ぶ。

89・90 は深鉢の口縁部破片で、関東・中部高地系の資料である。91 も同じく関東・中部高地系で、Ⅴ b 期の加曽利ⅣⅤ式の最新段階の資料か。

92 から 100 はⅤ b ～Ⅵ a 期に帰属する資料で、全て在地の三十稲場式である。92 は深鉢の橋状把手である。93 も深鉢で、透孔を持つ環状突起が付けられ、そこから垂下した刻目隆帯が巡る。94 は透孔が空けられた橋状把手をもち、胴部には花卉状刺突文が施される。95・96 は深鉢の口縁部破片で、内側に蓋受状隆帯が付される。96 は、胴部に花卉状刺突文が施されている。97 は深鉢の胴部破片で、花卉状刺突文が施されている。98 は口縁部内側に蓋受状隆帯が付かない資料で、胴部には LR 縄文が施される。99

は深鉢の頸部から胴部破片で、頸部の横位刻目隆帯に刺突文の入る瘤状の貼付文が付されている。胴部には点列上の花卉状刺突文が施されている。100も深鉢の頸部から胴部破片で、横位の刻目隆帯が付され、胴部は花卉状刺突文が施される。

101から104はⅥb～Ⅵc期に帰属する資料の一群である。全て三十稲場式の深鉢で、橋状把手にS字状の貼付が成されている。101は深鉢の口縁部破片で、8字状貼付文の付された橋状把手が付く。

105は深鉢の口縁部から胴部破片で、いわゆる「内後－中島タイプ」[石坂2006]である。Ⅵc期の所産である。

106は深鉢の胴部破片で刺突の入った環状の貼付文が付されている。帰属時期はⅥb～Ⅵc期である。

107は深鉢の頸部から胴部破片である。頸部と胴部は隆帯で区画されており、その下に弧状の沈線文が描かれる。Ⅴb期の所産か。

108から126はⅦ期に帰属する資料群である。108・109は、小仙塚類型に分類されるものである。110は南三十稲場式の口縁部破片である。111・112は同一個体と考えられる浅鉢で、口唇部に渦巻状沈線文が付された突起が四単位つくものである。113は浅鉢の口縁部破片で、口唇部に渦巻状沈線文が描かれる。114は深鉢の口縁部破片で、外面が無文、内面には渦巻状隆帯文と弧状沈線文+刺突文が施される。115は鉢の口縁部破片で、三ヶ所の透孔を持つ。116から120は深鉢の胴部破片で、そのほとんどは小仙塚類型に分類される。121から123は鉢の胴部破片である。これらも小仙塚類型に分類される資料である。124はⅦb期に帰属する深鉢である。胴部には多条沈線文と刺突列が縦位に並ぶ。125は深鉢の口縁部破片で、捻転状の突起が付され、口唇部に刺突文が施される。Ⅶ期の所産か。126は深鉢の口縁部破片で、口唇部に網状の捺糸文が付されている。口縁部から頸部は無文帯である。Ⅶ期の所産か。

127は深鉢の胴部破片で、LR縄文(R捺糸か)の後、縦位の蛇行沈線文が描かれる。Ⅴb～Ⅵa期に帰属する。

128は深鉢の口縁部破片で、格子状の条線文が描かれる。

129・130は同一個体と考えられる深鉢で、沈線の間にR縄文が充填されている。比較的精緻なつくりの土器である。

131は比較的薄手の深鉢の口縁部破片である。口縁部には二条の刻目隆帯が巡り、口唇部には刻目文が付される。Ⅶb期の所産か。

132は深鉢の底部破片で、底部には網状葉脈痕が残る。

133は壺で、極めて特殊な形状を成す。Ⅴb期の所産か。134は赤彩された壺で、器面が丁寧に整えられている。Ⅴb期まで遡るか。135は深鉢の胴部破片と考えたが、器形は不明である。Ⅴb期か。

136は浅鉢で、横位の多条沈線文が巡る。やや器面が粗いが、胴部下半は無文帯と考えられる。

137から143は蓋で、Ⅵ期に帰属する資料である。137は四単位の隆沈線で区画し、その間に沈線を描く。138・139は蓋のつまみ部分で、138は環状、139は渦巻状を成す。140は橋状把手が付く資料で、その付近の縁部はやや抉れている。141は内外面を赤彩しており、補修孔も数ヶ所確認できる。140同様、縁部の抉部付近に橋状把手が付される。142は無文の蓋で、土製品の可能性も考えられる。143には沈線文と花卉状刺突文が付けられる。

B 土製品（図版 31・69）

土製品は出土量が少なく、コンテナ 1 箱に満たない程度であった。器種ごとに記述を行う。

土偶

144 は左腕部のみ残存している。また乳房は焼成前の欠損か。

ミニチュア土器

145 は薄手のミニチュア土器である。胴部には横位の沈線区画文と LR 縄文、底部には網代痕が残る。

土製円板

146 から 151 は全て土器片を利用したものである。146 の一部には、摩滅痕が観察された。文様から、148 はⅥ期、151 はⅤ期に帰属する。

焼成粘土塊

152 は本調査区で唯一の焼成粘土塊である。器面に残る凹みは、掌握痕か。

不明土製品

153 は、刺突文と沈線文の描かれた不明土製品である。帰属時期はⅤ～Ⅵ期か。

C 石器・石製品

1) 概要

本調査区からは総数 1,747 点の石器・石製品が出土し、器種組成・石材組成は第 6 表に示している。器種組成について見ると、定形石器の中では磨石類が 179 点と最も多く、定形石器全体の約 41% を占める。これに、両極石器 (71 点、16%)、石錘 (46 点、11%)、打製石斧 (28 点、6%)、磨製石斧 (23 点、5%)、石鏃 (17 点、4%) などが続く。石材組成について見ると、安山岩が 398 点と最も多く、これに石英含有輝石安山岩 343 点、流紋岩 218 点、無斑晶ガラス質安山岩 165 点、頁岩 135 点が続く。遠隔地からの石材と推定される緑泥片岩 (1 点)、蛇紋岩類 (7 点)、ヒスイ (1 点) も出土しているが、これら石材の剥片が出土していないため、ほぼ製品の状態で遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。

	石鏃	尖頭器	石錘	板状石器	両極石器	打製石斧	磨製石斧	不定形石器	剥片	石核	原石	礫器	石錘	磨石類	石皿	台石	砥石	石棒	石製品	不明石器	合計
頁岩	4		4		8	6		63	42	5				3							135
珪質頁岩					5			1	3												9
凝灰岩	1				3		1	9	25					1			1			2	43
砂岩						1	1	2	2				9	26	1	3	14				59
礫岩								2	3	3				1			1				10
碧玉	2																				2
鉄石英 (赤)	1				6			11	53	1										1	73
鉄石英 (黄)			1		1			14	13												29
チャート			1		2			10	9												22
玉髓								1	1												2
珪化岩			1					6	3				1								11
黒曜石		1			2			1	5												9
流紋岩	5				15			57	117	10			3	8	2					1	218
珪化流紋岩									1												1
安山岩	1		1	2	20	4	3	122	191	3		6	17	25		1	1			1	398
無斑晶ガラス質安山岩	3		3		9			38	110	2											165
石英含有輝石安山岩				5		2		52	232	12	33			4		3					343
多孔質安山岩													6	59	8	4					77
花崗岩																	1				1
花崗閃緑岩													1	7		1					9
閃緑岩													1	17							18
輝緑岩							2		6				2	19							29
結晶片岩						6		18	7			1	5	5							42
緑色片岩						7	6	4	3					2							22
緑泥片岩																		1			1
斑レイ岩						1															1
変斑レイ岩						1	3		2				1	2		1					10
蛇紋岩類							7														7
ヒスイ																			1		1
合計	17	1	11	7	71	28	23	411	828	36	33	7	46	179	11	14	17	1	1	5	1747

第6表 器種・石材組成表

2) 各説

石鏃 (図版 32・37)

分類 17 点出土し、うち 9 点を図化した。未成品の C 類が 8 点と最も多く、A1 類の 5 点がそれに次ぐ。また A2 類、A3 類、B1 類、B3 類が 1 点ずつ出土しており、B2 類と D 類は確認できなかった。

石材 17 点を対象とした。流紋岩が 5 点と最も多く、次いで頁岩 4 点、無斑晶ガラス質安山岩 3 点、碧玉 2 点と続く。それ以外の石材は、凝灰岩、鉄石英 (赤)、安山岩が 1 点ずつ出土した。

法量 完形と未成品 14 点を対象とした。うち完形については、長さ 1.5 ～ 3.5cm、幅 1.2 ～ 1.8cm、厚さ 0.3 ～ 0.5cm の範囲に概ねまとまっている。石材別には、無斑晶ガラス質安山岩の 1 点が大きな値を示すものの、それ以外の分布は比較的まとまる。この傾向は、分類別の分布でも同様である。

2 出土遺物

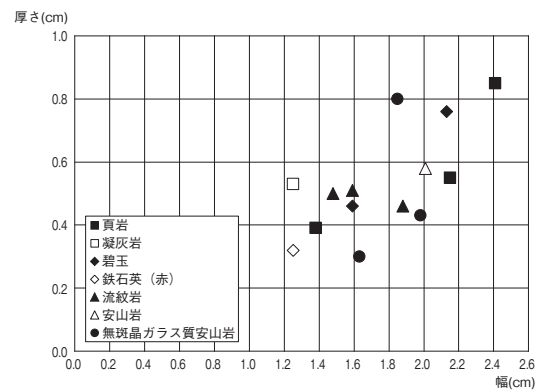
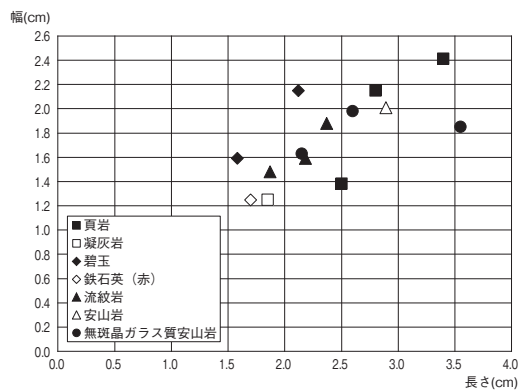
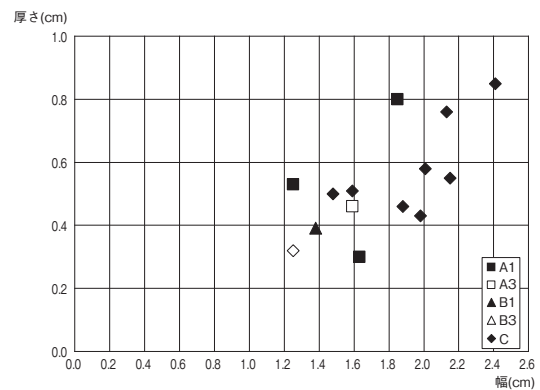
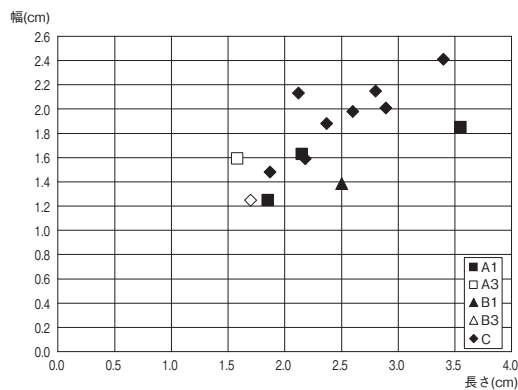
遺存状態 未成品以外の9点を対象とした。内訳は完形が6点と最も多く、先端部欠損が2点、右脚部欠損が1点である。なお、分類別・石材別の遺存状態の傾向は見出だせなかった。

分布 総数の17点を対象として見ると、遺構出土のものが3点、包含層出土が13点、表面採集が1点である。遺構出土資料の内、1点はSI2を構成する柱穴(P191)から出土している。包含層出土資料は、9E・9Fグリッドから7点出土しており、まとまった分布を示す。

付着物 17点を対象とし観察したが、アスファルト等の付着物は確認できなかった。

	A1	A2	A3	B1	B2	B3	C	D	合計
頁岩	1			1			2		4
凝灰岩	1								1
碧玉			1				1		2
鉄石英(赤)						1			1
流紋岩	1	1					3		5
安山岩							1		1
無斑晶ガラス質安山岩	2						1		3
合計	5	1	1	1	0	1	8	0	17

第7表 石鏃分類・石材別組成表



第33図 石鏃分類・石材別量分布図

尖頭器 (図版32・70)

1点のみ、遺構内から出土した。163は黒曜石製で、黒曜石産地推定では星ヶ塔産との結果が得られている(第Ⅶ章3参照)。本資料は上半部を欠損する尖頭器基部破片で、基部を中心に二次加工が施されている。基部以外への二次加工はほとんど施されず、表裏面には古い剥離痕が残っている。また、上部の折断面を打面として二次加工が加えられており、これは欠損後の再利用を考えた結果として捉えておきたい。

石錐（図版 32・70）

分類 11 点出土し、うち 3 点を図化した。ほぼ全面に二次加工が及ぶ A 類は 1 点のみの出土で、それ以外は全て B 類である。

石材 11 点を対象とした。頁岩が 4 点、無斑晶ガラス質安山岩が 3 点で、鉄石英（黄）、チャート、珪化岩、安山岩が各 1 点ずつ出土している。チャートは A 類にのみ使用されており、B 類にチャート製の石錐は確認できない。

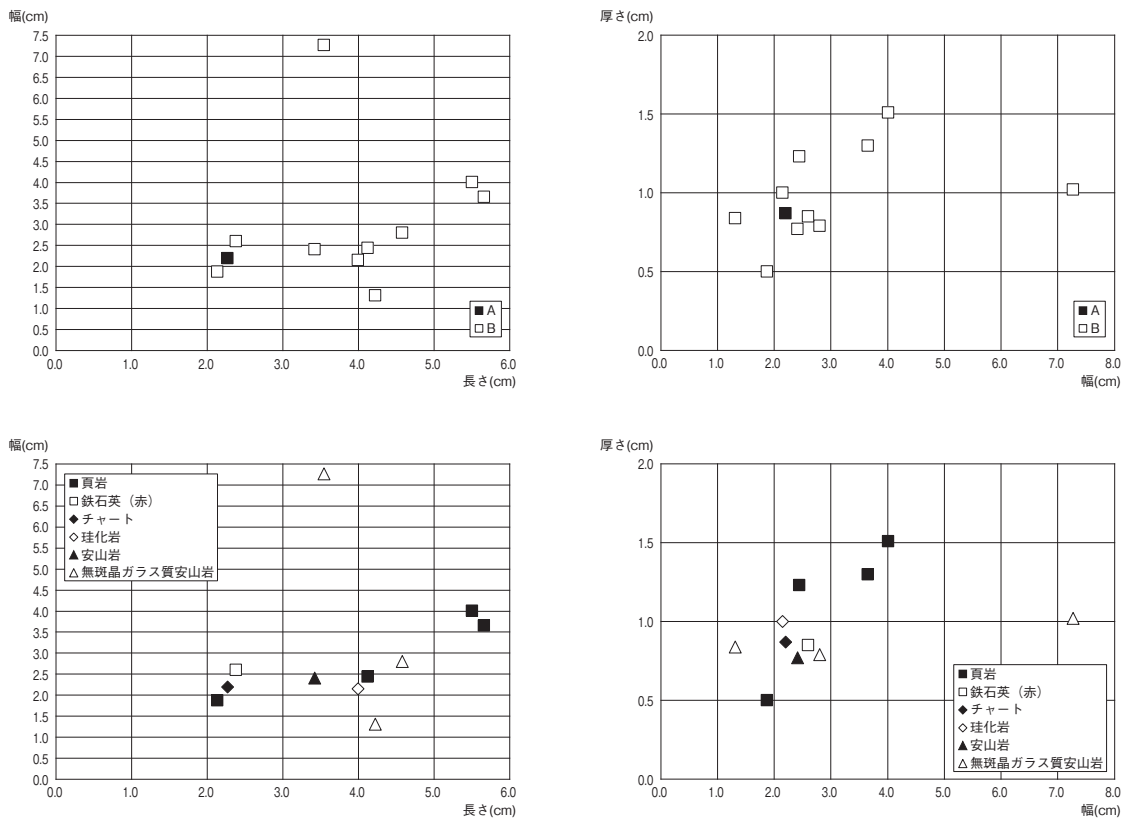
法量 11 点を対象とした。法量分布を見ると、全体的に散漫な分布を示す。石材別には、頁岩製の資料がやや大形の傾向を示し、鉄石英（黄）とチャートは小形である。分類別では、A 類は B 類の分布範囲に収まっており、傾向を見出だせなかった。

遺存状態 11 点を対象とし、機能部と考えられる錐部について観察を行った。その結果、A 類の 1 点が先端部を折損している以外は、全て完形であった。

分布 11 点を対象とした。内訳は、遺構出土資料が 3 点、包含層出土資料が 11 点である。包含層出土資料は、9E・9F グリッドが 3 点とややまとまっている。また、12E・13E・14E グリッドなど、調査区南側部分から出土した資料が 4 点あり、この点の一つの傾向として捉えておきたい。

	A	B	合計
頁岩		4	4
鉄石英（黄）		1	1
チャート	1		1
珪化岩		1	1
安山岩		1	1
無斑晶ガラス質安山岩		3	3
合計	1	10	11

第 8 表 石錐分類・石材別組成表



第 34 図 石錐分類・石材別法量分布図

板状石器 (図版 32・70)

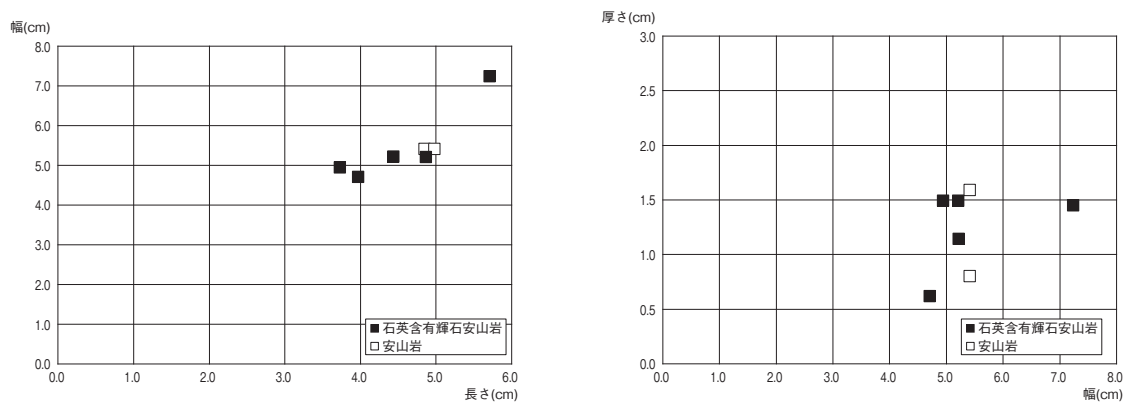
分類 7点出土し、うち3点を図化した。全てA類である。

石材 7点を対象とした。うち5点が石英含有輝石安山岩で、他は安山岩が2点であった。

法量 7点を対象とした。長さ3.7～5.7cm、幅4.7～7.2cm、厚さ0.6～1.6cmの範囲で、長さ・幅ともにやや大形の石英含有輝石安山岩製の資料を除けば、比較的まとまった分布を示している。逆に厚さについては大形の資料も他と同様の分布傾向を示す。石材別の分布傾向に違いは見出だせなかった。

遺存状態 7点を対象とした。完形が5点、略完形が1点で、未成品の可能性のあるものは1点あった。

分布 7点を対象とした。遺構出土資料は3点あり、全てSD327からの出土である。包含層出土資料は4点で、1点が調査区北側の2Fグリッドから出土しているものの、他は全て8Fグリッドからの出土で、遺構・包含層出土資料ともに、まとまった分布を示している。



第35図 板状石器石材別法量分布図

両極石器 (図版 32・33・70)

分類 総点数71点で、9点を図化した。A類が54点、B類が17点と、A類が多数を占める。

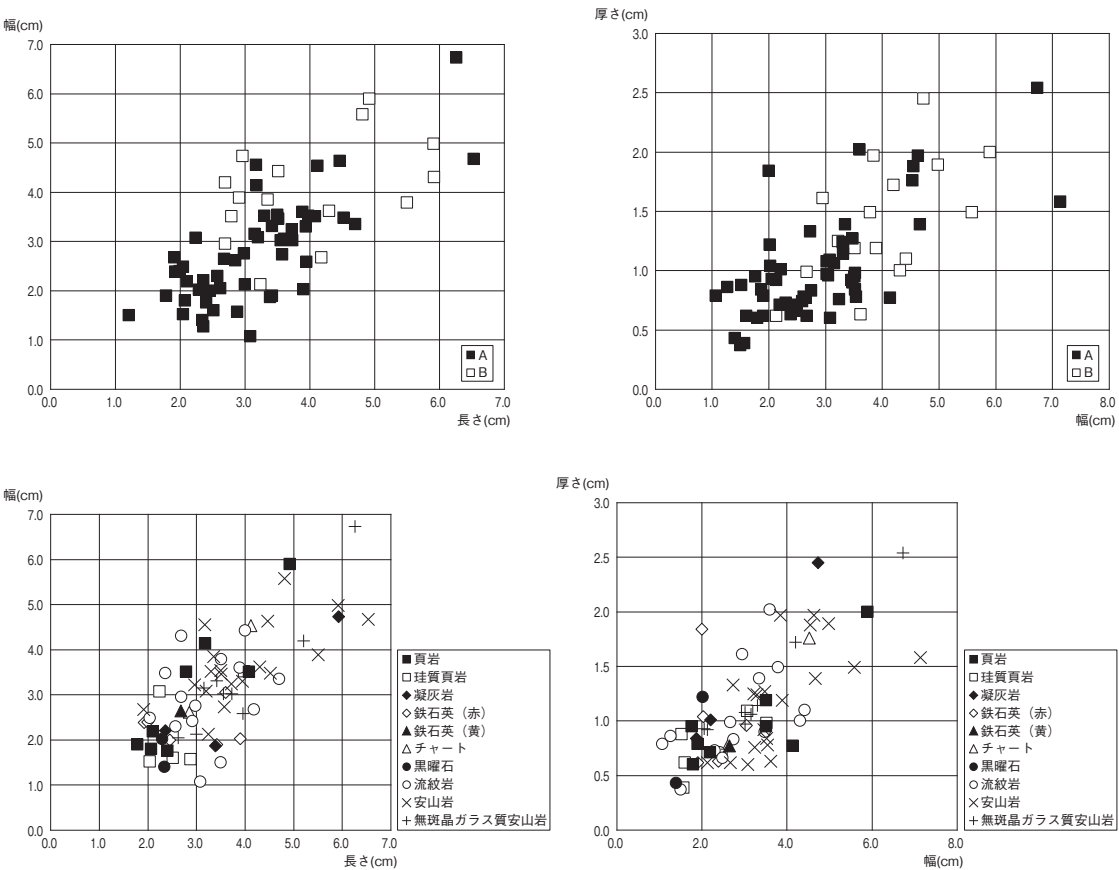
石材 71点を対象とした。本器種には10種類の石材が使用されており、A類にはそれら10種類の石材全てが、B類には頁岩、凝灰岩、流紋岩、安山岩、無斑晶ガラス質安山岩が用いられている。点数は、安山岩20点、流紋岩15点と、この2種の石材で約半数を占めている。黒曜石製の資料が2点出土しており、それらはそれぞれ、星ヶ塔産と大白川産と判定されている(第Ⅶ章3参照)。

法量 71点を対象としたが、これらは散漫な分布傾向を示し、法量の傾向は見出だせなかった。石材別に見ると、安山岩や流紋岩などの点数の多い石材は、散漫な分布を示すものの、珪質頁岩、凝灰岩、鉄石英(赤)・(黄)、黒曜石はやや小形の傾向にある。分類別ではA類に比べB類が大形の傾向を示している。

分布 71点を対象とした。遺構出土資料は17点で、そのうち15点がSD327からの出土である。包含層出土資料は、調査区北端からSD327が位置する15グリッドの範囲で出土している。

	A	B	合計
頁岩	6	2	8
珪質頁岩	5		5
凝灰岩	2	1	3
鉄石英(赤)	6		6
鉄石英(黄)	1		1
チャート	2		2
黒曜石	2		2
流紋岩	9	6	15
安山岩	13	7	20
無斑晶ガラス質安山岩	8	1	9
合計	54	17	71

第9表 両極石器分類・石材別組成表



第 36 図 両極石器分類・石材別法量分布図

打製石斧（図版 33・70・71）

分類 総数 28 点で、うち 8 点を図化した。最も多いものは A 類で、15 点出土しており、B 類と C 類がそれぞれ 2 点ずつ出土している。なお欠損品のため分類できなかった D 類は、9 点ある。

石材 28 点を対象とした。そのうち緑色片岩が 7 点と最も多く、次いで頁岩と結晶片岩が 6 点ずつ出土した。分類別では、A 類は打製石斧の使用石材 8 種類中 6 種類使用しており、石材の多様性が認められた。B 類は頁岩、C 類は結晶片岩のみ用いている。

法量 完形 7 点を対象とした。長さはやや散漫な分布を示すが、幅は 4.0 ～ 6.0cm、厚さは 1.5 ～ 2.0cm に分布が集中している。なお分類別と石材別の傾向については、見出だせなかった。

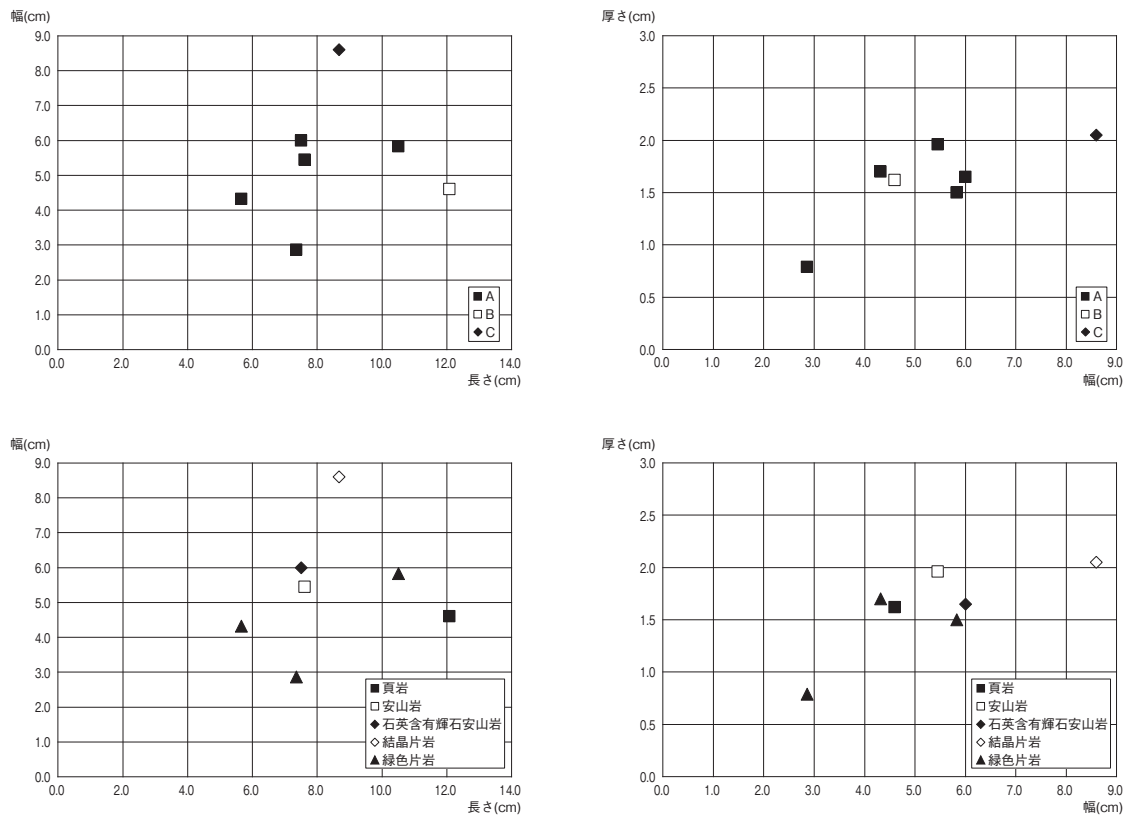
遺存状態 28 点を対象とした。内訳は、完形 7 点、基部欠損 13 点、刃部欠損 7 点、縦半分欠損 1 点で、何らかの形で欠損しているものが 21 点と、全体の 75% を占めている。

分布 28 点を対象とした。遺構出土資料が 6 点、包含層出土資料が 19 点、採集資料が 3 点である。遺構出土資料は 1 点を除き、全て SD327 から出土した。包含層出土資料については、8 グリッドから 15 グリッドからの出土で、これは遺構の集中範囲と重なる。

	A	B	C	D	合計
頁岩	3	2		1	6
砂岩	1				1
安山岩	2			2	4
石英含有輝石安山岩	2				2
結晶片岩	2		2	2	6
緑色片岩	5			2	7
斑レイ岩				1	1
変斑レイ岩				1	1
合計	15	2	2	9	28

第 10 表 打製石斧分類・石材別組成表

2 出土遺物



第 37 図 打製石斧分類・石材別法量分布図

磨製石斧（図版 33・34・71）

分類 総数 23 点（接合後、22 点）出土し、うち 9 点を図化した。分類別では A1 類が 3 点、A 類が 10 点、B 類が 3 点で、A2 類は出土していない。なお欠損品で分類できなかったものは 7 点ある。

石材 接合資料 1 点を含む 22 点を対象とした。A1 類及び A 類は、磨製石斧に使用されている石材のうち、緑色片岩以外の全ての石材を使用している。それに対し B 類では、緑色片岩のみであった。遠隔地から持ち込まれたと考えられる蛇紋岩類製の資料は 7 点出土し、全体の約 3 割を占めている。

法量 完形もしくは略完形の資料 3 点及び、接合資料 1 点の 4 点で、分布の傾向を掴むことが出来ない。しかし、188 のような大形品から、195 のような薄く小形の資料まで、法量の幅は広い。

遺存状態 接合資料を含む 22 点を対象とした。先述の通り、完形・略完形が 4 点、基部欠損 1 点、刃部欠損 9 点、基部と刃部ともに欠損 1 点で、破片は 7 点である。

分布 23 点を対象とした。遺構出土資料は 1 点で、P288 からの出土である。包含層出土資料は 5 グリッドから 14 グリッドまでの範囲から出土しており、やや散漫な分布傾向を示す。その他、採集資料が 1 点ある。また、接合資料が 1 点あり、約 30m 離れた位置から出土した。

転用 23 点を対象とし、そのうち輝緑岩製の資料 1 点が欠損後、磨石類に転用されている。

	A1	A2	A	B	C	合計
凝灰岩	1					1
砂岩			1			1
安山岩	2				1	3
輝緑岩			2			2
緑色片岩				3	3	6
変斑レイ岩			1		2	3
蛇紋岩類			6		1	7
合計	3	0	10	3	7	23

第 11 表 磨製石斧分類・石材別組成表

不定形石器（図版34・71）

分類 総点数411点で、うち15点を図化した。素材別分類ではⅣ類を除くと、縦長剥片素材のⅠ類が116点（約3割）と最も多く出土している。横長剥片素材のⅡ類は77点で、全体の2割ほどで、礫素材のⅢ類も18点と、定量出土している。加工別分類では不連続な二次加工が施されているE類が224点で、全体の半数以上を占める。微細剥離痕のあるF類も94点と定量出土しており、E・F類などの顕著な二次加工が認められないものが大多数を占めている。

石材 411点を対象とした。17種類もの石材が使用されており、そのうち安山岩が122点と最も多く出土している。これに次いで頁岩（63点）、流紋岩（57点）、石英含有輝石安山岩（52点）、無斑晶ガラス質安山岩（38点）などが利用されている。なお、素材別・加工別分類による傾向は見出だせない。ただし、石英含有輝石安山岩は板状石器や打製石斧、結晶片岩と緑色片岩は打製石斧や磨製石斧に多用されていることから、これらの石材は、上記器種の製作に関わる可能性も考えられる。

分布 411点を対象とした。遺構出土資料は110点で、全体の3割近くを占めている。このうちSD327からは72点出土した。それ以外は土坑やピット、性格不明遺構からの出土である。また包含層からは301点出土し、これらは2グリッドから17グリッドと広い範囲から出土している。

素材別

	I	II	III	IV	合計
頁岩	28	16		19	63
珪質頁岩				1	1
凝灰岩	5	3		1	9
砂岩				2	2
礫岩		1		1	2
鉄石英（赤）	3	3		5	11
鉄石英（黄）	4	4		6	14
チャート	4	4		2	10
玉髓				1	1
珪化岩	6				6
黒曜石	1				1
流紋岩	19	10		28	57
安山岩	26	31	3	62	122
無斑晶ガラス質安山岩	14	2		22	38
石英含有輝石安山岩	2	1	11	38	52
結晶片岩	4	2	4	8	18
緑色片岩				4	4
合計	116	77	18	200	411

第12表 不定形石器素材別・石材別分類組成表

加工別

	A	B	C	D	E	F	G	合計
頁岩	9		6	1	22	24	1	63
珪質頁岩					1			1
凝灰岩	2	1	1		4	1		9
砂岩	1				1			2
礫岩	1				1			2
鉄石英（赤）			1		4	6		11
鉄石英（黄）			1		7	6		14
チャート	2				3	5		10
玉髓					1			1
珪化岩	1				3	2		6
黒曜石					1			1
流紋岩	3	1	3		27	22	1	57
安山岩	6	7	3	2	77	16	11	122
無斑晶ガラス質安山岩	7	1	3		14	10	3	38
石英含有輝石安山岩	7		3		38	2	2	52
結晶片岩	1	1			16			18
緑色片岩					4			4
合計	40	11	21	3	224	94	18	411

第13表 不定形石器加工別・石材別分類組成表

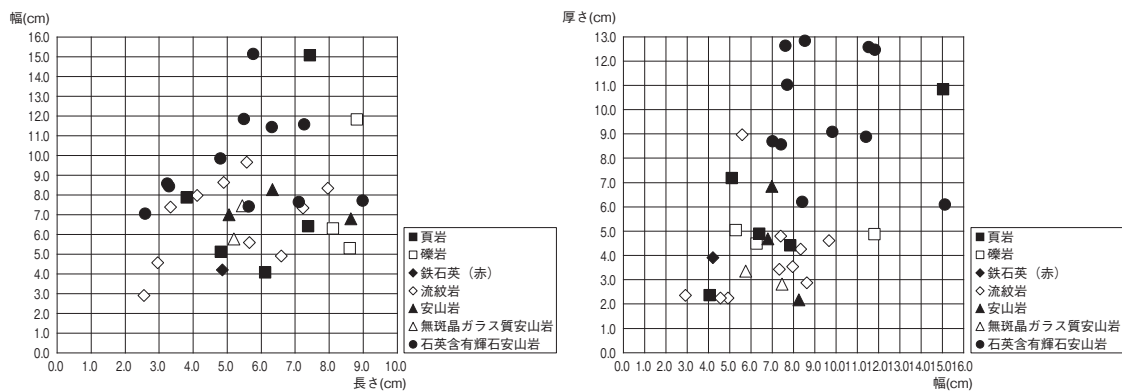
石核 (図版 34・72)

36 点出土し、石英含有輝石安山岩の 2 点が接合したため、総数 35 点である。うち 4 点を図化した。

石材 35 点を対象とする。内訳は頁岩 5 点、礫岩 3 点、鉄石英 (赤) 1 点、流紋岩 10 点、安山岩 3 点、無斑晶ガラス質安山岩 2 点、石英含有輝石安山岩 11 点、石英含有輝石安山岩と流紋岩が多い。

法量 35 点を対象とする。全体的に散漫な分布を示すが、石英含有輝石安山岩がやや大形の傾向を示す。なお石英含有輝石安山岩製の石核については、平成 24 年度の試掘調査において、やや大形の棒状礫を素材とした石核が出土している。

分布 出土した 36 点を対象とする。遺構からは 11 点出土し、そのうちの 9 点は SD327 からの出土で、他 2 点は P89 と P110 から各 1 点出土している。包含層出土資料は 24 点で、4 グリッドから 15 グリッドまでの範囲から出土している。ただし分布の中心は、遺構の集中する 9 グリッドから 15 グリッドである。接合資料については、小グリッド 1 つ分と、近いところからそれぞれ出土した。



第 38 図 石核石材別法量分布図

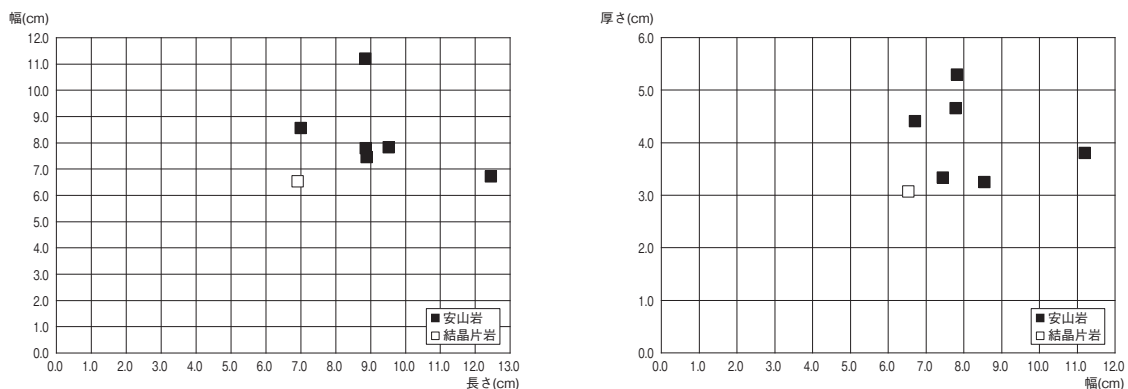
礫器 (図版 35・72)

7 点出土し、そのうち 2 点を図化した。

石材 7 点を対象とした。結晶片岩 1 点を除き、全て安山岩製である。

法量 7 点を対象とした。やや散漫な分布を示すが、長さ 7.0 ～ 10.0cm、幅 6.0 ～ 9.0cm、厚さ 3.0 ～ 5.0cm の範囲内に分布の中心がある。

分布 7 点を対象とし分布を見ると、遺構出土資料は 1 点で、他は包含層からの出土である。遺構出土資料については、SD327 から出土している。包含層出土資料は、遺構の密度がやや薄い 5 グリッドから 9 グリッドから出土しており、他の器種とはやや異なった平面分布を示している。



第 39 図 礫器石材別法量分布図

石錘（図版 35・72・73）

分類 46 点出土し、うち 24 点を図化した。分類別では A 類が 43 点と圧倒的に多く、全体の 9 割以上を占める。切目石錘の B 類は、本調査区からのみ出土している。

石材 46 点を対象とした。本器種には 10 種類の石材が利用されており、石材選択にバリエーションが認められる。内訳は安山岩が 17 点と最も多く、全体の約 4 割を占めている。次いで砂岩 9 点、多孔質安山岩 6 点、結晶片岩 5 点と続く。分類別の傾向は、A2 類と B 類が少ない他は傾向が見出だせない。

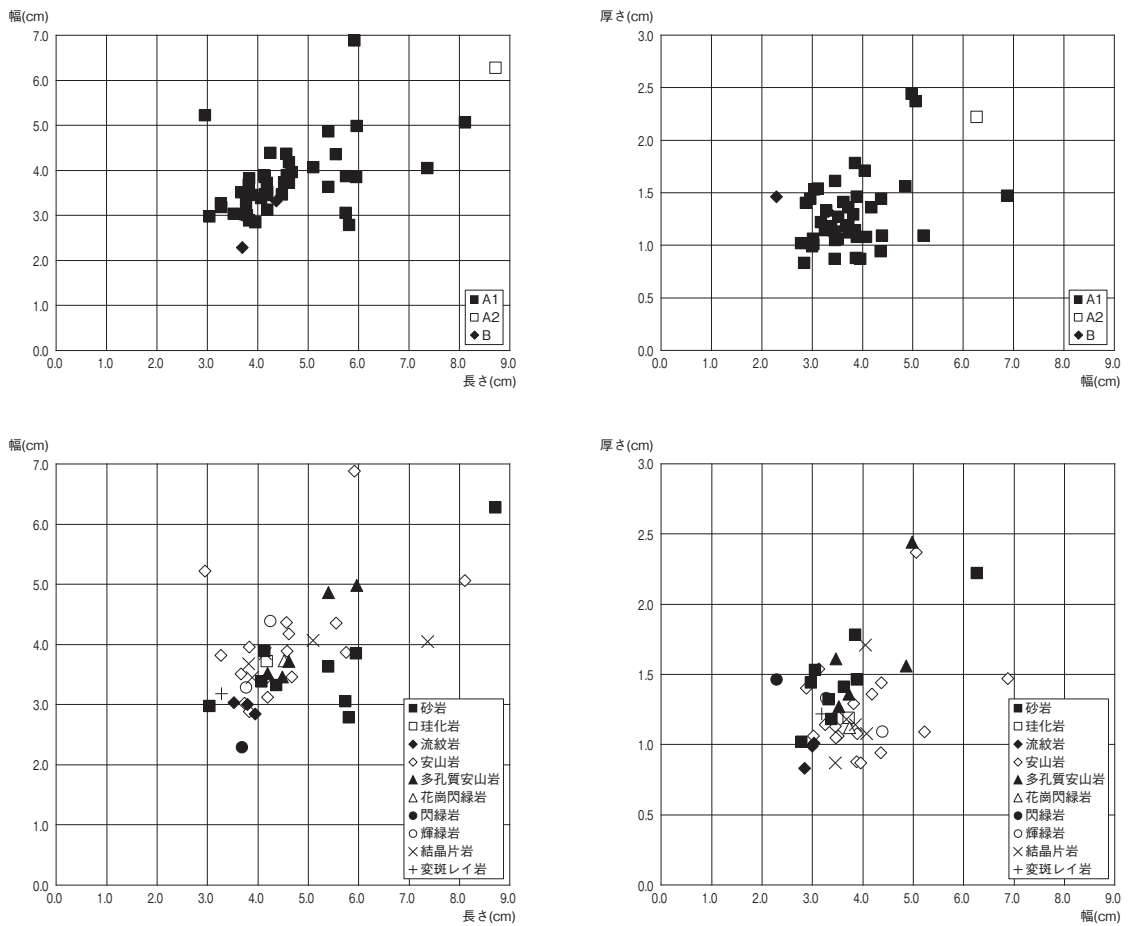
法量 46 点を対象とし法量分布を見ると、長さ 3.0 ～ 6.0cm、幅 2.7 ～ 4.5cm、厚さ 0.8 ～ 1.8cm によくまとまっている。石錘は素材形状を大きく変更しない器種のため、素材となる自然礫を採取する段階で、一定の基準があったものと推察される。石材別・分類別ともに、傾向は見出だせなかった。この点は、素材選択時に石材よりも大きさが優先された結果と考えたい。

遺存状態 46 点を対象とし、その全てが完形である。

分布 46 点を対象とした。遺構出土資料は 7 点で、P190 から出土した 1 点を除くと、全て SD327 から出土している。また包含層出土資料は、6 グリッドから 15 グリッドまでの広い範囲から出土しているが、遺構の集中する 9 グリッドか

	A1	A2	B	合計
砂岩	7	1	1	9
珪化岩	1			1
流紋岩	3			3
安山岩	17			17
多孔質安山岩	6			6
花崗閃緑岩	1			1
閃緑岩			1	1
輝緑岩	2			2
結晶片岩	5			5
変斑レイ岩	1			1
合計	43	1	2	46

第 14 表 石錘分類・石材別組成表



第 40 図 石錘分類・石材別法量分布図

ら 14 グリッドで多く出土している。

特記事項 227 の表裏面には研磨痕が観察され、この研磨痕の形成以降に上下両端の挟りが作出されている。石錘として整形するための研磨痕とは考え難く、ここでは磨石類等からの転用品と考えておきたい。

233 は、上下両端の挟りの作出が浅い資料で、未成品の可能性も考えられる。

磨石類（図版 36・73）

分類 179 点出土し、そのうち 18 点を図化した。分類別では凹痕のみの E 類が 68 点と最も多く、次いで敲打痕のみの G 類が 46 点出土している。磨痕＋凹痕の B 類と、敲打痕＋凹痕の F 類が 20 点前後出土しており、凹痕が器体表面に観察される比率が高い。特殊磨石に分類される H 類は 10 点出土している。

石材 179 点を対象とした。14 種類もの石材が資料されており、多孔質安山岩が 59 点と最も多く、砂岩 26 点、安山岩 25 点、輝緑岩 19 点、閃緑岩 17 点がこれに続く。それ以外の石材は、それぞれ 10 点未満の出土である。分類別では、多孔質安山岩は全ての分類に使用されており、利用頻度の高さが窺える。

法量 179 点中、完形もしくは略完形の 101 点を対象とした。長さ 4.0～17.0cm、幅 3.0～11.0cm、厚さ 1.3～7.0cm の範囲に分布しており、傾向としてはやや散漫な分布を示す。石材別においても傾向は見出だせないが、分類別で見ると、G 類がやや小形の傾向にあり、H 類の長さはより大きな値を示す。しかし形状は円形、楕円形、長楕円形のものが多く、法量よりも形状の選択性に重点が置かれている。

遺存状態 179 点を対象とし、完形・略完形は 101 点と、全体の半数以上を占める。

分布 179 点を対象とした。そのうち遺構出土資料は 35 点で、SD327 から 29 点出土し、ほか 6 点は土坑もしくはピットからの出土である。包含層出土資料は 3 グリッドから 16 グリッドまでの広い範囲から出土しているものの、分布の中心はやはり遺構密度の高い 9 グリッドから 14 グリッドである。

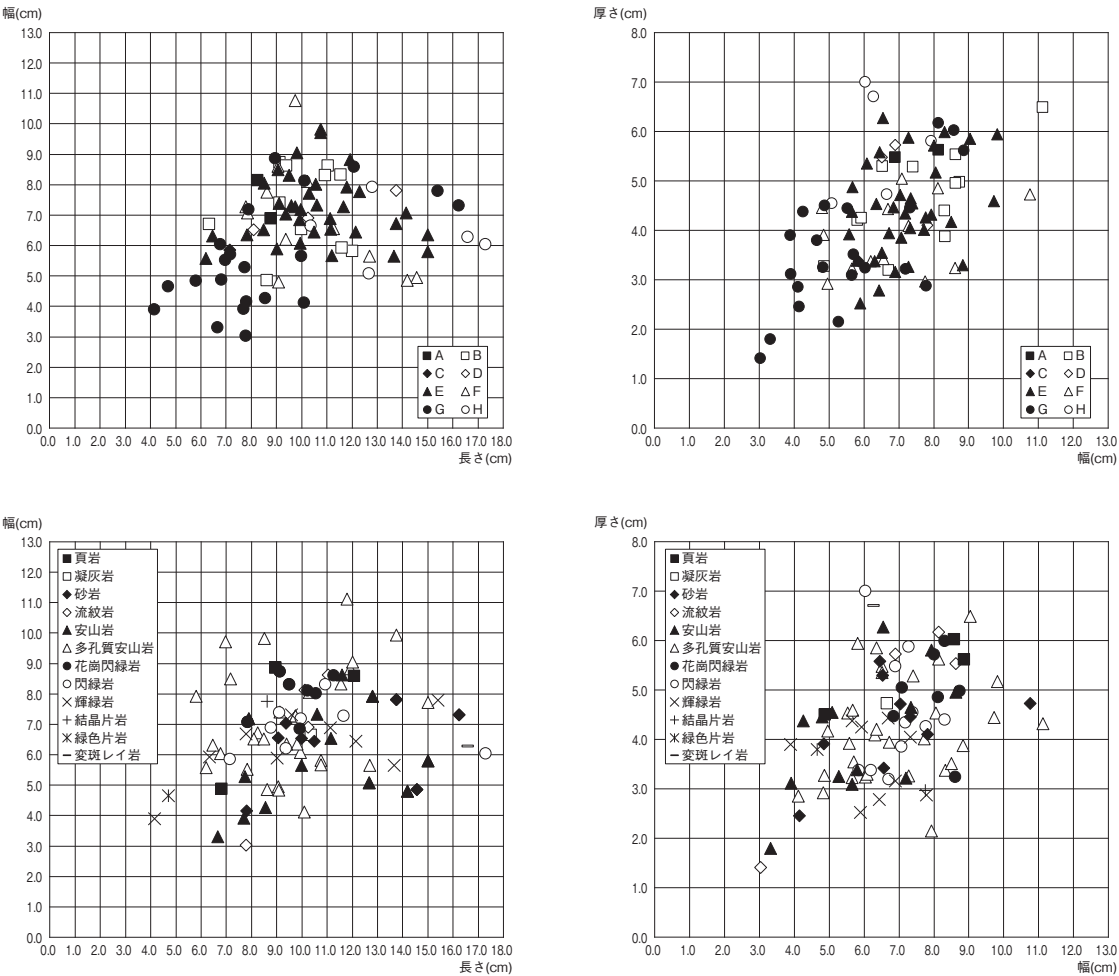
	A	B	C	D	E	F	G	H	合計
頁岩							3		3
凝灰岩								1	1
砂岩	2	3		1	8	3	8	1	26
礫岩					1				1
流紋岩		2		1	1	1	3		8
安山岩		3			6	2	10	4	25
石英含有輝石安山岩					1		3		4
多孔質安山岩	3	6	1	1	31	6	10	1	59
花崗閃緑岩		1			3	3			7
閃緑岩	2	3	1		8	2		1	17
輝緑岩		1			9	5	3	1	19
結晶片岩						1	4		5
緑色片岩							2		2
変斑レイ岩		1						1	2
合計	7	20	2	3	68	23	46	10	179

第 15 表 磨石類分類・石材別組成表

石皿（図版 36・74）

分類 11 点出土し、そのうち 2 点を図化した。分類別では、未成品の可能性のある A2 類が 5 点と最も多いが、それらのほとんどは破片のため、実際の点数は少ないものと考えられる。次いで A1 類の 3 点で、使用面が無加工の B 類は 1 点のみ出土している。

石材 11 点を対象とした。そのうち多孔質安山岩が 8 点と最も多く、流紋岩 2 点、砂岩 1 点と続く。なお、分類別の傾向は見出だせなかった。



第 41 図 磨石類分類・石材別法量分布図

法量 完形が1点のみで、傾向は見出だせない。

遺存状態 11点を対象とした。完形が1点のみである。それ以外は1/2以上残存しているものが2点で、ほか8点は全て小形の破片である。なお、石材別の遺存状態の差異は見出だせない。

分布 11点を対象とした。遺構出土資料は4点で、それらは全てSD327からの出土である。包含層出土資料は7点で、6Eグリッド出土の1点を除くと、10グリッドから13グリッドの範囲で出土している。この範囲は堅穴住居や掘立柱建物の分布するグリッドと概ね重なる。

	A1	A2	B	C	合計
砂岩				1	1
流紋岩	1		1		2
多孔質安山岩	2	5		1	8
合計	3	5	1	2	11

第 16 表 石皿分類・石材別組成表

台石 (図版 37・74)

分類 14点出土し、2点を図化した。A類が12点と大多数を占め、B類は2点のみである。本器種も石皿と同様に破片が多く、実際の点数は少ないものと考えられる。

石材 14点を対象とした。多孔質安山岩が4点、砂岩3点、石英含有輝石安山岩3点で、それ以外の石材は1点ずつ出土している。分類別では、B類の点数が少なく、傾向を掴めない。

法量 石皿と同様に、完形が1点のみで、傾向は見出だせなかった。

遺存状態 14点を対象とした。完形は1点のみで、1/2以上残存しているものが8点、小形の破片が5点

2 出土遺物

である。石皿同様、石材別の遺存状態の差異は見出だせない。

分布 14点を対象とした。遺構出土資料は3点で、全てSD327から出土している。包含層出土資料は10点で、6グリッドから11グリッドに分布の中心がある。また、SD327以南の16Dグリッドから1点出土している。その他、採集資料が1点ある。

砥石（図版 37-263～265）

分類 17点出土し、そのうち3点を図化した。断面形がほぼ方形を成すA類が5点で、それ以外のB類が12点出土した。ただし破片が多く、石皿・台石同様、実数は少ないものと推定される。

石材 17点を対象とした。内訳は砂岩が14点と多数を占め、それ以外の石材は1点ずつの出土である。この砂岩製の砥石は黒褐色を呈する軟質のものがほとんどであり、同石材は砥石として機能を果たすか、疑問も残る。また風化によって表面が削れやすく、そのためこの中には自然面を砥面として認定しているものが含まれる可能性をここで付記しておく。

法量 完形が3点のみ対象とする。これらの法量は長さ11.0～25.0cm、幅8.5～17.0cm、厚さ4.0～12.3cmの範囲にあり、ばらつきが大きい。

遺存状態 17点を対象とした。完形が3点、1/2程度欠損しているものが2点で、それら以外は全て小形の破片である。石皿・台石同様、破損率が高い。

分布 17点を対象とした。遺構出土資料は5点で、P162から出土した資料1点を除くと、全てSD327からの出土である。この傾向は、石皿・台石と同様である。包含層出土資料は12点で、7グリッドから13グリッドから出土している。SD327以南からは出土していない。

石棒（図版 37-266）

1点のみ出土し、図化している。266は緑泥片岩製の小形石棒である。緑泥片岩は、両調査区合わせて本資料にのみ用いられている。本資料は全面に研磨を施し、断面形が円形を成す。頭部と下半部を欠損している。そのため、末端部の形状は不明である。

石製品（図版 37-267）

1点のみ出土し、図化している。267はヒスイ製の石製品である。ヒスイ製の石器は、両調査区合わせて本資料のみである。本資料は全面を研磨によって整形され、その後1ヶ所穿孔されている。また、表裏面と左側面には縦方向の溝が観察される。

不明石器（図版 36・74）

5点が該当し、そのうち3点を図化した。268は凝灰岩製の資料である。左側縁を中心に剥離痕が観察され、裏面には凹痕も形成されている。また、上下両端は欠損しており、両者共に左方向からの加撃による欠損である。ただし、これが使用によるものかは判断出来ない。今回不明石器に分類したが、礫器の可能性も考えられる。269は流紋岩製の資料で、表裏両面を覆うように二次加工が施されている。異形石器の可能性も考えられる。270は鉄石英（赤）製の資料である。縦長剥片を素材とし、その基部と右側縁に二次加工が施されている。後期旧石器時代の二側縁加工のナイフ形石器とも考えられる。

	A	B	合計
砂岩	3		3
安山岩	1		1
石英含有輝石安山岩	3		3
多孔質安山岩	3	1	4
花崗岩		1	1
花崗閃緑岩	1		1
変斑レイ岩	1		1
合計	12	2	14

第17表 台石分類・石材別組成表

	A	B	合計
凝灰岩	1		1
砂岩	4	10	14
礫岩		1	1
安山岩		1	1
合計	5	12	17

第18表 砥石分類・石材別組成表

第Ⅵ章 B 区

1 検 出 遺 構

A 概 要

本調査区からは、竪穴住居 1 軒、掘立柱建物 3 棟、土坑 6 基のほか、ピットを多数検出した。A 区同様、検出した遺構の中には遺物が出土していない遺構も一定量存在し、帰属時期が判然としない遺構が多い。しかしながら、本調査区で検出した遺構は、出土遺物から V b 期（縄文時代中期末葉、以下、縄文時代は省略）～Ⅶ b 期（後期前葉）に帰属するものと考えられる。竪穴住居と掘立柱建物については、全て整理作業中に認定した。調査区内を南北に走る SD400 と SD523 については、土層堆積の観察やビニール片の出土等から、現代のものと確認されたため、ここでは記述しない。しかし、この二つの溝の中からも縄文時代に帰属する遺物が出土しており、資料の重要性から図化掲載したものもある。以下に、遺構種別ごとに記述を行う。

B 竪 穴 住 居

SI4（図版 17・56）

調査区北端の 15I・15J・16I・16J グリッドに位置しており、焼土が検出された土坑（SK480）の存在から周囲に竪穴住居があると考え、柱穴の配置や深度等から、本遺構を竪穴住居として認定した。本遺構は東側が調査区外に延びているが、平面形は概ね楕円形を呈するものと考えられる。SK480 には炉体土器が残されておらず、焼土も一部分のみであった。住居内での柱穴は 3 基で、柱穴の規模は径 44 ～ 64cm、深度は 30cm 前後である。遺構の構築時期は、出土遺物から VI 期と考えられる。

C 掘 立 柱 建 物

SB2（図版 17・57）

15I・16I・16J グリッドに位置し、SB3 と重複する。本遺構は、唯一調査区内に収まる亀甲形の掘立柱建物である。柱穴は 11 基で構成され、柱穴の規模は径 44 ～ 72cm、深度は 37 ～ 74cm である。帰属時期は、出土遺物からⅦ期と考えられる。

SB3（図版 18・57）

16I・16J グリッドに位置し、東側が調査区外に延びている。柱穴は 6 基で、柱穴の規模は径 32 ～ 48cm、深度は 10 ～ 56cm である。なお遺物が出土しておらず、帰属時期は不明である。

SB4（図版 18・58）

17H・17I グリッドに位置し、西側は後世の攪乱等で不明である。調査区内では 5 基の柱穴が確認でき、柱穴の規模は径 36 ～ 60cm、深度は 10 ～ 50cm である。なお遺構の帰属時期は、出土遺物から V b 期と推定される。

D 土 坑

SK406 (図版 19・59)

17I グリッドに位置する、本遺跡最大の土坑である。ほぼ完形の土器(297)が逆位の状態で検出しており、調査当初は竪穴住居と考えていたが、調査区を部分的に拡張し掘り進めた結果、遺構の範囲は想定より広がらず、土坑として認定した。また南北ベルト(B-B')からは、焼土層が検出された。しかし周辺から炭化材等が出土せず、ここでは燃烧行為が行われたと積極的に判断できない。そのため検出された焼土は、周辺からの混入と考えておきたい。本遺構からは多量の遺物が出土しているが、逆位で埋設された土器(297)から、帰属時期はⅦa期と考えられる。

SK410 (図版 20・60)

16I グリッドに位置する土坑で、現場での所見から隣接する P525 より新しい時期に構築されている。この土坑の平面形は楕円形、断面形は台形状をなす。出土遺物から本遺構は、Ⅶb期と考えられる。

SK419 (図版 20・60)

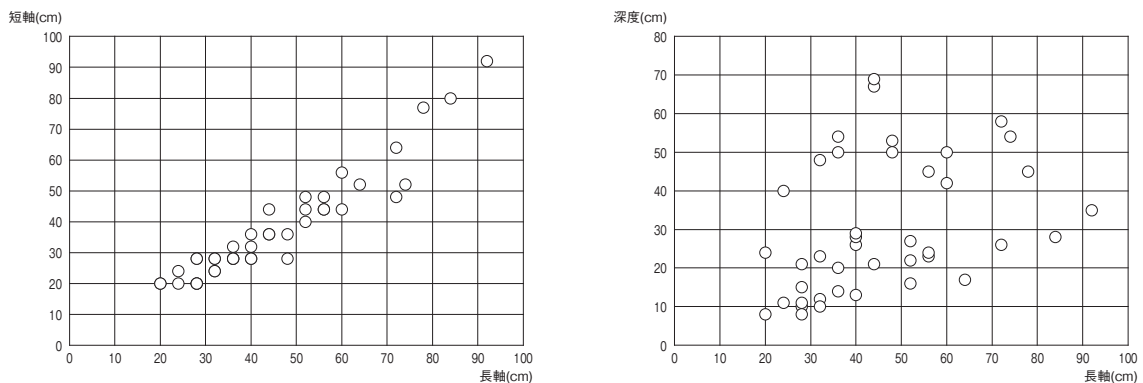
15I・16I グリッドに位置し、P418 よりも構築時期の新しい土坑である。本遺構の平面形は不整形、断面形は箱状をなす。出土遺物から、帰属時期はⅦ期と考えられる。

SK524・SK541 (図版 20・60)

両遺構とも 16H グリッドに位置しており、現場の所見から構築時期は SK541 が新しい。また両者の覆土を観察すると、本調査区の他の遺構と異なり、やや地山に近い色調をしている。遺物が出土していないため断定できないが、他の遺構とは構築時期が異なっている可能性がある。

E ピ ッ ト (図版 20・21・60～62)

ピットについては、A区と同様に個々には記載せず、第42図を用いて全体の概要を記載するにとどめる。規模について見ていくと、長軸 20～92cm、短軸 20～92cm、深度 8～69cm の範囲に分布している。また、A区同様、長軸と短軸は 1:1～2:1 の範囲にほぼ収まるが、長軸と深度の関係を見ると、分布にはばらつきがあり相関関係は認められない。そのため平面上の規模が大きいからと言って、必ずしも深度の値が大きくなるわけではない。



第 42 図 ピット量分布図

2 出土遺物

A 土 器

1) 概 要

B区からはコンテナ約 27 箱分の土器と土製品が出土した。遺物の出土分布を見ると、遺構密度の濃いグリッドと重複している。土器は深鉢が主体で、この他に鉢、浅鉢、注口土器、蓋が出土している。これらの資料の帰属時期はⅣ期～Ⅶb期で、主体はⅤb期～Ⅶb期である。

2) 各 説

SI4 (図版 38・77)

本遺構を構成する柱穴からの出土は多くない。271 は深鉢の口縁部破片で、口縁部にやや波状を成すように横位の刻目隆帯が巡る。時期はⅤb期と考えられる。

SB2 (図版 38・77)

柱穴からの出土は多くないが、時期判定の出来る資料を中心に図化した。272 はわずかに横位の刻目隆帯が残存する深鉢で、その下部には花卉状刺突文が付される。なお、帰属時期はⅥ期か。273 は浅鉢の口縁部資料で、器面を沈線のみで施文している。帰属時期はⅦ期と考えられる。274 は深鉢の胴部破片で、文様は縦位と横位の沈線のみで構成される。帰属時期はⅦ期か。275 は深鉢の底部破片で、一対の縦位の沈線が施文される。底部の敷物圧痕は観察できない。帰属時期は不明である。

SB4 (図版 38・77)

柱穴からの出土は多くない。276・277 は深鉢の胴部破片で、城之腰類型に分類される。Ⅴb期の所産である。

SK406 (図版 38～42・77～80)

本遺構から出土した土器はⅤ期～Ⅶb期と時期幅が広い。

278・279 はⅤ期に該当する資料である。278 は深鉢の口縁部から胴部破片で、口縁部の横位に巡る一条の沈線の下部には、RL 縄文+U字状(J字又はクランク文か)の沈線区画文が施される。東北系の土器である。279 は鉢もしくは浅鉢の口縁部破片で、口縁部の文様から沖ノ原式もしくはそれに類する土器か。

280 から 284 はⅤb期の所産と考えられる一群で、城之腰類型の深鉢である。285 は鉢の口縁部破片で、赤彩されている。Ⅴ～Ⅵ期に帰属する東北系か。

286 から 292 は、Ⅴb～Ⅵ期に該当する一群で、一部Ⅵ期に下るものもある。286・287 は口縁部に橋状把手の付く深鉢である。288 は深鉢の口縁部破片で、器形が他の資料とはやや異なる。口径の小さい壺状の器形か。289 は鉢の口縁部破片で、横位の刻目隆帯が一条巡る。290 から 292 は胴部破片で、瘤状の貼付文や花卉状刺突文、刺突文が確認できる。

293 から 296 はⅥb～Ⅵc期の資料である。293 は深鉢の口縁部から胴部の資料で、口縁部にS字状の橋状把手が付く。また頸部には横位の刻目隆帯が一条巡り、胴部には縦位の条線文が施文されている。294 は深鉢の口縁部破片で、口縁部に橋状把手が付けられている。頸部には横位の刻目隆帯が巡り、胴部には花卉状刺突文が施されている。295 も深鉢の口縁部破片で、橋状把手に環状の貼付文が施される。頸

部には一条の刻目隆帯が巡る。296 は胴部破片であるが、器形は不明である。胴部には R 撚糸が網目状に施される。

297 から 299 は、Ⅶ a 期に属する南三十稲場式の深鉢である。297 は口縁部に 7 単位の突起を持ち、同心円文や横位の沈線文が施される。胴部上半には渦巻文等が沈線によって描かれ、胴部下半は無文帯である。298 は胴部資料で、胴部上半には RL 縄文の後に、横位の渦巻状沈線文が施文される。胴部下半は無文帯である。299 は口縁部に 4 単位の突起を持つ資料で、口縁部から頸部の間は無文帯である。頸部と胴部は横位の沈線と 3 個一対の刺突文によって区画され、胴部には LR 縄文の後、逆 J 字の沈線文の下に懸垂文が施される。

300 は、完形に近い鉢である。口縁部には 4 単位の突起が付き、突起の間には捻転状の橋状把手が付けられている。胴部は無文帯で、底部には網代痕が残る。帰属時期については、V b ～Ⅶ a 期の範囲で捉えておきたい。

301 は、深鉢の口縁部破片である。口縁部はやや波状を呈し、その頂点に円形の刺突文が施されている。口縁部と頸部の間は無文帯で、頸部と胴部は刻目隆帯懸垂文が付けられる。帰属時期はⅦ期か。

302 は、深鉢の胴部破片で、器面には横位・逆 U 字・蛇行沈線文が施されている。帰属時期は V b ～Ⅶ期と考えられる。

303 から 310 は、Ⅶ期に帰属する土器である。303 は深鉢の口縁部破片で、やや波状を呈する口縁部に横位の沈線文と円形の刺突文が施される。胴部には LR 縄文を施文し、縦位の沈線文で区画している。304 も深鉢の口縁部破片である。口縁部は波状をなし、波頂部内外面に円文を施す。305 は深鉢の口縁部破片で、口縁部には環状突起が付けられる。胴部には隆沈線懸垂文が施されている。306 は口縁部破片で、環状の中空突起が付けられている。307 は深鉢の頸部から胴部の破片で、LR 縄文が施された後に渦巻状沈線文が施されている。308 は、深鉢の口縁部破片である。口縁部には山形の突起が付けられ、表面にはワラビ手状の懸垂文が施される。309 も、深鉢の口縁部破片である。表面は無文で、口縁部裏面には貼付文が付けられる。310 は深鉢の口縁部破片で、波状口縁を成すものと考えられる。口縁部は RL 縄文が施され、下位には横位の沈線で区画されている。その沈線の下には同じく RL 縄文が施され、縦位や斜位の多条沈線が施文されている。

311 は深鉢の胴部破片と考えられるが、器形の詳細や帰属時期は不明である。器体には環状の貼付文や刻目隆沈線文が施されている。

312・313、315 から 320 は無文土器で、口縁部が開くもの（312・313・315・316）と直線的なもの（317～319）の二者が確認できる。

314 は口縁部破片で、頸部には LR 縄文や横位の沈線文が施される。また、318 のように波状口縁のものも存在する。320 は底部破片資料で、底部には網代痕が残る。なお、帰属時期は不明である。

321 は鉢と考えられる口縁部破片で、口縁部には捻転状の突起が付けられているほか、沈線文が施文されている。また胴部は無文で、ミガキ調整が施される。帰属時期はⅦ期か。

322 は注口土器の口縁部破片で、S 字状や環状の貼付文が施される。また器体両面に付着物が確認でき、その付着物を分析したところ、漆であることが判明している [沢田 2018]。帰属時期はⅦ期か。

323 から 327 は、蓋の破片資料である。323 と 324 は同一個体と考えられる資料で、一条の刻目隆帯区画文が巡る。また外縁には挾部が確認できる。325 は中央部に一条の刻目隆帯区画文が貼り付けられ、S 字状をなすと考えられる。326 には二条の刻目隆沈線文が施され、外縁には挾部が認められる。327 は刻

目隆帯文と刺突文が施されている。橋状把手は剥落か。これらの帰属時期は、Ⅵ期である。

SK410 (図版 43・80)

328 は深鉢の胴部破片で、RL 縄文の後、横位の沈線文が施されている。時期はⅦ b 期で、関東・中部高地系の土器と考えられる。

SK419 (図版 43・80)

329・330 は V b ～Ⅵ期に属する三十稲場式土器で、深鉢の頸部から胴部破片である。両者ともに頸部には一条の横位の刻目隆帯区画文が巡り、胴部には花卉状刺突文が施されている。なお 329 の刺突文は、横ハ字状沈線文の影響を残すものと推察される。331 は、深鉢と考えられる資料の胴部破片である。胴部には沈線で区画された中に、RL 縄文 (R 縄文か) が施されている。器面はミガキ調整によって仕上げられている。帰属時期は不明である。332 は深鉢と考えられる口縁部破片で、口縁部はミガキ調整によって整形されている。帰属時期は不明である。333 は深鉢の口縁部破片で、内面には蓋受状隆帯が貼り付けられている。帰属時期は V b 期と考えられる。334 は蓋の破片資料で、沈線で区画された内側に刺突文が施されている。外縁には挾部が観察された。

P407 (図版 43・80)

335 は浅鉢の口縁部破片で、口縁部は波状を呈する。また外面には文様は施されていない。帰属時期は不明である。

P413 (図版 43・80)

336 は深鉢の口縁部破片で、橋状把手が欠損している。口縁部内面には、やや低い蓋受状隆帯が付けられている。帰属時期は、V b ～Ⅵ期と考えられる。

P420 (図版 43・80)

337 は、深鉢の口縁部から胴部破片である。口縁部から頸部には橋状把手が付けられ、頸部には横位の刻目隆帯区画文が一条巡る。胴部には、縦位の条線文が施されている。帰属時期は V b ～Ⅵ a 期である。

P422 (図版 43・80)

338 は蓋の破片資料で、一条の隆帯で区画された外側に刺突文が施されている。帰属時期はⅥ期か。

P423 (図版 43・80)

339 は深鉢の胴部破片で、斜位の格子状条線文が施されている。帰属時期は V b 期と考えられる。

P424 (図版 43・80)

340 は深鉢の口縁部破片である。外面は無文で、内面には蓋受状隆帯が貼り付けられている。帰属時期は、V b 期と考えられる。

P430 (図版 43・80)

341 は深鉢の口縁部破片である。内外面ともに文様は施されておらず、口唇部には平らな面を持つ。帰属時期は不明である。

P437 (図版 43・80)

342 は深鉢の底部破片で、底部には敷物圧痕は確認できない。帰属時期は不明である。

P440 (図版 43・80)

343 は深鉢の口縁部破片で、一条の横位刻目隆帯文が巡る。帰属時期は V b 期である。

344 は深鉢の口縁部から胴部破片である。口縁部には欠損しているものの、S 字状の橋状把手が付くと考えられる。口縁部内側には、やや低い蓋受状隆帯が貼り付けられている。帰属時期はⅥ b ～Ⅵ c 期か。

345 も深鉢の口縁部破片である。口縁部から頸部には欠損しているものの、橋状把手が付けられていたと考えられ、頸部には横位の刻目隆帯区画文が一条巡っている。344 同様、口縁部内側には低い蓋受状隆帯が貼り付けられている。帰属時期はⅥ b ～Ⅵ c 期と考えられる。

346 は深鉢の口縁部破片で、口縁部の形態はやや波状を呈する。また同心円状の条線文も施されている。帰属時期はⅦ期か。

347 は深鉢の胴部から底部破片で、胴部には L 撚糸文、底部には網状葉脈痕が残されている。帰属時期は不明である。

348 は蓋の破片資料で、器面全体に花卉状刺突文が施されている。外縁には挾部が形成されている。なお器面に残る二ヶ所の孔は補修孔と考えられる。帰属時期はⅥ期である。

P476 (図版 43・80)

349 は深鉢の口縁部破片で、二対の山形突起が形成されている。また外面は無文である。

P491 (図版 43・80)

350 は深鉢と考えられる頸部から胴部破片で、横位の隆帯文が付けられている。

P495 (図版 43・80)

351 は深鉢の底部破片で、底部には平行葉脈痕が残されている。

P497 (図版 43・81)

352 は深鉢の口縁部から胴部破片である。器形は頸部が屈曲し、内外面ともに文様は施されていない。

P511 (図版 43・81)

353 は深鉢の胴部破片である。外面には米字状の沈線文が施され、内面には条線のような調整が確認できる。帰属時期はⅦ期か。

包含層出土資料 (図版 44・81)

354 は深鉢の口縁部破片である。口縁部に施される一条の沈線の下には、刺突列が確認できる。帰属時期は、Ⅳ期である。

355 は深鉢の胴部破片で、U 字状の沈線文の外側に L 縄文が施されている。系統は東北系で、帰属時期はⅤ期か。

356 は深鉢で、口縁部は無文、頸部には横位の刻目隆帯区画文が付けられている。胴部は RL 縄文が施される。帰属時期はⅤ b 期である。

357 から 361 は、Ⅴ b ～Ⅵ a 期に帰属する資料である。357 は鉢の口縁部から胴部破片で、口縁部には横位の沈線文、口縁部から頸部には縦位の刻目隆帯文が付けられている。また胴部は無文である。358 の口縁部には瘤状貼付文や隆帯懸垂文が貼り付けられ、透孔も確認できる。359 には橋状把手が付けられ、その下部には瘤状の貼付文がある。360 には横位の刻目隆帯区画文が一条巡る。359・360 の口縁部内側には、蓋受状隆帯が貼り付けられている。361 は橋状把手が欠損している資料で、頸部には横位刻目隆帯区画文が貼り付けられている。

362 は深鉢の口縁部破片で、頸部に一条の横位刻目隆帯区画文が巡り、胴部には花卉状刺突文が施される。Ⅵ a ～Ⅵ b の所産か。

363 は深鉢と考えられる口縁部破片で、横位隆帯文が貼り付けられる。364 は鉢と考えられる胴部破片で、横位の微隆帯が付けられている。365 は深鉢の胴部破片で、横位の刻目隆帯区画文の下部には、短冊状の縦位多条沈線文が施されている。いずれも帰属時期は不明である。

366 から 368 は蓋で、366 はつまみ部、367・368 は体部資料である。368 は、内外面とも丁寧なミガキ調整が施されている。帰属時期はⅥ期である。

B 土 製 品（図版 44・81）

土製品はA区同様、少量のみの出土である。ここでは、器種ごとに記述を行う。

土偶

369 は土偶の右上半部の破片で、腕の先端部には刺突文が、体部には乳房が貼り付けられている。

円板状土製品

370 から 373 がこれにあたる。370 には花卉状刺突文、371 は撚糸文、372・373 は縄文が、それぞれの器面に残る。370 のみⅥ期である。

三角形土製品

374 には条線文が残る。また側面には研磨痕が残っている。

不明土製品

375 のほぼ全面に、刺突文が施される。残存する部位から土偶の腕の可能性も考えられる。376 は頂部がやや窪んでいる。形態から、蓋のつまみとも考えられる。

C 石器・石製品

1) 概要

本調査区からは総点数 1,079 点の石器・石製品が出土しており、器種組成・石材組成について、第 19 表に示した。器種組成では、定形石器の中で両極石器が 35 点（約 25%）と最も多く、石鏃も 31 点（約 21%）とそれに近い数量が出土している。A 区で最も多く出土した磨石類は 26 点と、定形石器の約 18% を占めている。A 区で比較的数量の多かった石錘は B 区では 5 点と少なく、また A 区で出土している尖頭器と礫器は、B 区から出土していない。石材組成ではやはり安山岩が最も多く、355 点出土している。次いで多いのが、流紋岩 249 点、石英含有輝石安山岩 123 点である。この主要石材の利用傾向は、A 区と概ね一致する。また A 区で出土が確認された緑泥片岩、蛇紋岩類、ヒスイ等の遠隔地の石材は、本調査区からは出土していない。なお、本調査区特有の石材として、石英が 2 点出土した。

	石 鏃	石 錘	板 状 石 器	両 極 石 器	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	不 定 形 石 器	剥 片	石 核	原 石	石 錘	磨 石 類	石 皿	台 石	砥 石	石 製 品	合 計
頁岩	2			3	1		14	31									51
珪質頁岩				2			4										6
凝灰岩	1	1		3			6	10	1								22
砂岩												5			2	2	9
礫岩								1									1
鉄石英（赤）	2	1		3			9	36	2								53
鉄石英（黄）				2			4	12									18
チャート	6	1		1			3	15									26
玉髓								3									3
珪化岩	5	1					4	24									34
黒曜石	1							3									4
流紋岩	14	3		9			34	188				1					249
安山岩		5	2	9	1	3	49	275	1		2	7				1	355
無斑晶ガラス質安山岩		2		3			23	32	1								61
石英含有輝石安山岩			2				11	105	2	2					1		123
多孔質安山岩												6	7				13
花崗閃緑岩								1				1					2
輝緑岩								1				3					4
結晶片岩					3		2	8			3	2					18
緑色片岩					2		2	10									14
変斑レイ岩						3		6				1				1	11
石英								2									2
合計	31	14	4	35	7	6	165	763	7	2	5	26	7	3	3	1	1079

第 19 表 器種・石材組成表

2) 各 説

石鏃（図版 45・82）

分類 31 点出土し、うち 26 点を図化した。分類別では A1 類が 8 点と最も多く、A2 類が 5 点、A3 類が 3 点と、凹基無茎鏃の A 類で、石鏃の約半数を占める。未成品の C 類（7 点）も定量出土している。なお本調査区では、平面形が五角形を成す B3 類は出土していない。

石材 31 点を対象とした。本器種には 7 種類の石材が使用されており、中でも流紋岩が 14 点と約半数を占めている。次いでチャート（6 点）、珪化岩（5 点）で、他は 1～2 点と少量のみの使用であった。また分類別では、流紋岩は A1 類と C 類に多く、それ以外の傾向は見出だせない。黒曜石製の石鏃が 1 点出土しており、分析の結果、信州産の可能性が指摘された（第Ⅶ章 3 参照）。

法量 総数 31 点中、完形、略完形、未成品の 17 点を対象とする。全体的に散漫な分布を示す。あえて括るならば、長さ 1.2～2.3cm、幅 1.0～1.7cm、厚さ 0.3～0.6cm に分布の中心がある。分類別では B2 類

がやや小形の傾向を示すほか、C類の未成品は、そのほとんどが他の分類と分布が重なっている。また石材別では、頁岩がやや大きな値を示し、チャートは幅に対し長さはさほど長くない。

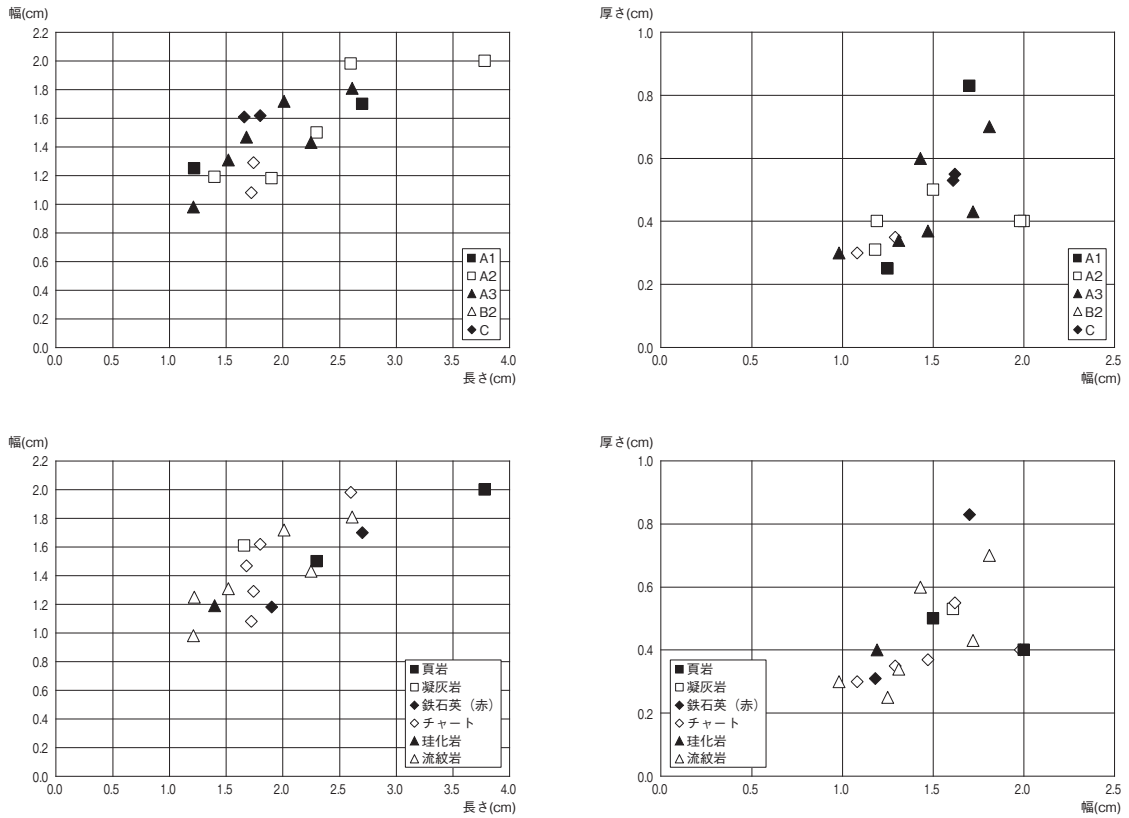
遺存状態 未成品以外の24点を対象とした。内訳は、完形及び略完形が10点、先端部欠損が7点、基部欠損が1点、先端部と基部欠損が1点、右脚部欠損が2点、先端部と脚部欠損が3点で、完形の比率が約4割を占める。分類別では、A2・A3類の完形率が高く、A2類は5点全てが、A3類は3点中2点が完形もしくは略完形の資料であった。石材別では、頁岩（2点中2点）、凝灰岩（1点中1点）、鉄石英（赤）（2点中2点）、チャート（6点中4点）の完形率が高い。

分布 31点を対象とした。遺構出土資料は28点と多く、うち26点がSK406から出土している。それ以外の遺構出土資料は、SK419から2点出土した。包含層出土資料は3点で、分布にばらつきがある。

付着物 31点を対象とし観察を行った。その結果チャート製の資料1点（396）に付着物が認められた。

	A1	A2	A3	B1	B2	B3	C	D	合計
頁岩		2							2
凝灰岩			1						1
鉄石英（赤）	1	1							2
チャート		1	1		2		1	1	6
珪化岩	1	1	1					2	5
黒曜石	1								1
流紋岩	5			1	1		6	1	14
合計	8	5	3	1	3	0	7	4	31

第20表 石鏃分類・石材別組成表



第43図 石鏃分類・石材別法量分布図

2 出土遺物

石錐（図版 45・82）

分類 14 点出土し、うち 3 点を図化した。分類別では B 類が 12 点と圧倒的多数を占めており、A 類は破片の 2 点のみであった。

石材 14 点を対象とした。本器種には 7 種類の石材が使用されており、安山岩が 5 点と最も多い。また流紋岩 3 点、無斑晶ガラス質安山岩 2 点と火成岩の点数が主体を成す。分類別では、堆積岩である凝灰岩とチャートは A 類に利用されており、これはより緻密で加工しやすい石材を選んだ結果と考えられる。

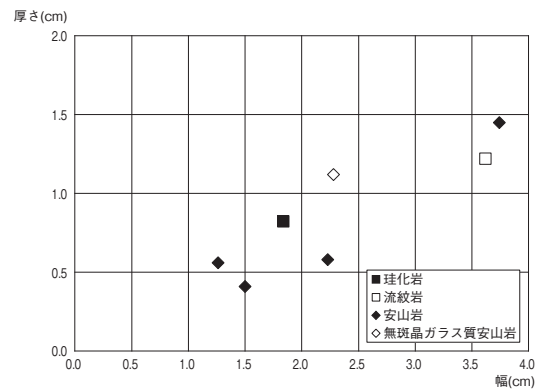
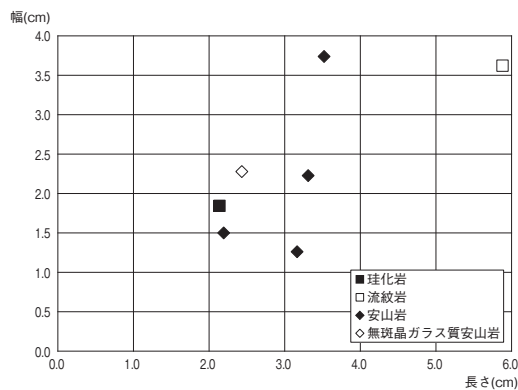
法量 7 点を対象とした。A 類に完形は無く、全て B 類である。これらはやや散漫であるものの、長さ 2.0 ～ 3.2cm、幅 1.3 ～ 2.4cm、厚さ 0.4 ～ 1.2cm 付近に分布の中心が認められる。また石材別では、流紋岩がやや大形、珪化岩は小形傾向にある。

遺存状態 14 点を対象とし、7 点が完形である。A 類の 2 点は全て欠損品で、2 点とも基部が欠損している。B 類は 5 点が完形で、半数以上が欠損品であった。

分布 14 点を対象とした。1 点の包含層出土資料を除き、全て SK406 からの出土である。包含層出土資料は 16I グリッドから出土している。

	A	B	合計
凝灰岩	1		1
鉄石英（赤）		1	1
チャート	1		1
珪化岩		1	1
流紋岩		3	3
安山岩		5	5
無斑晶ガラス質安山岩		2	2
合計	2	12	14

第 21 表 石錐分類・石材別組成表



第 44 図 石錐石材別法量分布図

板状石器（図版 45・82）

分類 4 点出土し、A・B 類それぞれ 2 点を図化した。

石材 4 点を対象とした。安山岩、石英含有輝石安山岩ともに、2 点ずつ出土した。安山岩は B 類に、石英含有輝石安山岩は A 類に用いられ、形態によって使用石材に違いが認められる。

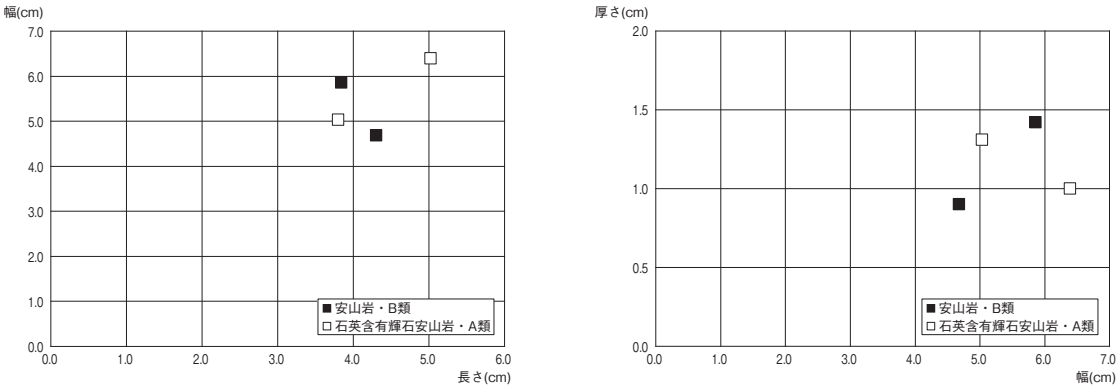
法量 4 点を対象とした。長さ 3.8 ～ 5.0cm、幅 4.6 ～ 6.4cm、厚さ 0.9 ～ 1.4cm の範囲に分布している。また、分類別の差異は見出だせなかった。

遺存状態 4 点全てが完形である。

分布 4 点を対象とした。うち遺構出土資料は 2 点で、全て SK406 から出土している。また、包含層出土資料は全て 16I グリッドから出土した。

	A	B	合計
安山岩		2	2
石英含有輝石安山岩	2		2
合計	2	2	4

第 22 表 板状石器分類・石材別組成表



第 45 図 板状石器分類・石材別法量分布図

両極石器（図版 45・82）

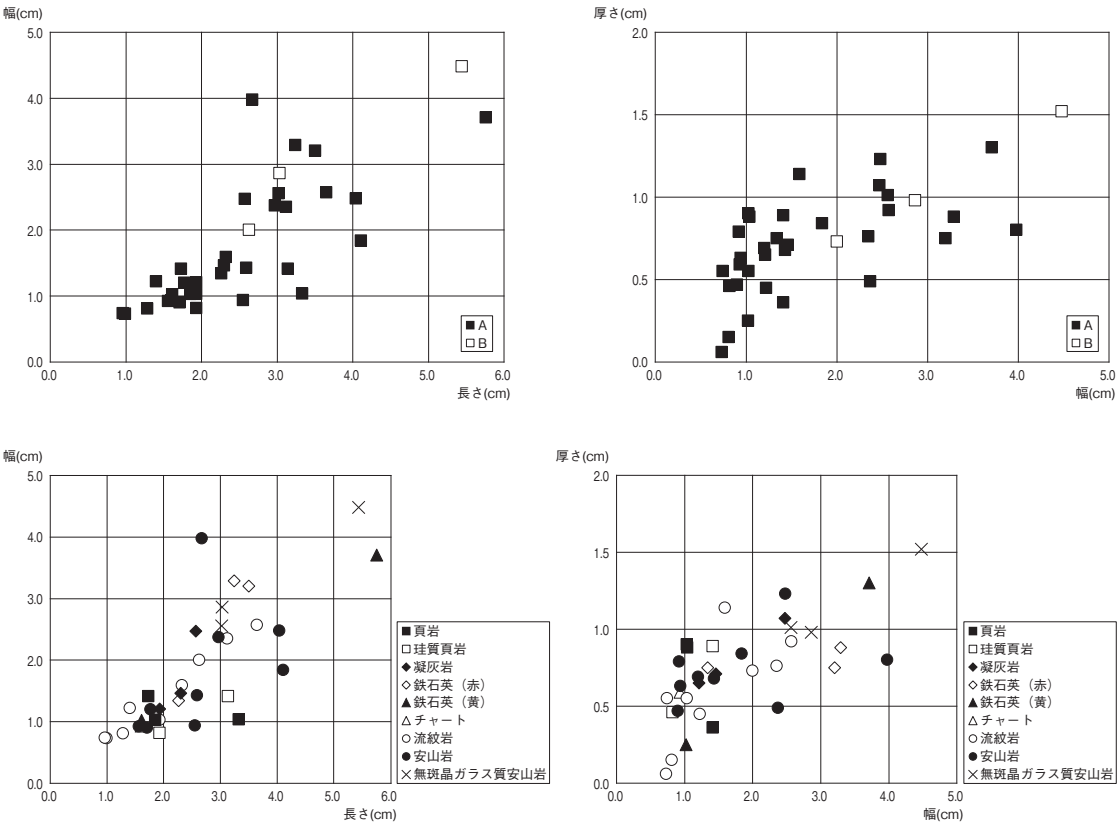
分類 35 点出土し、うち 8 点を図化した。A 類が 32 点、B 類が 3 点で、A 類が大多数を占める。

石材 35 点を対象とした。本器種には 9 種類の石材が用いられ、流紋岩と安山岩が 9 点ずつ出土し、最も多い。分類別では、A 類に 9 種類の石材全てが使用されている。

法量 35 点を対象とした。法量分布は散漫な分布を示すが、やや小形の傾向にある。分類別では B 類が少ないため、傾向を見出だせない。石材別では、頁岩、珪質頁岩、凝灰

	A	B	合計
頁岩	3		3
珪質頁岩	2		2
凝灰岩	3		3
鉄石英（赤）	3		3
鉄石英（黄）	2		2
チャート	1		1
流紋岩	8	1	9
安山岩	9		9
無斑晶ガラス質安山岩	1	2	3
合計	32	3	35

第 23 表 両極石器分類・石材別組成表



第 46 図 両極石器分類・石材別法量分布図

2 出土遺物

岩、チャートがより小形で、鉄石英（赤）と無斑晶ガラス質安山岩はより大形である。

分布 35点を対象とした。30点が遺構出土資料で、うち27点がSK406から出土した。包含層出土資料は5点で、SK406のあるグリッドとは異なるグリッドから出土している。

打製石斧（図版46・82）

分類 7点出土し、うち3点を図化した。A類3点、C類2点が出土し、B類は出土していない。

石材 7点を対象とした。結晶片岩と緑色片岩の変成岩製の資料が多く、ほかは頁岩、安山岩が1点ずつ出土している。ここから分類別の傾向は見出だせなかった。

遺存状態 7点を対象とした。全て欠損資料で、刃部欠損が4点と最も多い。また基部欠損が2点、C類の胴部残存が1点である。なお全て欠損資料のため、

法量の傾向については触れていない。

分布 7点を対象とした。遺構出土資料は3点で、SK406から2点、P51Iから1点出土している。包含層出土資料は4点で、そのうち3点が15Iグリッドと16Iグリッドの北側から出土しており、分布がややまとまる傾向にある。

	A	B	C	D	合計
頁岩	1				1
安山岩			1		1
結晶片岩	1		1	1	3
緑色片岩	1			1	2
合計	3	0	2	2	7

第24表 打製石斧分類・石材別組成表

磨製石斧（図版46・82）

分類 6点出土し、そのうち2点を図化した。分類別ではA類（A1・A2・A類）が4点と最も多く、B類は1点のみである。刃部平面形がやや開くA2類は、本調査区からのみ出土した。

石材 6点を対象として石材を見ると、安山岩と変ハンレイ岩が3点ずつ出土している。なお、分類別の傾向は見出だせなかった。

遺存状態 6点を対象とした。完形は無く、略完形が1点出土したのみで、他は全て欠損資料である。その内訳は、刃部欠損が2点、基部欠損が1点、破片が1点である。なおB類の1点については、未製品もしくは石製品の可能性も考えられるが、判然としない。法量の傾向については、略完形の資料が1点のみであるため、ここでは触れていない。

	A1	A2	A	B	C	合計
安山岩	1		1	1		3
変斑レイ岩		1	1		1	3
合計	1	1	2	1	1	6

第25表 磨製石斧分類・石材別組成表

分布 6点を対象とした。全て包含層からの出土で、遺構から出土した資料は皆無であった。また、6点中5点が16Iグリッドから出土しており、特にSB2からSK406の間の遺構がやや散漫な範囲から出土している。

不定形石器（図版46・83）

分類 165点出土し、そのうち8点を図化した。素材別分類ではIV類を除くと、I類が40点と最も多く、全体の25%を占めている。II類も33点と多く、こちらも全体の20%を占める。加工別分類ではやはりE・F類が圧倒的に

素材別

	I	II	III	IV	合計
頁岩	6	6		2	14
珪質頁岩		1		3	4
凝灰岩	3	1		2	6
鉄石英（赤）	2	1		6	9
鉄石英（黄）	1			3	4
チャート	1			2	3
珪化岩				4	4
流紋岩	10	8		16	34
安山岩	11	9	1	28	49
無斑晶ガラス質安山岩	6	6		11	23
石英含有輝石安山岩			1	10	11
結晶片岩		1		1	2
緑色片岩			1	1	2
合計	40	33	3	89	165

第26表 不定形石器素材別・石材別分類組成表

多く、両者合わせて 86%を占めている。他の分類ではA類の 16 点を除き、少数が出土した。

石材 165 点を対象とする。ここでは 13 種類の石材が用いられており、安山岩、流紋岩、無斑晶ガラス質安山岩製の不定形石器が多く出土している。なおⅤ章でも触れたが、石英含有輝石安山岩、結晶片岩、緑色片岩については、板状石器、打製石斧、磨製石斧の製作に関わる資料の可能性も考えられる。素材別・加工別分類による傾向は見出だせない。

分布 165 点を対象とした。遺構出土資料は 121 点で、うち 96 点が SK406 からの出土である。包含層出土資料は 44 点で、これらは調査区を網羅するように出土しており、明確な集中範囲は見出だせない。

加工別	A	B	C	D	E	F	G	合計
頁岩			1		3	10		14
珪質頁岩	2					2		4
凝灰岩	1				3	2		6
鉄石英（赤）					4	5		9
鉄石英（黄）					2	2		4
チャート					2		1	3
珪化岩			1		3			4
流紋岩	5		2		13	14		34
安山岩	4	1			29	14	1	49
無斑晶ガラス質安山岩	4				10	9		23
石英含有輝石安山岩					11			11
結晶片岩					2			2
緑色片岩					2			2
合計	16	1	4	0	84	58	2	165

第 27 表 不定形石器加工別・石材別分類組成表

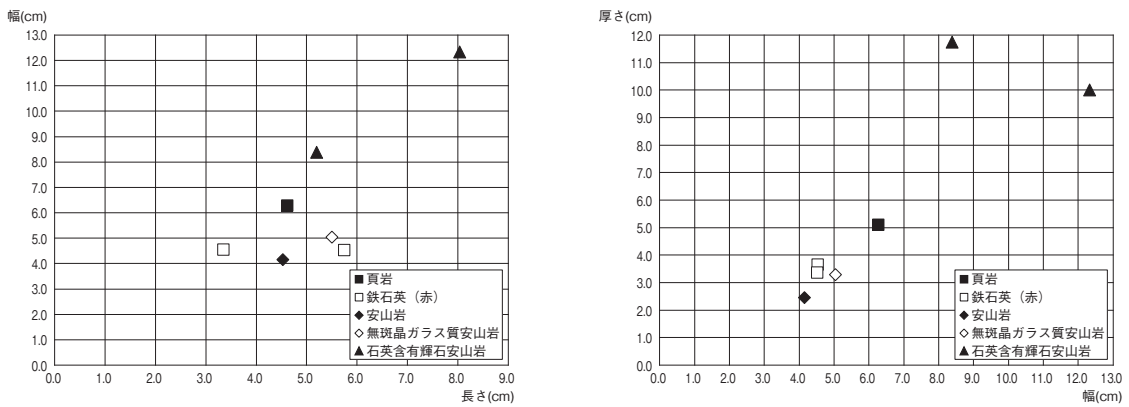
石核（図版 46・83）

7 点出土し、そのうち 2 点を図化した。

石材 7 点を対象とする。ここでは 5 種類の石材が石核に利用されており、鉄石英（赤）と石英含有輝石安山岩が各 2 点で、凝灰岩、安山岩、無斑晶ガラス質安山岩が 1 点ずつ出土している。

法量 7 点を対象とする。石英含有輝石安山岩の 2 点が大形で、それ以外の 5 点は分布がややまとまる。

分布 7 点を対象とする。遺構出土資料は 3 点で、内訳は SK406 から 2 点、P440 から 1 点である。包含層出土資料は 4 点で、全て 16I グリッドの SB2 付近の小グリッドからの出土である。



第 47 図 石核石材別法量分布図

2 出土遺物

石錘（図版 47・83）

分類 5点出土し、3点を図化した。A1、A2類はほぼ同数で、本調査区からはB類は出土していない。

石材 5点を対象とした。安山岩と結晶片岩の2種類の石材が使用されている。また、分類別の傾向は見出だせない。

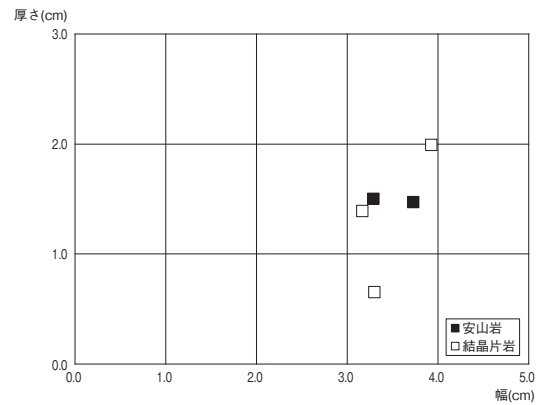
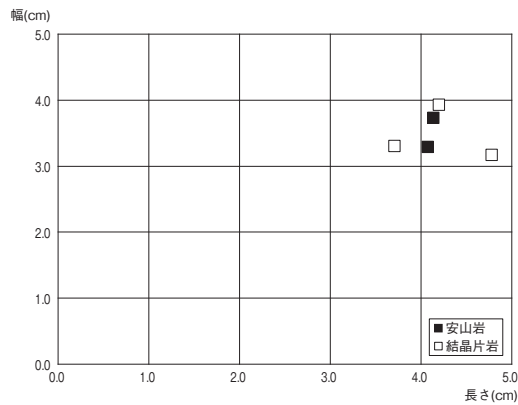
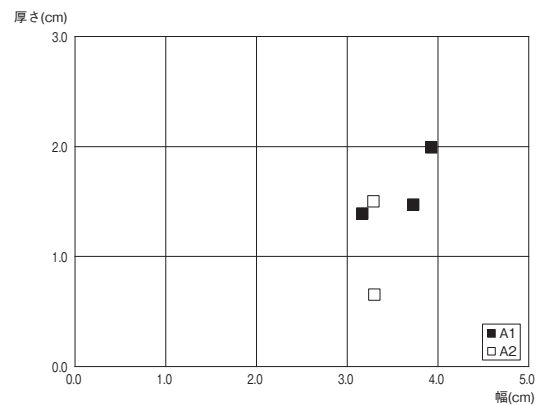
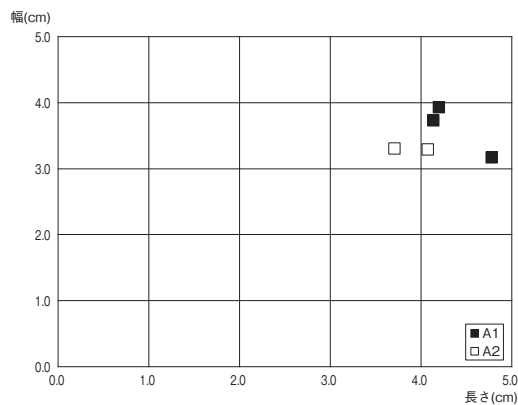
法量 5点を対象とした。長さ、幅ともにややまとまった分布を示すが、厚さについては0.6～2.0cmとやや分布にばらつきが認められる。

遺存状態 5点を対象とし、その全てが完形である。

分布 5点を対象とする。遺構出土資料は3点で、SK406から2点、SK480から1点出土した。包含層出土資料は2点で、ともに16I6グリッドからの出土である。

	A1	A2	B	合計
安山岩	1	1		2
結晶片岩	2	1		3
合計	3	2	0	5

第28表 石錘分類・石材別組成表



第48図 石錘分類・石材別法量分布図

磨石類（図版 47・83）

分類 26点出土し、そのうち2点を図化した。F・G類が8点ずつ出土しており、E類が4点出土している。ここから、敲打痕及び凹痕が残される比率が非常に高い事がうかがえる。またA区で出土したH類は、本調査区からは出土していない。

石材 26点を対象とする。8種類の石材が使用されており、安山岩や多孔質安山岩、砂岩の点数が多い。花崗閃緑岩と輝緑岩については、剥片を除くと本器種にのみ用いられている。なお分類別の石材の利用傾向について見たが、偏りは確認できなかった。

法量 26点を対象とする。長さ、厚さについては分布にまともには確認できなかったが、幅については、概ね5.0～8.0cmに分布の中心が認められる。分類別の法量分布では、B類がやや大形であるものの、

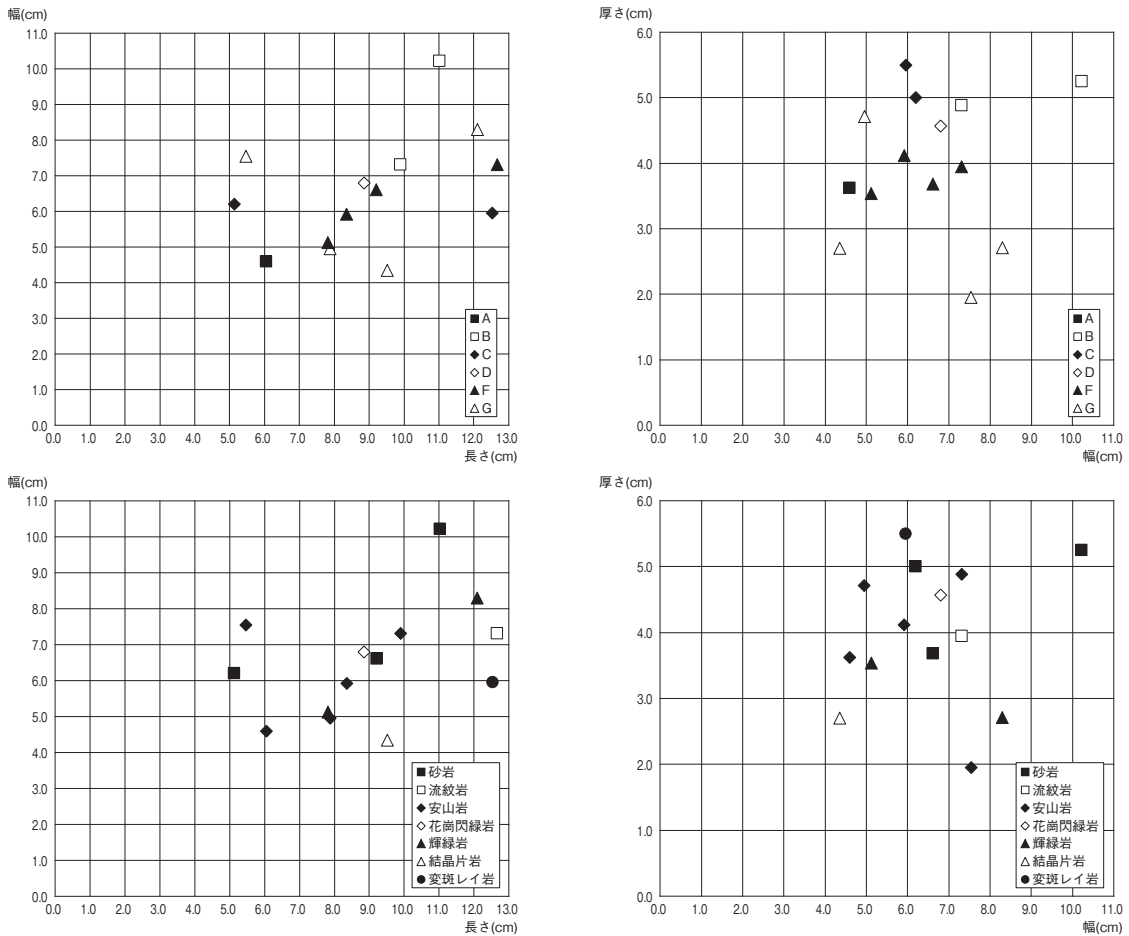
分類ごとの傾向は掴めない。石材別では砂岩製の資料がやや大形の傾向にあるが、これについても分布傾向は掴めなかった。本器種は素材形状を大きく変更しない器種であるため、この法量分布がすなわち素材選択の結果と言える。

遺存状態 26 点を対象とする。そのうち完形もしくは略完形は 14 点で、全体の約半数を占める。それ以外は 1/2 ほど欠損した資料が 10 点、それ以下の遺存状態のものは 2 点である。

分布 26 点を対象とする。遺構出土資料は 10 点で、他の器種に比べ遺構から出土する比率が低い。SK406 からは 6 点出土し、2 点は SI4 と SB2 の柱穴から、2 点は単独のピットからの出土である。包含層出土資料は 16 点で、そのうち 6 点は 16I グリッドからの出土である。本器種では、17H グリッドからも 5 点出土しており、この点においても他器種とは若干様相を異にしている。

	A	B	C	D	E	F	G	H	合計
砂岩		1	1			3			5
流紋岩						1			1
安山岩	1	1			1	1	3		7
多孔質安山岩					3	2	1		6
花崗閃緑岩				1					1
輝緑岩						1	2		3
結晶片岩							2		2
変斑レイ岩			1						1
合計	1	2	2	1	4	8	8	0	26

第 29 表 磨石類分類・石材別組成表



第 49 図 磨石類分類・石材別法量分布図

2 出土遺物

石皿（図版 47・83）

分類 7点出土し、そのうち2点を図化した。縁を作出した A1 類が1点のみで、他6点は全てB類である。未成品の可能性のある A2 類は、本調査区からは出土していない。

石材 7点全てが多孔質安山岩を利用している。

法量 7点全てが何らかの形で欠損しているため、法量の傾向は見出だせない。

遺存状態 7点を対象とした。完形及び略完形の資料は無く、全て 1/2 以下の遺存状態のものである。

分布 7点を対象とした。遺構出土資料は4点で、SK406 から1点、SB2 の柱穴（P436）から2点、単独のピットから1点出土している。包含層出土資料は3点あるが、出土集中範囲は見出だせない。

	A1	A2	B	C	合計
多孔質安山岩	1		6		7
合計	1	0	6	0	7

第 30 表 石皿分類・石材別組成表

台石（図版 47・83）

分類 3点出土し、1点を図化した。ここでは3点全てがA類である。

石材 3点を対象とし、砂岩2点、石英含有輝石安山岩1点であった。

法量 完形が1点のみのため、傾向については触れる事が出来ないが、長さ 15cm、幅 13cm 以上のものが出土している。

遺存状態 3点を対象とし、1点のみ完形であった。ほかは 1/2 以下の遺存状態のものである。

分布 3点を対象とした。遺構出土資料は1点のみで、SK406 からの出土している。

	A	B	合計
砂岩	2		2
石英含有輝石安山岩	1		1
合計	3	0	3

第 31 表 台石分類・石材別組成表

砥石（図版 47・83）

分類 3点出土し、うち2点を図化した。A類が1点、B類が2点出土している。

石材 3点中2点が砂岩で、1点が安山岩である。砂岩はやや軟質のものをを用いている。

遺存状態 3点全てが破片である。

分布 3点中2点が遺構出土資料で、SK406 から1点、SB2 の柱穴（P436）から1点出土した。

	A	B	合計
砂岩	1	1	2
安山岩		1	1
合計	1	2	3

第 32 表 砥石分類・石材別組成表

石製品（図版 47・83）

1点のみ出土している。443 は変ハンレイ岩製の三角壩形石製品で、全面を敲打と研磨によって整形している。また下面にはやや深い敲打痕が残り、これは三角壩形土製品に作出される意図的な凹みと同義である可能性がある。

第Ⅶ章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

谷内遺跡（新潟県魚沼市吉水字谷内地内）は、魚野川左岸、魚野川の支流である田河川流域に分布する河岸段丘（田河川台地）[鈴木 1976] 上に立地する。本遺跡は、発掘調査の結果、縄文時代後期初頭から前葉を主体とする集落であることが明らかになっている。

本報告では、谷内遺跡における動・植物および石材利用に関わる資料の作成を目的として、種実遺体同定、骨同定および黒曜石産地推定を実施した。

1 種実遺体同定

A 試料

試料は、堅穴住居（SI333）の炉、土坑やピット（SK406、SK419、P416）などの埋積物（覆土）より出土した炭化物 8 点である。炭化物試料の内訳は、SI333 炉が 1 点、SK406 が 5 点、SK419 が 1 点、P416 が 1 点である。このうち、「SK406 炭化物」の 3 点は、炭化物を多量に包含する堆積物の篩別によって回収されており、乾燥重量は約 763g を量る。

なお、上記した SK406 については、検出時は堅穴住居とされていたが、発掘調査の進捗によって埋積物中に焼土層が挟在する大形土坑であることが確認されている。そのため、分析に供された試料には「SK406」・「SI406」が混在する。以下の報告では、遺構名は SK406 として統一し、個々の試料を示す場合は受領時の名称に準拠し、表記している。

B 分析方法

試料を粒径 8 mm、4 mm、2 mm、1 mm、0.5mm の篩に通す。粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実を抽出する。

炭化種実の同定は、現生標本と石川（1994）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数と重量を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数分類群間は、－（ハイフン）で結んで表示する。また、各分類群の写真を添付し、一部の炭化種実の大きさをデジタルノギスで計測した結果を一覧表に併記して同定根拠とする。分析残渣は、個数または重量で表示する。分析後は、抽出物と分析残渣を容器に入れて保管する。

C 結果

同定結果を第 33 表に示す。分析に供された炭化物試料 8 点を通じて、炭化種実は、落葉広葉樹で高木になるオニグルミの核が 962 個（148.66g）、オニグルミの核－トチノキの種子が 8 個（0.05g）、ミズナラ－コナラの子葉が 4 個（0.41g）、クリの子葉が 9 個（1.05g）、クリ？の子葉が 4 個（0.08g）、トチノキの種皮

1 種実遺体同定

が 51 個 (2.31g)、種皮・子葉が 1 個 (0.26g)、子葉が 8 個 (0.94g) の、計 1,047 個 (153.76g) が抽出同定された。

分析残渣は、炭化材が 503.34g、炭化材主体が 2.73g、後代の混入と考えられる炭化していない植物片主体が 0.48g、スギの種子が 1 個 (0.00g)、キク科の果実が 1 個 (0.00g)、ハエ類の蛹が 1 個 (0.02g)、不明物質が 19 個 (2.05g)、岩片 (剥片類?) が 1 個 (0.02g) および岩片・土粒主体が 87.91g からなる。

炭化種実の出土状況は、SI333 炉、SK419、P416 からは検出されず、SK406 からのみ確認された。SK406 試料の炭化種実群は、全て堅果類から成り、1 個を除いて破片の状態である。また、炭化種実の出土個数 (重量) は、SK406 (炭化物) がオニグルミ 907 個 (143.09g)、オニグルミートチノキ 8 個 (0.05g)、ミズナラーコナラ 4 個 (0.41g)、クリ 9 個 (1.05g)、クリ? 4 個 (0.08g)、トチノキの種皮 51 個 (2.31g)、種皮・子葉 1 個 (0.26g)、子葉 8 個 (0.94g) の、計 992 個 (148.19g) である。また、SI406 (炭化種子) は、オニグルミ 55 個 (5.57g) である。

なお、出土種実の保存状態は、炭化や破損、土砂の付着等により極めて不良である。炭化種実各分類群の写真を第 53 図に、主な炭化種実の計測値を第 33 表に示して同定根拠とする。以下に、各分類群の形態的特徴等を述べる。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura) クルミ科クルミ属

核は炭化しており黒色。完形ならば、長さ 3 ~ 4 cm、径 2.5 ~ 3 cm 程度の広卵体で頂部が尖り、1 本の明瞭な縦の縫合線がある。核は硬く緻密で、維管束の痕跡である縦網状の彫紋があり、ごつごつしている。内部には子葉が入る 2 つの大きな窪みと隔壁がある。出土核は全て破片で、962 個 (148.66g) のうち 28 個 (5.81g) に縫合線が確認される。

・ミズナラ (*Quercus crispula* Blume) - コナラ (*Quercus serrata* Thunb. ex Murray) ブナ科コナラ属

子葉は炭化しており黒色。狭卵状楕円体で頂部は尖り、基部は切形。出土子葉は 2 枚からなる子葉の合わせ目に沿って縦に割れた半分で、長さ 13.32mm、幅 9.95mm、半分厚 5.14mm を測る。出土炭化子葉は、ミズナラの果実と、コナラの大型果実の大きさの範囲に収まることから、両種をハイフンで結んでいる。

子葉は硬く緻密で、表面には縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上はやや窪み、頂部に長径 2.3mm の小さな孔 (主根) がある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属 第 53 図 - 5 ~ 7

子葉は炭化しており黒色、三角状広卵体で頂部は尖り、基部は切形、一側面は偏平で反対面は丸みがある。子葉は硬く緻密で、表面には種皮 (渋皮) の圧痕の縦筋が粗く波打つ。2 枚からなる子葉の合わせ目の線に沿って割れた面は平滑で、正中線はやや窪み、頂部には小さな孔 (主根) がある (第 53 図 - 6b)。一部の表面には径 1.77mm の不規則な円形の孔が確認され、虫類による食痕と考えられる (第 53 図 - 7a)。

SK406 より出土した長さ (高さ) と幅が完全な炭化子葉 2 個の計測値は、長さ (高さ) 10.64mm、幅 10.64mm、残存厚 5.67mm (第 53 図 - 5)、長さ (高さ) 11.10mm、幅 11.23mm、残存厚 5.48mm (第 53 図 - 6) である。また、この計測値に基づくクリの大きさ指数 [吉川, 2011] は、17.21 (第 53 図 - 5) と 17.85 (第 53 図 - 6) である。いずれも小型である。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

種子 (種皮・子葉) は炭化しており黒色、径 1.5 ~ 3 cm の偏球体。種皮表面は、ほぼ赤道面を蛇行して一周する曲線を境に、不規則な流理状模様がある光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下

分類群 木本種実	部位	状態	SK406												備考			
			SI333		SK406		SI406		SI406		SK419		P416					
			炉		炭化物		炭化種子		炭化種子		炭化物		炭化物					
			(個)	(g)	(個)	(g)	(個)	(g)	(個)	(g)	(個)	(g)	(個)	(g)				
オニグルミ	核	破片(縦合線残存)	>8mm	-	1	0.32	3	0.87	5	2.18	-	-	-	-	-	-		
		8-4mm	-	-	-	6	0.81	12	1.58	-	-	-	-	-	-			
		4-2mm	-	-	-	-	-	1	0.05	-	-	-	-	-	-			
		>8mm	-	74	19.52	77	24.45	179	53.78	8	3.59	2	1.46	-	-			
		8-4mm	-	99	8.67	100	10.72	209	18.56	3	0.09	6	0.28	-	-			
オニグルミ核-トチノキ種子	破片	4-2mm	-	14	0.21	21	0.33	50	0.41	17	0.12	2	0.01	-	-			
		2-1mm	-	11	0.03	6	0.02	39	0.58	17	0.02	-	-	-	-			
		4-2mm	-	-	-	2	0.03	-	-	-	-	-	-	-	-			
		2-1mm	-	-	-	6	0.02	-	-	-	-	-	-	-	-			
		半分	-	-	-	-	-	1	0.20	-	-	-	-	-	-			
クリ	子葉	破片	-	-	-	-	-	3	0.21	-	-	-	-	-	-			
		完形未満	-	-	-	1	0.18	-	-	-	-	-	-	-				
		半分	-	-	-	1	0.26	-	-	-	-	-	-	-				
		破片	-	1	0.06	3	0.22	2	0.19	-	-	-	-	-	-			
		破片(食痕)	-	1	0.14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
クリ? トチノキ	種子	破片	-	-	-	-	-	4	0.08	-	-	-	-	-	-			
		破片	-	-	-	1	0.21	3	0.18	-	-	-	-	-	-			
		>8mm	-	17	0.30	9	0.33	12	0.30	-	-	-	-	-	-			
		8-4mm	-	2	0.01	-	-	3	0.50	-	-	-	-	-	-			
		4-2mm	-	-	-	-	-	4	0.48	-	-	-	-	-	-			
オニグルミ核-トチノキ種子	破片	2-1mm	-	-	-	-	-	1	0.26	-	-	-	-	-	-			
		破片	-	3	0.26	5	0.68	-	-	-	-	-	-	-	-			
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
		合計	-	-	223	29.52	241	39.13	528	79.54	45	3.82	10	1.75	-	-		
		炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
分析残渣	炭化材主体	炭化材	>4mm	-	-	-	156.44	161.35	+	176.79	1	0.01	-	-	+	3.28	+	5.47
		植物片	-	-	-	1.30	0.51	+	0.87	-	-	-	-	+	0.01	+	0.04	
		スギ	-	-	-	0.15	0.18	+	0.15	-	-	-	-	-	-	-	-	
		キク科	1	0.00	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		ハエ類	-	-	-	-	1	0.00	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		不明物質(スコリア?)	-	-	-	-	1	0.02	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		岩片(副片類?)	-	-	-	7	0.54	3	0.39	9	1.12	-	-	-	-	-	-	-
		岩片・土粒主体	-	-	-	1	0.02	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		炭化材	-	-	-	32.75	23.76	+	29.17	+	1.24	+	0.83	-	-	+	0.16	-
		炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
炭化材	-	-	-	-	-													

1)クリの大きさ指数：「 $\sqrt{(\text{炭化子葉の高さ}+1.85)/0.76} \times (\text{炭化子葉の幅}+4.86/0.86)$ 」〔吉川2011〕

第33表 種実遺体同定結果

部の着点に別れる。種皮は薄く硬く、不規則に割れる。種皮内部の子葉も不規則に割れ、クリよりも粗い。出土炭化種子（種皮・子葉）の破片は16.89mmを測る（第53図-14）。

D 考 察

種実遺体同定の結果、SK406から木本4分類群（オニグルミ、ミズナラーコナラ、クリ、トチノキ）1,047個（153.76g）の炭化種実が確認された。炭化種実群は全て落葉広葉樹から成り、オニグルミやトチノキは河畔林要素、ミズナラーコナラやクリは丘陵や山地などの明るく開けた場所に生育する二次林要素である。

2 骨 同 定

また、これらの炭化種実群は全て食用可能な堅果類から成る。オニグルミやクリは子葉が食用可能であり、ミズナラーコナラやトチノキはあく抜きをすることで子葉が食用可能となる。堅果類の出土部位についてみると、最も多く出土したオニグルミは、食用にならない核の破片のみからなるが、自然に割れた可能性が低い縫合線が残る破片も含まれる。この他、トチノキは可食部の子葉と食用にならない種皮が、クリとミズナラーコナラは可食部である子葉のみが確認された。

炭化種実群は、以上のような食用可能な堅果類を主体とすることを踏まえると、当時の植物質食料の利用状況を示すと考えられる。また、食用できないオニグルミの炭化核を主体とすること、分析残渣に炭化材が多量確認されている状況なども考慮すると、大形土坑埋積物に確認された炭化物層は可食部を取り出した後の残滓や燃料材などの処理（廃棄など）の痕跡を示している可能性も考えられる。

2 骨 同 定

A 試 料

試料は、SI333 炉、SK406 の 5 点である。いずれも土砂や礫などとともに取上げられた状態にある。なお、上記した SK406 の試料には、同一名称の試料（SI406）が 3 点あったため、便宜的に仮番号 1～3 を付して扱っている。

B 分 析 方 法

試料を肉眼および実体顕微鏡下で観察し、骨片を抽出する。抽出した骨片は形態的特徴から種および部位を同定する。なお、特徴的な部位が確認できた骨片に関しては、乾いた筆等を用いて土砂を除去する。また、一部の試料については一般工作用接着剤を用いて可能な限り復元を試みた。

C 結 果

同定結果を第 34 表に示す。分析に供された試料 5 点からは、イノシシ (*Sus scrofa*) が確認された。なお、今回、検出された骨片は、いずれも白色を呈し、表面に細かなひび割れが生じるなどの焼骨の特徴が認められた。以下に、遺構別に結果を記す。

1) SI333 炉

哺乳類の部位不明破片が検出されたのみである。

2) SK406

SI406

イノシシの近位端が欠損した第 2/5 中節骨、哺乳類の部位不明破片などが検出された。

SK406 骨

イノシシの第 2/5 中節骨の近位端が検出された。なお、イノシシの第 2/5 中節骨は、上記した SI406 からも検出されたが、接合部が確認できなかったため、同一骨であるかの判断には至らない。

D 考 察

SI333 炉およびSK406 から検出された骨は、いずれも白色を呈し、細かな破片であった。出土位置や前述の種実遺体同定結果などを踏まえると、利用後の残渣および廃棄の痕跡の可能性が考えられる。なお、今回の試料は、状態が悪く哺乳類の部位不明破片を主体とするが、イノシシが確認された。この結果から、イノシシが食料資源として狩猟対象とされていたことが推定される。

遺構名	地点名 /名称	仮番号	種類	部位	左右	部分	重量・数量	被熱
SI333	炉		哺乳類	不明		破片	3.79 g	○
			砂礫				8.84 g	
			残渣				4.3 g	
SI406		1	礫				2.62 g	
		2	イノシシ	第2/5中節骨		近位端欠	1 個	○
			哺乳類	不明		破片	0.54 g	○
			砂礫				7.21 g	
			残渣				1.8 g	
		3	哺乳類	不明		破片	0.18 g	○
			イノシシ	第2/5中節骨		近位端	1 個	○
SK406	骨		哺乳類	不明		破片	12.66 g	○
			砂礫				14.56 g	
			残渣				0.18 g	

第 34 表 骨同定結果

3 黒曜石産地推定

A 試 料

試料は、本遺跡の発掘調査で出土した黒曜石製の石器 12 点である。試料の詳細（遺物番号、出土位置など）は一覧として第 35 表に記した。

なお、既存の研究によれば、魚沼市域には黒曜石産地として大白川が知られている。今回の黒曜石産地

遺物番号 /仮名称	出土地点/採取地点			備考
	遺構名	グリッド	層位	
1	SK406			
2	SK406			
24	SK406			フルイ
43				表採
363		13-E-6	Ⅲ層	
364	P164			
365		9-F-1	I 層	
439		9-F-11	II 層	
440	SK95			
441				表採
A815		13-E-11	Ⅲ層	
A821		9-F-6	II 層	
仮3	守門川中～下流(大白川産)			魚沼市教育委員会保管試料
仮4	守門川中～下流(大白川産)			魚沼市教育委員会保管試料
仮5	守門川中～下流(大白川産)			魚沼市教育委員会保管試料
仮6	守門川中～下流(大白川産)			魚沼市教育委員会保管試料
仮7	守門川中～下流(大白川産)			魚沼市教育委員会保管試料

第 35 表 黒曜石産地推定試料一覧

推定を実施するにあたり、魚沼市教育委員会が保管する守門川中～下流域の河床より採取された、大白川産とされる黒曜石を借用し、同産地の黒曜石の基準データの作成および弊社保有データとの対照を行った。分析対象とした試料の名称（仮名称）を第 35 表、試料の外観を第 55 図に示したので参照されたい。

B 分 析 方 法

1) エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (EDX) による測定

本分析の特徴は、試料の非破壊による測定が可能であり、かつ多元素を同時に分析できることが利点として挙げられる。一方、非破壊分析である性格上、測定は試料表面のみが対象となることから、表面が汚れた試料や風化してしまっている試料については試料の洗浄あるいは測定面の選択が必要となる。本分析では試料が貴重な遺物であることから、汚れが少なく、風化が進んでいない面を選択して測定を行っている。ただし、表面の風化、汚れが目立つ場合は、メラミンスポンジを用いて洗浄した後に分析を行っている。

本分析で使用した装置は、セイコーインスツルメンツ製エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (SEA2120L) であり、X 線管球はロジウム (Rh)、検出器は Si (Li) 半導体検出器である。測定条件は、励起電圧 50kV、管電流自動設定 (μ A)、測定時間 600 秒、コリメータ (照射径) ϕ 10.0mm、フィルターなし、測定室雰囲気は真空である。測定元素は、Al (アルミニウム)、Si (ケイ素)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Mn (マンガン)、Fe (鉄)、Rb (ルビジウム)、Sr (ストロンチウム)、Y (イットリウム)、Zr (ジルコニウム) の 11 元素であり、測定試料全てにおいてマイラー膜 (PE2.5 μ m; ケンプレックス製 CatNo107) を介して元素 X 線強度 (cps) を測定した。

2) 産 地 推 定 方 法

産地推定は、望月 (2004 など) による方法に従い、測定結果 (元素 X 線強度 (cps)) から、5 つの判別指標値を求める。5 つの判別指標値は、Rb 分率 $\{Rb \times 100 / (Rb + Sr + Y + Zr)\}$ 、Sr 分率 $\{Sr \times 100 / (Rb + Sr + Y + Zr)\}$ 、Zr 分率 $\{Zr \times 100 / (Rb + Sr + Y + Zr)\}$ 、 $Mn \times 100 / Fe$ 、 $\log (Fe/K)$ である。

一方、産地推定に必要な原産地の資料に関しては、望月 (2004) 等で用いられている原産地試料の分析データを使い、原産地判定用資料を作成する。産地推定に用いた黒曜石原産地を第 50 図に示す。

原産地試料の各分析データを、Rb 分率と $Mn \times 100 / Fe$ 、Sr 分率と $\log (Fe/K)$ についてグラフ化する。二次元正規分布密度関数の結果、ならびに後述するマハラノビス距離の結果から、原産地を元にした判別群を設定する。その名称ならびに判別群と原産地との関係を第 36 表に示す。

各判別群について、二次元正規分布密度関数から計算した、重心より 2σ (約 95%) の範囲を示す楕円を上記のグラフに示す (原産地試料の各分析データは図が煩雑になるため割愛した)。これに、遺跡出土試料の分析結果を重ね合わせると、各判別群の範囲楕円内に収まるかどうか視覚的にわかるため、産地推定の指標の一つとなる。

一方、各判別群の 5 つの判別指標値について、基本統計量 (平均値や分散、共分散など) を求める。さらに、各判別群と遺跡出土試料とのマハラノビス平方距離を計算する。マハラノビス平方距離による判別は、先に述べた 5 つの判別指標値を用いる方法 [望月, 2004 など] と、基本的に Zr 分率を除くグラフに用いた 4 つの判別指標値を用いるが、群間の判別が難しい場合に Zr 分率を加える方法 [明治大学古文化財研究所, 2009; 2011、明治大学文学部, 2014a; 2014b など] がある。今回は、4 成分、5 成分の双方の結果を掲載する

が、判別には前述したグラフとの親和性などから、とくに前者の方法を参考にする。測定試料と各判別群全てについて、4成分、5成分のマハラノビス平方距離を求め、測定試料に近いものから2判別群を表に示す。これらについて χ （カイ）二乗検定を行い、 3σ の範囲内にある場合は「TRUE」、範囲外にある場合は「FALSE」と表記する。



第 50 図 黒曜石産地分布図（黒字：本分析で比較対象とした産地）

3 黒曜石産地推定

大分類	中分類	判別群	記号	該当する原産地
東北	深浦	深浦	深浦	岡崎浜,深浦公園,日和見,六角沢,八森山
東北	岩木山	出来島	出来島	出来島
東北	男鹿	男鹿1群	男鹿1	金ヶ崎,脇本
東北	男鹿	男鹿2群	男鹿2	脇本
東北	月山	月山1群	月山1	西川町志津,朝日町田代沢など
東北	月山	月山2群	月山2	鶴岡市今野川,鶴岡市大綱川
東北	北上	北上1群	北上1	水沢折居,花泉日形田ノ沢,雫石小赤沢
東北	北上	北上2群	北上2	水沢折居,花泉日形田ノ沢,雫石小赤沢
東北	北上	北上3群	北上3	水沢折居
東北	湯ノ倉	湯ノ倉	湯ノ倉	湯ノ倉
東北	秋保	秋保1群	秋保1	秋保土蔵
東北	秋保	秋保2群	秋保2	秋保土蔵
東北	色麻	色麻	色麻	色麻町根岸
東北	塩竈	塩竈港群	塩竈	塩竈市塩竈漁港
東北	小泊	小泊	小泊	青森小泊村折腰内
関東	天城	柏峠1群,2群	柏峠1,柏峠2	天城柏峠
関東	箱根	畑宿	畑宿	箱根畑宿
関東	箱根	鍛冶屋	鍛冶屋	箱根鍛冶屋
関東	箱根	黒岩橋	黒岩橋	箱根黒岩橋
関東	箱根	上多賀	上多賀	箱根上多賀
関東	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯	箱根芦ノ湯
関東	神津島	恩馳島	恩馳島	恩馳島,長浜
関東	神津島	砂糠崎	砂糠崎	砂糠崎,長浜
関東	高原山	高原1群	高原1	甘湯沢,桜沢
関東	高原山	高原2群	高原2	七尋沢
信州	霧ヶ峰	男女倉1群	男女1	ぶどう沢,牧ヶ沢,高松沢,本沢下
信州	霧ヶ峰	男女倉2群	男女2	ぶどう沢,牧ヶ沢
信州	霧ヶ峰	男女倉3群	男女3	ぶどう沢,牧ヶ沢,高松沢,本沢下
信州	霧ヶ峰	鷹山系	鷹山	星葉峠,鷹山
信州	霧ヶ峰	西霧ヶ峰系	星ヶ塔	星ヶ塔,星ヶ台
信州	霧ヶ峰	和田峠1群	和田1	古峠,土屋橋北
信州	霧ヶ峰	和田峠2群	和田2	丁子御領,芙蓉パーライト,鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠3群	和田3	小深沢,芙蓉パーライト,新和田トンネル,土屋橋北,土屋橋東,18地点,24地点,26地点,丁子御領,鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠4群	和田4	小深沢,芙蓉パーライト,新和田トンネル,土屋橋北,土屋橋西,土屋橋東,18地点,24地点,26地点,丁子御領,鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠5群	和田5	24地点,25地点,26地点,小深沢
信州	霧ヶ峰	和田峠6群	和田6	小深沢,芙蓉パーライト,24地点,25地点,26地点,土屋橋西,土屋橋東
信州	霧ヶ峰	和田峠7群	和田7	東餅屋,芙蓉パーライト,古峠,丁子御領,鷲ヶ峰,土屋橋北
信州	霧ヶ峰	和田峠8群	和田8	25地点,26地点,土屋橋東
信州	北八ヶ岳	横岳系双子池	双子池	双子池
信州	北八ヶ岳	横岳系亀甲池	亀甲池	亀甲池 擂鉢池
信州	北八ヶ岳	冷山・麦草系	麦草系	冷山,麦草峠,双子池,渋ノ湯,八ヶ岳7,八ヶ岳9,長門美しの森
信州	北八ヶ岳	中ツ原	中ツ原	中ツ原(遺跡試料)
東海・北陸	新潟	新発田	新発田	新発田板山
東海・北陸	新潟	新津	新津	新津金津
東海・北陸	新潟	大白川	大白川	大白川
東海・北陸	新潟	佐渡1群,2群	佐渡1,佐渡2	真光寺,金井ニッ坂
東海・北陸	富山	魚津	魚津	草月上野
東海・北陸	富山	高岡	高岡	二上山
東海・北陸	岐阜	下呂市	下呂	湯ヶ峰
中国・四国	隠岐	久見	久見	久見
中国・四国	隠岐	岬地区	岬地区	隠岐岬
中国・四国	隠岐	箕浦系	箕浦系	箕浦,加茂赤土,岸浜

第 36 表 黒曜石原産地試料一覧

C 結 果

各試料の元素X線強度 (cps) および判別指標値を第 37 表に示す。また、Rb 分率と $Mn \times 100/Fe$ 、Sr 分率と $\log (Fe/K)$ について、原産地試料の重心から 2σ の範囲を記したグラフに各試料の結果を重ね合わせた図を、第 51・52 図に記す。第 38 表には、測定試料に近いものから 2 原産地分のマハラノビス平方距離を示し、これらについて χ 二乗検定を行なった結果を示す。

分析の結果、黒曜石製石器 12 点のうち、8 点 (Na 1、2、364、365、439、440、441、A815) が西霧ヶ峰系の星ヶ塔産に、Na 43 が大白川産に判定された。なお、Rb 分率と $Mn \times 100/Fe$ による判定図 (第 51 図) では、Na 24 が和田峠、Na 363 が星ヶ塔にあたるが、マハラノビス距離による判定 (第 38 表) および Sr 分率と $\log (Fe/K)$ の判定図 (第 52 図) では範囲外に位置する。おそらく、カリウムなど岩石中の存在比が大きく、原子量が小さい元素は風化による影響を受けやすいことが原因と考えられる。第 51 図の結果から Na 24、363 はいわゆる信州産の可能性があると考えられるが、現時点では参考結果として参照されたい。A821 は、判別分析結果 (第 38 表) では 3σ の範囲外とされたが、Rb 分率と $Mn \times 100/Fe$ による判定図 (第 51 図) では大白川産の領域 (範囲楕円内) に近く、Sr 分率と $\log (Fe/K)$ の判定図 (第 52 図) では大白川産の領域内に位置する。このことから、A821 は大白川産の可能性が高い資料と判断される。

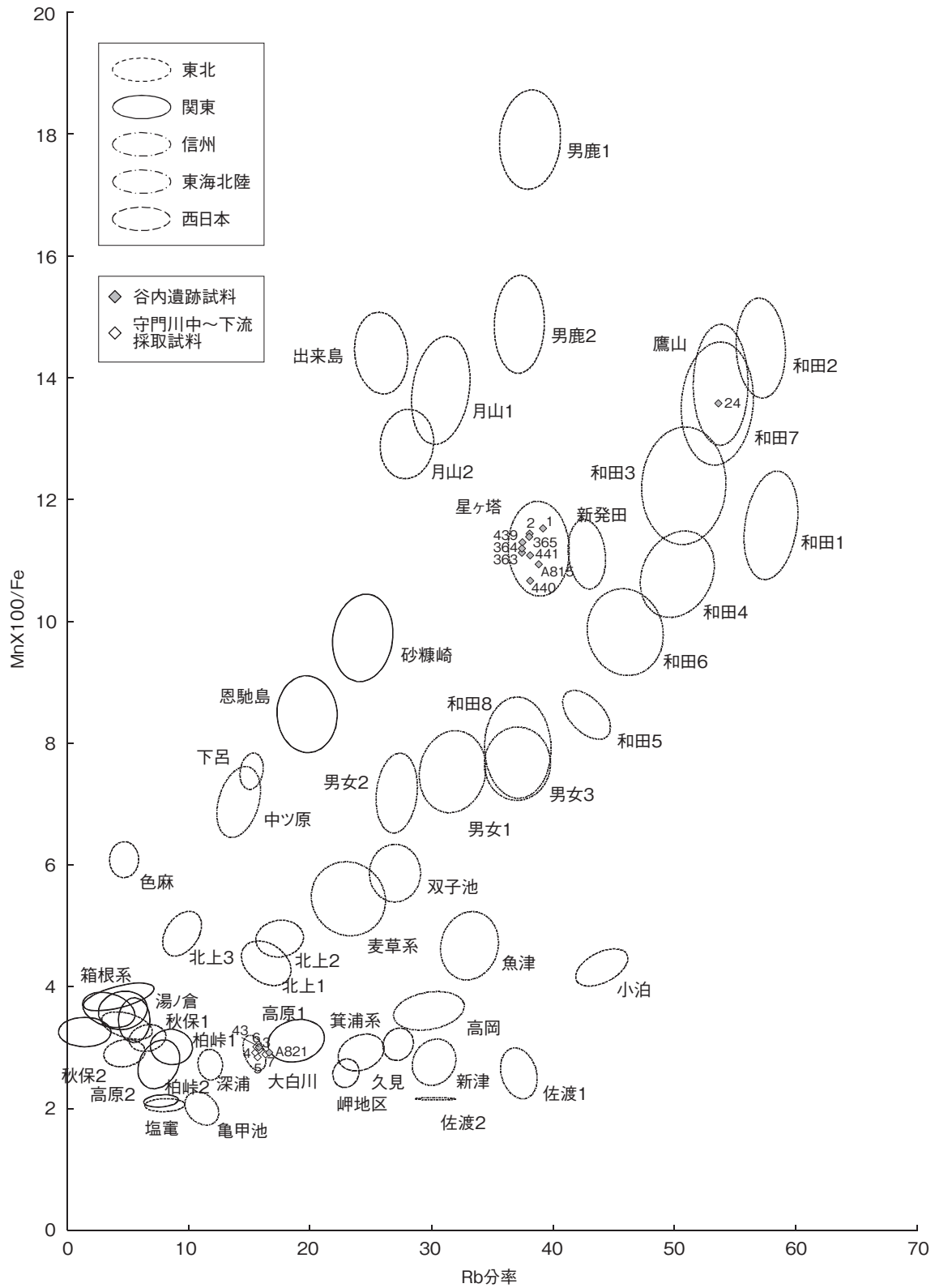
遺物番号 /仮名称	強度(cps)											判別指標				
	Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Sr分率	Zr分率	$Mn \times 100 / Fe$	$\log(Fe/K)$
1	66.081	553.063	69.762	17.892	3.446	8.838	76.685	14.647	4.941	6.226	11.577	39.17	13.21	30.96	11.53	0.041
2	62.096	520.023	65.253	16.978	3.071	8.337	72.850	13.457	4.696	6.175	11.035	38.05	13.28	31.20	11.44	0.048
24	60.709	513.627	115.388	22.132	1.771	9.791	72.110	26.528	0.076	10.568	12.294	53.63	0.15	24.85	13.58	-0.204
43	57.106	481.317	45.810	29.040	4.465	6.851	227.747	9.313	10.918	7.363	31.406	15.78	18.51	53.23	3.01	0.696
363	57.043	482.293	69.904	17.029	2.681	7.532	67.680	12.873	4.444	6.060	11.037	37.41	12.91	32.07	11.13	-0.014
364	57.936	469.144	67.148	20.727	3.075	7.932	70.830	13.855	4.917	6.926	11.321	37.43	13.28	30.58	11.20	0.023
365	58.079	480.910	60.922	19.178	2.690	7.787	68.355	12.867	4.079	5.918	10.964	38.04	12.06	32.41	11.39	0.050
439	65.209	541.672	67.330	19.007	3.436	8.774	77.643	14.492	5.364	6.734	12.090	37.47	13.87	31.26	11.30	0.062
440	57.356	487.049	62.113	16.364	2.821	7.381	69.175	13.336	4.543	6.236	10.871	38.12	12.99	31.07	10.67	0.047
441	58.741	488.541	61.900	16.702	2.883	7.677	69.251	12.864	4.004	5.463	11.426	38.11	11.86	33.85	11.09	0.049
A815	63.817	531.630	68.297	19.350	3.090	8.395	76.748	14.234	4.734	6.559	11.172	38.79	12.90	30.44	10.94	0.051
A821	61.335	520.524	46.029	31.821	4.865	7.026	233.136	9.882	11.222	7.272	31.739	16.44	18.67	52.80	3.01	0.705
仮3	52.814	441.752	42.813	27.558	4.221	6.334	213.023	9.285	11.244	7.767	30.479	15.80	19.13	51.86	2.97	0.697
仮4	54.938	463.889	43.315	27.605	4.493	6.366	217.089	8.882	10.684	7.363	30.506	15.46	18.60	53.11	2.93	0.700
仮5	49.863	414.275	41.250	25.272	3.893	5.648	198.039	8.914	10.780	7.500	29.619	15.69	18.97	52.13	2.85	0.681
仮6	56.655	474.496	43.659	29.829	4.195	6.703	222.321	8.857	10.772	7.427	29.951	15.54	18.90	52.54	3.02	0.707
仮7	50.193	410.009	42.486	29.423	3.685	5.794	200.708	9.667	11.326	7.850	30.410	16.31	19.11	51.32	2.89	0.674

第 37 表 元素 X 線強度 (cps) と判別指標値

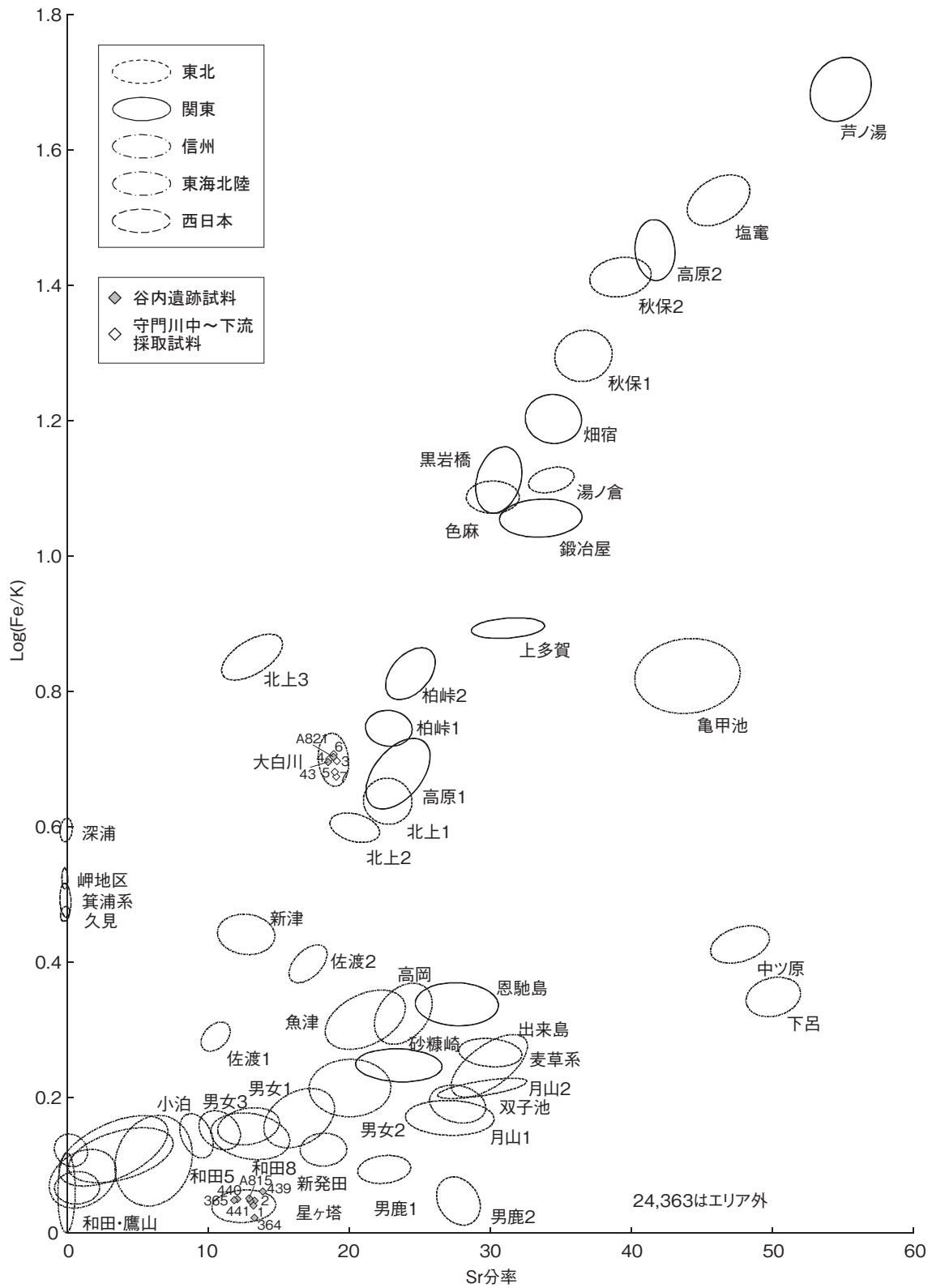
遺物 番号	4成分						5成分					
	第1候補			第2候補			第1候補			第2候補		
	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定
1	星ヶ塔	1.5	TRUE	和田6	79.0	FALSE	星ヶ塔	1.6	TRUE	和田6	88.9	FALSE
2	星ヶ塔	1.4	TRUE	和田6	78.4	FALSE	星ヶ塔	1.5	TRUE	和田6	83.9	FALSE
24	和田1	249.6	FALSE	和田6	349.3	FALSE	和田1	267.7	FALSE	和田6	351.5	FALSE
43	大白川	5.6	TRUE	高原1	70.5	FALSE	大白川	22.2	FALSE	高原1	78.2	FALSE
363	星ヶ塔	40.4	FALSE	和田6	82.3	FALSE	星ヶ塔	40.8	FALSE	和田6	87.1	FALSE
364	星ヶ塔	7.2	TRUE	和田6	77.8	FALSE	星ヶ塔	8.0	TRUE	和田6	78.7	FALSE
365	星ヶ塔	2.4	TRUE	和田6	67.5	FALSE	星ヶ塔	3.1	TRUE	和田6	73.8	FALSE
439	星ヶ塔	5.8	TRUE	和田6	80.0	FALSE	星ヶ塔	6.1	TRUE	和田6	84.9	FALSE
440	星ヶ塔	3.5	TRUE	和田6	56.2	FALSE	星ヶ塔	3.6	TRUE	和田6	57.8	FALSE
441	星ヶ塔	2.2	TRUE	和田6	57.2	FALSE	星ヶ塔	8.5	TRUE	和田6	70.1	FALSE
A815	星ヶ塔	1.1	TRUE	和田6	57.5	FALSE	星ヶ塔	1.8	TRUE	和田6	59.4	FALSE
A821	大白川	24.6	FALSE	高原1	62.1	FALSE	大白川	55.5	FALSE	高原1	70.9	FALSE

* 3σ の範囲内にある場合は「TRUE」、範囲外にある場合は「FALSE」と表記している。

第 38 表 判別分析結果



第 51 図 黒曜石産地推定結果 (1)



第 52 図 黒曜石産地推定結果 (2)

なお、魚沼市教育委員会より提供された大白川産とされる黒曜石5点（仮3～7）は、Rb 分率と Mn × 100/Fe による判定図（第51図）、Sr 分率と Log (Fe/K) の判定図（第52図）においていずれも大白川産の領域に位置し、弊社保有データと整合することが確かめられた。

魚沼地域における縄文時代中期末～後期前葉頃の黒曜石の産地推定に関わる調査事例は、三浦ほか（2012）による報告が挙げられる。この報告によれば、上野スサキ遺跡（津南町）は星ヶ塔産を主体として、小深沢産、麦草峠産、深浦産が混じる産地構成、中島遺跡（十日町市）が小深沢産が多く、星ヶ塔産がこれに次ぎ、板山産、産地不明が混じる産地構成が明らかとされ、いずれの遺跡においても長野県（信州）産が卓越する傾向が指摘されている。今回の試料には表採遺物などの帰属時期が不明な資料が含まれるため課題が残るものの、調査所見による遺跡の時期などを参考とすると、星ヶ塔産を主体とする傾向は上記した報告事例と調和する結果と言える。また、少数ではあるものの大白川産の黒曜石の利用も示唆され、今後更に資料の蓄積を行うことにより在地石材の流通や利用の一端が明らかになると期待される。

<引用文献>

石川茂雄,1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

三浦麻衣子・建石 徹・二宮修二,2012, 縄文時代後期初頭等の黒曜石製石器産地分析と土器胎土分析

－新潟県妻有地域出土資料を中心として－, 津南シンポジウムⅧ予稿集 三十稲場式土器文化の世界

－4.3Ka イベントに関する考古学現象②－, 津南学叢書, 第18号, 津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会,111-118.

明治大学古文化財研究所,2009, 蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定 －基礎データ集1

－, 明治大学古文化財研究所,294p.

明治大学古文化財研究所,2011, 蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定 －基礎データ集2

－, 明治大学古文化財研究所,294p.

明治大学文学部,2014a, 蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定 －基礎データ集3－, 杉

原重夫編, 森 義勝監修, 明治大学文学部,170p.

明治大学文学部,2014b, 日本における黒曜石の産状と理化学分析 －資料集－,75, 杉原重夫編, 森 義勝

監修, 明治大学文学部,170p.

望月明彦,2004, 第5節 和野 I 遺跡出土黒曜石製石鏃の石材原産地分析, 岩手県文化振興事業団埋蔵文

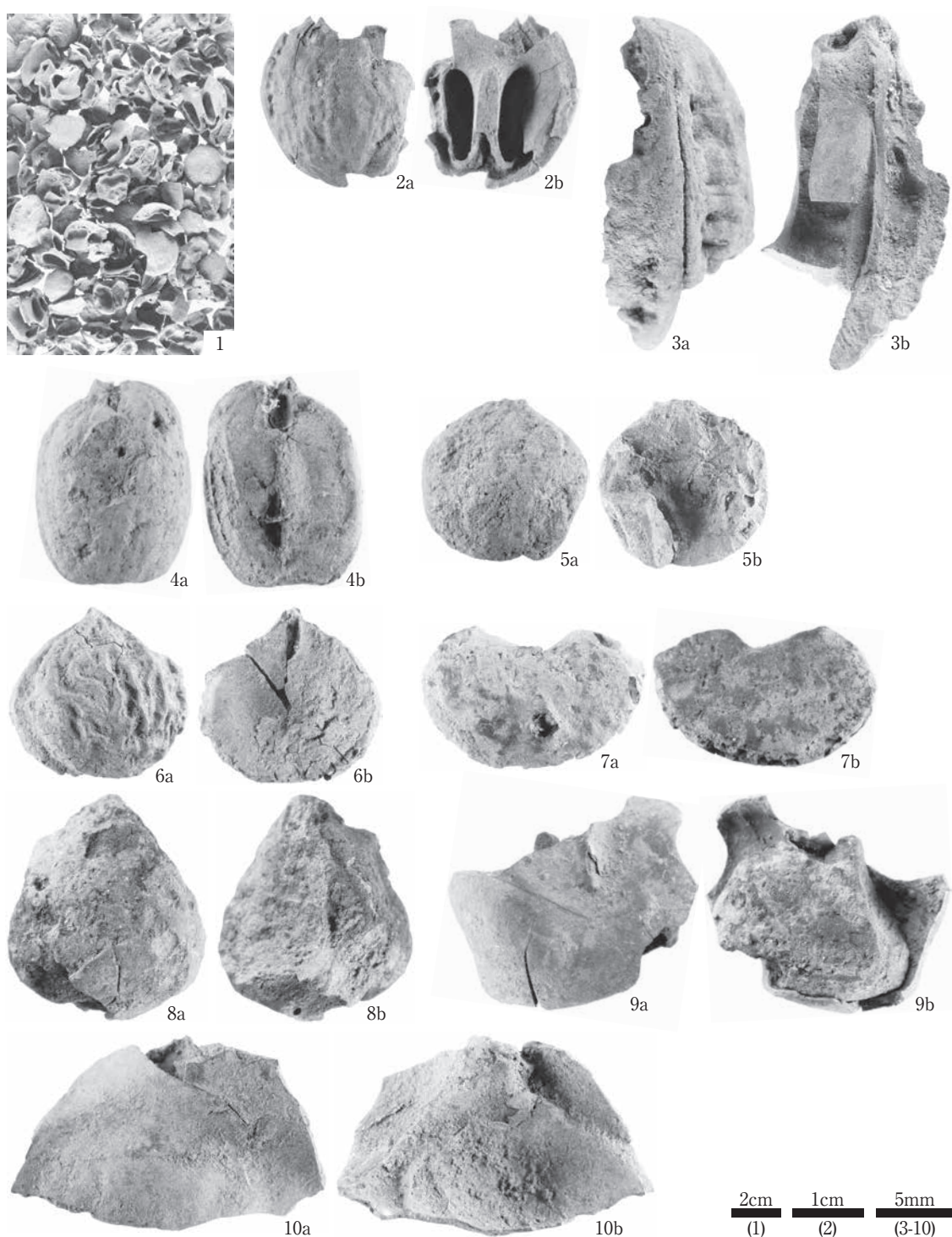
化財調査報告書 452 集 和野 I 遺跡発掘調査報告書,476-480.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010, 日本植物種子図鑑（2010年改訂版）, 東北大学出版会,678p.

鈴木郁夫,1976, I 地形分類図. 新潟県中越地域 土地分類基本調査 小千谷 5万分の1 国土調査, 新潟県,11-27.

鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012, ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実 －形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632 種－, 誠文堂新光社,272p.

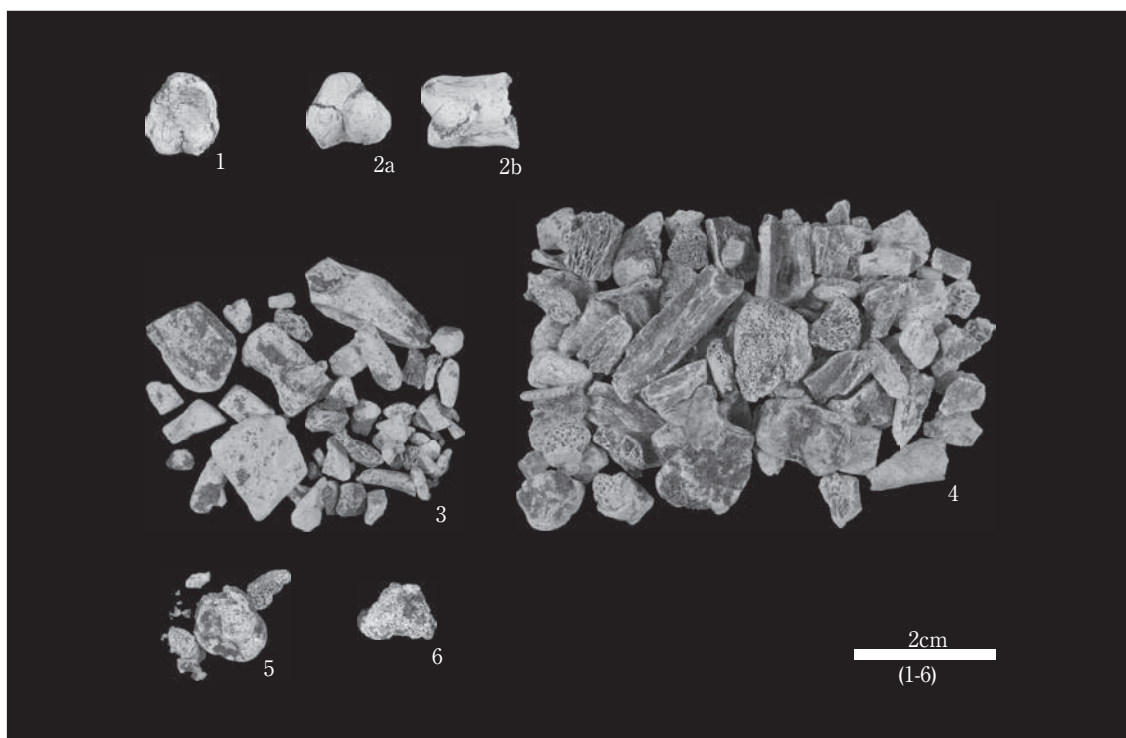
吉川純子,2011, 縄文時代におけるクリ果実の大きさの変化, 植生史研究, 第18巻 第2号,57-63.



- 1.オニグルミ 核(SK406)
- 3.オニグルミ 核(縫合線残存)(SK406)
- 5.クリ 子葉(SK406)
- 7.クリ 子葉(食痕)(SK406)
- 9.トチノキ 種子(種皮・子葉)(SK406)

- 2.オニグルミ 核(SK406)
- 4.ミズナラ-コナラ 子葉(SK406)
- 6.クリ 子葉(SK406)
- 8.トチノキ 子葉(SK406)
- 10.トチノキ 種皮(SK406)

第 53 図 炭化種実

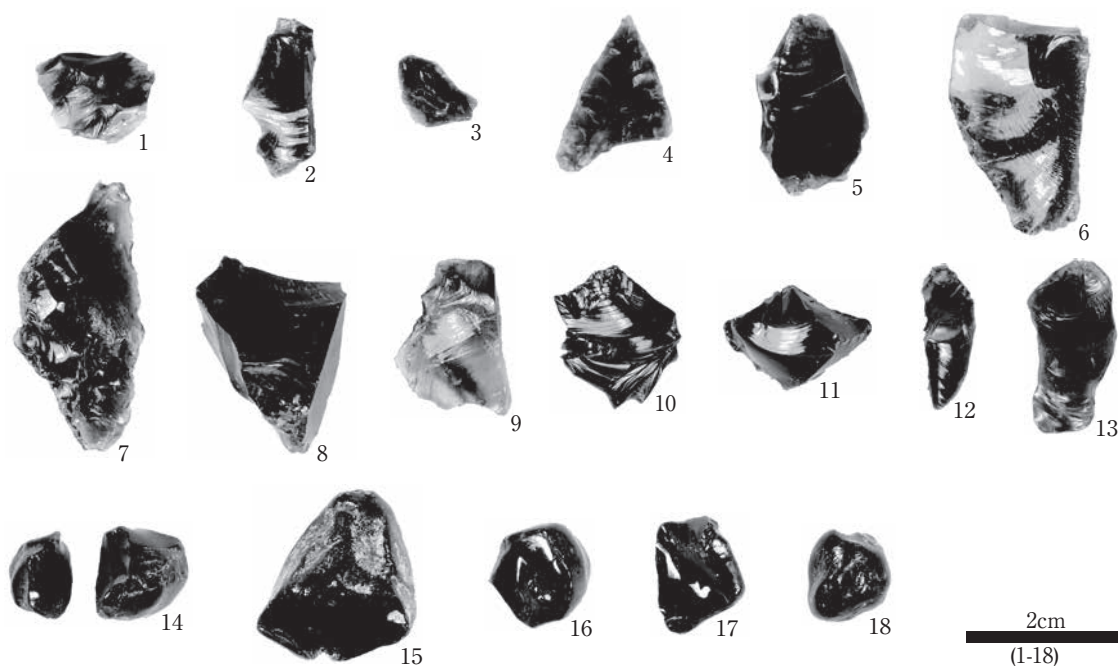


1.イノシシ 第2/5中節骨(SK406骨)
4.哺乳類 不明破片(SK406骨)

2.イノシシ 第2/5中節骨(SI406-2)
5.哺乳類 不明破片(SI406-2)

3.哺乳類 不明破片(SI333 炉)
6.哺乳類 不明破片(SI406-3)

第 54 図 出土骨



1.No1:SK406

2.No2:SK406

3.No3:SK406

4.No24:SK406 フルイ

5.No43:表採

6.No363:13-E-6 Ⅲ層

7.No364:P164

8.No365:9-F-1 I層

9.No439:9-F-11 Ⅱ層

10.No440:SK95

11.No441:表採

12.A815:13-E-11 Ⅲ層

13.A821:9-F-6 Ⅱ層

14.魚沼市教育委員会保管試料(仮3)

15.魚沼市教育委員会保管試料(仮4)

16.魚沼市教育委員会保管試料(仮5)

17.魚沼市教育委員会保管試料(仮6)

18.魚沼市教育委員会保管試料(仮7)

(1~13:谷内遺跡出土黒曜石、14~18:守門川中～下流採取黒曜石)

*No3は分析対象外

第 55 図 黒曜石産地推定試料

第Ⅷ章 ま と め

1 谷内遺跡出土土器の編年的位置付け

谷内遺跡から出土した土器はⅢ期（縄文時代中期中葉、以下、縄文時代は省略）からⅦb期（後期前葉）に位置付けられ、土器の出土量からその主体はⅤb期（中期末葉～後期初頭）からⅦa期と考えられる。ここでは本遺跡から出土した土器について各時期に整理し、先行研究を参照しながら位置付けを行う。なお記述にあたっては、A区とB区を分離せずに記述する。

A 各時期の様相

Ⅲ期 A区包含層から少量出土している。在地の馬高式（60）と栃倉式（61・63・66）の他、東北系の大木8b式（64～65）が出土したのみで、それ以外の地域の影響を受けた土器は出土していない。馬高式では鶏頭冠突起の鶏頭部分（60）が、栃倉式もしくは大木8b式では口縁部破片と胴部破片が出土しており、後者についてはその型式の中でも古手に位置付けられる資料である。また在地系と東北系が主体を成す点は、同地域にある清水上遺跡では大木8a式期からの様相として捉えられている〔寺崎1996〕。大木8b式期は、破間川流域の布場上ノ原遺跡においても、在地系と東北系が主体を成している〔南波2014〕。谷内遺跡では当該期の出土量が少ないため明言できないが、大木8a～8b式期において、当地域では在地系と東北系の土器が主体を成す傾向にある。




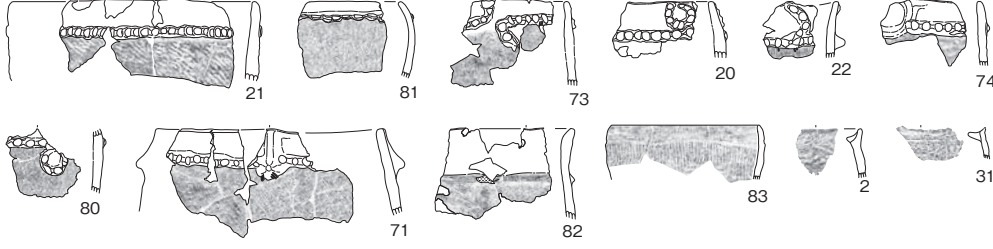
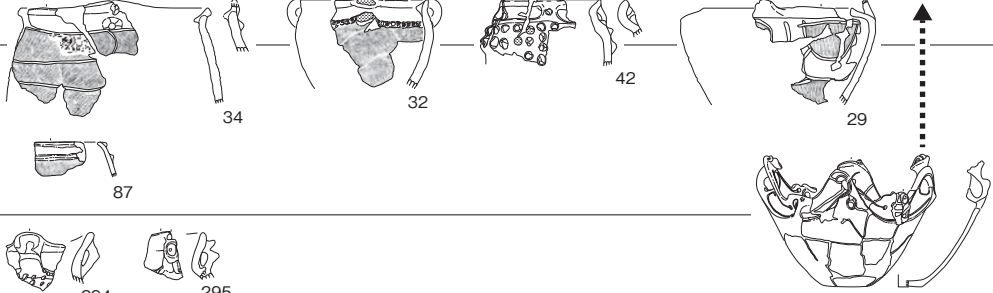
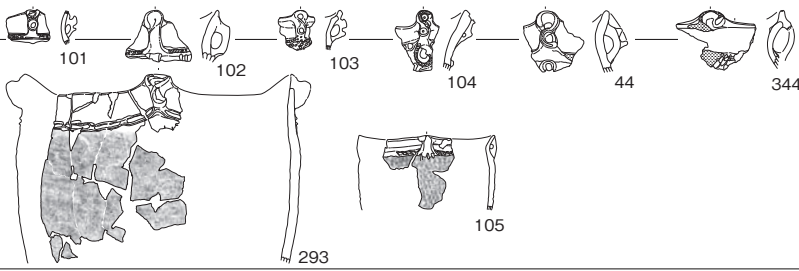

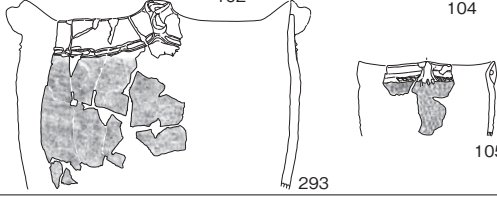
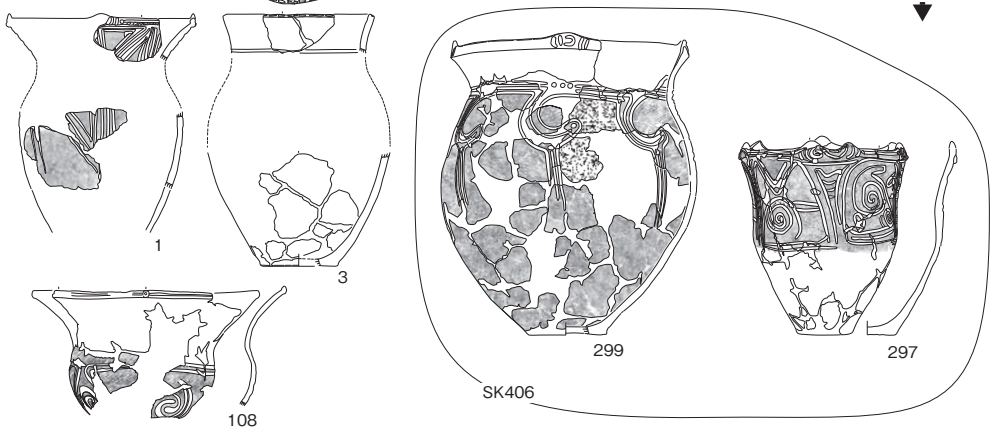

Ⅳ期 沖ノ原Ⅰ式や大木9式が当該期に位置付けられる。A区ではSD327から1点、包含層より数点出土したのみで、点数は少ない。B区では包含層から1点出土している。69と354は沖ノ原Ⅰ式の口縁部破片であるが、小破片のため文様構成等、詳細は不明である。

Ⅴ期 沖ノ原Ⅱ式と城之腰類型、大木10式が当該期に位置付けられる。前半のⅤa期の資料は、A区包含層から出土した沖ノ原Ⅱ式の資料（70）のみである。ただし278や355のような東北系の土器もⅤa期に位置付けられる可能性があるが、破片資料であり判然としない。

後半のⅤb期からは急激に資料数が増加し、A・B両調査区の遺構内と包含層から多く出土している。城之腰類型は遺跡内から定量出土しており、本遺跡を特徴付ける類型である。器形はそのほとんどがバケツ形で、頸部に明瞭な括れを持たない。また本遺跡出土資料に関しては、他と比べ器壁がやや厚手である点も特徴として挙げられる。文様は口縁部付近に一条の刻目隆帯や沈線が巡り、本遺跡出土資料の口縁部付近の隆帯・沈線については、以下のバラエティが認められる。


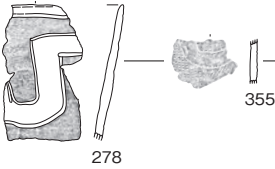

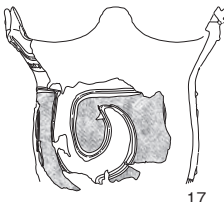

- ①一条の刻目隆帯のみが巡るもの（21）。
- ②開口部を持つ刻目隆帯のもの（73）。
- ③一条の刻目隆帯の上にU字状の刻目隆帯文が貼り付けられるもの（20）。
- ④一条の刻目隆帯からノ字状の刻目隆帯が伸びるもの（22）。
- ⑤一条の刻目隆帯にノ字状もしくは、逆C字状の隆帯文が貼り付けられるもの（74）。
- ⑥一条の刻目隆帯の下に環状もしくはC字状の刻目隆帯が貼り付けられるもの（80）。
- ⑦一条の刻目隆帯に縦位の隆帯文と瘤状貼付文が付けられるもの。

1 谷内遺跡出土土器の編年の位置付け

谷内 時期		在 地 系	
Ⅲ			
Ⅳ			
Ⅴ	Va		
	Vb		
	Vc		
Ⅵ	Ⅵa		
	Ⅵb		
	Ⅵc		
Ⅶ	Ⅶa		
	Ⅶb		

1・3・293・297・299・300：S=1/12
その他：S=1/10

第 56 図 谷内遺跡出土土器編年図（在地系）

谷内 時期		東 北 系	関 東 ・ 中 部 高 地 系
Ⅲ			
Ⅳ			
Ⅴ	Va		
	Vb		
Ⅵ	Ⅵa		
	Ⅵb		
	Ⅵc		
Ⅶ	Ⅶa		
	Ⅶb		

S=1/10

第 57 図 谷内遺跡出土土器編年図（外来系）

⑧一条の隆帯上に縄文が施されているもの(82)。

⑨一条の沈線が巡るもの(5・83)。

胴部文様には、縄文、撚糸文のほか、縦位・斜位の条線文、曲流条線文などが施される。これら口縁部付近と胴部文様の構成について、直ちに遺跡間などの差として断定できないが、ここではそのバラエティを提示しておきたい。在地系以外の土器では、関東・中部高地系の資料も散見される。その他にも当該期の資料として2・31が挙げられるが、これらの資料は後続するⅥ期の資料に見られる蓋受状隆帯に繋がるものとして理解される。

Ⅵ期 三十稲場式が主体を成す時期である。当該期の資料もA・B両調査区から多数出土しており、本遺跡の主体を成す時期である。以下、細分時期ごとに概略を記す。

Ⅵa期に帰属する資料は87の1点のみで、先行するⅤb期まで遡る可能性のある資料も含まれる。そのためここではⅤb～Ⅵa期の資料についても併せて記述を行う。この時期は、三十稲場式のみ出土しており、他地域の影響を受けた土器は確認できない。32・34のような蓋受状隆帯が内面に貼り付けられる資料は先行するⅤb期にも見られる資料で、Ⅴb～Ⅵa期に位置付けたい。

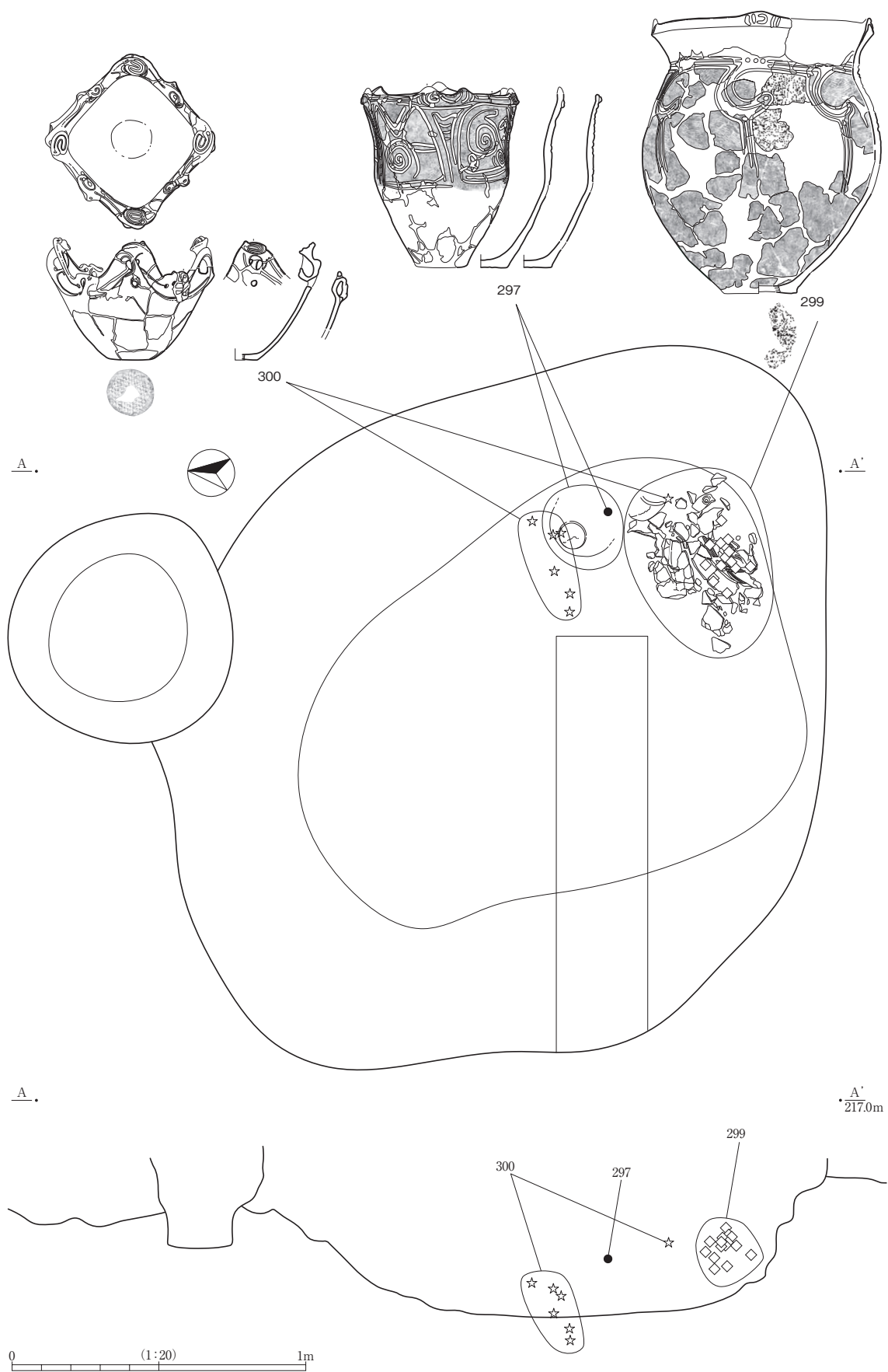
Ⅵb期もⅥa期同様、資料数はさほど多くない。主体は三十稲場式であるが、口縁部破片資料のみで判然としない。そのほか、関東・中部高地系の資料も少数加わる。17は関沢類型の範疇で理解される資料である。101～104、344・345は三十稲場式の口縁部破片で、橋状把手は8字状もしくは、捻転状を呈し、やや新しい要素として理解できる。しかしいずれも小破片で判然とせず、ここではⅥb～Ⅵc期の範囲で捉えておきたい。

Ⅵc期は三十稲場式のみが出土している。293は捻転状の橋状把手と鎖状隆帯の付く深鉢で、口縁部のくびれは無く、胴部は張らない。105は「内後－中島タイプ」[石坂2006]の範疇で捉えうる資料で、橋状把手は小振りで、胴部には細かな刺突文が施されている。また胴部は張らず、293と共通する。

Ⅶ期 在地の南三十稲場式が主体を成す時期である。当該期の資料も両調査区から多く出土しており、特にB区SK406からまとまって出土している。

Ⅶa期は南三十稲場式のみが出土している。注目すべきは、SK406出土資料(297・299・300)で、ここで再度SK406について触れる。当該遺構はB区東端付近で検出された大形の土坑で、土層の堆積を観察すると、概ねレンズ状を呈している。また297が逆位に伏せられた状態で出土し、その南隣からは299が潰れた状態で出土している。しかし、遺構構築時にどのような状態で設置されていたかは不明である。300も297の北隣から出土しており、比較的遺存度の高い資料である。同遺構からは他にもⅤ～Ⅶ期の土器が出土しているが、297が逆位に設置されていたことから、Ⅶa期の遺構として判断した。話題を土器に戻すと、297は胴部文様が器体全面に施されず、胴部中位で終わっている。この点については、気屋式と類似する¹⁾という。また299は頸部に無文帯を持つことなどから、小仙塚類型に含めて考えたい。同類型は「これまで堀之内1式中段階のものが県内各地から出土しており」[石坂2006]、品田高志氏が柏崎市十三本塚遺跡の資料を用い詳細に検討し、信州との関連が強い土器として理解されている[品田2002]。また石坂圭介氏は十日町市中島遺跡出土土器と出土層位の検討を通し、同類型について、堀之内1式古段階に帰属する資料の存在を指摘している[石坂2006]。また同氏は「『信州系』南三十稲場式は、十三本塚北遺跡で見られたように、信州を出自とし新潟県では魚沼・刈羽を中心に堀之内1式中段階で安定して分

1) 寺崎裕助氏よりご教示いただいた。なお、筆者の理解不足により記載に誤りがある場合、その責は筆者にある。

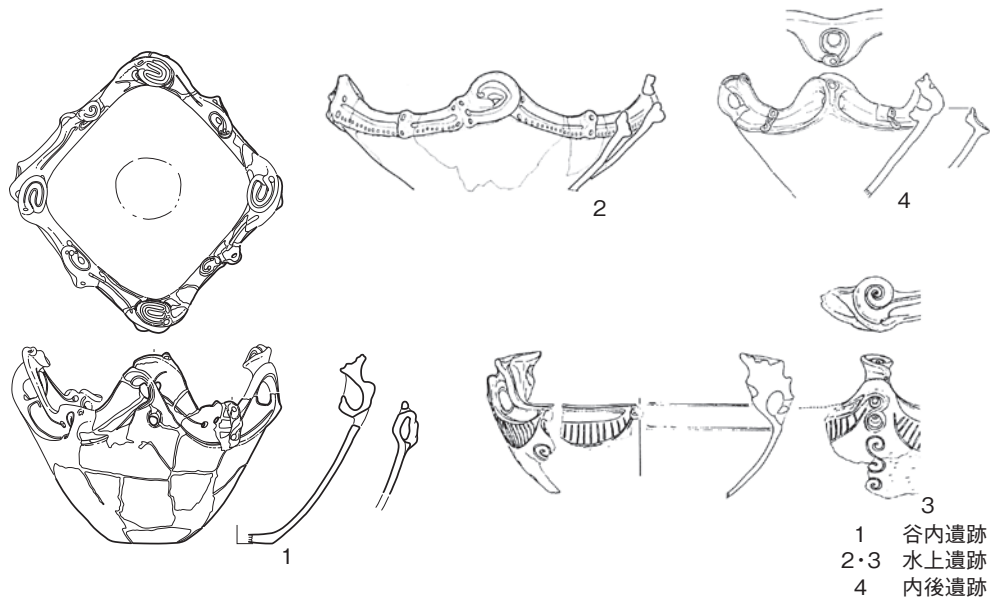


第 58 図 SK406 主要遺物出土状況

布するようになる』[石坂2018]とも指摘しており、この指摘に倣えば、299 はやはりⅦ a 期に位置付けられる。

ここで問題となるのは、300 の編年の位置付けである。魚沼地域において同様の形態を示す鉢は、十日町市内後遺跡 [笠井・長沢ほか2006] や南魚沼市水上遺跡 [池田・荒木1988、池田・細矢1990] など出土している (第59図)。内後遺跡例ではⅣ - Ⅰ 群に分類されており、この土器群は後期初頭に帰属し、ここに城之腰類型や三十稲場式を充てている [長沢2006]。しかし当該土器群は、一部後期前葉に下る可能性があるとも指摘している。水上遺跡では、後期初頭に位置付けられ、城之腰類型や三十稲場式と同時期として扱われており [荒木1988]、いずれも後期初頭、城之腰類型もしくは三十稲場式に帰属する土器と理解されている。300 が出土した SK406 からは城之腰類型と三十稲場式の両者が出土しており、周辺遺跡の様相を鑑みた場合、Ⅴ b ~ Ⅵ 期に位置付けても問題ない。ただし第58図のように、297・299 同様遺存度が比較的高く、両者と近接して出土していること、また出土レベルは300 がやや深いものの、レンズ状の堆積を示すことを積極的に評価すれば、Ⅶ a 期に位置付けられる可能性もある。

Ⅶ b 期は南三十稲場式と関東・中部高地系の資料が出土しているが、いずれも小破片で点数も少ないため、判然としない。



第59図 谷内遺跡及び周辺遺跡出土の鉢 (S = 1/8)

B 小 結

ここまで、本遺跡から出土したⅢ期からⅦ b 期の土器について概観した。Ⅴ b 期やⅥ期後半 (Ⅵ b ~ Ⅶ c)、Ⅶ a 期の資料が多く、それ以外の時期については出土点数が少ない。ただ時期を細分出来なかった資料が多く存在するため、Ⅵ a ~ Ⅵ b 期やⅦ b 期に帰属する資料は更に増えるものと考えられる。また周辺遺跡の様相と照らし合わせ300を暫定的にⅤ b ~ Ⅶ a 期とした。今後良好な出土例とともに編年的な位置付けを行う必要がある。

2 谷内遺跡の石材利用について

谷内遺跡からは総点数 2,826 点の石器が出土し、それらに利用されている石材は 29 種類にも及ぶ。ここではその全ての石材について触れる事は出来ないが、一部について周辺の石材環境を踏まえ、遺跡出土石器の石材利用の傾向を概観する。

A 出土石器の石材利用について

頁岩・珪質頁岩 201 点 (7.1%) 出土している。器種別では不定形石器と剥片以外に、石鏃・石錐・両極石器・打製石斧・石核・磨石類に利用される。遺跡から出土した頁岩製石器は灰色や乳白色のものが多く比較的均質であるが、打製石斧や磨石類は石鏃などの剥片石器に比べ、やや荒いものが利用されている。自然面の残る資料を観察すると、茶色のものが目立つ。周辺の石材環境と照らし合わせると、付近を流れる田河川や破間川 [高木 2008、倉石 2008、佐藤信 2017b 等] 等の魚野川流域をはじめ、信濃川流域 [佐藤信 2011・2016・2017a、佐藤信・石岡 2015、倉石 2011 等] や渋海川 [白井 2015] など広範囲で採取可能な石材で、特定は困難である。ただ田河川で採取できる頁岩は暗灰色～黒色で、表面がやや荒い。そのためここでは、田河川以外の採取地を想定したい。また肉眼観察でより珪酸分の多いものを珪質頁岩として分類したが、東北地方日本海側や新潟県北部地域で確認できるような油脂光沢が顕著なものではない。周辺地域では、信濃川支流の清津川流域や破間川流域が候補として挙げられる。

鉄石英 (赤)・(黄) 173 点 (6.1%) 出土した。不定形石器・剥片が多く、石鏃・石錐・両極石器・石核に利用される。鉄石英 (赤) は光沢があり均質のものが多く、節理の発達したものも確認できる。同石材は田河川と破間川上流域で採取可能であるが、数量は極めて少ない。また破間川流域のものは比重が高く、出土した石器も同様に重い。そのため田河川よりも破間川流域の可能性が高いと考えられる。不明石器のうち 1 点 (ナイフ形石器か) も、同石材が利用されている。鉄石英 (黄) も同様に破間川流域で採取できるが、数量はやはり少ない。しかし、両石材の色調を併せ持つ資料も存在するため、それらは同じ岩体のものと推定される。

チャート 48 点 (1.6%) 出土し、不定形石器・剥片の他に、石鏃・石錐・両極石器などの小形の石器に利用されている。色調は青灰色や赤色などがあり、赤色のものは鉄石英 (赤) と区別が困難なものもある。近傍の採取候補地は、田河川や破間川流域が挙げられ、赤色のチャートは、渋海川でも採取できる [佐藤信 2014]。

流紋岩 467 点 (16.5%) 出土しており、比較的利用頻度の高い石材と言える。不定形石器・剥片の他、石鏃・石錐・両極石器・石核・石錘・磨石類・石皿に利用されている。このうち剥片石器に利用される流紋岩の色調は白～乳白色で、斑晶の目立つ資料が多い。それに比べ石錘などの礫石器に利用されるものは、やや荒いものが多い。採取候補地は破間川流域のほか、湯沢町と群馬県との境界付近、浅貝川や毛渡川最上流部でも採取可能との事である [新潟県 2000]。

無斑晶ガラス質安山岩 226 点 (8.0%) 出土した。不定形石器・剥片以外では、石鏃・石錐・両極石器・石核に利用されている。同石材は津南町と長野県栄村の境界付近を流れる志久見川で多く採取出来るほか、長岡市 (旧川口町) の信濃川と魚野川の合流部付近や千曲川平滝周辺でも採取可能であるという [佐藤信 2014、佐藤信・石岡 2015]。この範囲が採取候補地と推定される。

石英含有輝石安山岩 466 点 (16.5%) 出土しており、流紋岩と同様に利用頻度の高い石材である。不定形石器と剥片が多く、板状石器・打製石斧・石核・磨石類・台石のほか、原石も定量出土している。同石材は板状に割れる性質を持つため、板状石器に多用される。田河川で比較的多く採取できるが、出土した石器の方が良質である。採取した地点は田河川流域と推定されるが、より良質のものを選んで採取していたと考えられる。また、同じ田河川流域の原居平遺跡 [池田・1981、梅川 1998] や正安寺遺跡 [梅川 1996・1997] でも定量出土し、板状石器と打製石斧への利用が特徴的である。

緑色片岩・変ハンレイ岩 57 点 (2%) 出土している。不定形石器・剥片以外には、打製石斧・磨製石斧・石錘・磨石類・台石・石製品に利用され、特に打製石斧・磨製石斧に特徴的に利用される石材である。両石材は田河川で採取可能で [鈴木・桑原 2015]、特に変ハンレイ岩は容易に採取できる。ただし緑色片岩は先述の石英含有輝石安山岩と同様に、採取石材よりも石器として利用されたものの方がより良質である。この傾向は原居平遺跡と正安寺遺跡でも同様で、特に両遺跡からは同石材を利用した打製石斧と磨製石斧のほか、多数の剥片が出土している。そのため遺跡近傍の田河川流域により良質の緑色片岩があるものと推定される。

B 小 結

以上、石材ごとの利用傾向について、概要を記した。石英含有輝石安山岩や緑色片岩・変ハンレイ岩は近傍の田河川流域、無斑晶ガラス質安山岩は信濃川流域～魚野川との合流部付近を採取候補地として推定した。それ以外の石材は候補地が多数あるものの、谷内遺跡に限ると、一定量出土しているものについては遺跡からさほど遠くない地点からもたらされたものと考えている。そのためここでは、より遺跡に近い魚野川中～下流域や破間川流域、信濃川流域までの範囲を想定したい。

この他、黒曜石や蛇紋岩類、ヒスイ、緑泥片岩などの遠隔地からの石材も少量ながら出土している。黒曜石は大白川産が 1 点出土したほかは、全て信州産 (星ヶ塔、和田峠) である。三十稲場式期においては星ヶ塔産が主体を占める点 [佐藤信 2012] は既に指摘されており、津南町上野スサキ遺跡や十日町市中島遺跡の中期末葉～後期初頭に帰属するであろう資料も、やはり星ヶ塔産が多い [三浦ほか 2012]。ただ両遺跡では後期前葉になると「小深沢産はじめ、星ヶ塔産以外の産地に由来する資料が増加する傾向」 [三浦ほか 2012] にある。周辺地域の様相を踏まえると、谷内遺跡出土の星ヶ塔産の資料は中期末葉～後期初頭のあり方に近いが、原産地からの距離や遺跡の立地 (流域) 等が異なっているため、ここでは可能性を指摘するに留める。また蛇紋岩類は糸魚川市姫川等が著名であるが、魚沼地域でも湯沢町谷川岳山頂付近や南魚沼市登川流域、魚沼市の奥只見湖周辺に分布する [新潟県 2000]。しかし石材調査では当該石材を確認できず、遺跡出土資料との比較は行っていない。今後、魚沼地域の蛇紋岩類について、調査の必要がある。

また遺跡周辺の石材調査は少しずつ進めているものの、まだ未踏査の地点が数多く存在する。そのためここで触れた以外にも、未発見の採取地が必ず存在するはずである。今後は規模の大きな河川だけでなく、小規模な沢など、よりミクロな視点に立ち石材調査を行う必要がある。

3 総 括

谷内遺跡は田河川右岸の高位段丘面に営まれた集落遺跡で、出土土器からⅤb（中期末葉～後期初頭）～Ⅶa期（後期前葉）を主体に持つ。ここではⅤ～Ⅷ章で判明した事実をまとめ、調査の総括としたい。

遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、埋設土器、土坑、ピット、自然流路が検出された。竪穴住居について明確な炉が検出できたのはA区 SI333のみで、他の竪穴住居は炉が検出されなかった。また掘立柱建物は後期に入ると集落の構成要素として顕在化する事が指摘されており〔阿部2005〕、本遺跡の様相と矛盾しない。B区 SK406はⅦa期（南三十稲場式期）の深鉢が逆位で設置されており、覆土内部からも多量の遺物が出土した。しかし今回は、遺構の性格まで検討できなかった。今後の課題としたい。

出土した土器はⅢ（中期中葉）～Ⅶb期（後期前葉）に帰属し、中心時期はⅤb～Ⅶa期である。土器の系統では各時期を通し在地の土器が主体を占め、そこに東北系や関東・中部高地系が客体的に加わる。時期別に見ると、Ⅴb期に充てた城之腰類型の隆帯の文様構成には多様性が認められ、周辺地域の様相とも齟齬は無い。またⅥa・Ⅵb期単独の資料はやや希薄であるものの、Ⅵb～Ⅵc期、Ⅶa期は比較的多く出土している。特にSK406出土資料は良好な資料が多く、Ⅶa期を代表する資料群といえよう。ただ同遺構から出土した鉢（300）の編年的位置付けは、周辺遺跡の様相を考慮し、時期幅を持たせた。この鉢の位置付けは大きな課題の一つであり、今後検討すべき事案である。

石器は2826点出土し、これらはそのほとんどが土器の時期幅に収まるものと推測されるが、後期旧石器時代のナイフ形石器と考えられる資料が1点出土しており、注目される。また石器組成は両調査区とも磨石類が多いほか、A区では石錘、B区は石鏃が多量に出土している。特にB区 SK406からは石鏃が26点出土しており、一つの遺構から出土する点数としては多い。石材組成に目を向けると、安山岩や石英含有輝石安山岩製の石器が多く、頁岩、流紋岩、無斑晶ガラス質安山岩がこれに次ぐ。これらの石材はその出土量から、比較的近傍で採取されたものと考えたいが、頁岩や安山岩など広範囲に分布し、多様性の認められる石材は採取地の特定が困難である。しかし石英含有輝石安山岩や、打製石斧と磨製石斧に利用される緑色片岩、変ハンレイ岩は近傍の田河川で採取され遺跡内に持ち込まれたものと推定した。また黒曜石の一部や蛇紋岩類、ヒスイ、緑泥片岩については遠隔地の石材と考えられ、今後土器の様相と併せて、周辺地域との地域間交流について考えていく必要がある。

以上、雑駁ではあるが、調査成果をまとめた。田河川流域は魚沼市の中でも調査事例が多い地域で、比較資料に富む。今回はそれら他の調査事例との比較検討は行えなかったが、今後田河川流域の縄文遺跡のまとまりとして詳細に検討する事で、当該地域の様相が更に明らかになると期待したい。

最後に本報告書が魚沼市の歴史を明らかにする一助となることを願い、総括の結びとする。

引用・参考文献

- 阿部昭典 2005 「第Ⅵ章第2節 集落構造について」『津南町文化財調査報告第47輯 道尻手遺跡（本文編）』津南町教育委員会
- 荒川勝利 1995 「第一章第一節 堀之内町を取りまく自然」『堀之内町史 資料編上巻』堀之内町
- 荒川勝利 1997 「第一章第一節 堀之内町の地形と地質」『堀之内町史 通史編上巻』堀之内町
- 荒木勇次 1988 「第Ⅷ章1b. 魚野川中流域からみた水上遺跡出土土器の位置付け」『大和町文化財発掘調査報告第3号 水上遺跡』大和町教育委員会
- 池田 亨 1981 『堀之内町文化財調査報告書第2輯 原・居平遺跡』堀之内町教育委員会
- 池田 亨・荒木勇次 1988 『大和町文化財発掘調査報告第3号 水上遺跡』大和町教育委員会
- 池田 亨・細矢菊治 1990 『大和町文化財発掘調査報告第4号 水上遺跡』大和町教育委員会
- 石坂圭介 2006 「第Ⅴ章1 中島遺跡出土の後期初頭から後期前葉の土器」『十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集 中島遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会
- 石坂圭介 2007 「新潟県中越地方の縄文中期末から後期前葉の土器様相」『第20回縄文セミナー 中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
- 石坂圭介 2008 「三十稲場式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 石坂圭介 2012 「新潟県における縄文時代中期後葉から後期初頭の土器様相」『津南学叢書 第18輯 三十稲場式土器文化の世界－4.3Ka イベントに関する考古学的現象②－』新潟県津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会
- 石坂圭介 2018 「内後・中島遺跡から見た縄文時代後期前葉－南三十稲場式古段階の土器系統を中心に地域相を考える－」『津南学』第7号 ほおずき書籍株式会社
- 石橋夏樹 2011 「Ⅸ2 石器石材について」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第63集 剣野（本文・観察表編）』柏崎市教育委員会
- 梅川勝史 1996 『堀之内町文化財調査報告書第6集 正安寺遺跡 春日平遺跡』堀之内町教育委員会
- 梅川勝史 1997 『堀之内町文化財調査報告書第8集 正安寺遺跡Ⅱ』堀之内町教育委員会
- 梅川勝史 1998 『堀之内町文化財調査報告書第9集 原・居平遺跡 倉下遺跡』堀之内町教育委員会
- 岡村道雄 1976 「ピエス・エスキューについて」『東北考古学の諸問題』東出版寧楽社
- 織笠 昭 1992 「弥三郎第2遺跡 縄文時代草創期」『土気南遺跡群Ⅱ』千葉県土気南土地区画整理組合
- 笠井洋祐 2006 「第Ⅳ章3 3）石器の分類と出土状況」『十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第31集 中島遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会
- 笠井洋祐・石坂圭介 2006 『十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第31集 中島遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会
- 笠井洋祐・長沢展生ほか 2006 『十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第32集 内後遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会
- 加藤 学 1999a 「Ⅴ章1. c. 遺構の形態分類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 和泉A遺跡（本文編）』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 1999b 「Ⅴ章2. c. (1) c. 出土石器の分類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 和泉A遺跡（本文編）』新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 倉石広太 2005 「第Ⅳ章 第3節3. 石器」『津南町文化財調査報告第47輯 道尻手遺跡（本文編）』津南町教育委員会
- 倉石広太 2008 「第5章第3節 岩石分類と石器石材」『魚沼市埋蔵文化財調査報告書 第5集 黒姫洞窟遺跡－第2期発掘調査報告－』魚沼市教育委員会・魚沼地域洞窟遺跡発掘調査団
- 倉石広太 2011 「Ⅳ章第2節 石器の分類」『津南町文化財調査報告第59輯 堂平遺跡（本文編）』津南町教育委員会

- 桑原 健 2006 「第Ⅳ章 2 C 石器」『十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 32 集 内後遺跡発掘調査報告書』 十日町市教育委員会
- 桑原 健 2014 「第Ⅳ章 3 石器・石製品の分類」『魚沼市埋蔵文化財調査報告書 第 10 集 布場上ノ原遺跡』 魚沼市教育委員会
- 佐藤信之 2011 「第Ⅵ章第 3 節 津南町における周辺石材環境と石器組成の変遷」『津南町文化財調査報告第 59 輯 堂平遺跡（本文編）』 津南町教育委員会
- 佐藤信之 2012 「三十稲場式期の石器について－分胴形打製石斧、板状石器、蛇紋岩製磨製石斧について－」『津南学叢書 第 18 輯 三十稲場式土器文化の世界－ 4.3Ka イベントに関する考古学的現象②－』 新潟県津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会
- 佐藤信之 2014 「Ⅲ．D．3 a 石器石材環境とその利用」『津南学叢書 第 23 輯 魚沼地方の先史文化』新潟県津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会
- 佐藤信之 2016 「津南町における杉久保石器群の石材組成と石材の特徴－石材環境を背景に－」『津南学叢書 第 28 輯 津南段丘の杉久保石器群 予稿集』 新潟県津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会
- 佐藤信之 2017a 「本ノ木遺跡における石材利用及び遺跡周辺の石材環境について」『津南学叢書 第 31 輯 座談会 60 年目の本ノ木遺跡－要旨集－』 新潟県津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会
- 佐藤信之 2017b 「第 2 章第 2 節 自然・石材環境調査報告」『魚沼市埋蔵文化財調査報告書第 13 集 黒姫洞窟遺跡－第 4 期発掘調査報告－』 魚沼市教育委員会
- 佐藤信之・石岡智武 2015 「信濃川・魚野川上流域の地質・石材環境」『第 29 回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』 東北日本の旧石器文化を語る会
- 佐藤雅一 1995 「第一章第三節 堀之内町の遺跡と遺物」『堀之内町史 資料編上巻』 堀之内町
- 佐藤雅一 2017 「津南段丘における旧石器時代研究」『岩宿フォーラム 2017/ シンポジウム 石器群の地域性－日本海側中央部と北関東地方を対比する－ 予稿集』 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 佐藤雅一・阿部昭典^{ほか} 2011 「津南町文化財調査報告第 59 輯 堂平遺跡（本文編）」 津南町教育委員会
- 沢田 敦 2018 「アスファルト関連遺物の自然科学分析について－赤外分光分析を中心に－」『縄文時代のアスファルト利用Ⅱ 特定非営利活動法人 いちのへ文化・芸術 NPO
- 品田高志 2002 「新潟県における後期前葉期の土器群－柏崎市十三本塚北遺跡を中心に－」『第 15 回縄文セミナー 後期前半の再検討』 縄文セミナーの会
- 品田高志・平吹 靖 2001 「柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第 37 集 十三本塚北遺跡群」 柏崎市教育委員会
- 白井雅明 2015 「浜海川採集の頁岩について－十日町市域を中心に－」『第 29 回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』 東北日本の旧石器文化を語る会
- 菅沼 亘^{ほか} 2007 「十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 34 集 幅上遺跡発掘調査報告書」 十日町市教育委員会
- 菅野和郎 2008 「ミニチュア土器」『総覧 縄文土器』 アム・プロモーション
- 鈴木俊成 1996 「第Ⅳ章 C 石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 72 集 清水上遺跡Ⅱ（本文編）』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成・桑原 健 2015 「魚野川支流田河川流域の石斧石材」『第 29 回東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』 東北日本の旧石器文化を語る会
- 高木公輔 2008 「第 2 章第 1 節 黒姫洞窟遺跡周辺の石材環境」『魚沼市埋蔵文化財調査報告書 第 5 集 黒姫洞窟遺跡－第 2 期発掘調査報告－』 魚沼市教育委員会・魚沼地域洞窟遺跡発掘調査団
- 高木公輔^{ほか} 2014 「魚沼市埋蔵文化財調査報告書 第 10 集 布場上ノ原遺跡」 魚沼市教育委員会
- 高橋保雄 1992 「第Ⅳ章 4 B 石器類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 57 集 五丁歩遺跡・十二木遺跡（本文編）』 新潟県教育委員会
- 高橋保雄・鈴木俊成 1990 「第Ⅳ章 2 B 出土石器の分類と分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 55 集 清水上遺跡（本文編）』 新潟県教育委員会

- 寺崎裕助 1996 「第Ⅶ章 1 A 縄文時代中期前・中葉の土器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 72 集 清水上遺跡Ⅱ（本文編）』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 長沢展生 2006 「第Ⅲ章 3 1）A 縄文土器の分類」『十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 32 集 内後遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会
- 南波 守 2014 「第Ⅳ章 2 土器・土製品の分類」『魚沼市埋蔵文化財調査報告書 第 10 集 布場上ノ原遺跡』魚沼市教育委員会
- 新田康則・石坂圭介 2011 『長岡市埋蔵文化財調査報告書 多賀屋敷遺跡Ⅳ』長岡市教育委員会
- 新潟県 2000 『新潟県地質図説明書（2000 年版）』新潟県商工労働部商工振興課
- 藤巻正信^{ほか} 1991 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 29 集 城之腰遺跡（本文編）』新潟県教育委員会
- 藤巻正信・田中 靖 1991 「第Ⅳ章 2 C 石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 29 集 城之腰遺跡（本文編）』新潟県教育委員会
- 松永篤知 2008 「網代・敷物」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 三浦麻衣子^{ほか} 2012 「縄文時代後期初頭等の黒曜石製石器産地分析と土器胎土分析－新潟県妻有地域出土資料を中心として－」『津南学叢書 第 18 輯 三十稲場式土器文化の世界－4.3Ka イベントに関する考古学的現象②－』新潟県津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会

A 区検出竪穴住居 (SI) 観察表

遺構名	図版	グリッド	主軸	柱穴等属性						掲載遺物	帰属時期	備考
				柱穴No	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深度 (cm)	平面形	断面形			
SI333	10	13E・14E	N-64° -E	P58	76	60	52	楕円形	V字状	1	Ⅶa	調査区外に伸びる
				P59	42	28	28	楕円形	V字状			
				P62	62	38	23	不整形	U字状			
				P73	30	30	29	円形	半円状			
				P85	74	20	40	楕円形	U字状			
				P344	52	40	35	楕円形	箱状			
				P125	48	36	33	楕円形	V字状			
				P126	56	32	36	不明	不明			
SI1	10	11E・12E	-	P136	36	28	44	楕円形	V字状	2	Ⅶb	調査区外に伸びる
				P147	40	32	36	楕円形	U字状			
				P149	40	36	51	円形	V字状			
				P158	64	36	40	楕円形	階段状			
				P162	60	44	25	楕円形	台形状			
				P168	52	40	21	不整形	V字状			
				P176	44	28	29	楕円形	台形状			
				P183	34	32	26	円形	台形状			
SI2	11	10E・11E	-	P191	76	48	21	楕円形	階段状			調査区外に伸びる
				P230	38	38	15	円形	台形状			
				P231	28	20	16	不整形	U字状			
				P240	28	26	15	円形	台形状			
				P246	44	40	18	円形	台形状			
				P248	32	30	19	円形	台形状			
				P260	28	12	15	不明	不明			
				P262	48	44	20	円形	弧状			
SI3	11	9E・10E	N-7° -E	P264	56	34	13	楕円形	弧状			

A 区検出掘立柱建物 (SB) 観察表

遺構名	図版	グリッド	主軸	柱穴等属性						掲載遺物	帰属時期	備考
				柱穴No	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深度 (cm)	平面形	断面形			
SB1	11	10E・10F・11E	N-42° -E	P180	54	37	31	楕円形	U字状			調査区外に伸びる
				P189	40	24	41	不明	U字状			
				P192・10F・11E	40	34	58	円形	U字状			
				P353	76	28	32	不整形	階段状			
				P357	50	38	52	楕円形	U字状			

A 区検出埋設土器 (SH) 観察表

遺構名	図版	グリッド	掘り込み規模			掲載遺物	帰属時期	備考
			長軸 (cm)	短軸 (cm)	深度 (cm)			
SH341	12	14E11	28	18	72	3	Ⅶa	
SH346	12	11E22・23・12E2・3	44	28	39	4	Ⅶa	
SH347	12	9E25	56	38	27	5	V	

A 区検出土坑 (SK) 観察表

遺構名	図版	グリッド	属性				掲載遺物	帰属時期	備考
			長軸 (cm)	短軸 (cm)	深度 (cm)	断面形			
SK49	12	14D20・14E16	104	76	46	箱状	6	Vb	
SK54	12	14E12・17	102	92	106	箱状	7・8	Ⅵ	
SK67	12	14E1・2・6・7	100	104	101	U字状			
SK68	12	14E1・2	80	44	28	不明			
SK90	13	13E17	100	76	20	楕円形	9	Ⅵ	
SK95	13	13E6	108	60	55	不整形	10・11	Ⅶ	
SK150	13	11E14・19	132	64	52	階段状			
SK197	13	10E19・20・24・25	122	66	112	不明	12・13	Ⅵ	

A 区検出ピット (P) 観察表

遺構名	図版	グリッド	属性				掲載遺物	帰属時期	備考
			長軸 (cm)	短軸 (cm)	深度 (cm)	断面形			
P100	13	13E6	72	48	46	階段状	14	V	
P137	13	11E23	88	60	51	不整形	15		
P173	13	11E9・10	32	32	21	円形	16	Ⅶ	
P288	13	7F16	76	64	31	半円状	17	Vlb	

B 区検出竪穴住居 (SI) 観察表

遺構名	図版	グリッド	主軸	柱穴等属性						掲載遺物	帰属時期	備考
				柱穴No	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深度 (cm)	平面形	断面形			
SI4	17	15I・15J 16I・16J	N-31° -W	P454	44	40	31	円形	U字状	27I	VI	調査区外に伸びる SK480は姪跡か
				P478	56	52	31	不整形	台形状			
				P512	64	40	32	不整形	階段状			

B 区検出掘立柱建物 (SB) 観察表

遺構名	図版	グリッド	主軸	柱穴等属性						掲載遺物	帰属時期	備考
				柱穴No	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深度 (cm)	平面形	断面形			
SB2	17	15I 16I・16J	N-85° -W	P432	48	40	74	円形	U字状	272～275	Ⅶ	
				P434	60	60	42	円形	U字状			
				P436	72	72	41	不整形	階段状			
				P438	44	40	37	円形	U字状			
				P447	68	44	54	不整形	U字状			
				P452	56	48	54	円形	階段状			
				P467	48	40	49	円形	階段状			
				P470	72	64	71	不整形	U字状			
				P474	64	64	47	不整形	U字状			
				P482	52	44	65	円形	台形状			
				P532	52	44	55	円形	U字状			
				P451	32	28	13	円形	階段状			
				P466	36	28	56	楕円形	U字状			
SB3	18	16I・16J	N-80° -W	P469	44	36	46	楕円形	U字状			調査区外に伸びる
				P485	48	40	52	円形	U字状			
				P538	40	12	42	不明	U字状			
				P540	36	28	10	不整形	弧状			
				P401	36	32	10	円形	弧状			
SB4	18	17H・17I	N-89° -W	P402	48	44	45	不整形	U字状	276・277	Vb	
				P403	60	48	17	楕円形	階段状			
				P404	48	40	50	円形	U字状			
				P405	48	32	16	楕円形	階段状			

B 区検出土坑 (SK) 観察表

遺構名	図版	グリッド	属性				掲載遺物	帰属時期	備考
			長軸 (cm)	短軸 (cm)	深度 (cm)	平面形	断面形		
SK406	19	17I1・2・6・7	240	232	60	方形	台形状	278・327・370 ～372・375・ 379～391・ 394・395・397 ～399・402～ 411・415～ 417・426・ 428・437・442	Ⅶa
SK410	20	16I12	112	80	35	楕円形	台形状	328 329～334・ 374・396・400	Ⅶb Ⅵ
SK419	20	15I21・16I1	108	92	69	不整形	箱状		
SK524	20	16H14・15・19	148	80	15	不明	不明		
SK541	20	16H15・20	156	96	49	不明	半円状		

B 区検出ピット (P) 観察表

遺構名	図版	グリッド	属性				掲載遺物	帰属時期	備考
			長軸 (cm)	短軸 (cm)	深度 (cm)	平面形	断面形		
P407	20	16I21	32	28	48	円形	袋状	335	
P413	20	16I8	80	76	36	円形	台形状	336	Ⅵ
P420	20	15I21・16I1	72	44	38	不整形	弧状	337	Ⅵc
P422	20	15I21・16I1・2	56	48	45	方形	U字状	338	Ⅵ
P423	21	16I3・8	82	72	26	不整形	台形状	339	Vb
P424	21	16I4・8・9	40	24	18	不明	不明	340	Vb
P430	21	15I23	28	28	10	方形	弧状	341	
P437	21	16I11	36	28	27	長方形	台形状	342	
P440	21	15I24・25	92	92	35	円形	台形状	343～348・ 373・423	Ⅶ
P476	21	16I5	60	56	50	方形	台形状	349	
P491	21	16I4	36	20	15	不明	不明	350	
P495	21	16I4	88	76	21	不整形	階段状	351	
P497	21	16I21	72	64	58	方形	箱状	352	
P511	21	15I16	60	44	42	楕円形	階段状	353・443	Ⅶ

A区出土土器観察表(1)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等		混入物	色調		炭化物		備考
	グリッド	遺構	層位					口径	底径	器高	高さ	(口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	上段：外面 下段：内面		外	内			
1	14E2・7	-	Ⅲ	深鉢	C 4 b	在地	Ⅶa	29.4 復	-	-	1.1	口：同心円文、横線文、刺突文 頸～胴：平行沈線文、RL細文	長・チャ・土	明赤褐 にぶい橙	-	-			
2		SH1-P136		深鉢	C 2 -	在地	Vb	-	-	-	1.1	口：縄の押圧か→斜位→縦位細沈線文、内面蓋受状隆帯	橙粒	浅黄 浅黄	○	-			
3	14E11	-	Ⅱ・Ⅲ	深鉢	D 1 a	在地	Ⅶa	22.7 復	12.2	40.0 復	1.1	口：無文 口唇：刺突文 頸：横位沈線区画文 胴：無文 底：敷物圧痕（網代痕）	石・長・チャ・ 土	にぶい橙 にぶい橙	○	○			
4		SH346		深鉢	C - -	在地	Ⅶa	-	7.0	-	1.3	胴：RL細文とL細文の2種か、米字状もしくは渦巻状沈線文	石・長・チャ・ 橙粒・白粒・礫	淡黄～浅黄橙 淡黄～浅黄橙	○	-			
5	9E20・25 9F16	-	Ⅱ	深鉢	B 3 a	在地	V	25.3 復	-	-	1.0	口：無文 胴：横位沈線区画文、縦位沈線文（懸垂文）	石・雲・チャ・ 赤粒・橙粒・土	浅黄橙～にぶ い黄橙 にぶい黄橙～ 灰黄橙	○	○			
6	14D20・ 14E16	SK49	Ⅱ・Ⅲ	深鉢	A 3 a	在地	Vb	28.3 復	-	-	1.2	口：横位沈線区画文 胴：格子状沈線文	石・長・橙粒・ 白粒・土	浅黄橙～黒褐 にぶい黄橙	○	-			
7		SK54		深鉢	- - -	在地	Ⅵ	-	-	-	1.2	胴：花卉状刺突文	長・雲・橙粒・ 白粒・礫・土	にぶい黄橙～ 灰黄褐 にぶい黄橙	-	○	8と同一個体		
8		SK54		深鉢	- - -	在地	Ⅵ	-	-	-	1.4	胴：花卉状刺突文	橙粒・白粒・土	にぶい黄橙 にぶい黄褐	-	○	7と同一個体		
9	13E17	-	Ⅲ	深鉢	- - -	在地	Ⅵ	-	-	-	1.1	胴：花卉状刺突文	橙粒・白粒・礫	にぶい黄橙 にぶい黄橙	○	○			
10		SK95		鉢	- - -	-	Ⅶ	-	-	-	0.8	胴：横位（刻目か）沈線区画文、弧状もしくは鱗状沈線文	雲・赤粒	橙 黄橙	-	-			
11		SK95		深鉢	D - -	在地	Ⅶa	-	-	-	1.0	口～頸：無文 胴：横位沈線区画文、LR細文（L細文か）→沈線文	石・長・チャ・ 橙粒・白粒	橙 黄橙～褐灰	○	-			
12		SK197		深鉢	D - -	在地	Ⅵ	-	-	-	1.0	頸：無文 胴：横位刻目隆帯区画文、隆帯より下部は縄文か	石・長・雲・礫	浅黄橙 浅黄橙	-	-			
13		SK197		蓋	- 2	在地	Ⅵ	-	-	-	0.9	挾部あり 体：刻目隆帯文、花卉状刺突文	石・長・チャ・ 橙粒	にぶい黄橙 にぶい橙	○	○			
14		P100		深鉢	D - -	在地	V	-	-	-	1.2	胴：縦位沈線区画文、区画内雨垂状刺突文	石・長・チャ・ 土	にぶい黄橙 にぶい黄橙	-	-			

A区出土土器観察表(2)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等		混入物	色調		炭化物		備考
	グリッド	遺構	層位					口径	底径	器高	高さ	(口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	上段：外面 下段：内面		外	内			
15		P137		深鉢	- - -	-	-	-	11.8	-	1.1	底：敷物圧痕（網代痕2・1・1か）、中央部付近原体の異なる網代痕（2・1・1か）、周囲のものより細い	石・長・チャ・金雲・赤粒・白粒	にぶい黄橙 にぶい黄橙	-	○			
16		P173		深鉢	- - -	在地	Ⅶ	-	-	-	1.1	胴：L縄文（LRか）→弧状・連弧状沈線文	石・長・チャ・白粒	灰黄褐～にぶい黄橙 にぶい黄橙	○	-			
17		P288		深鉢	C 3 b	岡中	Ⅵb	27.2 復	-	-	1.0	透孔を持つ環状突起＋渦巻状沈線文 口：隆沈線文 頸：横位刻目微隆帯区画文 胴：LR（R）縄文→逆J字状隆沈線区画文（磨消）	石・チャ・橙粒・土	橙～灰黄褐 にぶい黄橙	○	○			
18	15D14	SD327		深鉢	- - -	-	Ⅳか	-	-	-	1.2	胴：LR縄文→状隆沈線区画文	石・長・礫	にぶい黄橙 にぶい黄橙	-	-			
19	15D5	SD327		深鉢	- - -	在地？	Vb	-	-	-	0.9	胴：環状貼付文、R縄文	石・長・白粒	にぶい黄橙 にぶい黄橙	-	-			
20	15E1	SD327		深鉢	A 3 a	在地	Vb	-	-	-	1.4	口：（U字状）刻目隆帯文 胴：横位刻目隆帯区画文	長・橙粒・白粒・礫	灰黄褐 橙	○	-			
21	15D5・10 15E1	SD327		深鉢	A 1 a	在地	Vb	-	-	-	1.6	口：無文 胴：横位刻目隆帯区画文→L縄文	長・橙粒・礫	浅黄橙～橙 にぶい黄橙～橙	-	○			
22	15D15	SD327		深鉢	A 1 b	在地	Vb	-	-	-	1.1	口：ノ字状刻目隆帯文 胴：細状貼付文、横位刻目隆帯区画文→R撫系文	橙粒・白粒・礫・土	浅黄橙 にぶい黄橙	-	-	23と同一個体		
23	15D15	SD327		深鉢	A 1 b	在地	Vb	-	-	-	1.0	口：無文 胴：横位刻目隆帯区画文→R撫系文	橙粒・白粒・礫・土	浅黄橙 にぶい黄橙	-	-	22と同一個体		
24	15D10・15	SD327		深鉢	A 2 -	在地	Vb	-	-	-	1.6	口：無文 胴：横位刻目隆帯区画文→条線文	白粒・礫・土	浅黄橙～橙 橙～にぶい褐	-	○			
25	15D14	SD327		深鉢	A 1 -	在地	Vb	-	-	-	1.2	口：無文 胴：横位刻目隆帯区画文、縦位→斜位条線文	赤粒・橙粒・白粒・礫・土	黄橙 黄橙	-	-			
26	15D15	SD327		深鉢	- - -	在地	Vb	-	-	-	1.3	胴：細状貼付文→横位沈線区画文、縦位（斜位）条線文	赤粒・白粒・土	浅黄橙 浅黄	-	-			
27	15D15	SD327		深鉢	- - -	在地	Vb	-	-	-	1.1	胴：曲流条線文（5～6条一単位か）	長・橙粒・白粒・礫・土	浅黄橙～橙 浅黄橙	-	-			
28	15D9・14	SD327		壺	A 1 c	在地	Vbか	14.2 復	-	-	1.1	(2単位條状把手) 口～頸：無文、内面蓋受状隆帯 胴：横位微隆帯区画文、J字状隆帯懸垂文	雲・赤粒・橙粒・礫	灰褐～黒 灰褐	○	○			

A区出土土器観察表(3)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等		混入物	色調 上段：外面 下段：内面	炭化物		備考
	グリップ	遺構	層位					口径	底径	器高 高さ	厚さ	(口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	山形？突起 口：無文 胴：R縹系文（絡糸体もしくは押圧）→半円状沈線区画文 環状突起 口～胴：LR縹文 口：無文、内面蓋受状隆帯 胴：横位沈線区画文 橋上把手 口：内面蓋受状隆帯 口～頸：無文 胴：横位刻目隆帯区画文→R縹系文 橋状把手 口～頸：無文 胴：横位刻目隆帯区画文 口：縮状貼付文、内面蓋受状隆帯 胴：LR縹文→横位（楕円形）沈線区画文 橋状把手 口～頸：無文 胴：横位刻目隆帯区画文、（縦位刻目隆帯区画文）、花卉 状刺突文 橋状把手+C字状貼付文 口～頸：無文 胴：花卉状刺突文 橋状把手+C字状貼付文 口～頸：無文 胴：花卉状刺突文 （C字状）橋状把手 口～頸：無文、透孔あり 胴：横位刻目隆帯区画文、（縦位刻目隆帯区画文） 橋状把手 口～頸：無文、透孔あり			長・橙粒・白 粒・礫・土	金雲・黒雲・橙 粒・白粒・礫 橙粒・土 橙粒・礫 石・雲・角・ チャ・赤粒・橙 粒・白粒・土 石・長・角・ チャ 石・長・角・ チャ 長・雲・白粒・ 礫・土 石・長・角・ チャ・白粒・土 雲・橙粒・白 粒・礫・土	

A区出土土器観察表(4)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)			文様等 (口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	混入物	色調 上段：外面 下段：内面	炭化物		備考
	グリップ	遺構	層位					口径	底径	器高 高さ	厚さ			外	内	
41	15D10	SD327		深鉢	D 1 c	在地	V/b ~VIa	-	-	-	-	石・長・チャ・ 橙粒・礫・土	橙～浅黄橙 灰黄～浅黄橙	-	-	
42	15D9・ 15・19	SD327		深鉢	D 1 c	在地	V/b ~VIa	13.1	-	-	1.1	金雲・橙粒・白 粒・礫・土	にぶい黄橙～ 褐灰 にぶい黄橙黄 橙～褐灰	○	○	
43	15E6	SD327		深鉢	D 1 c	在地	VI	-	-	-	1.0	石・長・チャ・ 橙粒・土	黄橙 黄橙～にぶい 黄橙	○	-	
44	15D14	SD327		深鉢	D 1 c	在地	VIb ~VIc	-	-	-	1.0	石・長・雲・ チャ	浅黄橙～黒褐 浅黄橙～灰黄 褐	-	-	
45	15D10	SD327		深鉢	C 4 -	在地	VIb	-	-	-	0.6	石・長・雲・角	にぶい黄橙～ 灰黄褐 橙	○	-	
46	15E1	SD327		浅鉢	A - -	在地	VII	-	-	-	0.9	長・チャ・金雲	灰黄褐～黒褐 にぶい黄橙	○	-	
47	15D14・15	SD327		深鉢	C 4 b	在地	VII	-	-	-	0.9	石・長・角・ チャ	にぶい黄橙 灰黄褐	-	-	
48	15D2?	SD327		浅鉢	A 1 a	在地	VII	-	-	-	0.9	石・長・角・白 粒	にぶい黄橙 にぶい黄橙	-	-	
49	15D15・20	SD327		深鉢	A 3 a	-	-	20.5 復	-	-	1.3	橙粒・土	浅黄橙～褐灰 灰黄～褐灰	○	-	
50	15D10 15E6	SD327		深鉢	- - -	-	-	-	-	-	1.2	長・橙粒・礫・ 土	褐灰 にぶい黄橙	○	-	
51	15D14・19	SD327		深鉢	C 2 a	-	-	-	-	-	1.0	長・橙粒・礫・ 土	にぶい橙～褐 灰 にぶい橙～褐 灰	-	-	52・53と同一個体

A区出土土器観察表(5)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)			文様等		混入物	色調 上段：外面 下段：内面	炭化物		備考
	グリッド	遺構	層位					口径	底径	器高 高さ	厚さ	(口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)					
52	15D14・19	SD327		深鉢	C 2 a	-	-	-	-	-	1.1	胴：横ハ字状細沈線文	長・橙粒・礫・土	にふい橙～褐 灰 にふい橙～褐 灰	-	-	51・53と同一個体
53	15D15	SD327		深鉢	C 2 a	-	-	-	-	-	1.2	胴：横ハ字状細沈線文	石・白粒・礫・土	にふい橙～褐 灰 にふい橙～褐 灰	-	-	51・52と同一個体
54	15D15	SD327		浅鉢	A 3 -	-	-	-	-	-	0.9	口：無文 胴：横位沈線区画文→RL細文（充填）→逆J字状沈線文（磨消）	石・長・角	橙、にふい褐 にふい黄橙～ 橙	○	-	
55	15E1	SD327		深鉢	- - -	-	-	-	6.4 復	-	0.6	底：散物庄痕（網代裏2・1・1か）	長・雲・橙粒・白粒・礫	橙～にふい橙 橙	-	-	
56	15D19	SD327		蓋	- 1	在地	Ⅵ	13.6 復	-	-	1.1	体：無文	白粒・土	橙～浅黄橙 黒褐	○	-	
57	15E1	SD327		蓋	B 2	在地	Ⅵ	-	-	-	0.8	橋状把手 体：刻目隆沈線区画文、刺突文	石・長・雲・金 雲・赤粒・橙 粒・土	にふい黄橙～ 褐灰 黄橙～黒褐	○	○	
58	15D15	SD327		蓋	B 2	在地	Ⅵ	-	-	-	0.9	挾部あり 橋状把手＋刺突 体：沈線区画文、区画内刺突文	白粒	橙 灰黄	-	-	
59	15D15	SD327		蓋	- 2	在地	Ⅵ	-	-	-	0.5	挾部あり （橋状把手） 体：刻目隆沈線文、刺突文	石・雲	橙 橙	-	-	橋状把手剥落か
60	12E3	-	Ⅲ	深鉢	- - -	在地	Ⅲ	-	-	-	-	鶏頭冠突起	石・長・チャ・ 橙粒	にふい黄橙 橙	-	-	
61	7E25	-	Ⅱ	深鉢	- - -	在地	Ⅲ	-	-	-	-	（橋状把手）、渦巻状沈線文	石・長・チャ	浅黄橙 浅黄橙	-	-	
62	7F21	-	Ⅱ	深鉢	- - -	在地	Ⅲ	-	-	-	-	渦巻状突起、渦巻状沈線文	赤粒・白粒	橙 灰黄褐	○	-	
63	9F1	-	Ⅱ	深鉢	- - -	在地	Ⅲ	-	-	-	1.0	胴：縦位多条沈線文、縁杉状細沈線文	石・長・チャ	にふい黄橙 にふい黄橙	-	-	
64	8F6・12	-	Ⅱ	深鉢	- - -	東北	Ⅲ	-	-	-	0.9	胴：LR細文、渦巻状懸垂文（沈線）	長・赤粒・白粒	浅黄橙 灰黄褐	-	-	65と同一個体 御れ口面に炭化物付着
65	7F21	-	Ⅱ	深鉢	- - -	東北	Ⅲ	-	-	-	0.8	胴：LR細文、渦巻状懸垂文（沈線）	橙粒・白粒	黄橙 にふい黄橙	-	-	64と同一個体

A区出土土器観察表(6)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)			文様等 (口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	混入物	色調 上段：外面 下段：内面	炭化物		備考
	グリップ	遺構	層位					口径	底径	器高 高さ	厚さ			外	内	
66	7F16	-	II	深鉢	B 3 b	在地	III	-	-	-	0.6	石・長・赤粒	にぶい黄橙 浅黄橙	-	-	
67	10E1	-	II	鉢	A 4 c	岡中か	Vb	-	-	-	1.0	長・橙粒・土	灰黄褐～浅黄 橙	○	○	
68	10E10	-	II	鉢	A 4 -	-	-	-	-	-	0.8	石・長・雲・白 粒・土	浅黄橙～褐灰 にぶい黄橙	○	○	
69	9F6	-	II	深鉢	B 3 -	在地	IV	-	-	-	1.0	長・チャ・白粒 橙粒・礫	浅黄橙	-	-	
70	8F22	-	II	深鉢	- - -	在地	Va	-	-	-	0.9	長・雲・チャ・ 橙粒・礫	にぶい橙 にぶい褐	-	○	
71	8E20・25 8F21	-	II・III	深鉢	A 4 b	在地	Vb	29.8 復	-	-	1.5	橙粒・礫・土	浅黄橙～橙 浅黄橙	○	-	
72	11E5	-	III	深鉢	A 2 -	在地	Vb	-	-	-	1.1	石・チャ・橙 粒・白粒・土	明黄褐 にぶい黄褐	-	-	
73	8F16・17 9F17	-	I・II	深鉢	A 2 a	在地	Vb	-	-	-	1.3	橙粒・土	浅黄橙～灰黄 褐	○	○	
74	14E12	-	II	深鉢	A 2 b	在地	Vb	-	-	-	1.3	チャ・赤粒・白 粒・土	にぶい黄橙 にぶい黄橙	-	-	
75	8F1	-	II	深鉢	A 2 -	在地	Vb	-	-	-	1.0	石・長・チャ・ 金雲・土	橙 橙～浅黄橙	-	-	
76	13E11	-	III	深鉢	- - -	在地	Vb	-	-	-	1.3	石・橙粒・礫	浅黄橙～灰黄 灰黄	-	-	
77	14D25	-	II	深鉢	C 1 -	在地	Vb	-	-	-	1.2	石・長・雲・赤 粒・橙粒・礫	橙～黄橙 にぶい黄橙	-	-	
78	9F6	-	II	深鉢	A 2 a	在地	Vb	-	-	-	1.1	長・金雲・橙 粒・土	浅黄橙 にぶい黄橙	-	-	
79	7E20	-	I	深鉢	C 2 -	在地	Vb	-	-	-	0.8	石・橙粒・土	黄橙 黄橙	○	-	
80	7E20	-	II	深鉢	A 2 -	在地	Vb	-	-	-	1.3	長・橙粒・土	にぶい黄橙 にぶい黄橙	-	○	

A区出土土器観察表(7)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等 (口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	混入物	色調 上段：外面 下段：内面	炭化物		備考
	グリッド	遺構	層位					口径	底径	器高 高さ	厚さ				外	内	
81	10F1	-	Ⅱ	深鉢	A 3 a	在地	Vb	-	-	-	0.9	口：無文 胴：横位刻目隆帯区画文、R縄文、L縄文 (LRか) の2種あり	石・雲・橙粒・土	橙 橙	○	-	
82	9E25	-	Ⅱ・Ⅲ	深鉢	C 1 a	在地	Vb	-	-	-	1.2	口：無文 胴：横位隆帯区画文+LR?縄文、LR?縄文	橙粒・白粒・土	灰黄褐～にぶ い黄橙 橙～褐灰	○	-	
83	14E21	-	Ⅱ	深鉢	A 3 a	在地	Vb	-	-	-	0.9	口：無文 胴：横位沈線区画文→L燃系文	石・長・橙粒	黄橙 黄橙	○	○	
84	9F11・16	-	Ⅱ・Ⅲ	深鉢	A 4 a	在地	Ⅵ	-	-	-	1.0	口：2条横位刻目隆帯区画文 胴：R燃系文	石・橙粒・土	浅黄橙～黒褐 浅黄橙～黒褐	○	○	
85	14G7	-	Ⅱ	深鉢	D - -	-	Vか	-	-	-	1.2	胴：沈線文、区画外に刺突文	石・長・雲・ チャ	浅黄橙 にぶい橙	-	-	
86	6F11	-	Ⅱ	鉢	- - -	-	V	-	-	-	1.1	胴：楕円形沈線区画文、区画外刺突文	石・礫・土	灰黄褐 褐灰	○	-	
87	7E20	-	Ⅰ	鉢	A 3 a	在地	Ⅵa	-	-	-	0.6	口：2条横位隆帯区画文 胴：LR縄文か	石・長・金雲・ 赤粒	にぶい橙 にぶい橙	-	-	
88	9F1	-	Ⅱ・Ⅲ	深鉢	A 1 b	-	-	-	-	-	1.1	口：突起、隆帯文+刺突列、沈線文 胴：沈線文	長・橙粒・土	橙～にぶい黄 橙 にぶい黄橙	○	-	
89	7F11	-	Ⅱ	深鉢	A 4 b	関中	Vb	-	-	-	0.8	口：無文 胴：RL縄文→横位沈線区画文	石・長・橙粒・ 土	にぶい黄橙 浅黄橙	○	-	
90	11E15	-	Ⅱ	深鉢	A 1 a	関中	Vb	-	-	-	1.4	口：無文 胴：横位・斜位沈線区画文→RL縄文 (充填)	石・長・チャ・ 赤粒	浅黄橙 浅黄橙	-	-	
91	9F11	-	Ⅱ	浅鉢	- - -	関中	Vb	-	-	-	-	突起 (把手か)、隆沈線文、刺突文、上端に沈線文+刺突 内面円文、沈線文+刺突、隆帯	長・赤粒・橙粒 橙	橙 橙	○	-	
92	14E7	-	Ⅲ	深鉢	- - -	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	-	橋状把手	石・長・角・ チャ	浅黄橙 にぶい黄橙	-	-	
93	9F6	-	Ⅱ	深鉢	D 1 b	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	1.1	口：透孔を持つ環状突起、そこから垂下する刻目隆帯文と 横位刻目隆帯区画文	石・白粒・土	浅黄橙 にぶい黄橙	-	-	刺突工具原体が特異
94	8F1	-	Ⅱ	深鉢	D 1 c	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	0.9	橋状把手 (透孔) 口～頸：無文 胴：花弁状刺突文	橙粒・土	浅黄橙 浅黄橙	○	-	
95	11E19	-	Ⅲ	深鉢	D 1 c	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	0.7	橋状把手 (上端部S字状貼付文) 口：無文、内面蓋受状隆帯	長・雲・チャ	浅黄橙 淡黄	○	-	

A区出土土器観察表(8)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等 (口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	混入物	色調 上段：外面 下段：内面	炭化物		備考
	グリップ	遺構	層位					口径	底径	器高 高さ	厚さ				外	内	
96	7E20	-	Ⅱ	深鉢	D 1 c	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	-	橋状把手 口：無文、内面蓋受状隆帯 胴：櫛位刻目隆帯区画文、花弁状刺突文	石・長・雲・ チャ	橙～灰褐 にぶい橙	○	○	
97	9E15	-	Ⅱ	深鉢	- - -	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	1.3	胴：花弁状刺突文	石・長・金雲・ 橙粒・土	浅黄橙 灰黄	-	-	
98	7F16	-	Ⅱ	深鉢	D 1 -	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	0.8	口～頸：無文 胴：櫛位刻目隆帯区画文、LR縄文	石・櫛粒・土	明赤褐 橙	○	○	
99	14E12	-	Ⅱ	深鉢	- - -	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	1.0	頸：櫛位刻目隆帯区画文 胴：櫛状貼付文＋刺突、花弁状刺突文	石・雲・チャ・ 櫛粒・白粒	にぶい黄橙 橙	-	-	
100	8F11	-	Ⅰ	深鉢	D - -	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	0.9	頸：無文 胴：櫛位刻目隆帯区画文、花弁状刺突文	石・長・チャ・ 白粒	にぶい褐 橙	○	-	
101	6F16	-	Ⅱ	深鉢	C 1 c	在地	Ⅳb～c	-	-	-	-	橋状把手 (8字状貼付文＋刺突) 口：無文 頸：櫛位刻目隆沈線区画文 胴：櫛位刻目隆沈線区画文	石・長・橙粒・ 土	黄橙 灰黄褐	○	○	
102	8E15	-	Ⅰ	深鉢	D 1 c	在地	Ⅳb～c	-	-	-	-	橋状把手、(S字状貼付文) 口：無文 頸：櫛位刻目隆帯区画文 胴：花弁状刺突文	長・チャ・橙 粒・土	橙 橙	-	-	
103	8F21	-	Ⅱ	深鉢	C 1 c	在地	Ⅳb～c	-	-	-	0.6	S字状橋状把手＋刺突文 口：無文 頸：櫛位刻目隆帯区画文 胴：刺突文	櫛粒 灰白～橙 浅黄橙	-	-		
104	7F16	-	Ⅱ	深鉢	C 1 c	在地	Ⅳb～c	-	-	-	0.9	橋状把手＋S字状刻目貼付文 口～頸：櫛位刻目隆帯区画文、逆J字状刻目隆帯懸垂文	チャ・橙粒・土	浅黄橙～にぶ い黄橙 黄橙	○	-	
105	13E17	-	Ⅱ・Ⅲ	深鉢	C 1 c	在地	Ⅴc	-	-	-	0.8	橋状把手 口～頸：無文 胴：櫛位刻目隆帯区画文→花弁状刺突文	石・長・チャ・ 櫛粒・白粒・土	にぶい黄橙 にぶい黄橙	○	○	
106	9E20	-	Ⅱ	深鉢	- - -	在地	Ⅳb～c	-	-	-	1.2	胴：環状貼付文＋刺突、RL縄文	長・チャ・橙 粒・土	橙 橙	-	-	
107	9F11	-	Ⅱ	深鉢	C - -	在地	Vb	-	-	-	0.9	口～頸：無文 胴：櫛位隆帯区画文、(J字状懸垂文(隆帯))、弧状沈線 文、L縄文か	雲・橙粒・土	橙 にぶい橙	-	-	
108	11E4	-	Ⅲ	鉢	B 2 a	在地	Ⅳa	29.6 復	-	-	0.8	口：櫛状貼付文、櫛位沈線文 頸：無文 胴：櫛位沈線区画文、三角形・渦巻状沈線文、LR縄文	赤粒・白粒 橙 橙	-	-		

A区出土土器観察表(9)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等		混入物	色調		炭化物		備考
	グリップド	遺構	層位					口径	底径	器高 高さ	厚さ	(口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	上段：外面 下段：内面		外	内			
109	9F16	-	II	深鉢	C 4 b	在地	Ⅶa	-	-	-	0.7	口：透孔を持つ環状突起、横線文＋刺突、横位刻目隆帯文、内面環状貼付文＋刺突 頸：無文	石・長・赤粒・ 橙粒	浅黄橙 浅黄橙	○	○			
110	8F1	-	II	深鉢	C 2 b	在地	Ⅶa	-	-	-	0.6	口：沈線文(渦巻状か)、横線文、内面円形沈線文、横位沈線文 頸：横位沈線文	赤粒・白粒	橙 浅黄橙	○	-			
111	11E9	-	II	浅鉢	A 2 b	在地	Ⅶ	-	-	-	1.0	円柱状突起(把手か)、突起部上面渦巻状沈線文 口～胴：RL細文→渦巻状沈線文	石・長・雲・角 黒褐、にぶい、 黄褐	橙、黄橙、黒 褐	○	-	112と同一個体		
112	11E9・24	-	Ⅱ・Ⅲ	浅鉢	A 2 b	在地	Ⅶ	-	-	-	1.0	円柱状突起(把手か) 口～胴：RL細文→渦巻状沈線文	石・長・雲・角・チャ	浅黄橙	-	-	111と同一個体		
113	6F16	-	II	浅鉢	A 2 -	在地	Ⅶ	-	-	-	0.8	口：無文 口唇：渦巻状沈線文	白粒	にぶい黄橙 にぶい黄橙～ 褐灰	-	-			
114	7F11	-	II	深鉢	C - b	在地	Ⅶ	-	-	-	-	口：無文、内面渦巻状隆帯文、弧状沈線文＋刺突	石・長・チャ・金雲・赤粒・礫	浅黄橙 にぶい黄橙	-	-			
115	5F16	-	II	鉢	A - b	在地	Ⅶ	-	-	-	-	透孔、縦位沈線文	長・橙粒・白粒	橙 橙	○	-			
116	6F21	-	I	深鉢	- - -	在地	Ⅶa	-	-	-	0.8	頸：横位沈線区画文 胴：LR細文→沈線文(弧状か)	石・長・雲	にぶい黄橙 黄橙	○	-			
117	7F11	-	II	深鉢	- - -	在地	Ⅶa	-	-	-	1.2	胴：LもしくはLR細文、斜位沈線文(渦巻状か)	石・長・角・チャ・金雲・礫	黄橙 明黄褐	-	-			
118	8E20・25	-	Ⅲ	深鉢	- - -	在地	Ⅶa	-	-	-	1.1	胴：沈線文→RL細文(充填)	長・橙粒・土	黄橙 浅黄橙	○	-			
119	9F6	-	I	深鉢	- - -	在地	Ⅶa	-	-	-	0.9	胴：沈線文→LR細文(充填)	石・長・角・白粒	橙～明赤褐 黒褐	○	○			
120	13E11	-	Ⅲ	深鉢	- - -	在地	Ⅶa	-	-	-	1.1	胴：RL細文(R細文か)→斜位沈線文	石・長・チャ・金雲・赤粒	にぶい黄橙 黄橙	○	-			
121	11E18・23	-	Ⅲ	鉢	- - -	在地	Ⅶa	-	-	-	0.7	胴：LR細文か、横位沈線区画文、沈線文	石・長・雲・チャ・白粒・礫	にぶい黄橙 灰黄褐	○	-			
122	11E23	-	Ⅲ	鉢	- - -	在地	Ⅶa	-	-	-	0.7	胴：LR細文か、横位沈線区画文、沈線文	石・長・雲・チャ・白粒・礫	にぶい黄橙 灰黄褐	○	-			
123	11E23	-	Ⅲ	鉢	- - -	在地	Ⅶa	-	-	-	0.8	胴：LR細文か、横位沈線区画文、沈線文	石・長・雲・チャ・白粒・礫	にぶい黄橙 灰黄褐	○	-			

A区出土土器観察表 (10)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等		混入物	色調		炭化物		備考
	グリップ	遺構	層位					口径	底径	器高	高さ	厚さ	(口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)		上段：外面 下段：内面	外	内		
124	5F6・11	-		深鉢	- - -	在地	Ⅷb	-	-	-	0.8	胴：多条沈線文、刺突列 (押引文か)	長・金雲・橙粒・白粒	灰褐	-	-			
125	7E20	-		深鉢	A 3 b	在地	Ⅶ	-	-	-	1.0	捻転状突起 口：横位沈線区画文、RL細文 口唇：刺突文	石・長・チャ・金雲	橙～灰褐 にふい、赤褐	○	-			
126	8F1	-		深鉢	D 1 a	在地	Ⅶか	-	-	-	1.2	口～頸：無文 口唇：網状懸糸文 (緒条体)	長・チャ・赤粒	浅黄橙	-	-			
127	13E6	-		深鉢	- - -	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	1.5	胴：LR細文 (R懸系か) →縦位蛇行沈線文	石・角・チャ・赤粒	浅黄橙 にふい、黄橙	-	-			
128	10F16	-		深鉢	C 1 a	-	-	-	-	-	1.7	口～頸： (格子状) 条線文	長・チャ・橙粒	黄橙	-	-			
129	9F6	-		深鉢	C 4 a	-	-	-	-	-	0.9	口～頸：沈線文→R細文か (充填)	石・長・赤粒	黄橙 にふい、黄橙	-	-	130と同一個体		
130	9F6	-		深鉢	C 4 a	-	-	-	-	-	1.1	頸～胴：沈線文→R細文か (充填)	石・長・赤粒	黄橙 にふい、黄橙	-	○	129と同一個体		
131	9F1	-		深鉢	A 1 a	在地	Ⅷb	-	-	-	0.6	口：2条横位刻目隆帯文 口唇：刻目文	石・橙粒・白粒	灰黄褐 褐灰	○	-			
132	10F1	-		深鉢	- - -	-	-	-	9.3	-	1.1	底：敷物圧痕 (網状葉脈痕)	石・長・雲・赤粒・橙粒・土	浅黄橙～黄橙	-	○	割れ口面に炭化物付着		
133	8F1・16・17	-		壺	B 4 -	-	Vb	-	-	-	1.0	微隆帯文、突起、横位橋状把手	石・金雲・橙粒・土	黄橙	-	-	134と同一個体か		
134	10E1	-		壺	B 4 -	-	Vb	-	-	-	1.3	胴：微隆帯文	石・チャ・橙粒・土	にふい、黄橙 にふい、黄橙	-	-	133と同一個体か		
135	14E11	-		深鉢か	- - -	-	Vb	-	-	-	1.2	胴：楕円形・縦位沈線文	石・長・雲・チャ・赤粒・礫	黄橙 黄橙	-	-			
136	10E25	-		浅鉢	A - -	-	-	-	-	-	1.2	胴：横位多条沈線区画文、縦位沈線文、下半無文	石・長・チャ	黄橙 黄橙	-	-			
137	8F11	-		蓋	A -	在地	Ⅵ	-	-	-	-	体：4単位隆沈線区画文、区画内沈線文	赤粒・橙粒・土	浅黄橙 橙	-	-	つまみ欠か		
138	12E3	-		蓋	A -	在地	Ⅵ	-	-	-	-	環状のつまみ、上面周囲に沈線文+刺突文 体：4単位刻目隆帯区画文	橙粒・土	黒褐～橙 にふい、黄橙～ 黒褐	○	○			
139	9F11	-		蓋	A -	在地	Ⅵ	-	-	-	-	渦巻状のつまみ 体：刻目隆帯区画文 (2単位か)、刺突文	石・白粒・土	浅黄橙 橙	-	-			
140	9F21	-		蓋	B 2 -	在地	Ⅵ	-	-	-	0.9	挾部あり 橋状把手	長・土	浅黄橙 浅黄橙	-	○			

A区出土土器観察表 (11)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)			文様等		混入物	色調		備考
	グリッド	遺構	層位					口径	底径	器高 高さ	厚さ	(口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)		上段：外面 下段：内面	炭化物 外 内	
141 8F16	-	-	II	蓋	B 2	在地	VI	-	-	-	-	袂部あり 橋状把手 微隆帯文	橙粒・土	浅黄橙 浅黄橙	○	補修孔あり 内外面赤彩
142 9F1	-	-	I	蓋	C 1	在地	VI	7.8	-	1.9	-	体：無文	長・橙粒・土	浅黄橙 浅黄橙	-	○
143 14E6	-	-	III	蓋か	- -	在地	VI	-	-	-	1.2	体：沈線文+刺突文、花卉状刺突文	石・雲・チャ・ 赤粒	にぶい黄褐 にぶい黄褐	-	-

A区出土土製品観察表

報告 番号	出土位置			器種	時期	法量 (cm)			文様等	混入物	色調 上段：表面 下段：裏面	炭化物		備考
	グリッド	遺構	層位			長さ	幅	厚				表	裏	
144	9F11	-	Ⅱ	土偶	-	(2.7)	(3.8)	(2.1)	乳房部：貼付文か	長・角・橙粒・白 粒	浅黄橙	-	-	左腕部 乳房焼成前に剥落か
145	11E24	-	Ⅲ	ミニチュア土器	-	口径 (5.5)	底径 4.2	器高 (2.0)	胴部：LR縄文か、横位沈線区画文 底部：敷物丘痕（網代痕2・1・1か）	長・チャ	灰黄褐 にぶい黄褐	-	-	
146	12E9	-	Ⅱ	円板状土製品	-	5.6	5.2	1.4	R縄文か、側面一部研磨痕	石・長・チャ	にぶい黄橙 淡黄	○	-	土器片再利用
147	13E12	-	Ⅲ	円板状土製品	-	4.3	4.0	2.0		石・長・チャ	にぶい黄橙 にぶい黄橙	-	-	土器片再利用
148	14E16	-	Ⅱ	円板状土製品	Ⅵ	4.7	4.7	1.1	花卉状刺突文	石・橙粒	灰黄褐 橙	○	-	土器片再利用
149	9F21	-	Ⅱ	円板状土製品	-	3.5	3.7	1.1	LR縄文	チャ・橙粒・白 粒・土	灰黄褐 にぶい黄橙	-	-	土器片再利用
150	9F16	-	Ⅱ	円板状土製品	-	4.8	5.0	1.3	沈線文、LR縄文（R燃系か）	石・長・赤粒・土	橙 橙	○	-	土器片再利用
151	9F16	-	Ⅱ	円板状土製品	V	3.7	3.7	1.4	（横位）刻目隆帯区画文、縦位（弧状又は鱗状）沈線文	石・長・チャ・金 雲	にぶい黄橙 浅黄橙	-	-	土器片再利用
152	11E4	-	Ⅱ	焼成粘土塊	-	4.1	4.6	3.2		長・金雲	明黄褐 橙	-	-	
153	9F6	-	Ⅱ	不明土製品	V～ Ⅵか	(2.4)	(4.9)	(1.6)	沈線文、刺突文	長・白粒・土	にぶい橙	-	-	

B区出土土器観察表(1)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等		混入物	色調		炭化物		備考
	グリッド	遺構	層位					口径	底径	器高	高さ	(口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	外		内				
271		SI4-P478		深鉢	A 4 b	在地	Vb	-	-	-	1.4	口：横位刻目隆帯文	長・橙粒・礫・土	褐灰	-	-			
272		SB2-P532		深鉢	D - -	在地	Ⅵ	-	-	-	0.8	頸：横位刻目隆帯区画文 胴：花弁状刺突文	橙粒・白粒・礫・土	黄褐～黒 黄橙	○	○			
273		P413 SB2-P532		浅鉢	A 3 -	在地	Ⅶ	-	-	-	0.8	口～胴：隆沈線区画文	長・金雲・橙粒・白粒・礫	橙～褐灰 橙	-	-			
274		SB2-P474		深鉢	- - -	在地	Ⅶ	-	-	-	0.8	頸：縦位沈線文、横位沈線区画文	長・金雲・橙粒・白粒・礫	にぶい橙 橙	-	-			
275		SB2-P438		深鉢	- - -	-	-	-	6.0	-	0.8	胴～底：一対の縦位沈線文 (橋状把手)	長・橙粒・白粒・礫・土	にぶい橙～橙 にぶい橙	-	-			
276		SB4-P402		深鉢	C 1 -	在地	Vb	-	-	-	1.6	頸：横位刻目隆帯区画文 胴：縦位沈線文	石・長・橙粒・白粒・礫・土	にぶい黄橙 にぶい黄橙	-	-	橋状把手剥落か		
277		SB4-P403		深鉢	A 1 -	在地	Vb	-	-	-	0.9	口：横位刻目隆帯区画文、橋状貼付文 胴：橋状貼付文	長・白粒・土	黄橙 にぶい黄橙	-	-			
278		SK406		深鉢	A 1 a	東北	V	-	-	-	1.3	口：横位沈線区画文 胴：RL縄文→U字 (J字もしくはクラंक) 状沈線区画文	橙粒・白粒・礫・土	にぶい黄橙 にぶい黄橙～ 褐灰	○	○	内面原体不明の圧痕あり		
279		SK406		鉢又は 浅鉢	A 4 -	在地	V	-	-	-	0.8	口：隆帯区画文、横位楕円形沈線区画文、区画内刺突文、 内面刺突文 胴：無文	石・長・角・白粒	にぶい黄橙 浅黄褐～にぶい黄橙	○	○			
280		SK406		鉢	A 3 a	在地	Vb	-	-	-	1.6	口：閉口部を有する横位刻目隆帯区画文 胴：L縄文か	長・角・橙粒・白粒・礫・土	褐灰～にぶい黄橙 黄橙	○	-			
281		SK406		深鉢	- - -	在地	Vb	-	-	-	1.6	頸：渦巻状刻目隆帯文 胴：横位沈線区画文	石・長・橙粒・土	浅黄橙 浅黄橙	-	-			
282		SK406		深鉢	- - -	在地	Vb	-	-	-	1.0	口：無文 胴：横位刻目隆帯区画文→横位曲流条線文	石・長・チャ・金雲	浅黄橙 浅黄橙	-	-			
283		SK406		深鉢	C - -	在地	Vb	-	-	-	1.3	頸：(横位沈線区画文) 胴：斜位→縦位条線文	橙粒・白粒・礫・土	にぶい黄橙 灰白	-	-			
284		SK406		深鉢	- - -	在地	Vb	-	-	-	1.2	曲流条線文 (6～7条一単位か)	橙粒・白粒・礫・土	灰黄褐 にぶい黄橙	○	-			
285		SK406		鉢	A 4 a	-	V ～Ⅵ	-	-	-	0.8	口：方形沈線区画文→区画外LR縄文	赤粒・白粒・礫	にぶい褐 灰褐	-	-	内面赤彩		
286		SK406		深鉢	A 3 c	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	1.0	橋状把手 胴：横位隆帯区画文→R燃赤文	白粒	にぶい黄橙 浅黄橙	-	-			

B区出土土器観察表(2)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等 (口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部) (橋状把手)	混入物	色調		炭化物		備考
	グリッド	遺構	層位					口径	底径	器高	高さ			上段：外面 下段：内面	外	内		
287		SK406		深鉢	D 1 -	在地	Ⅵ	-	-	-	0.7	口：無文 頸：横位刻目隆帯区画文 胴：花卉状刺突文	長・雲・橙粒・ 白粒・礫	灰褐 褐灰	-	-		橋状把手剥落か
288		SK406		深鉢	D 2 -	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	0.7	口：無文 頸：2条横位刻目隆沈線区画文、橋状貼付文 胴：刺突文	チャ・橙粒・白 粒	褐灰 にぶい橙	○	-		
289		SK406		鉢	A 2 -	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	0.7	口～頸：無文 胴：横位刻目隆帯区画文、刺突文	雲・橙粒・土	浅黄橙～にぶ い黄橙	○	-		
290		SK406		深鉢	- - -	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	0.8	胴：橋状貼付文	白粒・礫	橙 橙	-	-		
291		SK406		深鉢	- - -	在地	Ⅵ	-	-	-	1.3	胴：花卉状刺突文	長・白粒	にぶい黄橙 にぶい黄橙	○	○		
292		SK406		深鉢	- - -	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	1.1	胴：刺突文	チャ・白粒・土	浅黄橙	-	-		
293		SK406		深鉢	C 2 c	在地	Ⅵc	-	-	-	1.8	S字状橋状把手 口：無文 頸：横位刻目隆帯区画文 胴：縦位条線文	橙粒・白粒・ 礫・土	にぶい橙～黒 褐 黄橙	○	-	378と同一個体	
294		SK406		深鉢	D 1 c	在地	Ⅵb	-	-	-	1.2	橋状把手 口：無文 頸：横位刻目隆帯区画文 胴：花卉状刺突文	長・赤粒・白粒	明褐 明褐	○	○		
295		SK406		深鉢	D 1 c	在地	Ⅵb	-	-	-	1.2	橋状把手+環状貼付文、刺突文 口：無文 頸：横位刻目隆帯区画文	長・雲・金雲・ 白粒・礫	にぶい橙 にぶい橙	-	-		
296		SK406		深鉢	- - -	-	Ⅵ	-	-	-	1.1	胴：網目状燃糸文 (絡状体) (R燃糸)	長・赤粒・白 粒・礫・土	にぶい黄橙 橙	-	-		
297		SK406		深鉢	C 3 b	在地	Ⅶa	25.4	9.0	28.7 30.8	0.9	7単位山形突起 (正面2個一対と見れば6単位) 口：同心円文、横位沈線文、刺突文 胴：R細文→沈線文	石・長・チャ・ 白粒	灰黄褐～橙 灰黄褐～橙	○	○		
298		SK406		深鉢	- - -	在地	Ⅶa	-	-	-	1.1	胴：横位渦巻状沈線文、RL細文、下半無文	長・雲・金雲・ 白粒・礫	にぶい橙～褐 灰 浅黄橙	○	-		

B区出土土器観察表(3)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等		混入物	色調		炭化物		備考
	グリッド	遺構	層位					口径	底径	器高	高さ	(口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	上段：外面 下段：内面		外	内			
299	-	SK406		深鉢	C 2 b	在地	VⅦa	36.8	12.8	45.8 47.9	1.1	4単位山形突起 口：逆C字状沈線文、同心円文 頸：横位沈線区画文、3個一対の刺突文 (7単位) 胴：逆J字状沈線文＋懸垂文 (沈線) (7単位)、LR細文 底：敷物圧痕 (網状葉脈痕)	長・橙粒・白 粒・礫	にふい橙～黒 褐 にふい褐～黒 褐	○	○			
300		SK406		鉢	A 3 c	在地	Vb ～Ⅶa	28.6	7.7	14.6 20.8	0.6	4単位山形中空突起、単位間に刺突を入れた捻転状備状把手 胴：無文 底：敷物圧痕 (網代痕1・1・1か)	石・長・チャ・ 白粒	灰黄褐～橙 灰黄褐～橙	○	-			
301		SK406		深鉢	D 1 b	在地	Ⅵ	-	-	-	0.9	口：波状口縁の波頂部に刺突文、横位沈線文 頸：刻目隆帯懸垂文 胴：LR細文→横位刻目隆沈線区画文	橙粒・白粒・土 灰褐	褐灰 灰褐	○	○			
302		SK406		深鉢	- - -	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	0.6	胴：横位・逆U字・蛇行沈線文	白粒・礫	黒褐 褐灰	○	○			
303		SK406		深鉢	C 2 b	在地	Ⅶa	-	-	-	1.3	口：横位沈線文、刺突文 胴：LR細文→縦位沈線文 (区画文)	雲・白粒	にふい橙 にふい橙	○	-			
304		SK406		深鉢	- - b	在地	Ⅶ	-	-	-	2.0	波状口縁 口：波頂部内外面に円文	長・赤粒・白 粒・礫	にふい橙 浅黄橙	-	-			
305		SK406		深鉢	- - b	在地	Ⅶa	-	-	-	1.5	環状突起、透孔、刺突文 胴：隆沈線懸垂文	長・雲・金雲・ 赤粒・橙粒・白 粒・礫	にふい黄橙 にふい黄橙	○	-			
306		SK406		深鉢	- - b	在地	Ⅶa	-	-	-	-	中空突起	長・雲・白粒・ 礫	にふい橙 橙	○	-			
307		SK406		深鉢	D - -	在地	Ⅶa	-	-	-	1.1	頸～胴：渦巻状懸垂文 胴：LR細文	白粒・礫・土	浅黄橙～褐灰 橙	○	-			
308		SK406		深鉢	C 1 b	在地	Ⅶ	-	-	-	1.2	山形突起 口～頸：ワラビ手状懸垂文	長・雲・橙粒・ 白粒・礫	にふい黄橙 にふい黄橙	○	○			
309		SK406		深鉢	C 1 a	在地	Ⅶa	-	-	-	1.0	口：無文、内面貼付文 頸：横位沈線区画文	長・チャ・金 雲・礫	にふい黄橙 灰黄褐	-	-			
310		SK406		深鉢	- 3 b	在地	Ⅶa	-	-	-	1.1	波状口縁か 口：RL細文、横位沈線区画文 胴：RL細文→縦・斜位多条沈線文	白粒・礫	灰褐 灰褐	-	-			
311		SK406		深鉢か	- - -	-	-	-	-	-	1.2	環状貼付文、刻目隆沈線文	長・雲・橙粒・ 白粒・礫	にふい黄橙 にふい黄橙	-	-			
312		SK406		深鉢	D 1 a	-	-	-	-	-	0.8	口～頸：無文	雲・黒雲・橙 粒・白粒・礫	褐灰 灰黄褐・黒褐	○	○			

B区出土土器観察表(4)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)			文様等		混入物	色調 上段：外面 下段：内面	炭化物		備考
	グリップ	遺構	層位					口径	底径	器高 高さ	厚さ	(口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)			外	内	
313		SK406		深鉢	C 1 a	-	-	-	-	-	1.2	口～頸：無文	長・金雲・橙 粒・白粒・礫	浅黄橙～にぶ い黄橙 浅黄橙	○	-	
314		SK406		深鉢	C 1 a	-	VII	-	-	-	0.9	口：無文 頸：LR細文→横位沈線区画文	石・長・チャ・ 土	にぶい黄橙～ 褐灰 にぶい黄橙	-	-	
315		SK406		深鉢	D 1 a	-	-	30.3 復	-	-	1.4	口～胴：無文	雲・金雲・橙 粒・礫・土	にぶい橙～褐 灰 浅黄橙	-	-	316と同一個体
316		SK406		深鉢	D 1 a	-	-	-	-	-	1.3	口～頸：無文	金雲・橙粒・ 礫・土	橙 浅黄橙～褐灰	-	-	315と同一個体
317		SK406		深鉢	C 1 a	-	-	25.3 復	-	-	1.5	口～胴：無文	雲・橙粒・白 粒・礫	浅黄橙 浅黄橙	-	-	
318		SK406		深鉢	A 1 b	-	-	-	-	-	1.4	口～胴：無文	雲・橙粒・白 粒・礫	にぶい黄橙～ 灰黄褐 にぶい橙～灰 黄褐	○	-	
319		SK406		深鉢	A 2 a	-	-	-	-	-	1.3	口～頸：無文	長・雲・金雲・ 橙粒・白粒・ 礫・土	にぶい褐～褐 灰 にぶい黄橙～ 褐灰	-	-	
320		SK406		深鉢	- - -	-	-	-	-	-	0.7	胴：無文 底：敷物圧痕(網代裏1・1・1か)	雲・金雲・橙 粒・白粒・礫	にぶい黄橙 にぶい黄橙～ 黒褐	○	○	
321		SK406		鉢か	- - -	在地	VII	-	-	-	0.6	捻転状突起 口：沈線文、横位沈線文 胴：無文(ミガキ)	角・白粒・礫	にぶい褐 灰黄褐	○	-	
322		SK406		注口	- - -	在地	VI	-	-	-	-	口：S字状貼付文、環状貼付文	橙粒・白粒・礫	灰白～黒褐 灰白～黒褐	-	-	
323		SK406		蓋	- 2	在地	VI	-	-	-	0.8	袂部あり 体：刻目隆帯区画文	雲・橙粒・礫・ 土	にぶい橙～灰 褐 浅黄橙～にぶ い赤褐	○	○	324と同一個体

B区出土土器観察表(5)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等 (口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	混入物	色調 上段：外面 下段：内面	炭化物		備考
	グリップ	遺構	層位					口径	底径	器高	高さ				外	内	
324		SK406		蓋	- 2	在地	Ⅵ	-	-	-	0.9	挾部あり 体：刻目隆帯区画文	雲・橙粒・白 粒・礫・土	にぶい橙～褐 灰 にぶい橙～褐	○		323と同一個体
325		SK406		蓋	- -	在地	Ⅵ	-	-	-	1.3	体：刻目隆帯区画文 (S字状か)	石・長・角・土 灰黄～浅黄	橙～黄橙 灰黄～浅黄	-	○	
326		SK406		蓋	- 2	在地	Ⅵ	-	-	-	0.7	挾部あり 体：2条刻目隆沈線文	長・白粒・礫・ 土	橙	-	-	
327		SK406		蓋	- -	在地	Ⅵ	-	-	-	0.9	(橋状把手) 体：刻目隆帯文、刺突文	白粒・礫・土	浅黄橙 浅黄橙	-	○	橋状把手剥落か
328	15J21	SK410	Ⅲ	深鉢	- - -	関中	Ⅶb	-	-	-	1.0	胴：RL細文→沈線文	長・雲・角・白 粒・礫	にぶい黄橙 にぶい橙	○	-	
329		SK419		深鉢	D - -	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	1.3	頸：横位刻目隆帯区画文 胴：花弁状刺突文 (横ハ字状沈線文の影響残す)	長・雲・橙粒・ 白粒・礫・土	明褐 にぶい黄褐	-	○	
330		SK419		深鉢	D - -	在地	Ⅵ	-	-	-	1.1	頸：横位刻目隆帯区画文 胴：花弁状刺突文	金雲・橙粒・白 粒・礫・土	褐灰 橙	-	-	
331		SK419		深鉢か	- - -	-	-	-	-	-	1.0	胴：沈線区画文、RL細文 (R細文か)、ミガキ	黒雲・白粒・ 礫・土	明赤褐 黒褐	-	-	
332		SK419		深鉢か	- 3 -	-	-	-	-	-	1.2	口：ミガキ	雲・金雲・黒 雲・橙粒・白 粒・礫	黒褐 浅黄橙	-	-	
333		SK419		深鉢	- 3 -	在地	Vb	-	-	-	0.9	口：無文、内面蓋受状隆帯	金雲・橙粒・白 粒・礫・土	にぶい黄褐 灰黄褐	○	○	
334		SK419		蓋	- 2	在地	Ⅵ	-	-	-	0.7	挾部あり 体：沈線区画文、区画内刺突文	長・橙粒・白 粒・礫・土	明褐 暗褐	-	-	
335		P407		浅鉢	A 3 b	-	-	-	-	-	0.8	波状口縁 口：無文	長・黒雲・橙 粒・礫	浅黄橙～灰白 灰白	-	-	
336		P413		深鉢	D 1 c	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	0.7	橋状把手 口：内面蓋受状隆帯	橙粒・白粒・礫	にぶい橙 にぶい黄橙	○	-	
337		P420		深鉢	D 1 c	在地	Vb ～Ⅵa	-	-	-	0.8	橋状把手 頸：横位刻目隆帯区画文 胴：縦位条線文	金雲・橙粒・白 粒・礫	灰黄褐 にぶい黄橙	○	○	
338		P422		蓋	- -	在地	Ⅵ	-	-	-	1.3	体：隆帯区画文、刺突文	石・雲・角・橙 粒・土	にぶい黄橙 灰黄	-	-	
339		P423		深鉢	- - -	在地	Vb	-	-	-	1.6	胴：(格子状)斜位条線文	雲・橙粒・土	浅黄橙 浅黄橙	○	○	

B区出土土器観察表(6)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等		混入物	色調		炭化物		備考
	グリップ	遺構	層位					口径	底径	器高	高さ	(口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	上段：外面 下段：内面		外	内			
340		P424		深鉢	- 1 -	在地	Vb	-	-	-	0.6	口：無文、内面蓋受状隆帯	雲・橙粒・白粒・礫	灰黄褐 灰黄褐	○	○			
341		P430		深鉢	- 2 -	-	-	-	-	-	1.0	口：無文	角・橙粒・白粒・礫・土	にぶい黄橙 灰黄褐	○	-	口唇部：炭化物		
342		P437		深鉢	- - -	-	-	-	6.4	-	1.4		長・角・黒雲・白粒・礫	にぶい橙 灰褐	-	-			
343		P440		深鉢	A 3 a	在地	Vb	-	-	-	1.6	口：横位刻目隆帯文	角・橙粒・白粒・礫・土	明赤褐 橙	-	-			
344		P440		深鉢	D 1 c	在地	Vlb～c	-	-	-	0.8	橋状把手 (S字状刻目隆帯文) 口：無文、内面蓋受状隆帯 頸：横位刻目隆帯区画文 胴：花弁状刺突文	橙粒・白粒・礫・土	黒褐～灰黄褐 灰黄褐～褐灰	○	-			
345		P440		深鉢	D 1 c	在地	Vlb～c	-	-	-	0.6	(橋状把手) 口：無文、内面蓋受状隆帯 頸：横位刻目隆帯区画文	雲・赤粒・白粒・礫・土	にぶい黄褐色 灰褐～にぶい橙	○	-	橋状把手剥落か		
346		P440		深鉢	A 2 b	-	Ⅶ	-	-	-	0.9	胴：同心円状条線文	角・白粒・礫・土	浅黄橙～黒褐 にぶい黄橙	○	-			
347		P440		深鉢	- - -	-	-	-	-	-	1.0	胴：L燕条 底：駝物瓦痕 (網状葉脈痕)	赤粒・白粒・礫・土	明赤褐 橙	○	-			
348		P440		蓋	- 2	在地	Ⅵ	-	-	-	0.9	袂部あり 体：花弁状刺突文	白粒	浅黄橙 灰白～浅黄橙	○	○	補修孔あり		
349		P476		深鉢	A 2 b	-	-	-	-	-	0.9	2個一対の山形突起 口～胴：無文	石・長・チャ・金雲・白粒	橙 橙～灰褐	○	○			
350		P491		深鉢か	- - -	-	-	-	-	-	1.0	胴：横位隆帯文	白粒・礫・土	橙 橙	-	-	363と同一個体か		
351		P495		深鉢	- - -	-	-	-	-	-	1.0	底：駝物瓦痕 (平行葉脈痕)	長・白粒・礫・土	浅黄橙 橙	-	○			
352		P497		深鉢	D 1 a	-	-	-	-	-	1.5	口～胴：無文	長・金雲・橙粒・白粒・礫・土	橙～灰褐～黒褐 橙～黒褐	○	-			
353		P511		深鉢	- - -	在地	Ⅶ	-	-	-	1.2	胴：(米字状) 沈線文、内面条痕様の調整	長・金雲・橙粒・白粒・礫	にぶい黄褐 にぶい黄橙	○	-			
354 16H25		-	Ⅲ	深鉢	A 3 a	在地	Ⅳ	-	-	-	0.9	口：横線文＋刺突列	石・長・金雲・橙粒・白粒・礫	灰黄橙 灰黄橙	○	-			

B区出土土器観察表(7)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等		混入物	色調 上段：外面 下段：内面	炭化物		備考
	グリップ	遺構	層位					口径	底径	器高 高さ	厚さ	(口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)						
355	16I6	-		Ⅱ	深鉢	- - -	東北	V	-	-	-	1.0	胴：U字状沈線区画文→L縄文	角・橙粒・白粒・礫・土	にぶい黄橙～黒褐 黒褐	-	-	
356	16H15	-		Ⅲ	深鉢	- - -	在地	Vb	-	-	-	1.1	口：無文 頸：横位刻目隆帯区画文 胴：RL縄文か	橙粒・礫・土	灰白 灰白	-	-	
357	17H	-		Ⅱ	鉢	A 3 -	在地	Vb ～Ⅵa	-	-	-	0.8	口：横位沈線文、縦位刻目隆帯文 胴：無文	角・橙粒・白粒・礫	浅黄橙～褐灰 浅黄橙～にぶい黄橙	○	-	
358	16I6	-		Ⅱ	深鉢	C 3 -	在地	Vb ～Ⅵa	-	-	-	1.0	口：縞状貼付文、隆帯懸垂文、透孔 頸：横位刻目隆帯区画文 胴：RL縄文か	橙粒・白粒・礫	暗赤灰 明赤褐	○	-	
359	15I25	-		Ⅲ	深鉢	D 1 c	在地	Vb ～Ⅵa	-	-	-	-	橋状把手 口：内面蓋受状隆帯 胴：縞状貼付文	橙粒・白粒・礫・土	浅黄橙～黄橙 浅黄橙	-	-	
360	15I17	-		Ⅲ	深鉢	- - -	在地	Vb ～Ⅵa	-	-	-	0.9	口：横位刻目隆帯区画文、内面蓋受状隆帯	雲・橙粒・白粒・礫	にぶい褐 橙	○	-	
361	16H20	-		-	深鉢	D 1 c	在地	Vb ～Ⅵa	-	-	-	0.7	橋状把手 胴：(横位刻目隆帯区画文)	白粒・礫	にぶい橙 にぶい橙	○	○	
362	16I11	-		Ⅱ	深鉢	D 1 -	在地	Ⅵa～b	-	-	-	0.7	口：無文 頸：横位刻目隆帯区画文 胴：花卉状刺突文	雲・橙粒・白粒・礫・土	にぶい黄橙～褐灰 にぶい黄橙	○	○	
363	16I6	-		Ⅱ	深鉢か	- 3 -	-	-	-	-	-	0.9	口：横位隆帯文	橙粒・白粒・礫・土	明赤褐 にぶい橙	-	-	350と同一個体か
364	16I21	-		Ⅲ	鉢か	- - -	-	-	-	-	-	0.9	胴：横位微隆帯文、沈線文	橙粒・白粒・礫	橙 にぶい橙	-	-	外面赤彩
365	17H4	-		Ⅱ	深鉢	- - -	-	-	-	-	-	0.8	胴：横位刻目隆帯区画文、横位沈線文、短冊状の縦位多条沈線文	金雲・白粒・礫	にぶい褐 にぶい黄橙～褐灰	-	-	
366	16I11	-		Ⅱ	蓋	A -	在地	Ⅵ	-	-	-	-	体：縞状貼付文	角・橙粒・白粒・礫・土	橙 灰黄褐	-	-	
367	16H25	-		-	蓋	B 2	在地	Ⅵ	-	-	-	0.7	挾部あり (橋状把手) 体：刻目隆帯区画文、刺突文	橙粒・白粒・礫	灰黄褐 灰黄褐	-	-	橋状把手剥落か

B 区出土土器観察表 (8)

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等 (口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	混入物	色調		炭化物		備考
	グリッド	遺構	層位					口径	底径	器高 高さ	厚さ			上段：外面 下段：内面	外	内		
368	15I24	-	Ⅲ	蓋	-	在地	Ⅵ	-	-	-	0.8	体：渦巻状微隆帯文、内外面ミガキ	雲・白粒・礫	灰黄褐～黒褐 にぶい褐～褐	○	○		

B 区出土土製品観察表

報告 番号	出土位置			器種	時期	法量 (cm)			文様等	混入物	色調		炭化物	備考
	グリップド	遺構	層位			長さ	幅	厚			上段：表面 下段：裏面	表	裏	
369	16H15	-	Ⅲ	土偶	-	(4.0)	(5.5)	(2.2)	腕部：先端刺突文 乳房部：貼付文	角・金雲・橙粒・ 白粒・礫・土	にぶい橙～灰 黄褐	-	-	右腕～胸部
370		SK406		円板状土製品	Ⅵ	7.6	7.2	1.5	花弁状刺突文	長・橙粒・白粒・ 土	灰黄橙	○	-	土器片再利用
371		SK406		円板状土製品	-	5.6	5.5	1.4	R 撫糸文	石・橙粒・白粒・ 土	灰褐	○	-	土器片再利用
372		SK406		円板状土製品	-	3.2	3.0	0.9	RI 細文か	赤粒・白粒・礫	褐灰	○	-	土器片再利用
373		P440		円板状土製品	-	4.2	5.0	1.0	L 細文か	長・橙粒・白粒・ 礫	にぶい橙 灰褐	-	○	製作途中か
374		SK419		三角形土製品	-	5.8	5.7	0.9	条線文、側面研磨	長・橙粒・白粒・ 礫 白粒・礫・土	褐灰～にぶい 橙 黒褐	-	-	
375		SK406		不明土製品	-	(3.5)	(2.1)	(2.0)	刺突文	土	にぶい橙～灰	-	-	土偶左腕部か
376		SK406		不明土製品	-	(1.4)	(1.8)	(1.3)	環状突起	長・白粒・礫	浅黄橙	-	-	

確認調査出土土器観察表

報告 番号	出土位置			器種	器形	系統	時期	法量 (cm)				文様等 (口：口縁部 口唇：口唇部 頸：頸部 胴：胴部 底：底部 体：体部)	混入物	色調 上段：外面 下段：内面		炭化物		備考
	グリップド	遺構	層位					口径	底径	器高 高さ	厚さ			外	内			
377	79Tr	-	-	深鉢	C 1 -	在地	Vb ～Ⅵ	-	-	-	1.4	口：無文 胴：横位沈線区画文、格子状沈線文→縦位沈線文	橙粒・土	にぶい黄橙 黄橙		○	-	
378	85Tr	-	-	深鉢	C 2 c	在地	Ⅵc	-	-	-	1.4	口：無文 頸：横位刻目隆帯区画文 胴：縦位条線文	橙粒・土	浅黄橙～黄橙 浅黄橙		○	-	293と同一個体

A 区出土石鏃観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
154	13F17			IV	A1	頁岩	390	155	0.40	1.55	右脚部欠損	
155		P152			A1	無斑晶ガラス質安山岩	355	185	0.80	4.34	完形	
156	9F11			II	A1	凝灰岩	185	125	0.53	0.64		
157					A1	無斑晶ガラス質安山岩	215	163	0.30	0.80	完形	表面採集
158	9F16			II	A1	流紋岩	245	240	0.70	3.11	先端部欠損	
159	9E15			I	A3	碧玉	158	159	0.46	0.90	完形	
160	5F22			II	B1	頁岩	250	138	0.39	0.97	完形	
161	15D10	SD327			C	頁岩	280	215	0.55	2.84	未成品	
162	7F16			II b	C	頁岩	340	241	0.85	7.40	未成品	

A 区出土尖頭器観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	石材	法量				遺存状態	備考
						長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
163		P164			黒曜石	346	231	0.84	3.67	上半部欠損	

A 区出土石錐観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
164	9F11			II	A	チャート	227	220	0.87	3.53	完形	
165	4F16			II	B	頁岩	550	401	1.51	22.65	完形	
166	14E11			II	B	頁岩	566	365	1.30	20.63	完形	

A 区出土板状石器観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
167	2F18			II	B	石英含有輝石安山岩	724	571	1.45	97.10	完形	
168	15D10	SD327			B	石英含有輝石安山岩	522	444	1.14	33.40	完形	
169	8F16			I	B	安山岩	541	485	0.80	26.30	完形	

A 区出土両極石器観察表 (1)

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	
170	13E2			III	A	安山岩	351	346	0.92	12.40	
171	7E1			II	A	珪質頁岩	251	160	0.62	3.00	
172	10E15			II	A	流紋岩	308	107	0.79	2.80	

A区出土両極石器観察表（2）

報告No	グリップド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	
173	6F25			II	A	無斑晶ガラス質安山岩	6.26	6.73	2.54	106.40	
174	14D25			I	B	頁岩	4.92	5.90	2.00	54.60	打製石斧の基部破片か
175	3F16			III	B	安山岩	4.81	5.58	1.49	38.30	
176	15D19	SD327			B	凝灰岩	5.92	4.73	2.45	67.30	
177	10F11			III	B	流紋岩	2.91	2.42	0.71	6.80	
178	15D10	SD327			B	安山岩	2.96	3.22	1.25	13.70	

A区出土打製石斧観察表

報告No	グリップド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
179	15D19	SD327			A	安山岩	7.62	5.45	1.96	73.30	完形	
180	15D10	SD327			A	頁岩	8.43	4.13	1.80	60.24	刃部欠損	被熱
181	9F11			III	A	石英含有輝石安山岩	9.22	6.40	1.50	108.24	基部欠損	
182	12E23			II	A	緑色片岩	5.66	4.32	1.70	53.87	完形	基部欠損後、再加工か
183	8F1			II	A	頁岩	6.80	5.86	2.30	84.72	基部欠損	被熱
184	7E20			II	B	頁岩	12.08	4.60	1.62	109.89	完形	
185	13E7			II	C	結晶片岩	8.67	8.60	2.05	138.72	完形	
186	8F1			I	C	結晶片岩	8.41	6.38	2.08	104.40	刃部欠損	

A区出土磨製石斧観察表

報告No	グリップド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
187	14E2			I	A1	安山岩	9.31	4.01	2.32	134.00	略完形	
188	11E9			II	A1	安山岩	14.21	5.61	2.42	347.40	完形	被熱
189	9F16			II	A	蛇紋岩類	9.62	5.25	1.75	158.90	刃部欠損	
190	5F11			I	A	蛇紋岩類	7.27	4.38	1.31	65.80	完形	
191	8F16			I	A	蛇紋岩類	6.48	3.80	1.25	48.50	刃部欠損	
192	14G7			II	A	輝緑岩	9.19	4.71	2.55	219.90	刃部欠損	磨石類に転用
193	13E22			III	A1	凝灰岩	6.91	4.63	2.50	136.30	基部欠損	
194	14E21			II	A	蛇紋岩類	7.38	4.20	2.51	128.60	基部・刃部欠損	
195	8F21			II	B	緑色片岩	3.06	1.84	0.64	6.70	刃部欠損	

A 区出土不定形石器観察表

報告No	グリップ	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	
196	7F11			Ⅲ	I A	頁岩	9.08	4.30	1.64	8243	
197	7F16			Ⅲ	I A	頁岩	7.68	6.01	2.04	8592	
198	6F11			Ⅱ	I A	チャート	3.86	3.03	1.00	1067	
199	5F2			Ⅱ	Ⅱ A	凝灰岩	4.02	4.74	0.61	1232	
200		P213			Ⅱ A	安山岩	3.69	4.62	1.93	3177	
201	14E2			Ⅱ	I B	流紋岩	5.88	4.23	1.27	31.50	
202	5F6			Ⅱ	I C	凝灰岩	3.79	3.05	0.68	5.84	
203		P244			I C	頁岩	4.10	4.00	1.35	17.49	石鏃か
204	15D9	SD327			I C	頁岩	3.60	2.94	0.73	5.98	石鏃か
205	15D10	SD327			Ⅳ C	安山岩	4.71	6.12	1.94	33.94	
206	4E11			Ⅱ	Ⅳ C	無斑晶ガラス質安山岩	8.10	4.15	2.80	69.89	石鏃か
207	7F16			Ⅱ	I D	安山岩	6.89	4.82	1.46	38.97	
208	15D14	SD327			I F	頁岩	5.53	3.17	1.22	20.31	
209	4F1			Ⅱ	I G	頁岩	5.63	3.99	1.39	29.56	
210	6F1			Ⅱ	Ⅳ G	安山岩	8.60	5.35	1.96	105.38	

A 区出土石核観察表

報告No	グリップ	遺構	取上No	層位	石材	法量				備考
						長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	
211	10F6			Ⅱ	流紋岩	7.96	8.34	4.26	273.96	
212	8F6			Ⅱ	頁岩	4.82	5.11	7.18	209.06	
213	15D15	SD327			安山岩	6.33	8.26	2.18	99.57	
214		P89	3		頁岩	7.38	6.40	4.89	308.48	

A 区出土礫器観察表

報告No	グリップ	遺構	取上No	層位	石材	法量				素材	備考
						長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
215	8F1			Ⅱ	安山岩	8.85	11.20	3.80	414.74	礫	
216	5F2			Ⅱ	安山岩	7.00	8.55	3.25	238.62	剥片	

A 区出土石錘観察表 (1)

報告No	グリップ	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
217	7F21			I	A1	砂岩	3.04	2.97	1.44	17.80	完形	
218	11E23			Ⅲ	A1	変斑レイ岩	3.28	3.18	1.22	23.02	完形	

A区出土石錘観察表（2）

報告No	グリップ	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
219	15E1	SD327			A1	流紋岩	3.95	2.84	0.83	11.81	完形	
220	10F1			II	A1	安山岩	3.74	3.02	1.06	22.02	完形	
221	11E23			II	A1	砂岩	4.07	3.38	1.18	25.54	完形	
222	15D10	SD327			A1	安山岩	4.18	3.45	1.13	23.82	完形	
223	13E17			III	A1	砂岩	4.13	3.89	1.46	34.73	完形	
224	8F1			II	A1	安山岩	4.58	3.89	1.08	20.55	完形	
225	6F11			II	A1	安山岩	4.67	3.96	0.87	21.36	完形	
226	15D19	SD327			A1	安山岩	4.62	4.18	1.36	41.76	完形	
227	14G7			II	A1	安山岩	4.57	4.37	1.44	47.81	完形	表裏面に磨痕もしくは研磨痕
228	11E9			II	A1	砂岩	5.40	3.63	1.41	39.88	完形	被熱
229	11E4			II	A1	多孔質安山岩	5.40	4.86	1.56	57.42	完形	
230		P190			A1	砂岩	5.74	3.05	1.53	47.61	完形	被熱
231	15E1	SD327			A1	砂岩	5.95	3.85	1.78	60.00	完形	
232	10E15			II	A1	結晶片岩	7.37	4.05	1.71	73.07	完形	
233	12E12			III	A1	多孔質安山岩	5.96	4.98	2.44	105.66	完形	上下両端の挟りが浅い
234	8F16			I	A1	安山岩	8.11	5.06	2.37	127.92	完形	
235	9E20			II	A1	安山岩	5.92	6.88	1.47	90.36	完形	上下両端の挟りが浅い
236	15D5	SD327			A1	安山岩	2.95	5.22	1.09	18.99	完形	
237	8F1			II	A1	多孔質安山岩	7.70	10.65	1.66	216.31	完形	
238	9E20			II	A2	砂岩	8.72	6.27	2.22	174.25	完形	
239	12E22			II	B	砂岩	4.37	3.32	1.32	27.41	完形	
240	11E23			III	B	閃緑岩	3.69	2.29	1.46	19.30	完形	

A区出土磨石類観察表（1）

報告No	グリップ	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
241	11E4			II	B類	流紋岩	11.04	8.62	5.53	727.28	完形	被熱
242		P336			B類	多孔質安山岩	9.40	5.82	4.20	334.03	完形	凹痕付近を中心に黒色付着物
243	14E6			III	B類	安山岩	11.60	8.62	4.95	759.25	完形	
244	12E17			II	D類	流紋岩	10.25	6.90	5.73	592.99	完形	
245	9F16			II	D類	砂岩	13.75	7.82	4.10	702.47	完形	被熱
246	8F1			II	D類	多孔質安山岩	8.09	6.52	5.48	388.69	完形	被熱
247	14E21			II	E類	輝緑岩	9.01	5.90	2.52	203.71	完形	
248		P147			E類	多孔質安山岩	7.83	6.35	4.53	319.67	完形	
249	7E20			II	E類	閃緑岩	9.97	7.18	4.34	489.85	完形	被熱

A 区出土磨石類観察表（2）

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
250	8F6			I	E類	安山岩	15.00	5.80	3.39	505.03	完形	被熱
251	13E6			III	F類	多孔質安山岩	12.69	5.66	3.23	303.03	完形	被熱
252	7E15			II	F類	花崗閃緑岩	7.85	7.08	5.05	404.32	完形	
253	8F16			I	F類	閃緑岩	9.36	6.20	3.38	271.89	完形	
254	7F6			I	G類	安山岩	8.55	4.26	4.37	173.80	完形	打製石斧か
255	13E2			III	G類	緑色片岩	4.71	4.65	3.80	153.50	完形	多面体緑石
256	7F21			II	G類	多孔質安山岩	6.77	6.03	3.24	152.18	完形	
257	3F7			I	H類	閃緑岩	17.30	6.04	7.00	1114.11	完形	特殊磨石か
258	15E6	SD327			H類	凝灰岩	10.37	6.65	4.73	463.68	完形	石製品の未成品か、褐色付着物有り

A 区出土石皿観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
259	15D5	SD327			A1	多孔質安山岩	16.25	17.50	6.40	1379.96	1/2欠損	使用面は敲打後磨り
260	10E1			II	A1	多孔質安山岩	7.30	7.55	5.80	393.25	破片	被熱

A 区出土台石観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
261	11E9			III	B	多孔質安山岩	10.70	6.00	9.85	761.66	破片	被熱
262	10E20			III	A	安山岩	15.80	11.41	7.79	1079.65	破片	

A 区出土砥石観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
263	7F16			II	B	礫岩	24.90	17.00	12.30	6600.00	完形	
264		P162	2		B	砂岩	18.05	15.00	8.70	3263.23	1/2欠損	被熱
265	11E23			II	B	砂岩	11.75	8.85	5.40	709.87	完形	被熱

A 区出土石棒観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	石材	法量				遺存状態	備考
						長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
266	10E25			III	緑泥片岩	14.30	3.10	2.90	251.80	上下両端欠損	

A 区出土石製品観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	石材	法量				遺存状態	備考
						長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
267	11E24			II	ヒスイ	410	125	1.30	9.50	完形	

A 区出土不明石器観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	石材	法量				備考
						長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	
268	8F1			I	凝灰岩	13.00	5.15	6.10	423.74	被熱
269		P194			流紋岩	267	2.33	0.61	2.26	異形石器か
270	6F11			I	鉄石英 (赤)	2.75	1.32	0.47	1.24	旧石器時代のナイフ形石器か

B 区出土石鏃観察表 (1)

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
379		SK406			A1	鉄石英 (赤)	2.70	1.70	0.83	1.76	完形	先端部被熱
380		SK406			A1	流紋岩	1.22	1.25	0.25	0.25	完形	
381		SK406			A1	黒曜石	2.18	1.49	0.39	0.75	右脚部欠損	和田峠産黒曜石？
382		SK406			A1	流紋岩	1.92	0.94	0.30	0.34	右脚部欠損	
383		SK406			A1	流紋岩	1.40	1.10	0.31	0.31	先端部欠損	
384		SK406			A1	珩化岩	1.50	1.00	0.33	0.33	先端部欠損	被熱、先端部は御撃剥離か
385		SK406			A1	流紋岩	1.20	1.23	0.20	0.21	先端部・左脚部欠損	
386		SK406			A1	流紋岩	1.85	1.42	0.41	0.67	先端部・右脚部欠損	
387		SK406			A2	チャート	2.60	1.98	0.40	1.55	完形	
388		SK406			A2	頁岩	3.78	2.00	0.40	2.77	完形	
389		SK406			A2	頁岩	2.30	1.50	0.50	1.64	完形	
390		SK406			A2	鉄石英 (赤)	1.90	1.18	0.31	0.65	完形	
391		SK406			A2	珩化岩	1.40	1.19	0.40	0.39	完形	
392	16H15			III	A3	凝灰岩	1.66	1.61	0.53	0.90	完形	
393	16H20	SD523			A3	チャート	1.80	1.62	0.55	1.30	完形	
394		SK406			A3	珩化岩	1.94	1.30	0.40	0.76	先端部欠損	先端部は御撃剥離か
395		SK406			B1	流紋岩	1.70	1.36	0.45	0.52	先端部欠損	先端部は御撃剥離か
396		SK419			B2	チャート	1.72	1.08	0.30	0.51	完形	表裏面に付着物あり
397		SK406			B2	チャート	1.74	1.29	0.35	0.68	略完形	
398		SK406			B2	流紋岩	1.98	1.15	0.32	0.25	先端部欠損	
399		SK406			C	流紋岩	2.72	1.38	0.46	1.00	先端部欠損	
400		SK419			C	流紋岩	2.25	1.43	0.60	1.32	略完形	
401	16I1			II	C	チャート	1.68	1.47	0.37	1.00	先端部欠損	

B 区出土石鏃観察表 (2)

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
402		SK406			D	珪化岩	1.40	1.10	0.35	0.30	基部欠損	
403		SK406			D	流紋岩	1.40	1.20	0.30	0.20	先端部・右脚部欠損	
404		SK406			D	チャート	1.43	1.50	0.40	0.88	先端部欠損	

B 区出土石錐観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
405		SK406			A	チャート	2.90	1.25	0.49	0.94	基部欠損	
406		SK406			B	安山岩	3.31	2.23	0.58	2.49	完形	
407		SK406			B	珪化岩	2.14	1.84	0.82	3.04	完形	

B 区出土板状石器観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
408		SK406	753		B	石英含有輝石安山岩	6.39	5.02	1.00	3410	完形	
409		SK406	700		C	安山岩	5.86	3.84	1.42	4890	完形	

B 区出土両極石器観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	
410		SK406	108		A	鉄石英 (赤)	3.24	3.29	0.88	8.20	
411		SK406	184		A	無斑晶ガラス質安山岩	3.02	2.56	1.01	7.40	
412		P494			A	頁岩	3.33	1.04	0.88	2.70	
413	15J22			Ⅲ	A	安山岩	2.67	3.98	0.80	7.20	
414		SK435			A	鉄石英 (黄)	5.76	3.71	1.30	25.10	
415		SK406			A	安山岩	4.04	2.48	1.23	11.60	
416		SK406			B	無斑晶ガラス質安山岩	3.03	2.86	0.98	8.90	
417		SK406	76		B	流紋岩	2.63	2.00	0.73	4.10	

B 区出土打製石斧観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
418	16H20	SD523			A	緑色片岩	8.57	5.30	2.08	107.04	刃部欠損	
419	15I23				A	頁岩	10.40	4.89	1.73	95.62	基部欠損	
420	16I16			Ⅲ	D	結晶片岩	7.47	4.54	3.09	118.94	刃部欠損	

B 区出土磨製石斧観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
421	16115			Ⅲ	A1	安山岩	11.41	5.31	2.70	279.60	略完形	
422	16115			Ⅲ	A2	変斑レイ岩	9.20	7.26	3.18	343.80	基部欠損	

B 区出土不定形石器観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	
423		P440			Ⅱ A	無斑晶ガラス質安山岩	3.89	4.81	1.76	29.79	
424	16H15			Ⅲ	Ⅳ A	流紋岩	3.79	3.66	1.18	13.73	
425	16111			Ⅲ	Ⅰ E	流紋岩	5.65	3.75	1.16	23.84	
426		SK406			Ⅱ E	流紋岩	3.89	6.13	1.11	17.95	
427		P472			Ⅱ E	流紋岩	4.74	5.31	1.07	20.99	
428		SK406			Ⅱ E	流紋岩	4.16	4.69	1.30	17.04	
429	1616			Ⅱ	Ⅱ F	安山岩	4.86	7.52	1.29	40.13	
430		P484			Ⅱ F	流紋岩	4.65	5.34	0.97	16.44	

B 区出土石核観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	石材	法量				備考
						長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	
431	16118			Ⅲ	凝灰岩	4.62	6.27	5.09	126.17	
432	1613				無斑晶ガラス質安山岩	5.50	5.04	3.29	127.47	

B 区出土石錘観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
433	1616			Ⅱ	A1	結晶片岩	4.20	3.93	1.99	30.74	完形	
434		SK480			A2	安山岩	4.08	3.29	1.50	27.64	完形	
435	1616			Ⅱ	A2	結晶片岩	3.71	3.30	0.65	10.68	完形	剥片素材

B 区出土磨石類観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
436	16115			Ⅲ	B類	砂岩	11.02	10.22	5.25	826.43	略完形	被熱
437		SK406			E類	多孔質安山岩	11.20	6.50	4.30	444.27		

B 区出土石皿観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
438	16H20	SD523			A1	多孔質安山岩	1520	9.95	6.25	868.88		
439	16I7			II	B	多孔質安山岩	1340	12.85	4.20	1131.97		

B 区出土台石観察表

報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
440	16I15			II	A	砂岩	1300	11.04	4.72	779.36	1/2欠損	

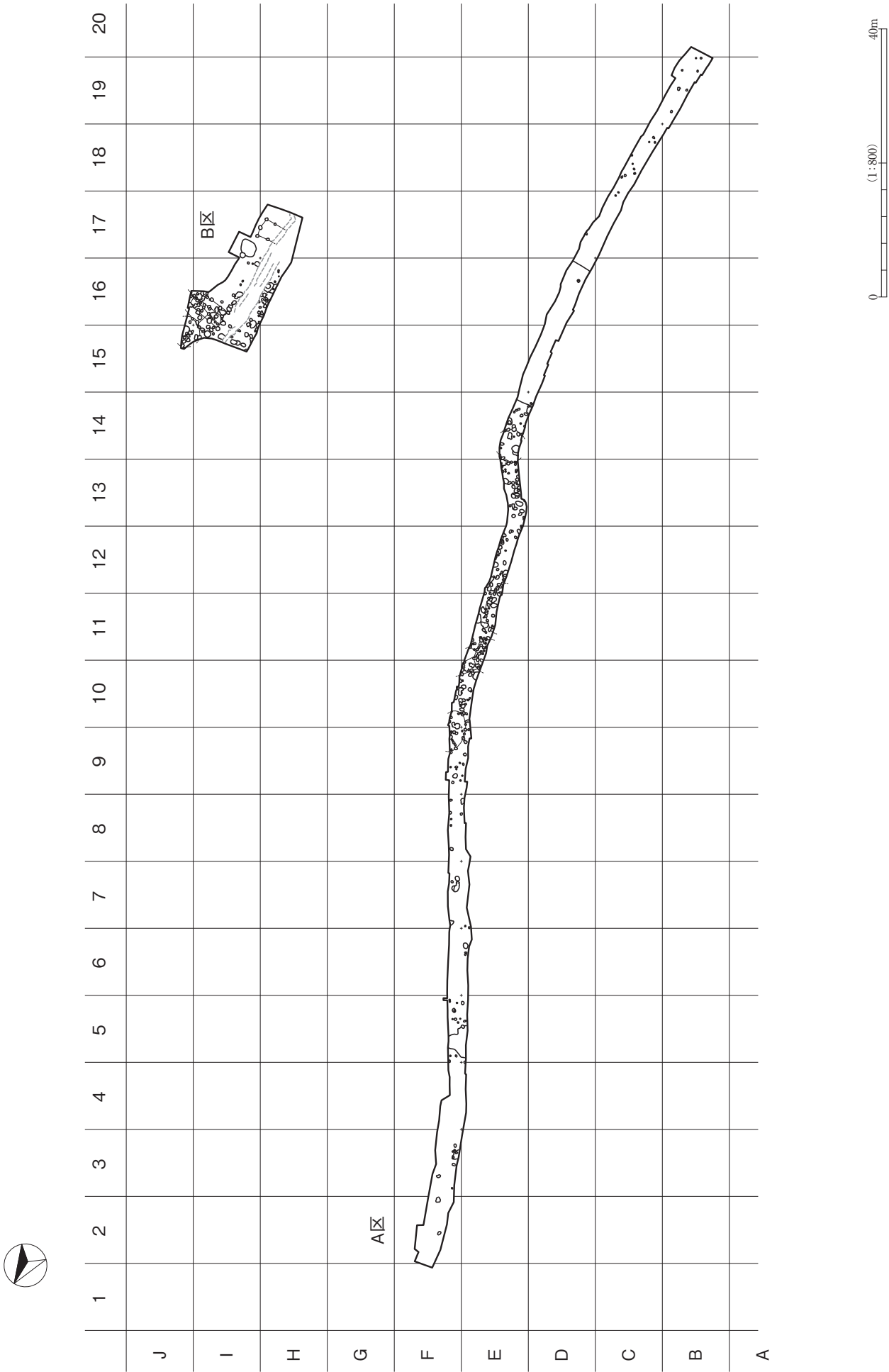
B 区出土砥石観察表

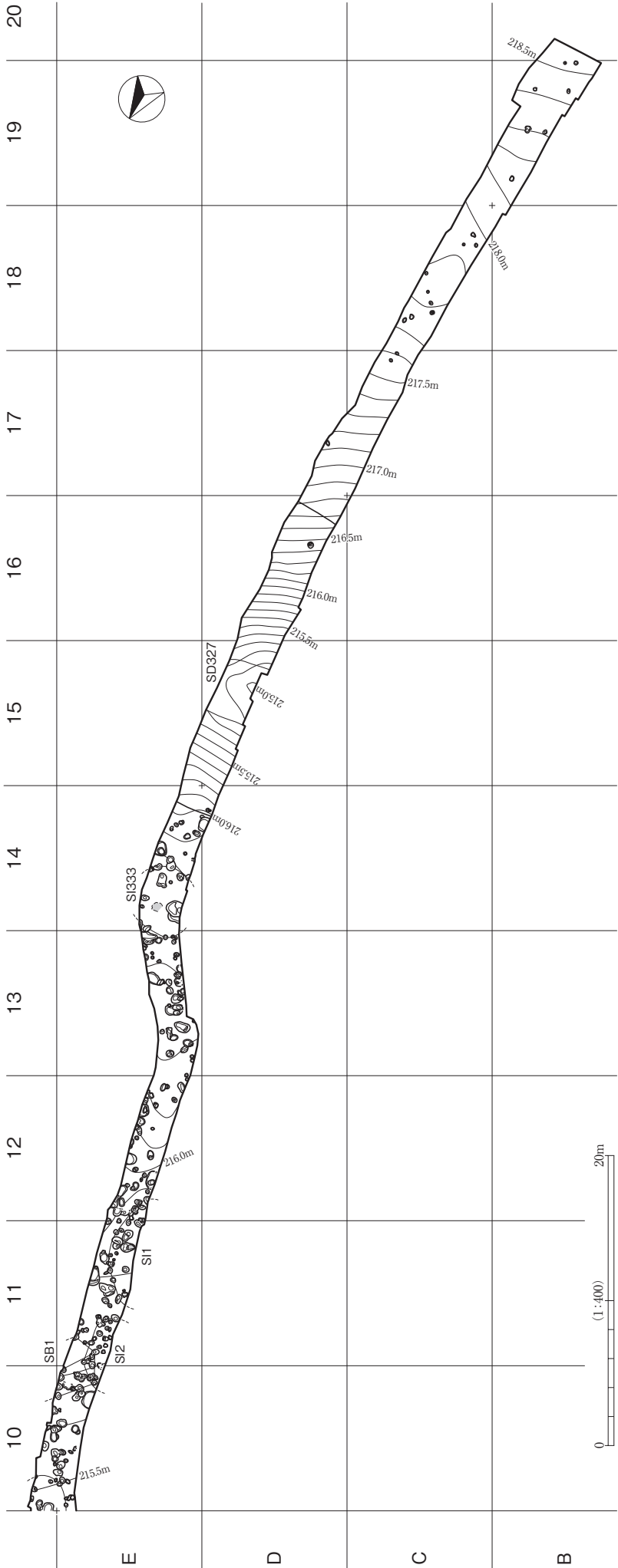
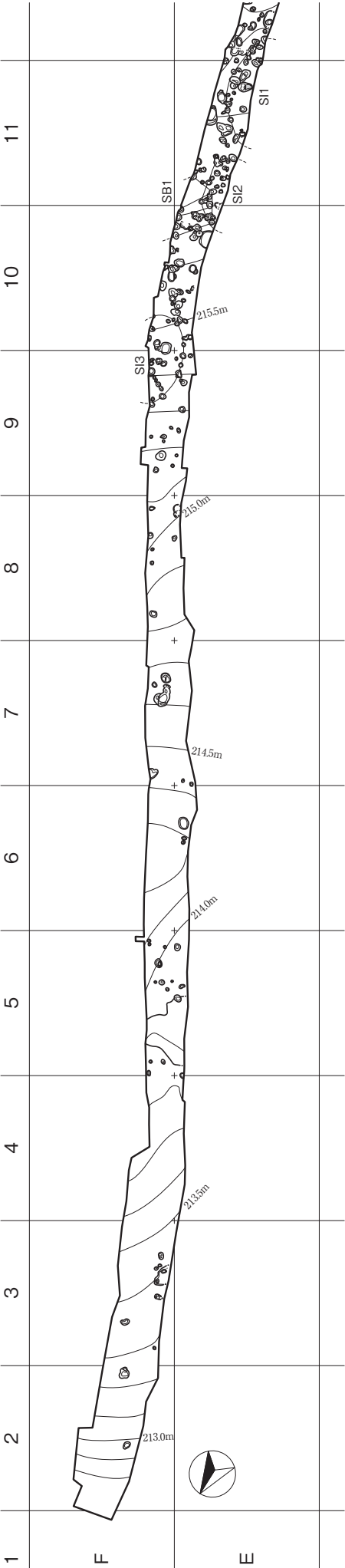
報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	分類	石材	法量				遺存状態	備考
							長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
441		P436	19		A	砂岩	1200	13.25	6.55	1300.49		
442		SK406	941		B	安山岩	778	4.49	1.93	100.98	上下両端欠損	

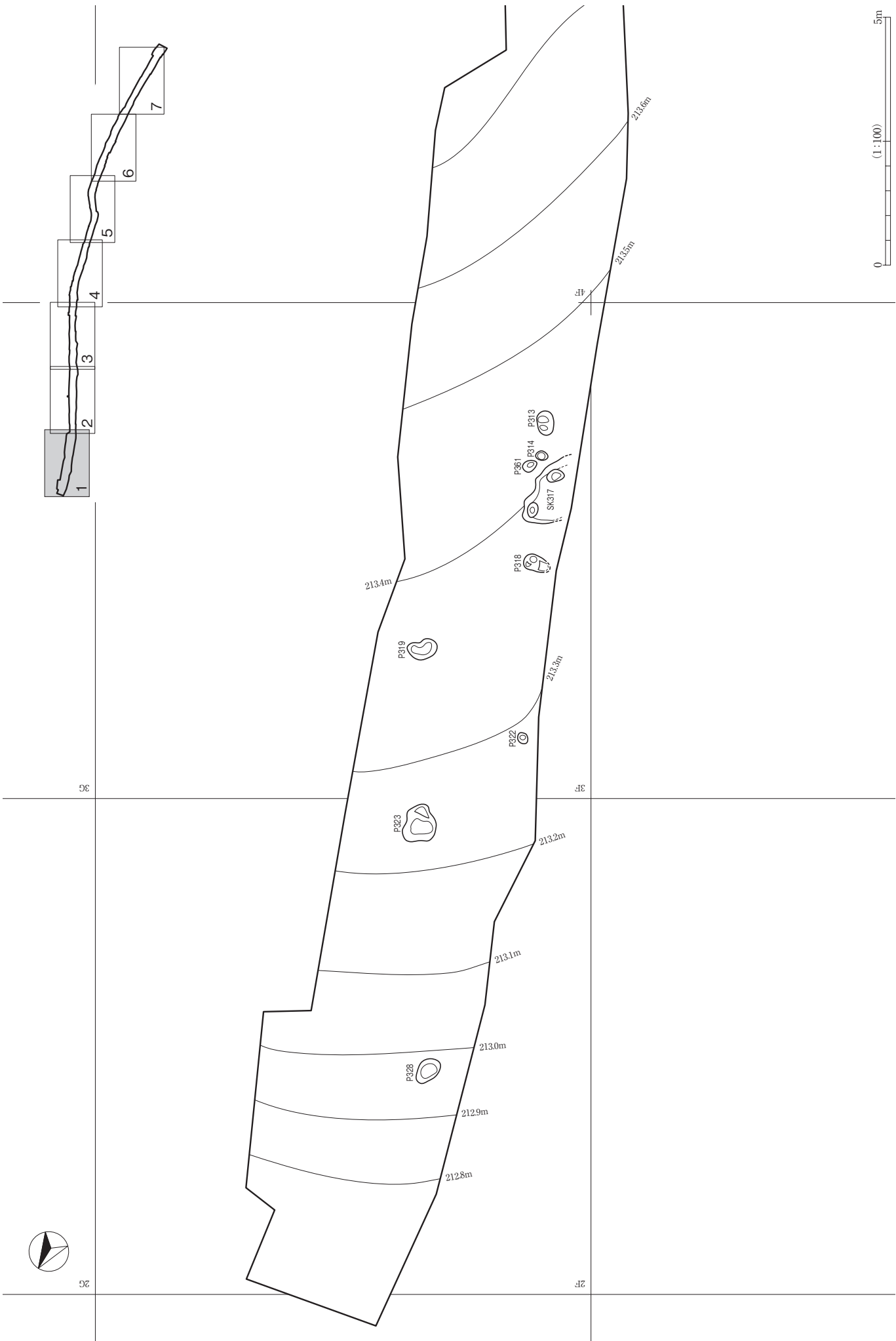
B 区出土石製品観察表

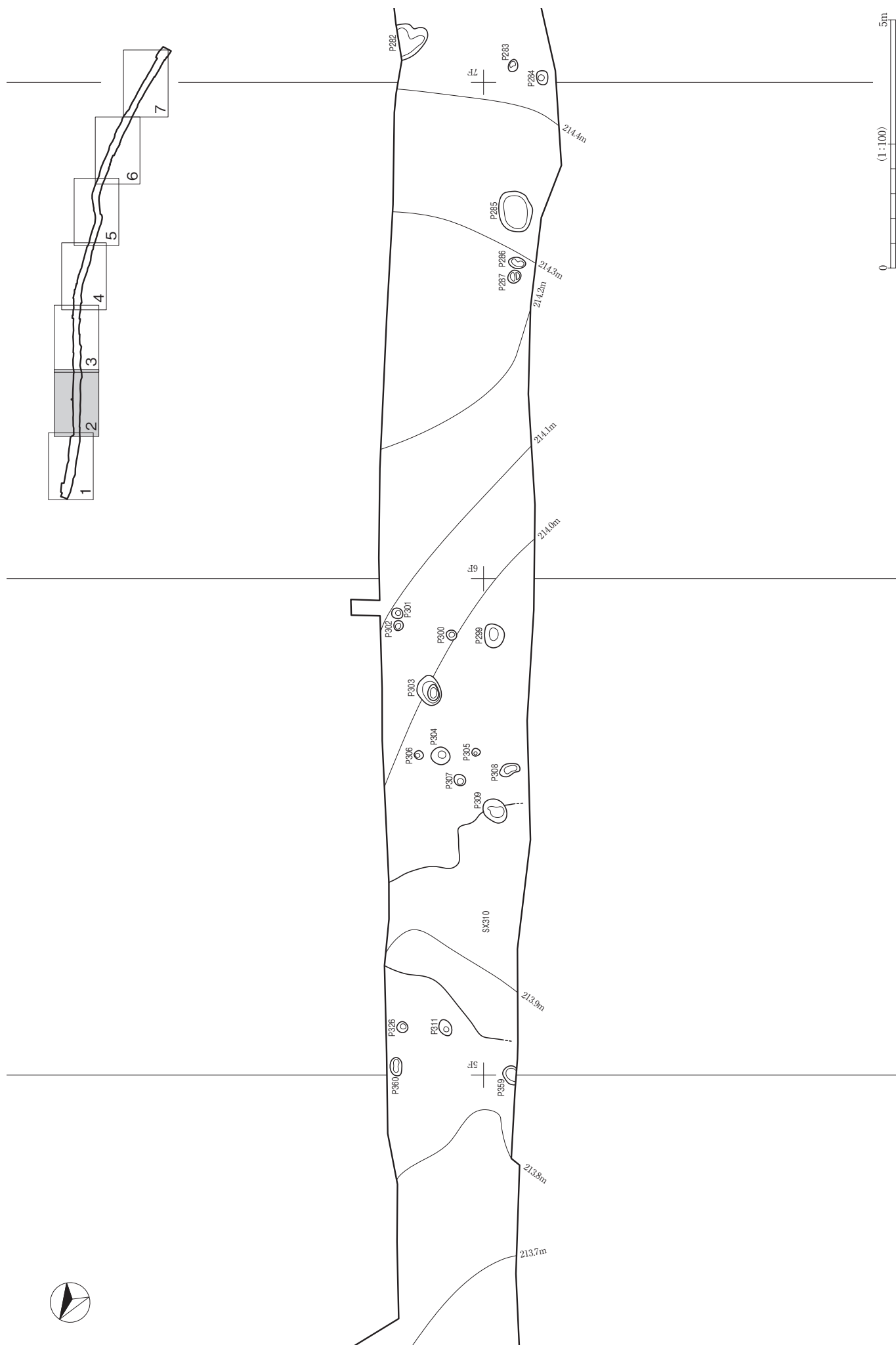
報告No	グリッド	遺構	取上No	層位	石材	法量				遺存状態	備考
						長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)		
443		P511			変斑レイ岩	675	11.40	2.75	195.61	完形	三角錐形石製品か

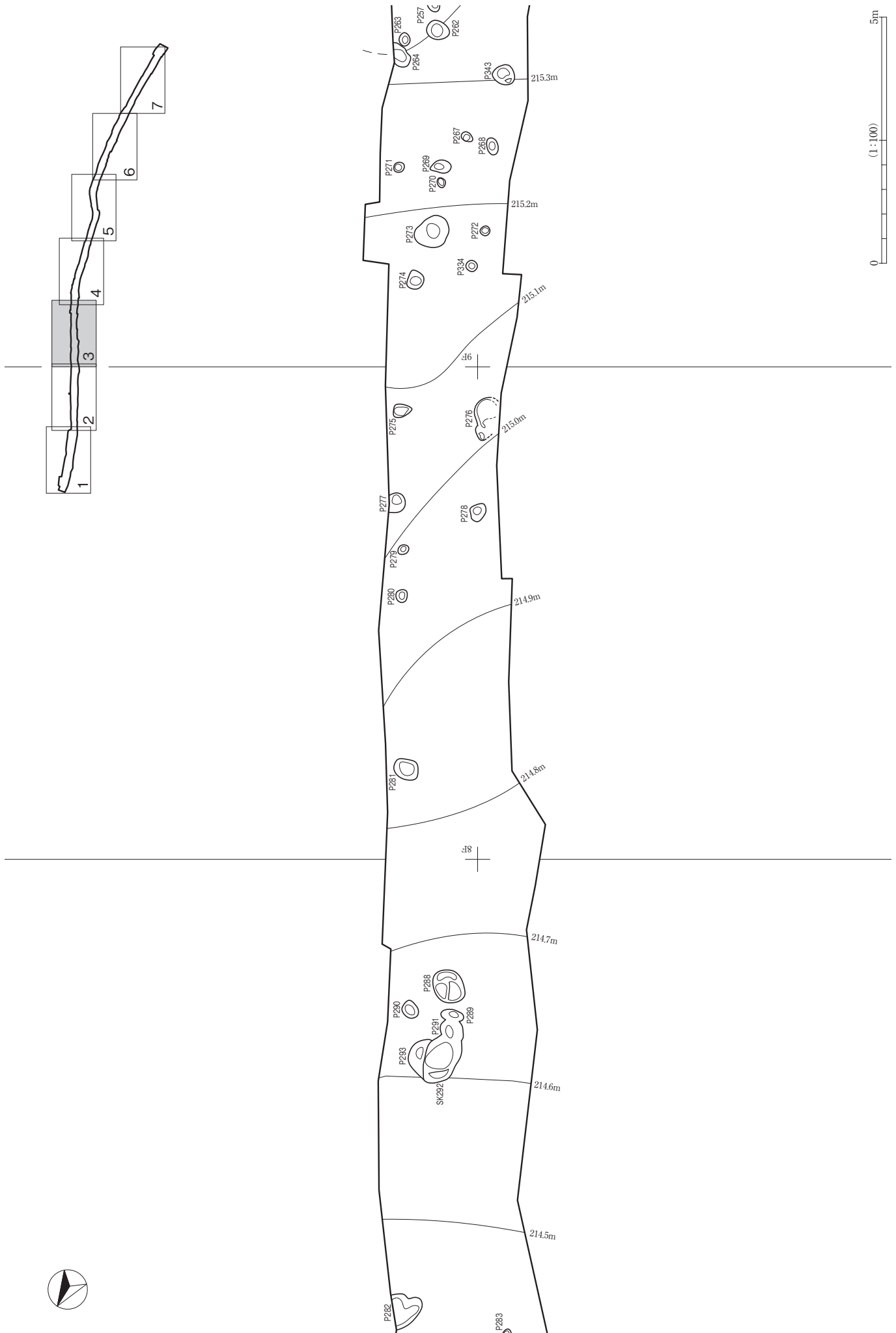
図 版

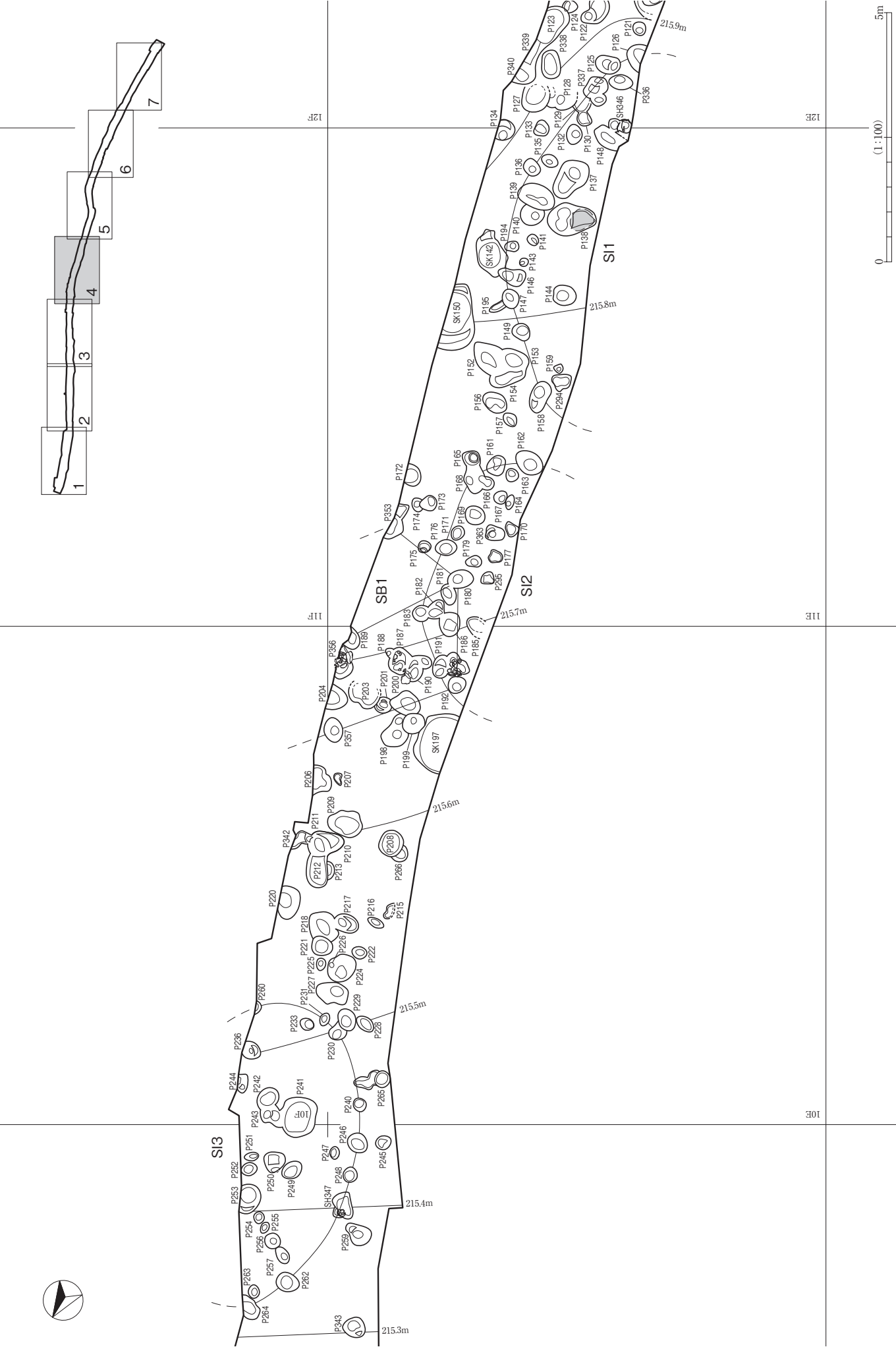


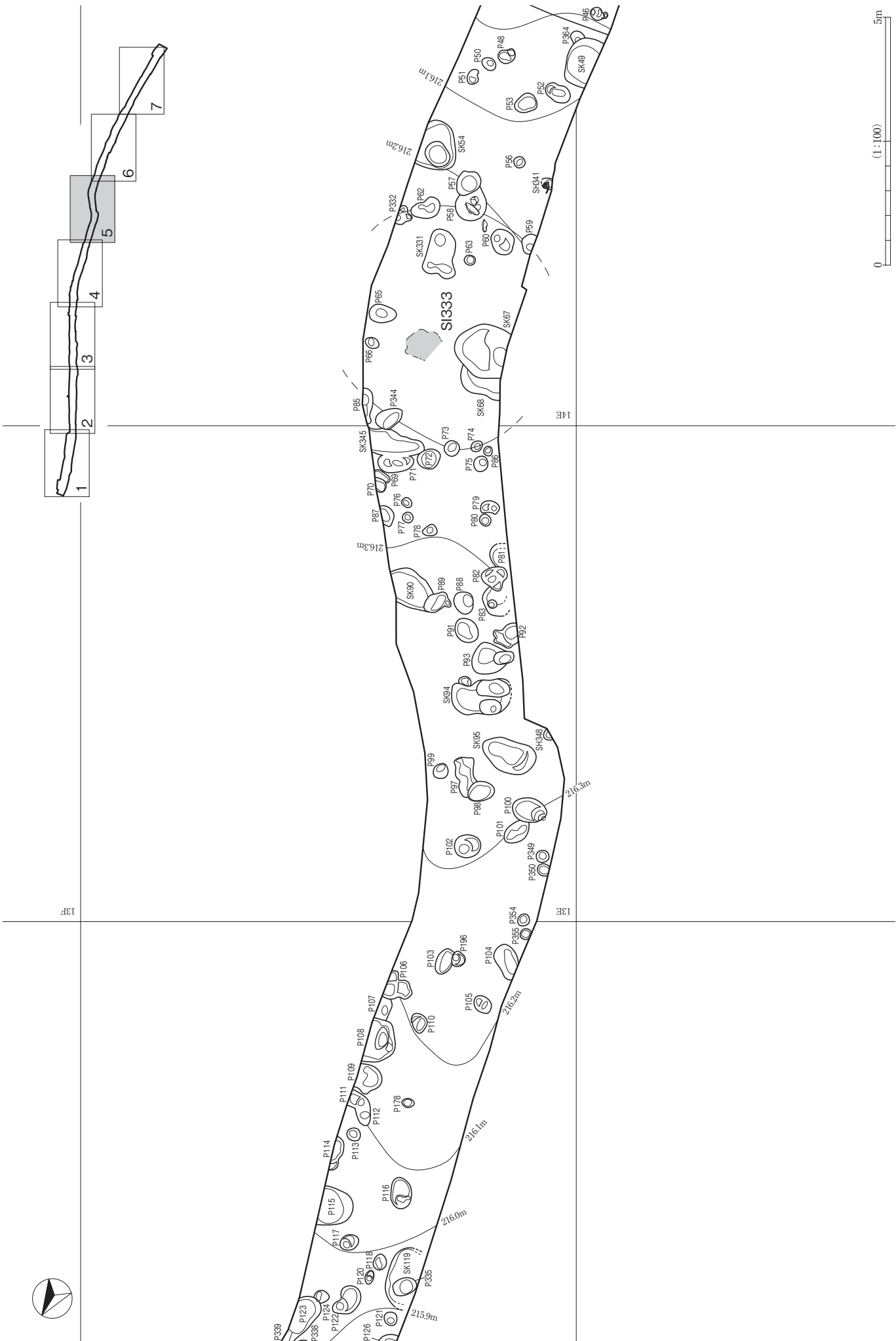


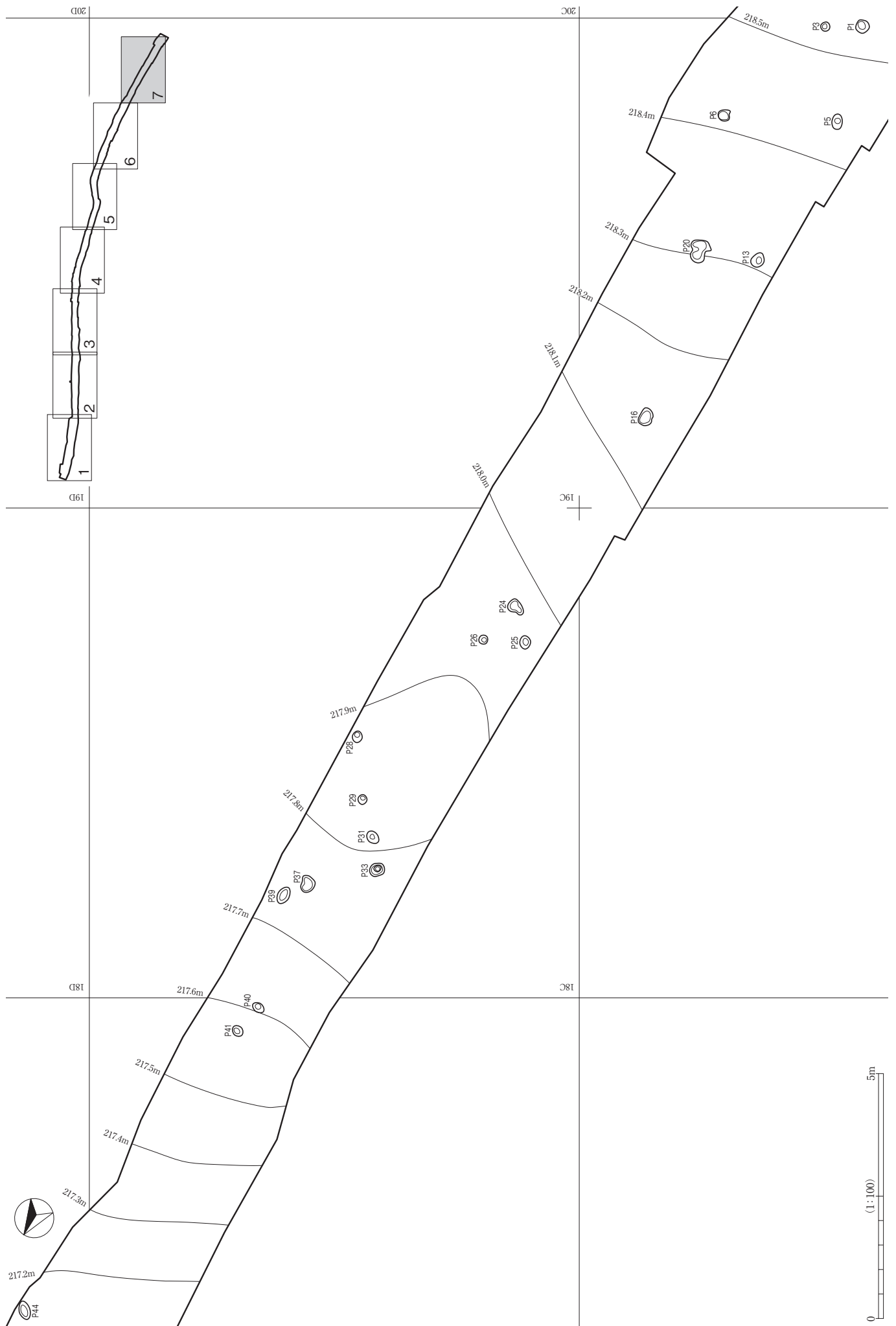




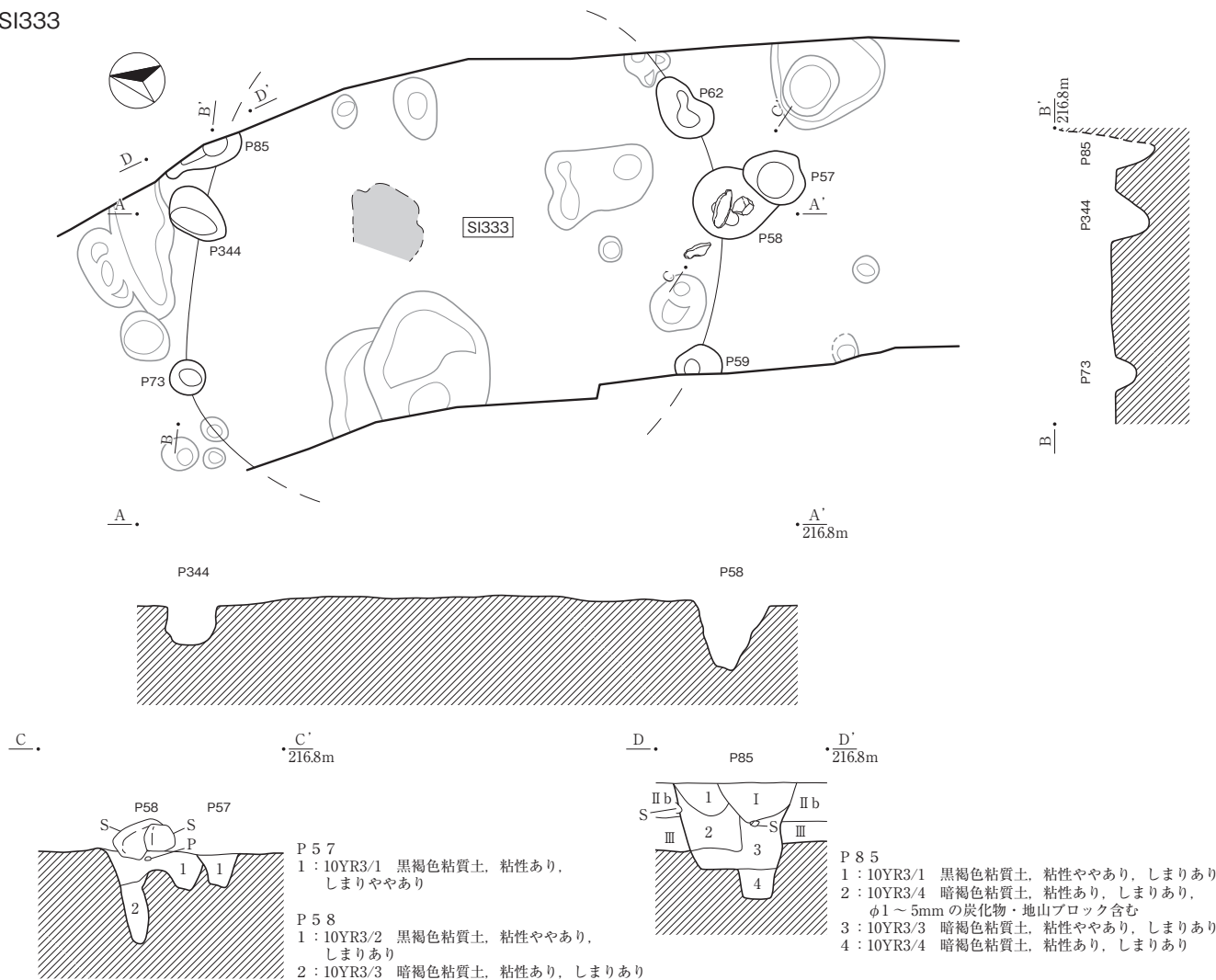




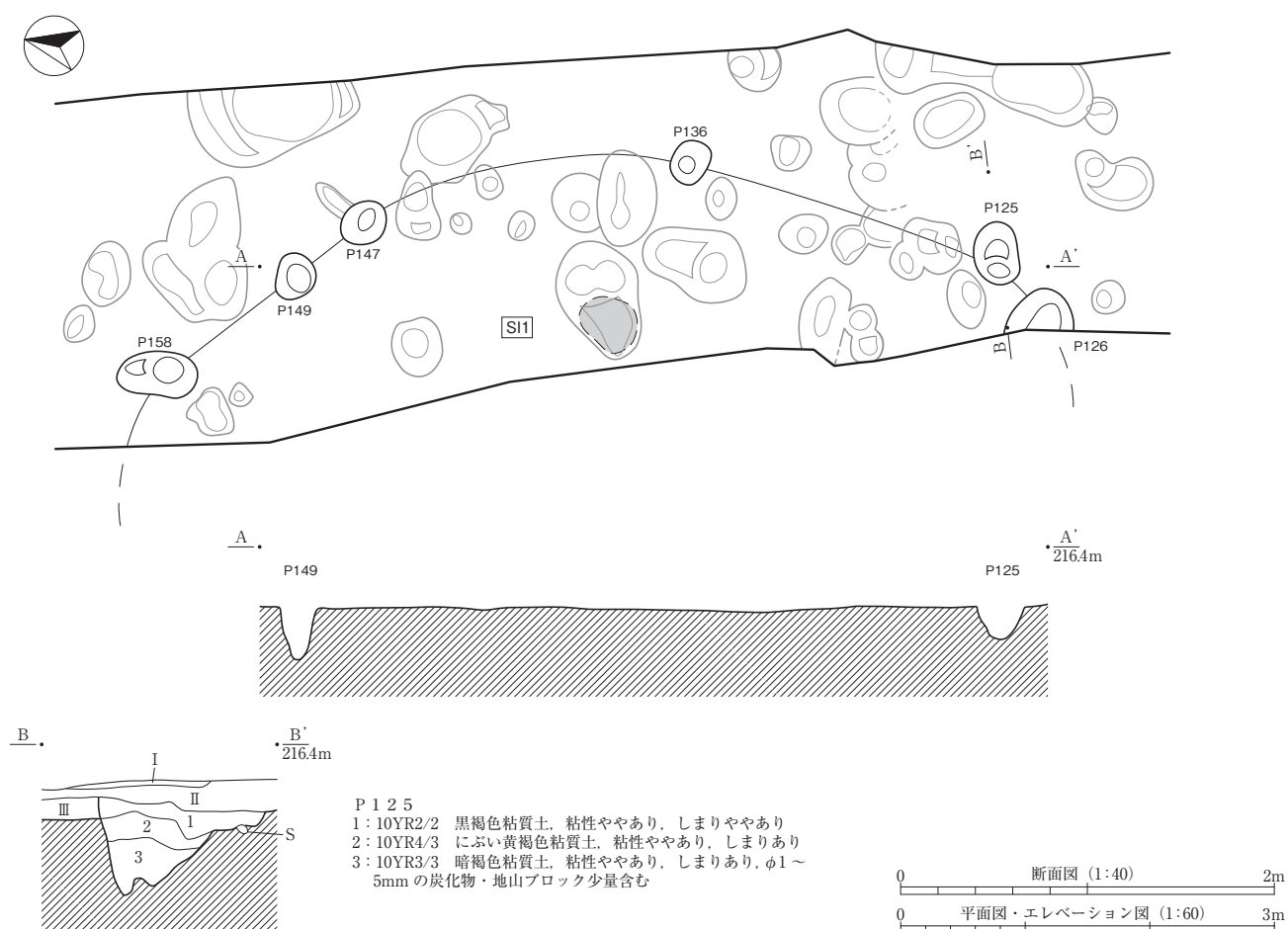




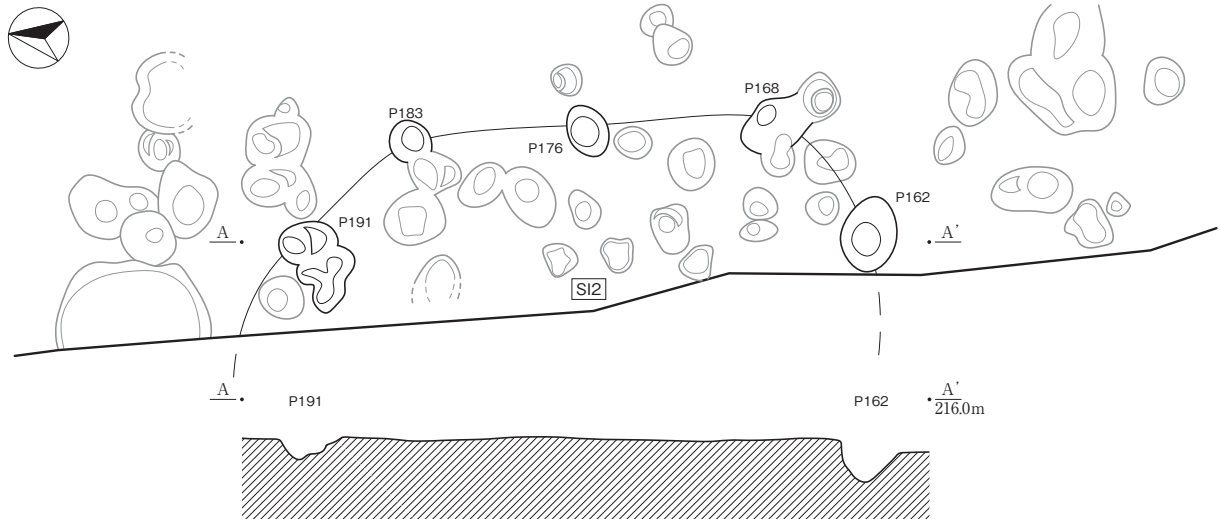
SI333



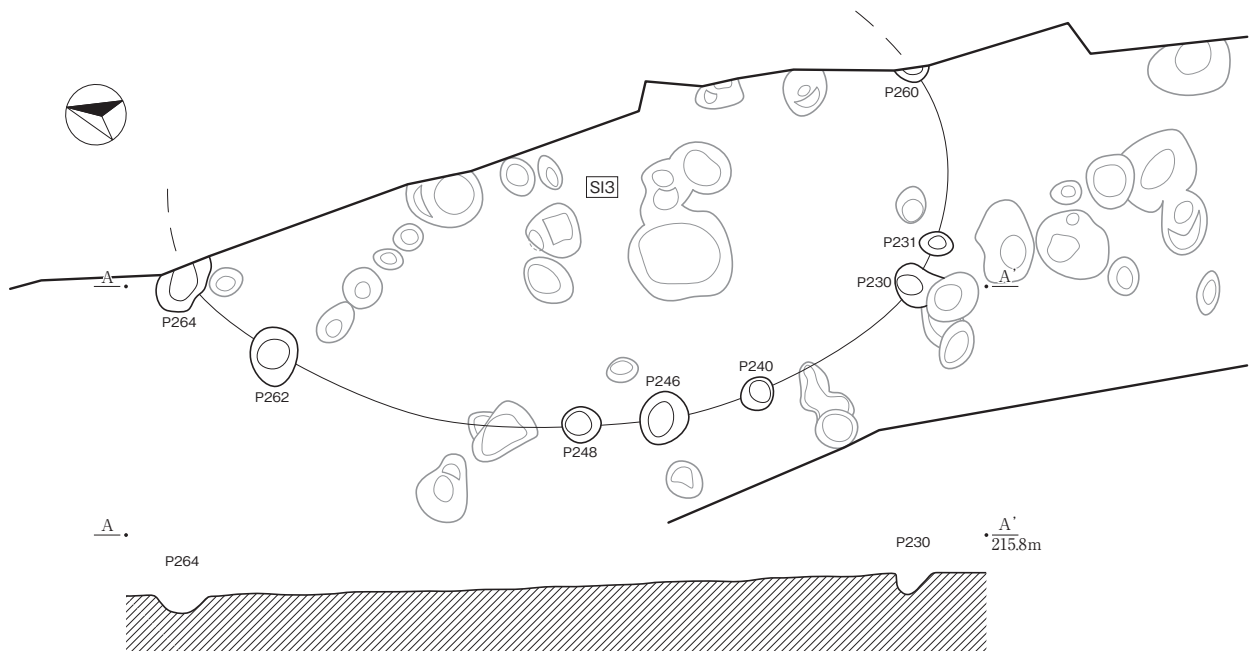
SI1



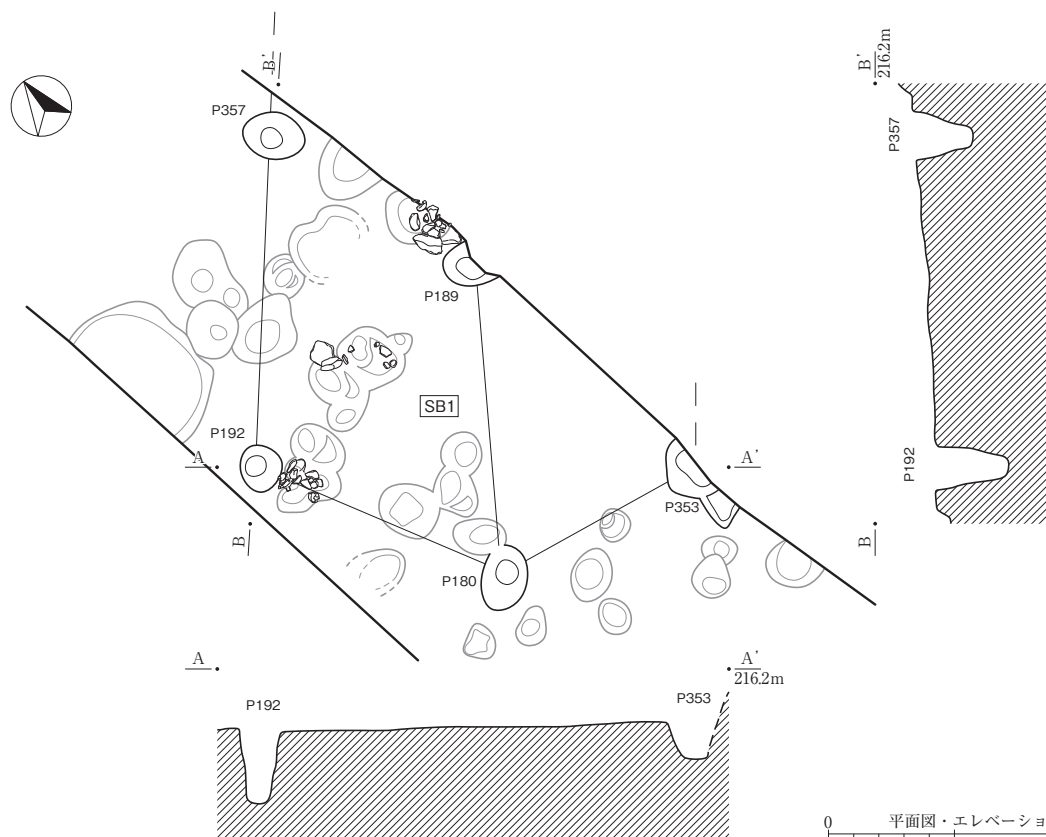
SI2



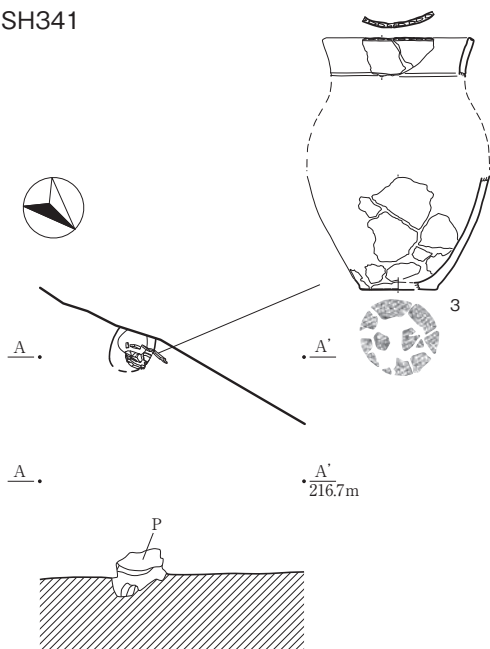
SI3



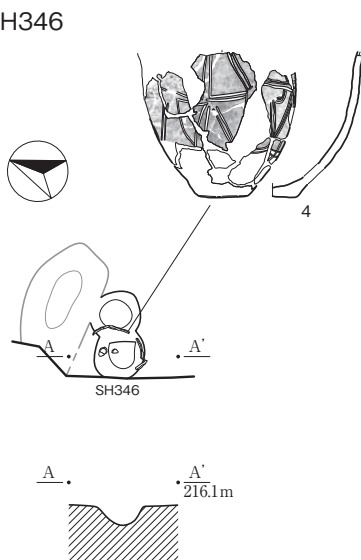
SB1



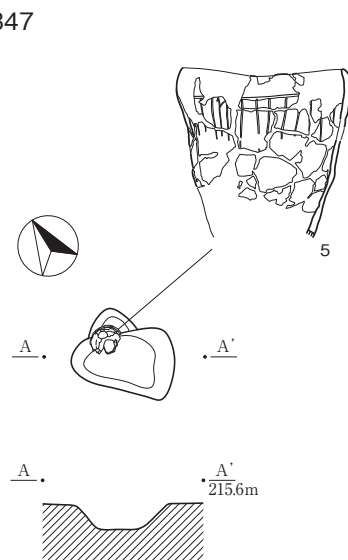
SH341



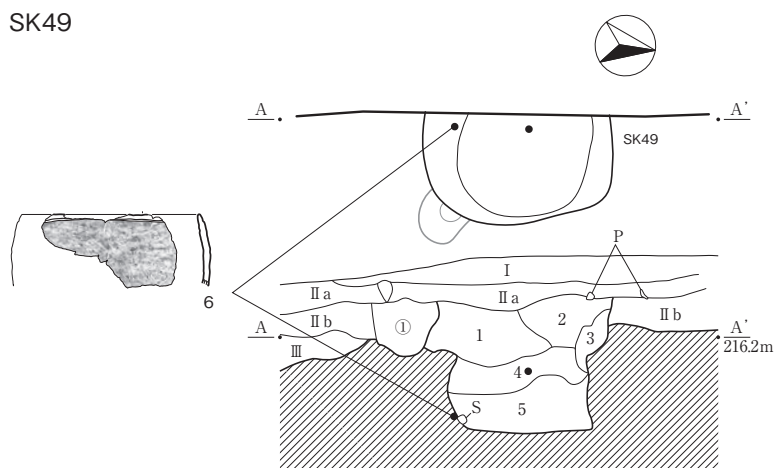
SH346



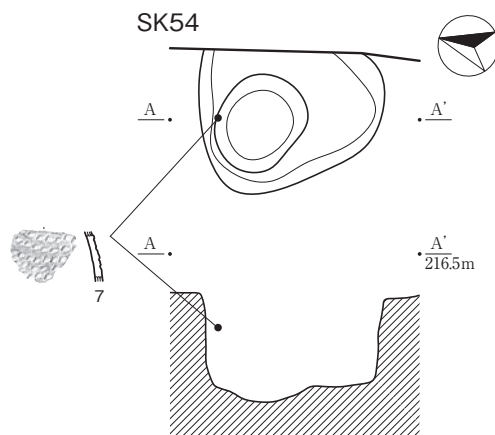
SH347



SK49



SK54

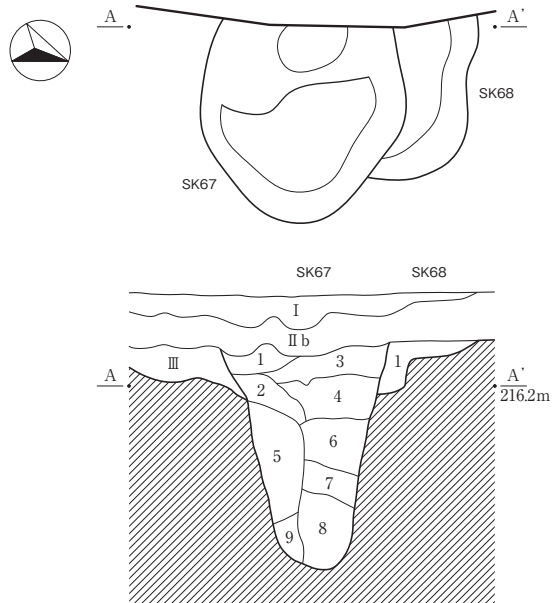


SK49

- 1 : 10YR3/1 黒褐色粘質土、粘性ややあり、しまりあり、 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 2 : 10YR2/1 黒色粘質土、粘性あり、しまりあり、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 3 : 10YR3/2 黒褐色粘質土と10YR4/4 褐色粘質土との混合土、粘性ややあり、しまりややあり
 4 : 10YR3/1 黒褐色粘質土、粘性ややあり、しまりあり、 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の炭化物少量含む
 5 : 10YR2/1 黒色粘質土、粘性ややあり、しまりあり

①: 10YR2/1 黒色粘質土、粘性ややあり、しまりややあり

SK67



SK67

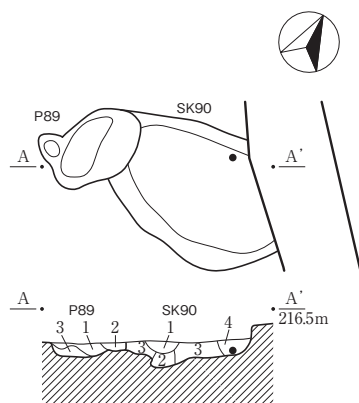
- 1 : 10YR3/2 黒褐色粘質土と褐色粘質土との混合土、粘性あり、しまりあり
 2 : 10YR3/3 暗褐色粘質土、粘性あり、しまりややあり
 3 : 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、粘性あり、しまりややあり
 4 : 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、粘性あり、しまりあり、 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 5 : 10YR4/4 褐色粘質土、粘性あり、しまりややあり、 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の炭化物少量含む
 6 : 10YR3/3 暗褐色粘質土、粘性ややあり、しまりややあり、 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック多量含む
 7 : 10YR2/3 黒褐色粘質土、粘性あり、しまりややあり、 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック多量含む
 8 : 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、粘性あり、しまりややあり、 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック・炭化物多量に含む
 9 : 10YR4/4 褐色粘質土、粘性あり、しまりややあり

SK68

- 1 : 10YR4/6 褐色粘質土、粘性ややあり、しまりややあり

0 平面図・断面図 (1:40) 2m

SK90



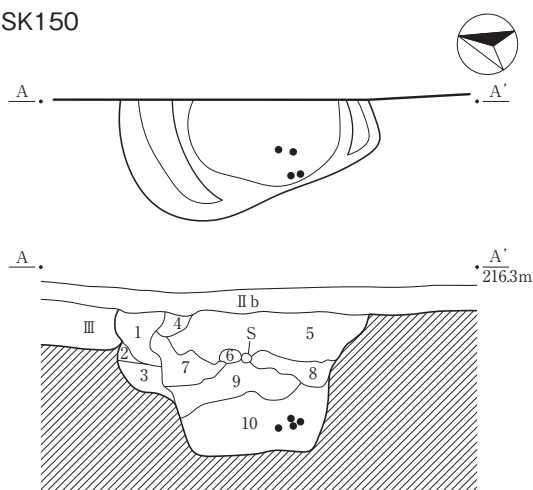
P 8 9

- 1 : 10YR3/2 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり, $\phi 3 \sim 5\text{mm}$ の炭化物少量含む
 2 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりややあり
 3 : 10YR3/4 暗褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり

SK 9 0

- 1 : 10YR3/2 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり, $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 2 : 10YR3/4 暗褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり, $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ の炭化物・地山ブロック含む
 3 : 1層と2層の混合土
 4 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり, $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の炭化物・地山ブロックを少量含む

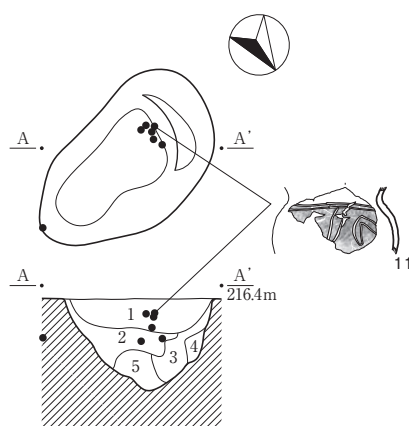
SK150



SK 1 5 0

- 1 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり
 2 : 10YR3/3 暗褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり
 3 : 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり, $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 4 : 10YR3/1 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり
 5 : 10YR3/1 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり, $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 6 : 10YR2/1 黒色粘質土, 粘性あり, しまりあり, $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の地山ブロック・炭化物少量含む
 7 : 10YR3/3 暗褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり, $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック・炭化物少量含む
 8 : 10YR2/1 黒色粘質土, 粘性あり, しまりあり, $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 9 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり
 10 : 10YR2/2 黒褐色粘質土と 10YR4/4 褐色粘質土との混合土, 粘性あり, しまりややあり

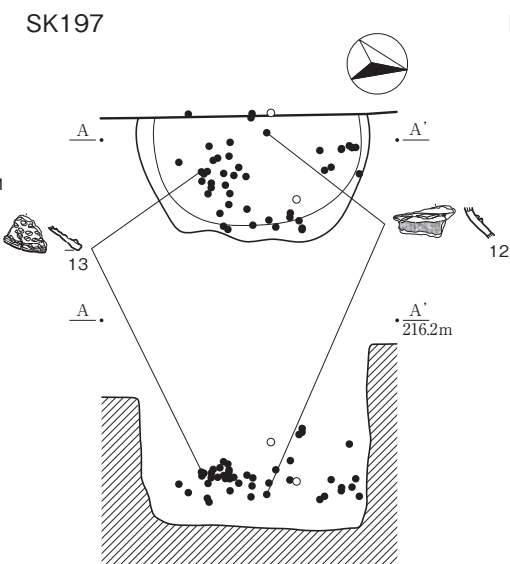
SK95



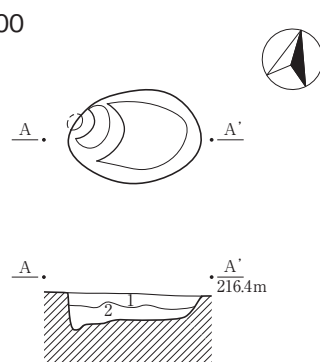
SK 9 5

- 1 : 10YR3/3 暗褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり, $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の炭化物少量含む
 2 : 10YR2/3 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり
 3 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり
 4 : 10YR3/3 暗褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり
 5 : 10YR3/4 暗褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりややあり

SK197



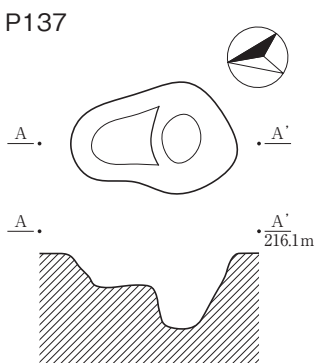
P100



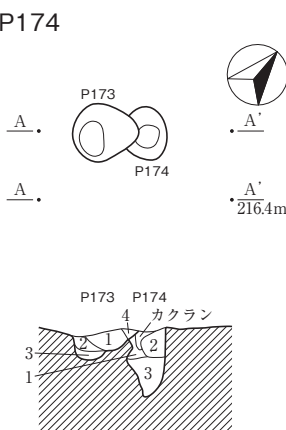
P 1 0 0

- 1 : 10YR3/3 暗褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり, $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 2 : 10YR3/4 暗褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり

P137



P173・P174



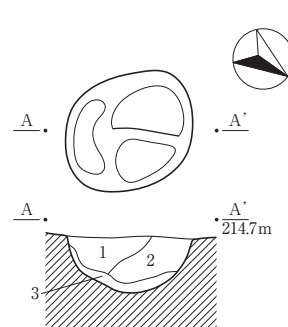
P 1 7 3

- 1 : 10YR3/3 暗褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり
 2 : 10YR3/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり

P 1 7 4

- 1 : 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり
 2 : 10YR3/3 暗褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりややあり
 3 : 10YR3/2 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりややあり

P288

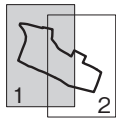


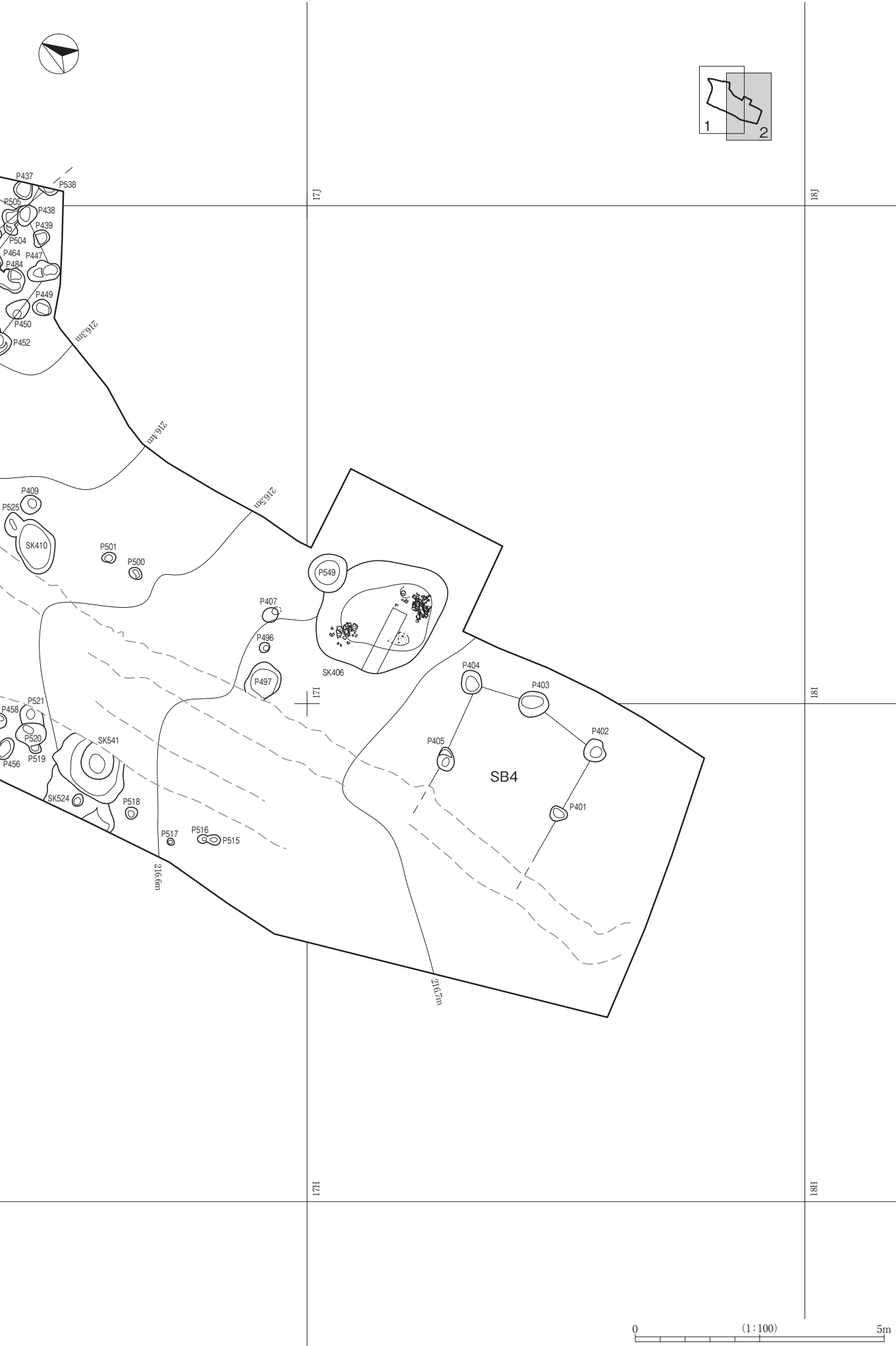
P 2 8 8

- 1 : 10YR3/1 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり, $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の炭化物少量含む, $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロックまばらに含む
 2 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり, $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロックまばらに含む
 3 : 10YR4/4 褐色粘質土と1層との混合土, 粘性あり, しまりあり

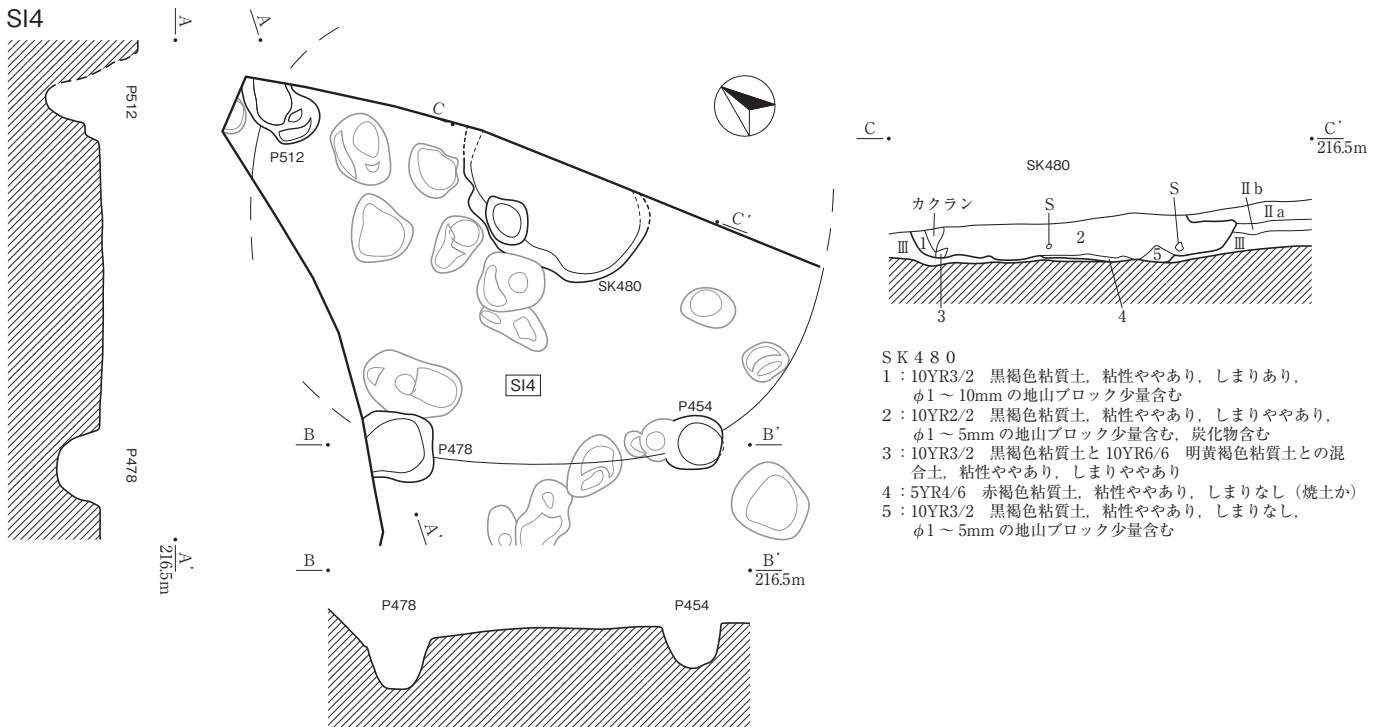
0 平面図・断面図 (1:40) 2m



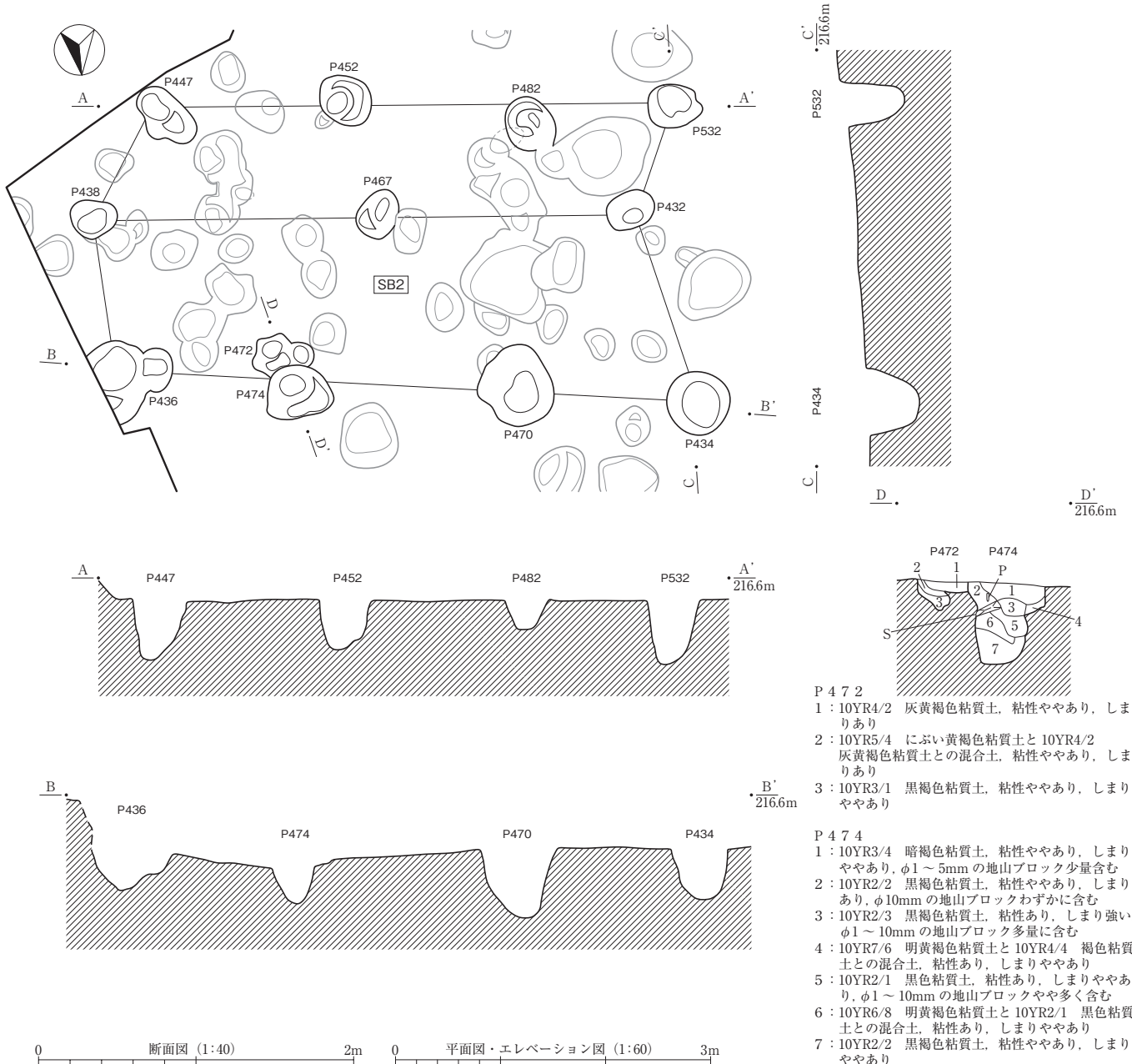




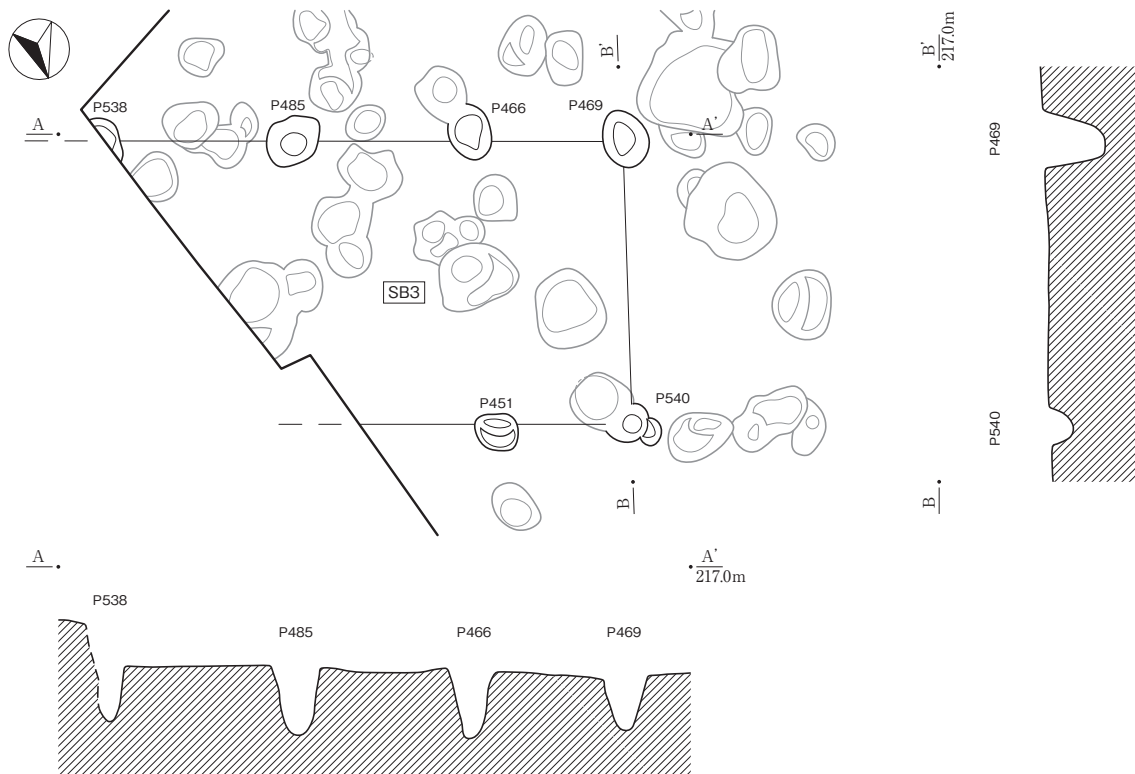
SI4



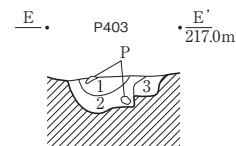
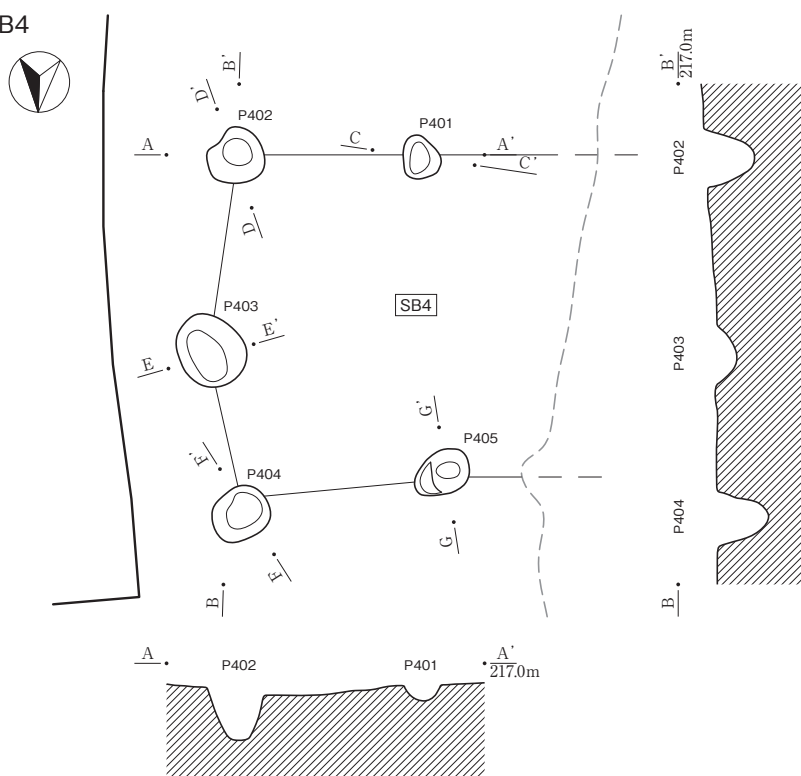
SB2



SB3

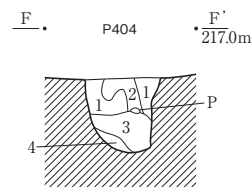


SB4



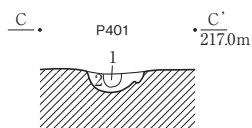
P 4 0 3

- 1 : 10YR2/1 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりややあり
- 2 : 10YR2/3 黒褐色粘質土と 10YR7/6 明黄褐色粘質土との混合土, 粘性ややあり, しまりあり
- 3 : 10YR2/3 黒褐色粘質土と 10YR7/6 明黄褐色粘質土との混合土, 粘性ややあり, しまりあり, 2層に比べ明黄褐色粘質土が多い



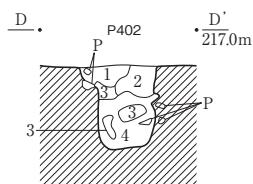
P 4 0 4

- 1 : 2.5YR8/8 黄色粘質土と 10YR4/1 褐灰色粘質土との混合土, 粘性ややあり, しまりややあり
- 2 : 10YR2/1 黒色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり, $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
- 3 : 10YR2/1 黒色粘質土と 2.5YR8/8 黄色粘質土との混合土, 粘性あり, しまりややあり
- 4 : 10YR5/2 灰黄褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり



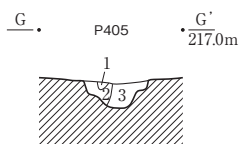
P 4 0 1

- 1 : 10YR3/2 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりややあり, $\phi 10\text{mm}$ 程の地山ブロック含む
- 2 : 2.5YR1/3 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり



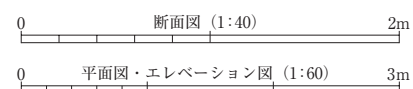
P 4 0 2

- 1 : 10YR2/3 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり, $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロックわずかに含む
- 2 : 10YR2/3 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり, $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック少量含む, 炭化物わずかに含む
- 3 : 10YR2/3 黒褐色粘質土と 10YR7/6 明黄褐色粘質土との混合土, 粘性ややあり, しまりなし
- 4 : 10YR2/1 黒色粘質土, 粘性ややあり, しまりややあり, $\phi 1\text{mm}$ の地山ブロックわずかに含む

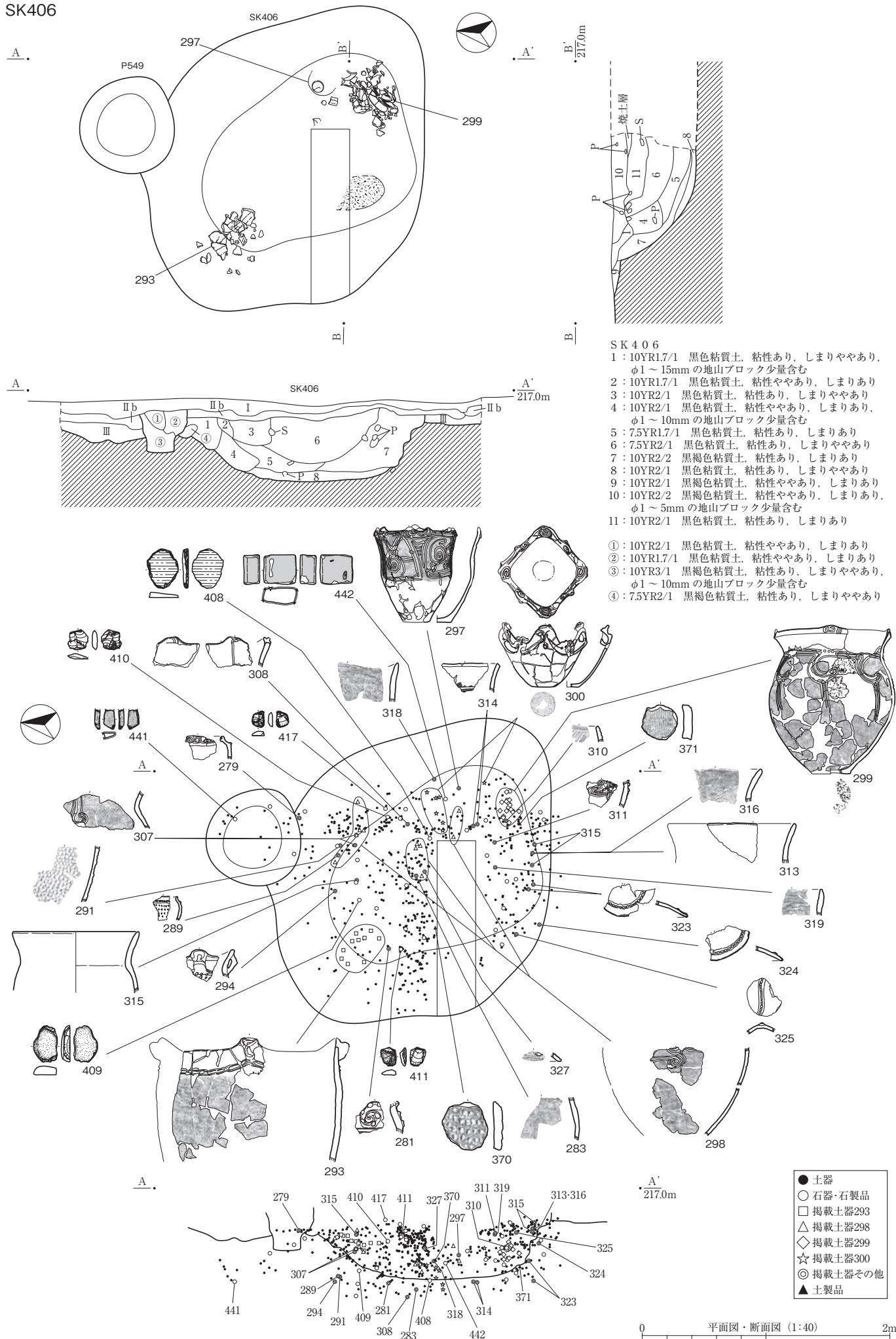


P 4 0 5

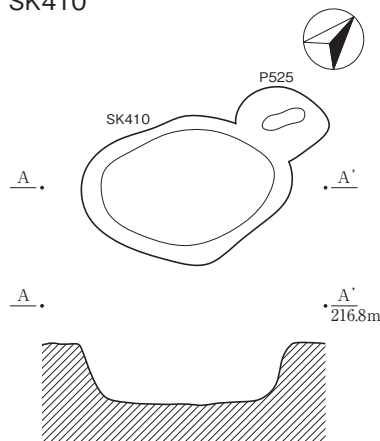
- 1 : 10YR3/1 黒褐色粘質土と 10YR7/6 明黄褐色粘質土との混合土, 粘性ややあり, しまりややあり
- 2 : 10YR3/1 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり
- 3 : 10YR3/2 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり, $\phi 5\text{mm}$ の地山ブロック少量含む



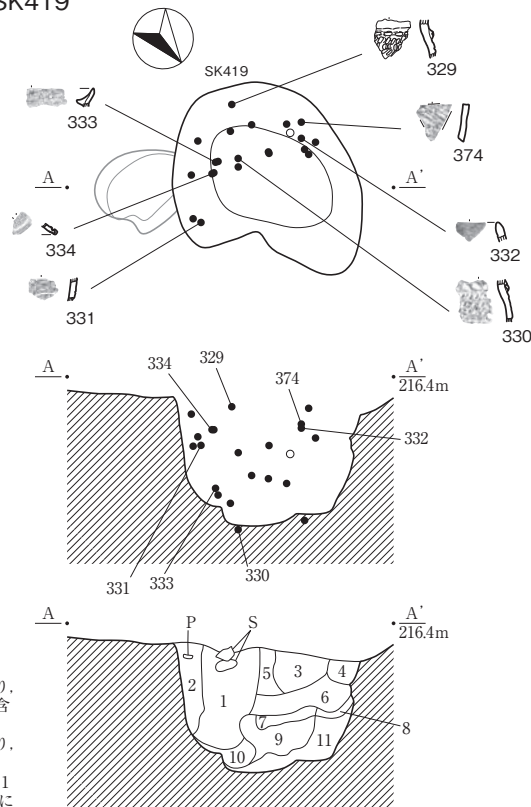
SK406



SK410



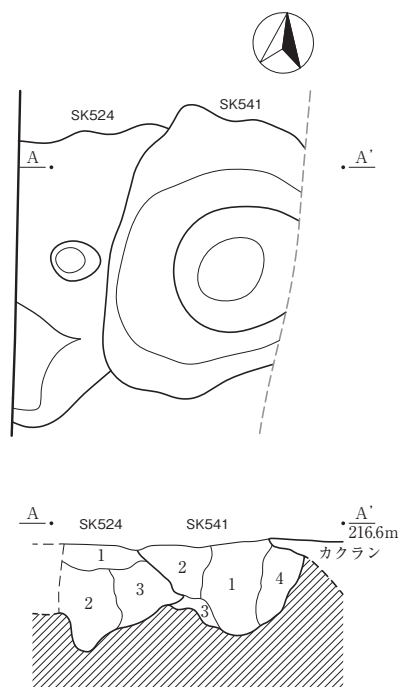
SK419



SK419

- 1 : 10YR3/1 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり, $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック少量含む, 炭化物少量含む
 2 : 10YR3/4 暗褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり, $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 3 : 10YR3/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり, $\phi 1 \sim 20\text{mm}$ の地山ブロック多量に含む, 炭化物わずかに含む
 4 : 10YR2/2 黒色粘質土, 粘性あり, しまりややあり, $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック多量に含む
 5 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり, $\phi 1 \sim 15\text{mm}$ の地山ブロック少量含む, 炭化物少量含む
 6 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり, $\phi 1 \sim 30\text{mm}$ の地山ブロック多量に含む
 7 : 10YR2/3 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりややあり, $\phi 1 \sim 20\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 8 : 10YR2/1 黒色粘質土と 10YR5/8 黄褐色粘質土との混合土, 粘性あり, しまりあり
 9 : 10YR2/3 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり, $\phi 1 \sim 50\text{mm}$ の地山ブロック多量に含む
 10 : 10YR2/1 黒色粘質土, 粘性あり, しまり強い, $\phi 1 \sim 20\text{mm}$ の地山ブロック多量に含む
 11 : 10YR3/3 暗褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり, $\phi 1 \sim 20\text{mm}$ の地山ブロック多量に含む

SK524・SK541



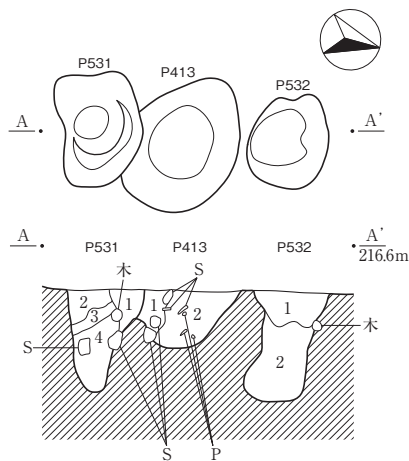
SK524

- 1 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり
 2 : 10YR3/4 暗褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり
 3 : 10YR3/3 暗褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり

SK541

- 1 : 10YR3/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり
 2 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり
 3 : 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり
 4 : 10YR3/3 暗褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり

P413・P531・P532



P413

- 1 : 10YR2/3 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまり強い, $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 2 : 10YR2/1 黒色粘質土, 粘性ややあり, しまりややあり, $\phi 1 \sim 20\text{mm}$ の地山ブロック多量に含む

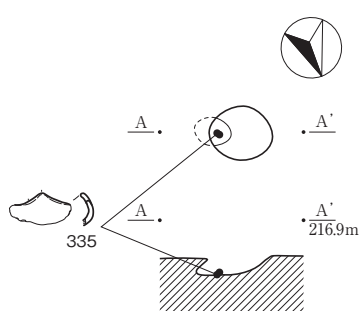
P531

- 1 : 10YR2/3 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり
 2 : 10YR2/3 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり, $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック少量含む, 炭化物少量含む
 3 : 10YR3/4 暗褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりなし, $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 4 : 10YR2/1 黒色粘質土, 粘性あり, しまりあり, $\phi 1 \sim 30\text{mm}$ の地山ブロック少量含む, 炭化物少量含む

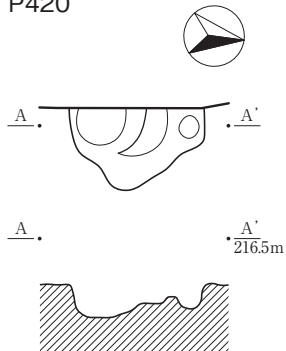
P532

- 1 : 10YR2/1 黒色粘質土, 粘性あり, しまりややあり, $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 2 : 10YR2/1 黒色粘質土, 粘性あり, しまりあり, $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロックわずかに含む

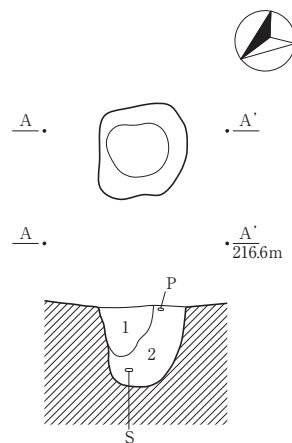
P407



P420



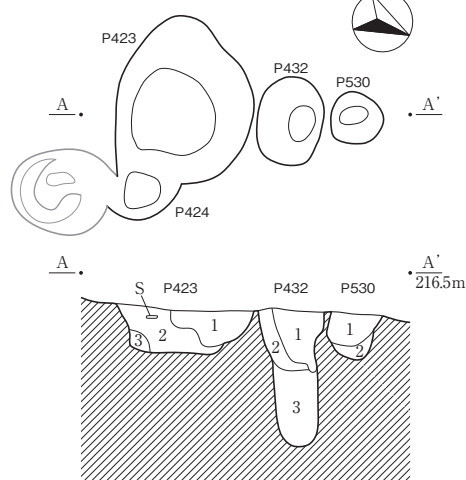
P422



P422

- 1 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり, $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック少量含む, 炭化物少量含む
 2 : 10YR2/1 黒色粘質土, 粘性あり, しまりあり, $\phi 1 \sim 20\text{mm}$ の地山ブロック多量に含む, 炭化物少量含む

P423・P424・P432・P530



P 4 2 3

- 1 : 10YR2/3 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりややあり
 2 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりややあり,
 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロックわずかに含む
 3 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりなし,
 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック多量に含む

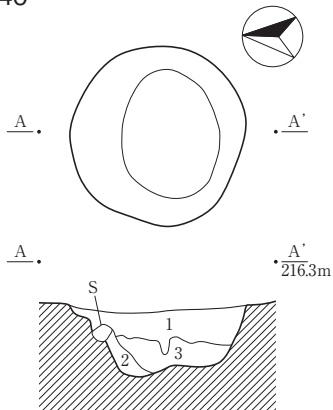
P 5 3 0

- 1 : 10YR3/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり,
 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 2 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり,
 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロックわずかに含む

P 4 3 2

- 1 : 10YR2/1 黒色粘質土, 粘性ややあり, しまりややあり,
 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 2 : 10YR2/3 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり,
 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック多量に含む
 3 : 10YR2/1 黒色粘質土, 粘性あり, しまりややあり,
 $\phi 1 \sim 20\text{mm}$ の地山ブロック多量に含む

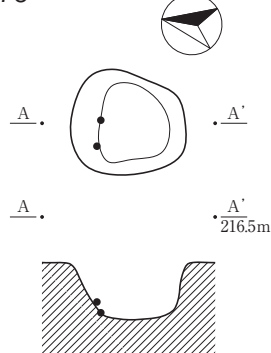
P440



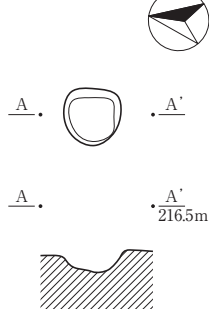
P 4 4 0

- 1 : 7.5YR3/2 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり,
 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロックわずかに含む, 炭化物少量含む
 2 : 10YR3/4 暗褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりなし
 3 : 7.5YR4/4 褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり,
 $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック多量に含む, 炭化物少量含む

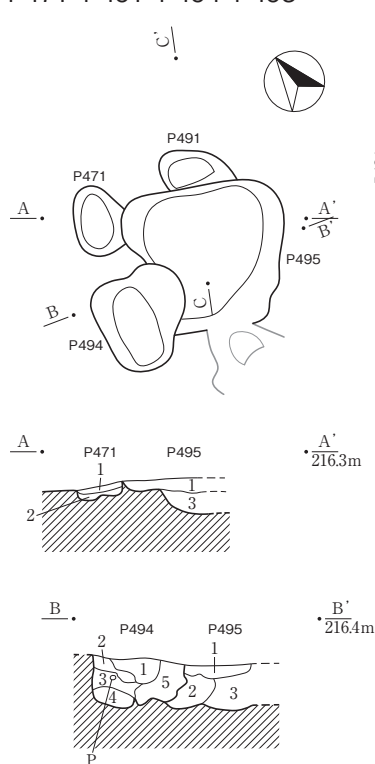
P476



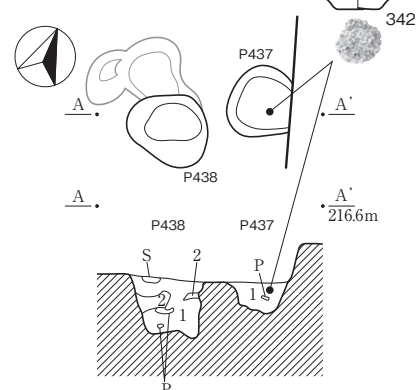
P430



P471・P491・P494・P495



P437・P438



P 4 3 7

- 1 : 10YR3/2 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりややあり,
 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック少量含む

P 4 3 8

- 1 : 7.5YR2/1 黒色粘質土, 粘性ややあり, しまり強い,
 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック含む
 2 : 10YR3/1 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり
 3 : 10YR3/3 黒褐色粘質土, 粘性ややあり, しまりあり,
 $\phi 5 \sim 30\text{mm}$ の地山ブロック含む

P 4 7 1

- 1 : 10YR2/1 黒色粘質土, 粘性あり, しまりややあり,
 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の炭化物少量含む,
 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 2 : 10YR3/1 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり,
 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の炭化物少量含む,
 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の地山ブロック少量含む

P 4 9 1

- 1 : 10YR2/3 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり,
 10YR4/4 褐色粘質土をまばらに含む
 2 : 10YR3/1 黒褐色粘質土と 10YR4/4 褐色粘質土との混合土,
 粘性あり, しまりややあり
 3 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり

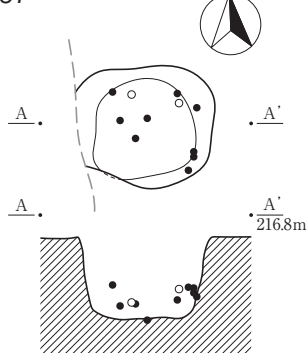
P 4 9 4

- 1 : 10YR2/3 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり,
 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 2 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり,
 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 3 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりややあり
 4 : 10YR2/2 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり,
 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 5 : 10YR3/3 暗褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり,
 $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ の地山ブロック多量含む

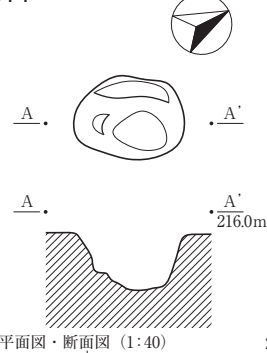
P 4 9 5

- 1 : 10YR2/3 黒褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり,
 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ の地山ブロック少量含む
 2 : 10YR3/4 暗褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり,
 $\phi 1 \sim 15\text{mm}$ の地山ブロック多量含む
 3 : 10YR3/3 暗褐色粘質土, 粘性あり, しまりあり,
 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の地山ブロック少量含む

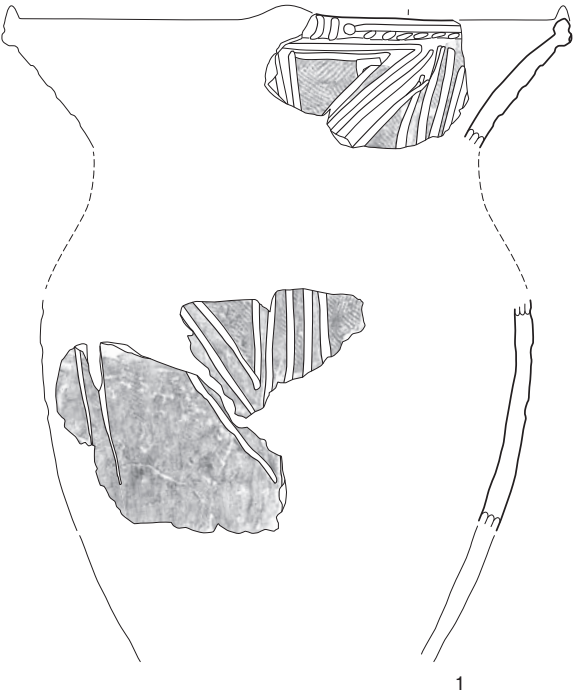
P497



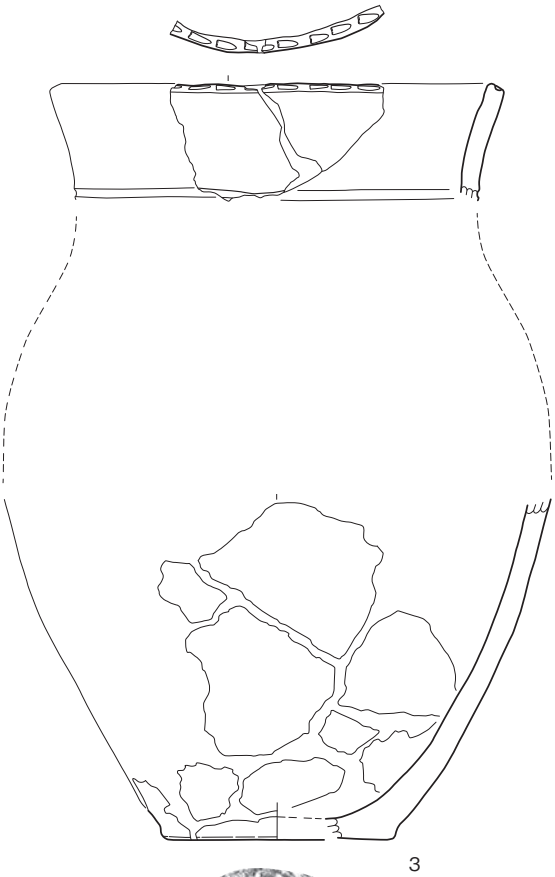
P511



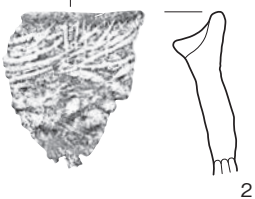
SI333



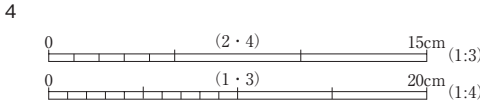
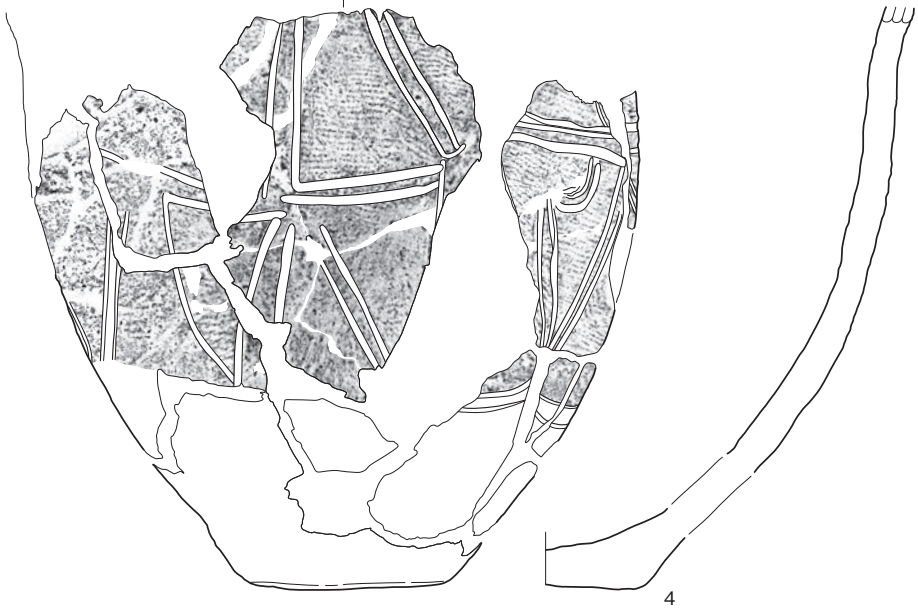
SH341



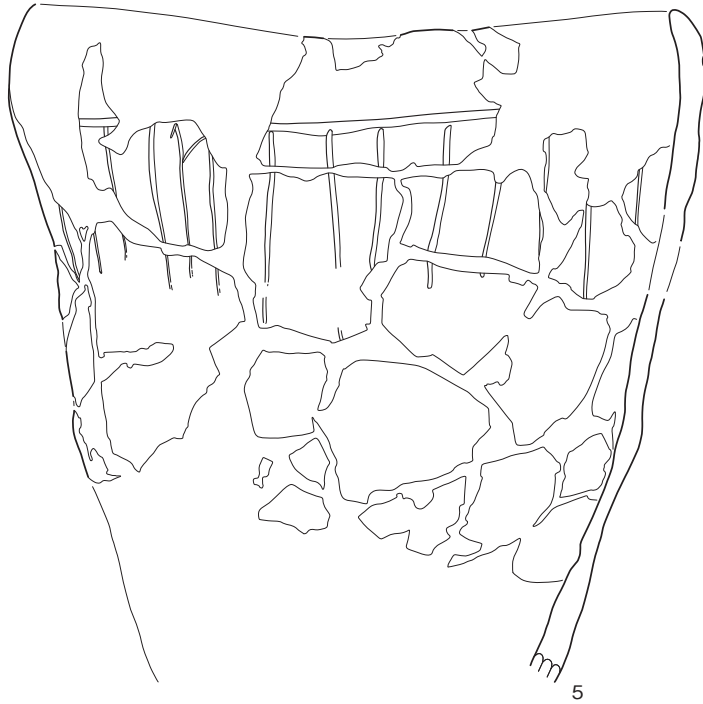
SI1



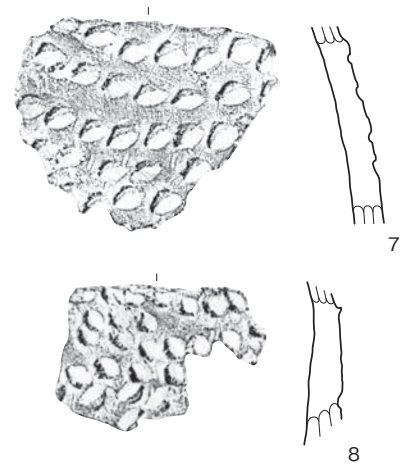
SH346



SH347



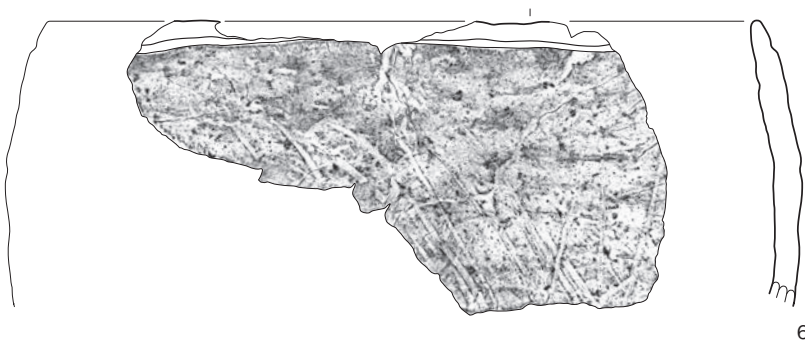
SK54



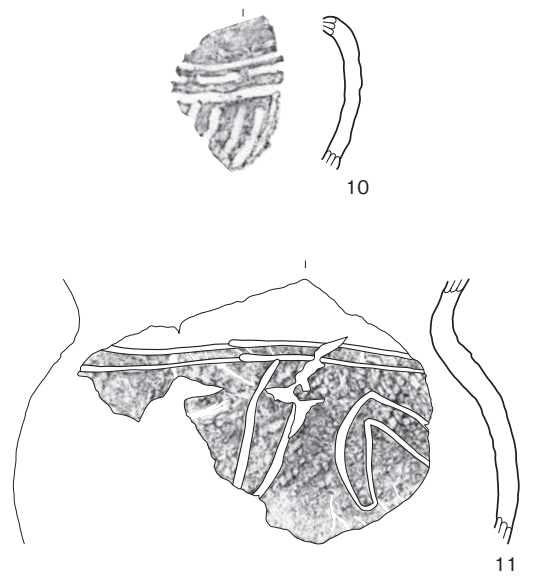
SK90



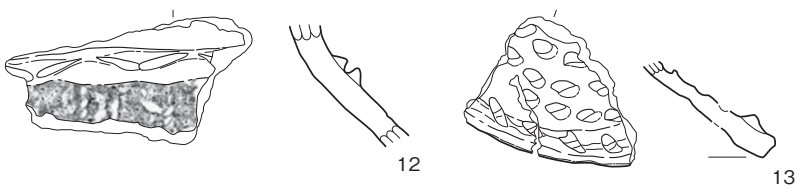
SK49



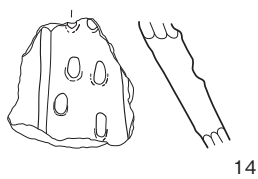
SK95



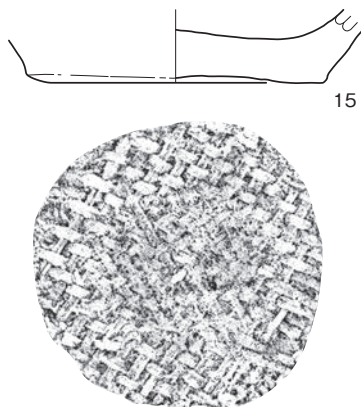
SK197



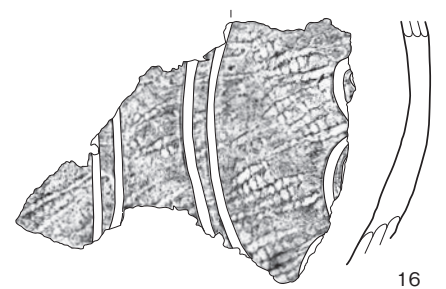
P100



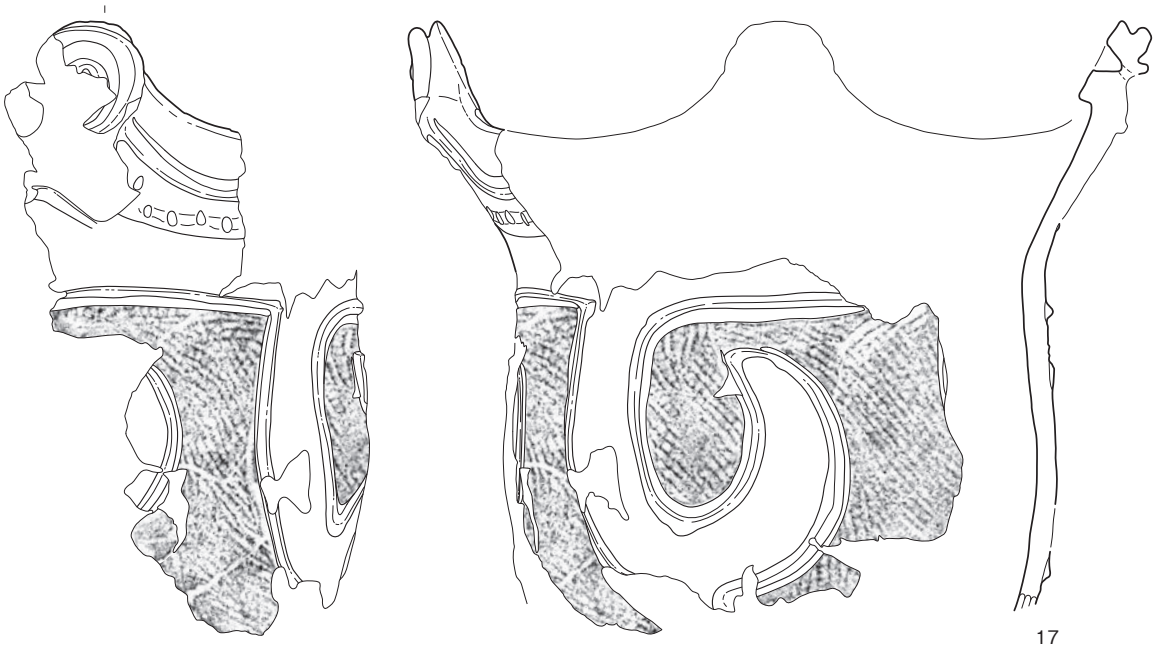
P137



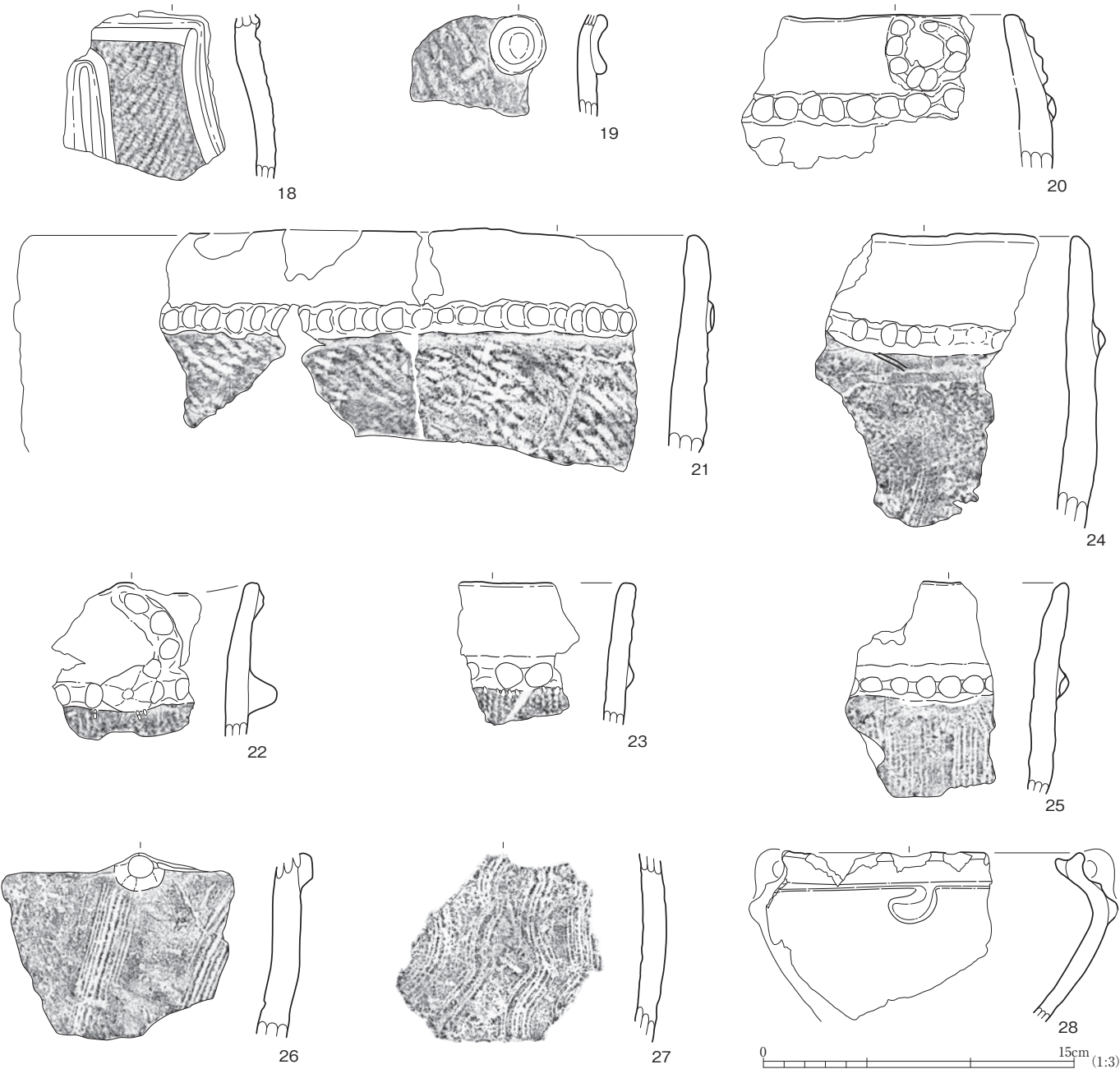
P173



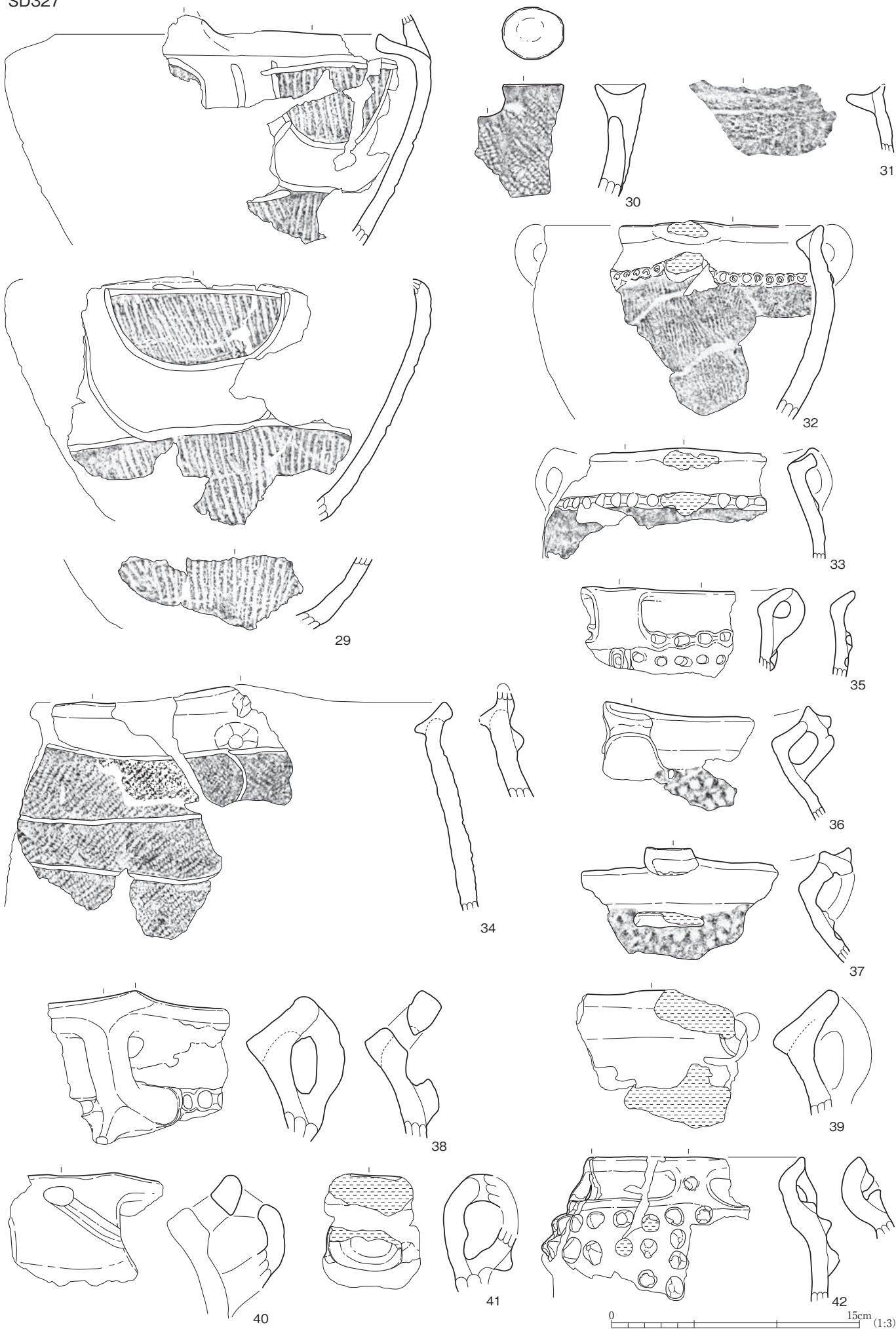
P288



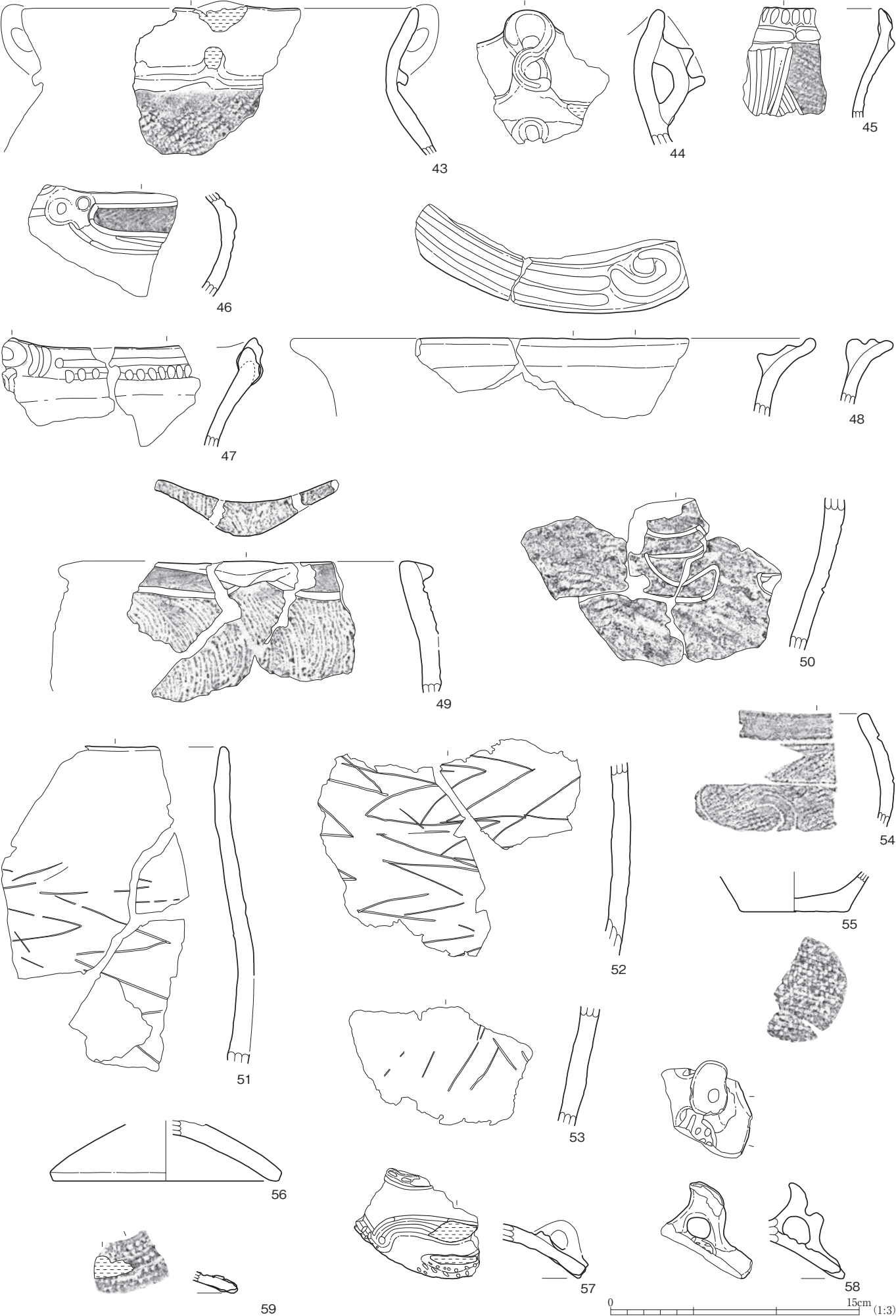
SD327



SD327



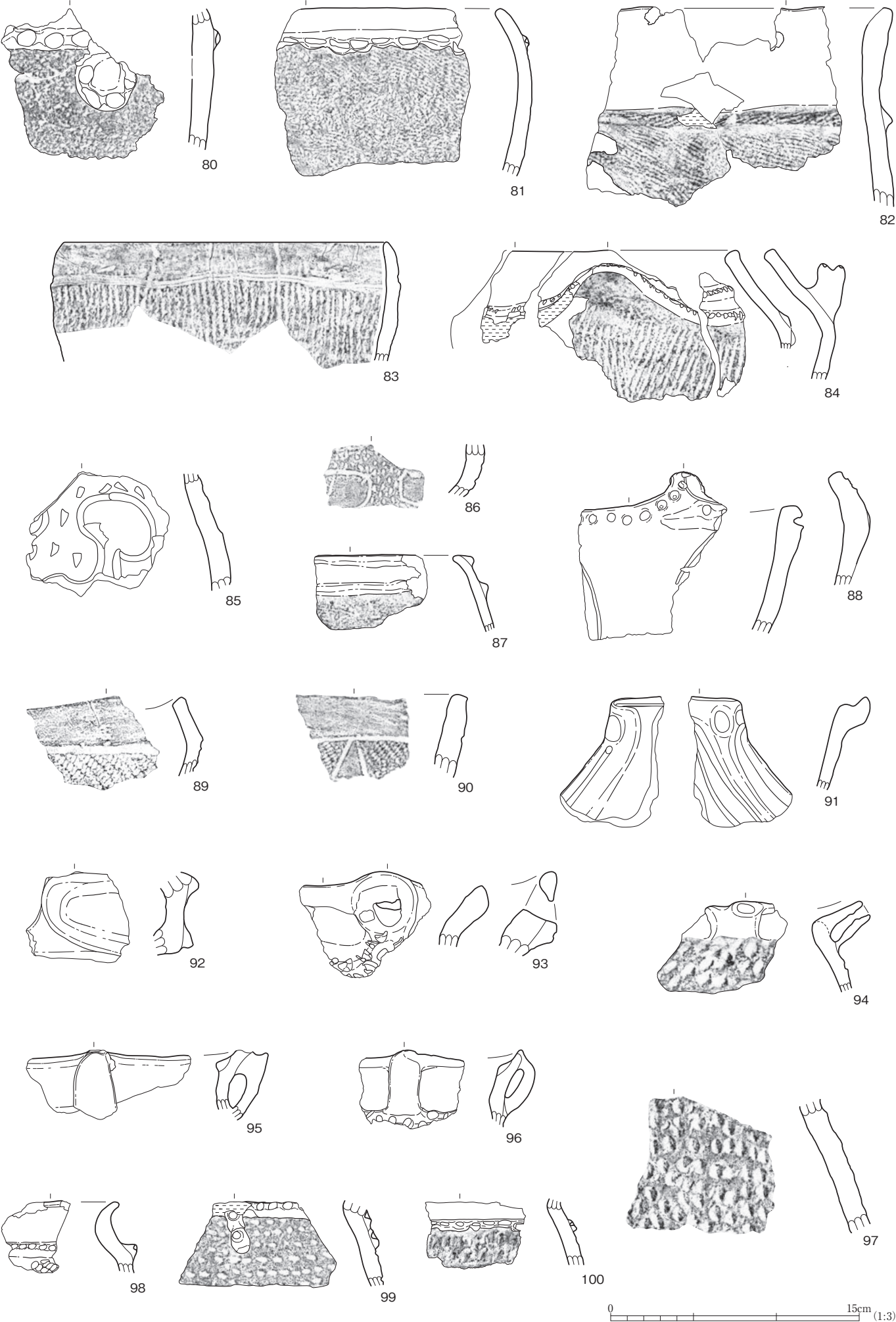
SD327



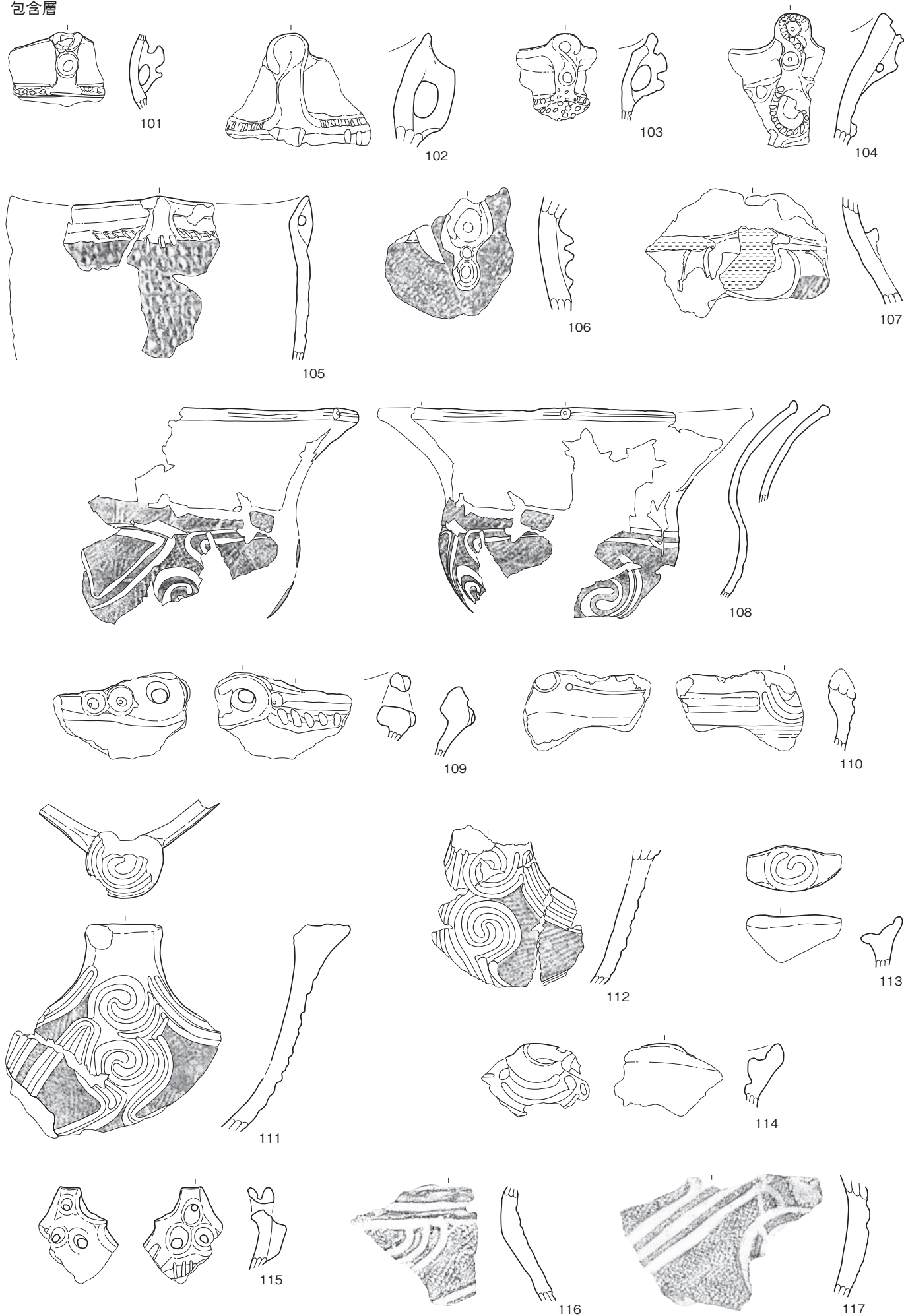
包含層



包含層



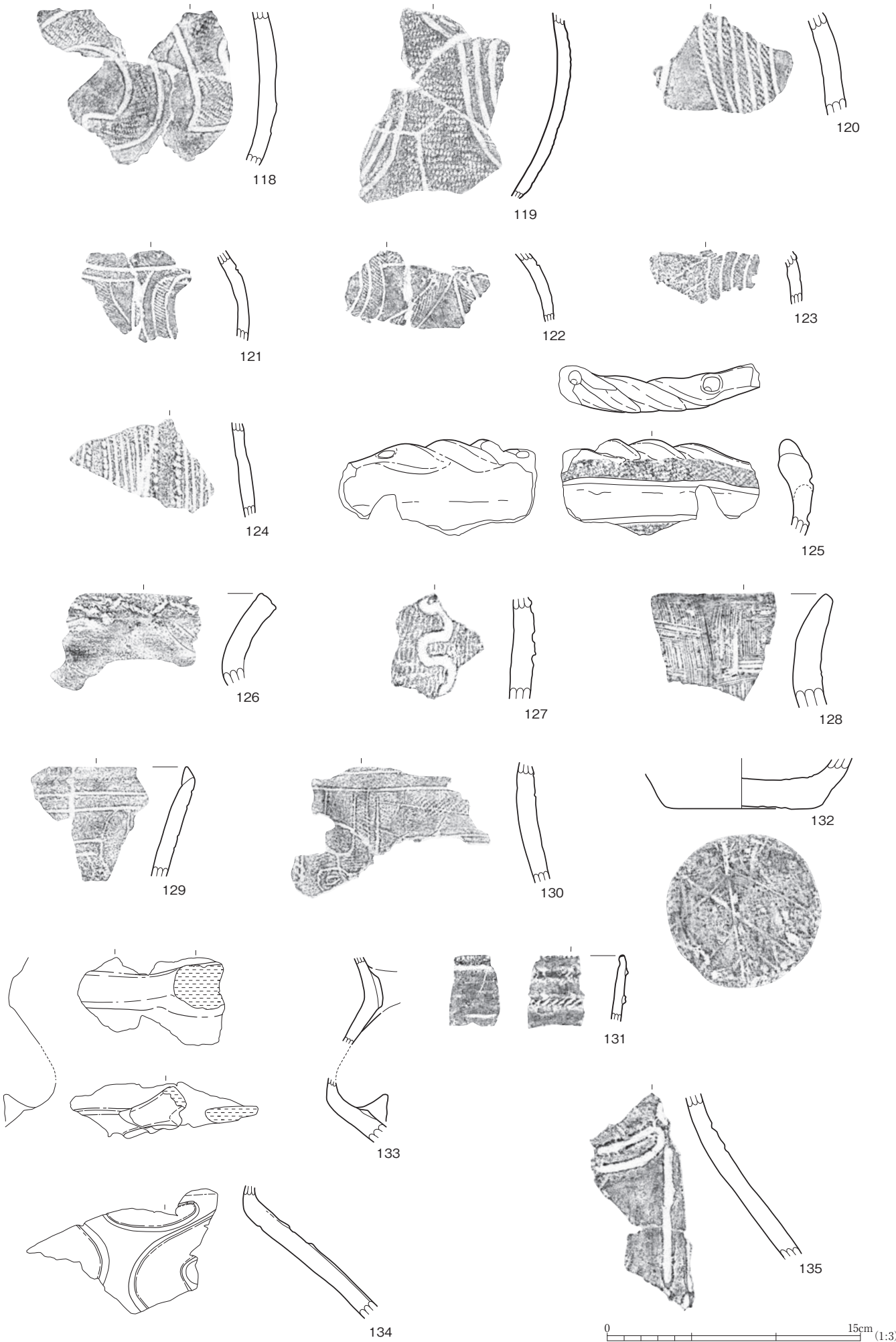
包含層



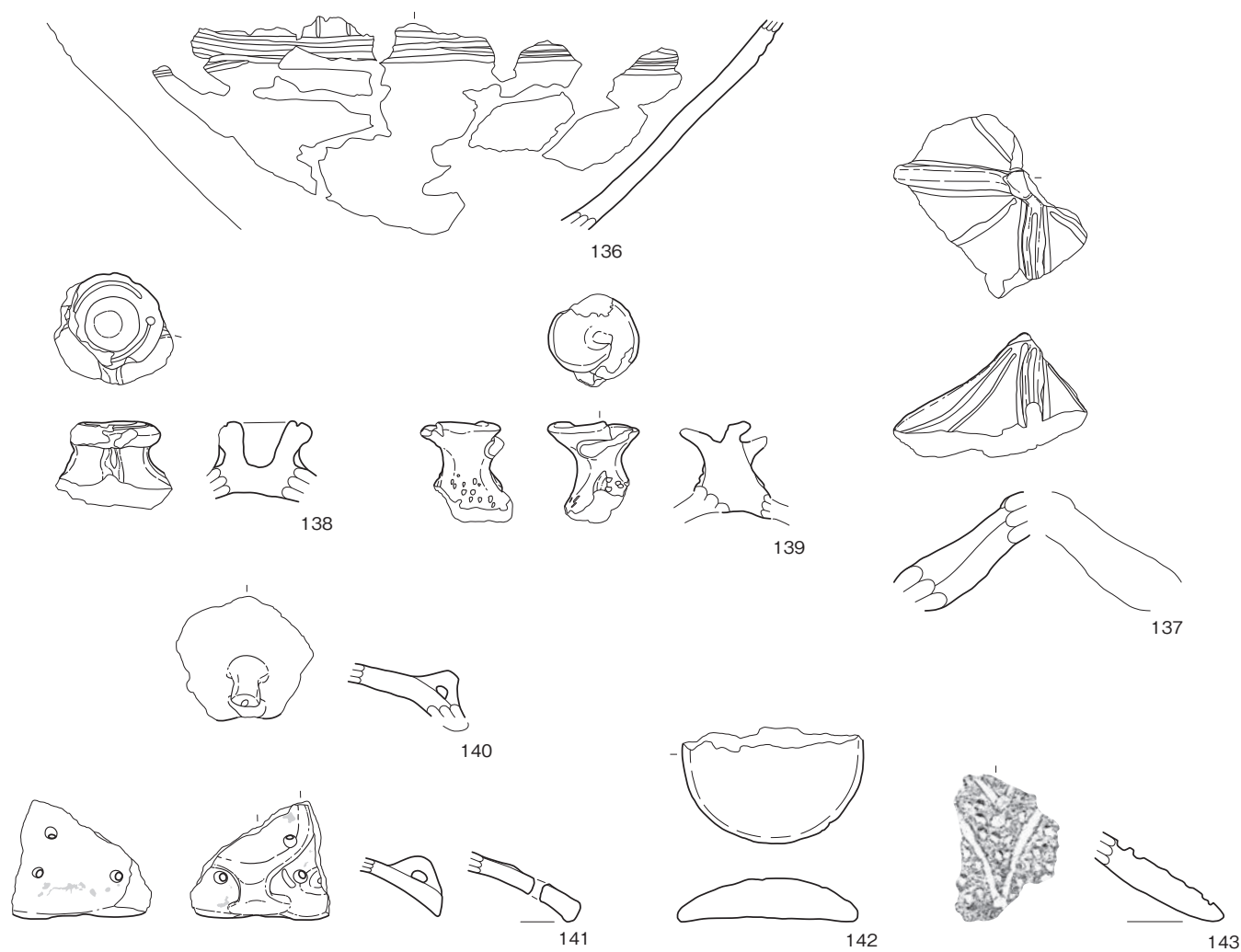
0 (その他) 15cm (1:3)

0 (108) 20cm (1:4)

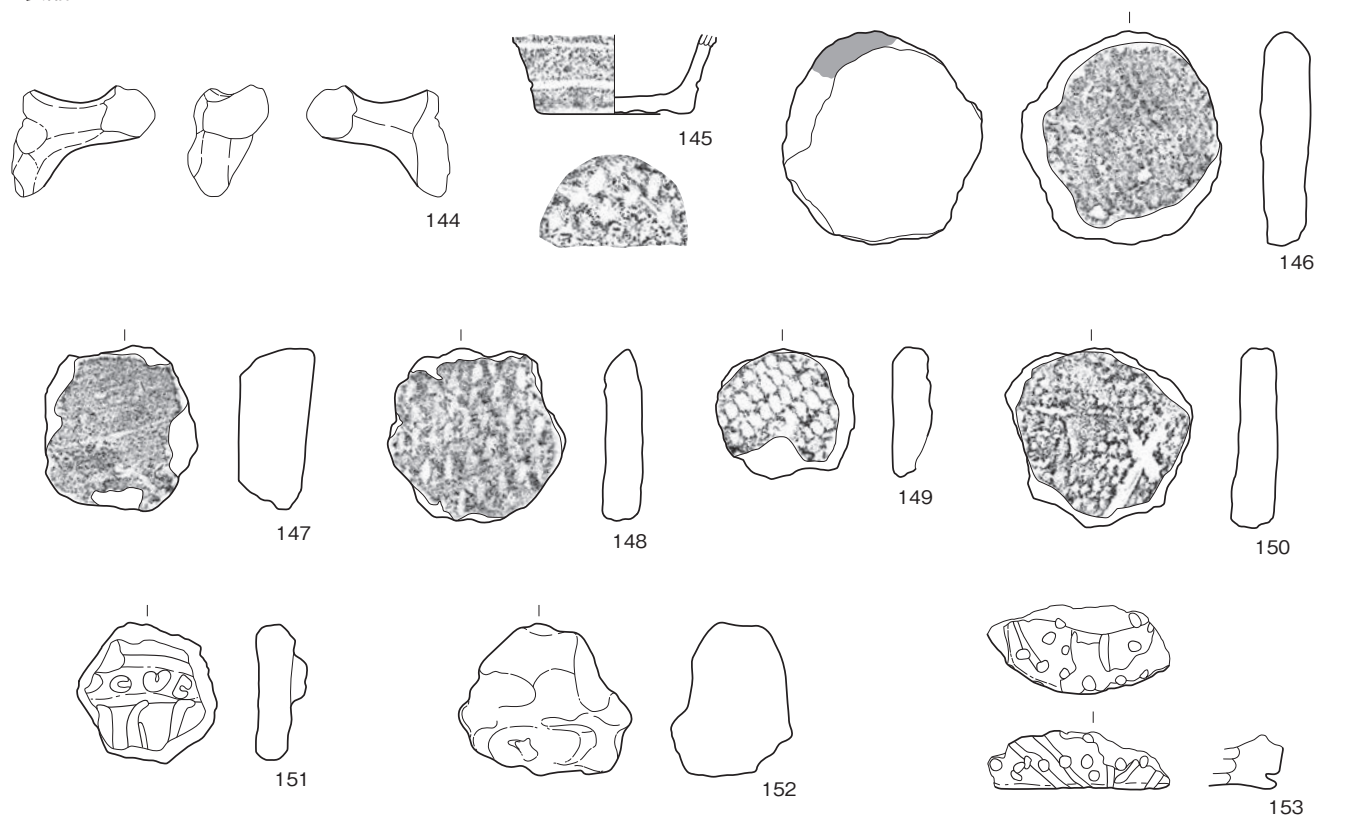
包含層



包含層



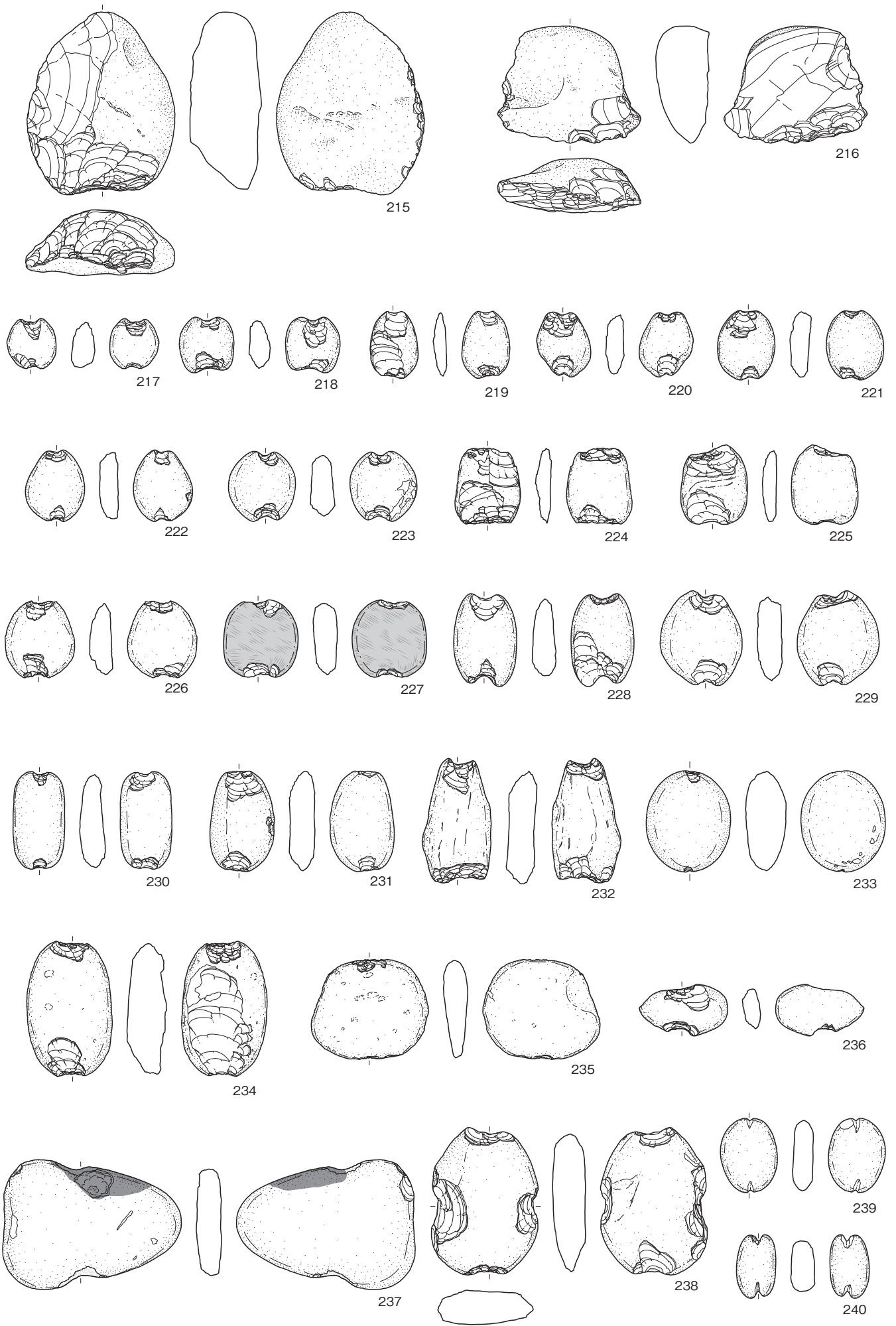
土製品

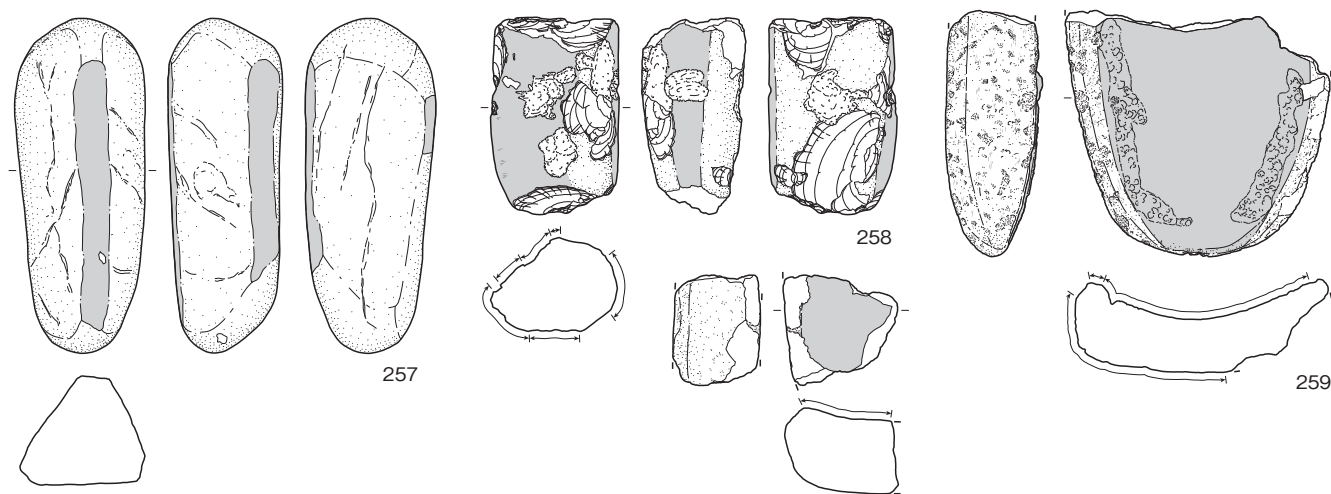
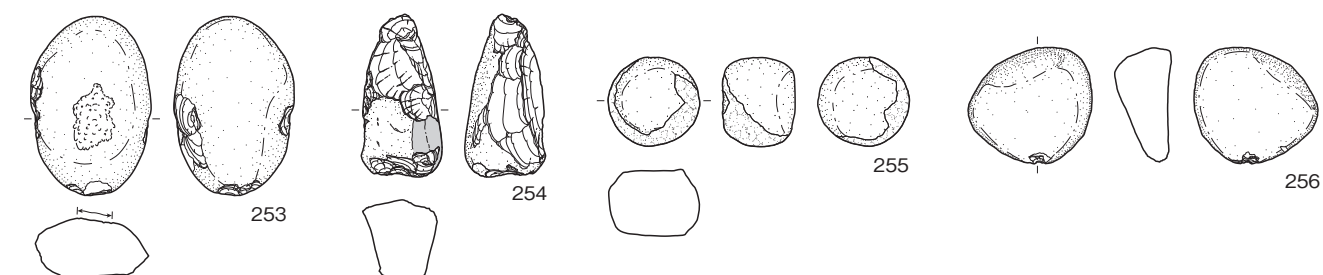
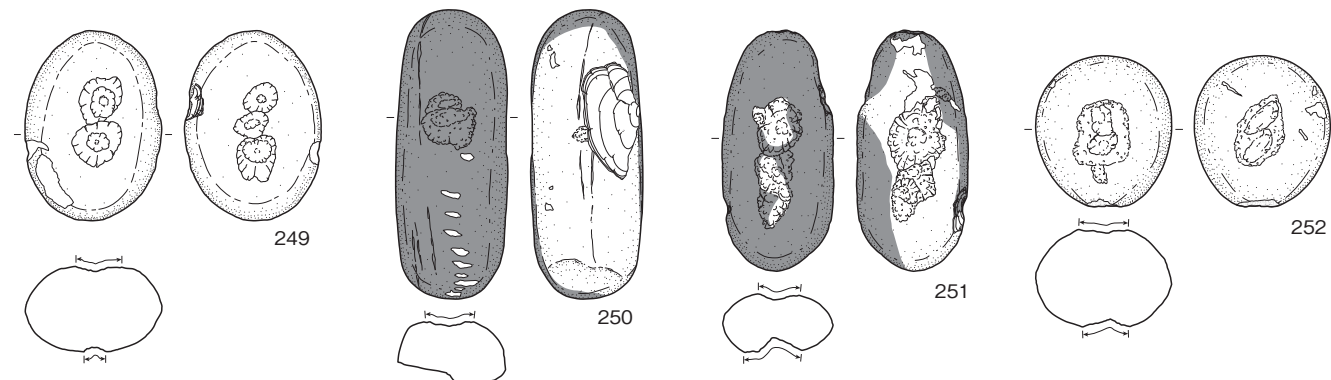
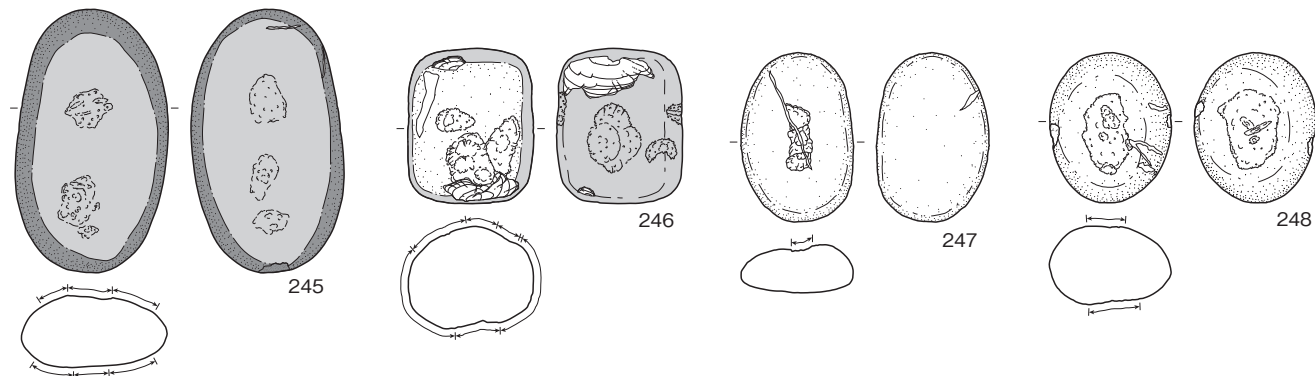
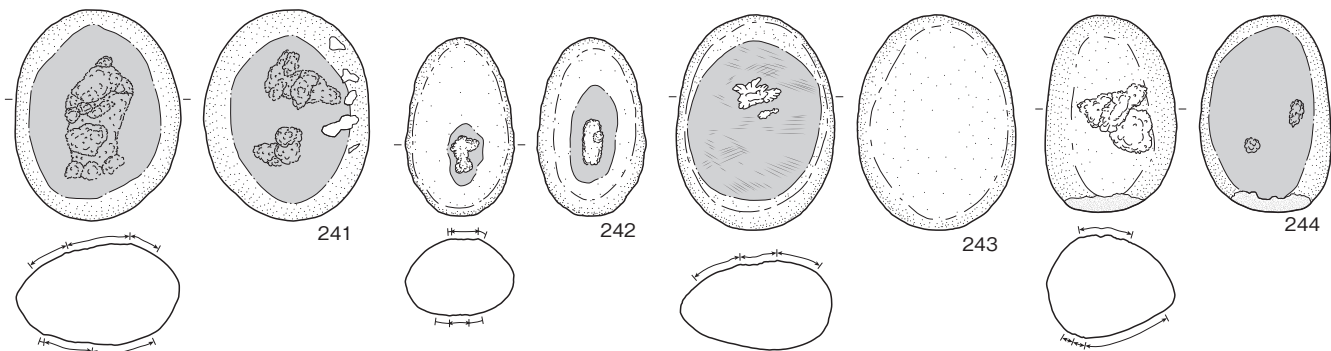


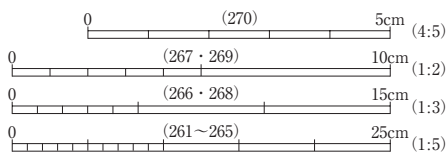










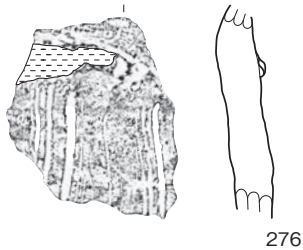


SI4

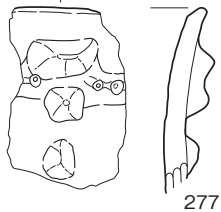


271

SB4

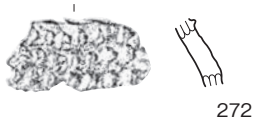


276

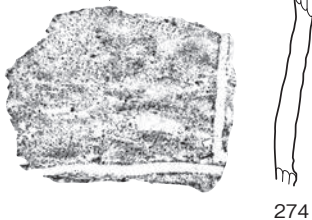


277

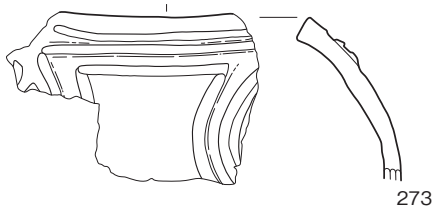
SB2



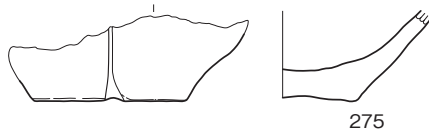
272



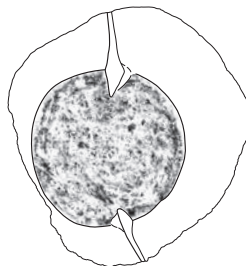
274



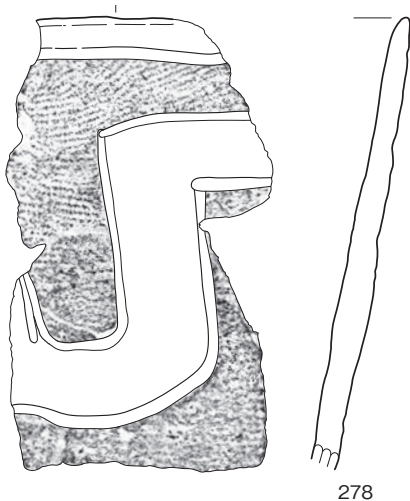
273



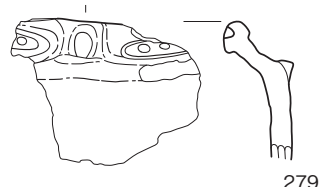
275



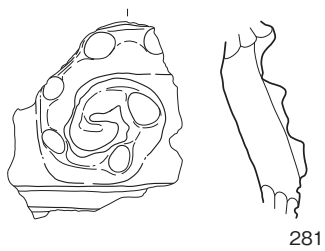
SK406



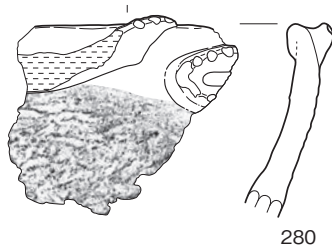
278



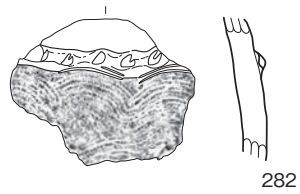
279



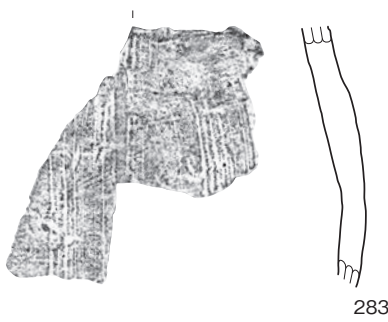
281



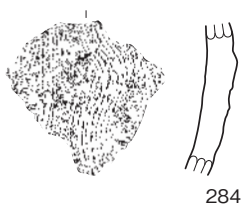
280



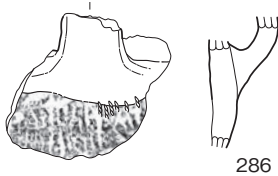
282



283



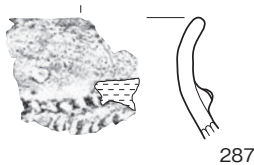
284



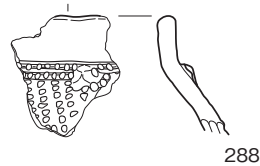
286



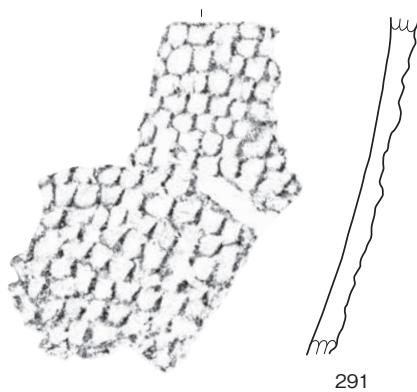
285



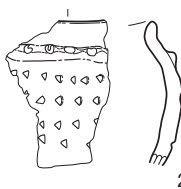
287



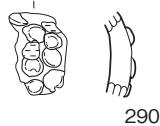
288



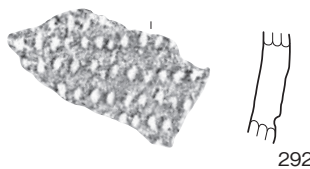
291



289



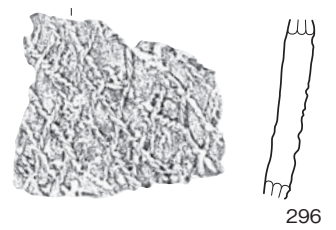
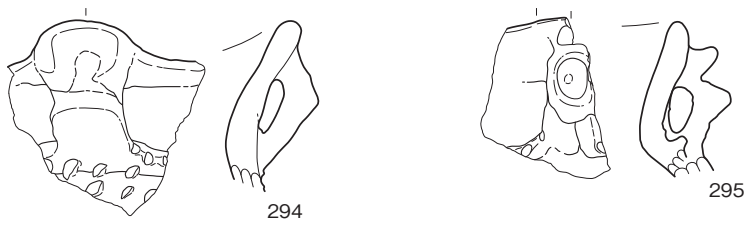
290



292

0 15cm (1:3)

SK406

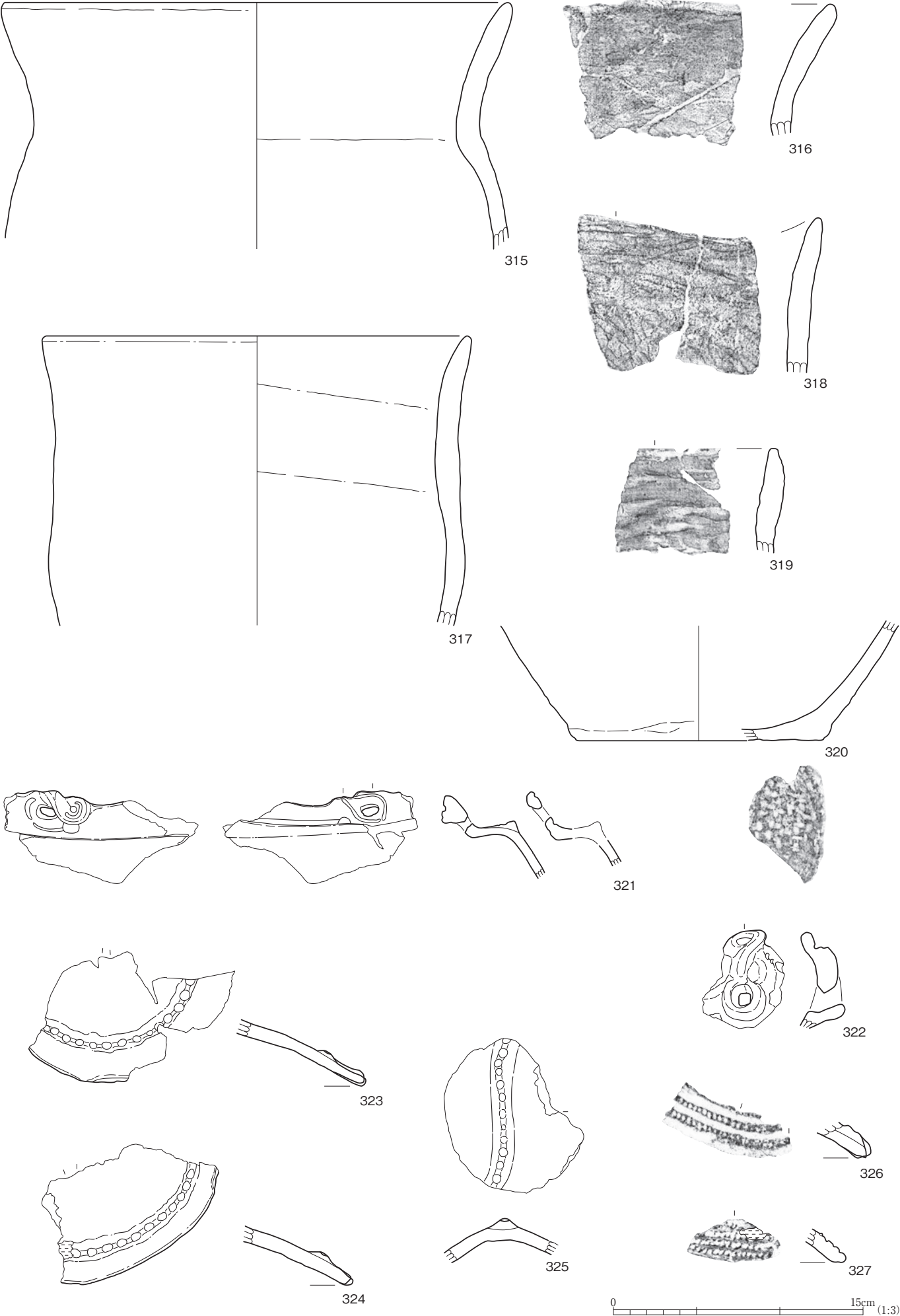




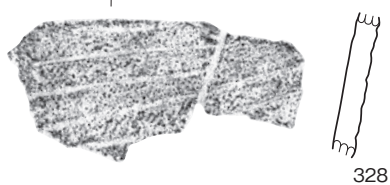
SK406



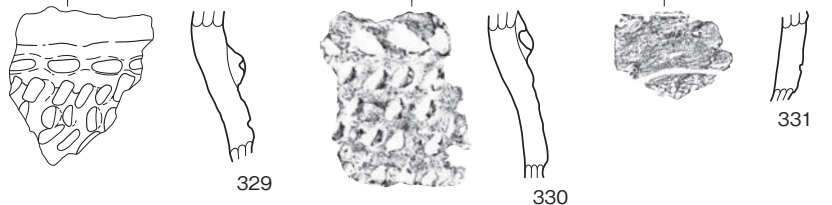
SK406



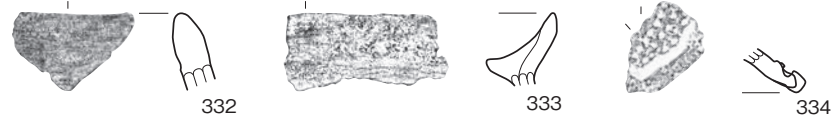
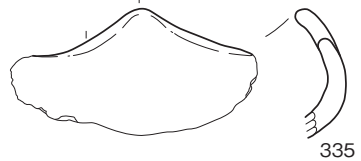
SK410



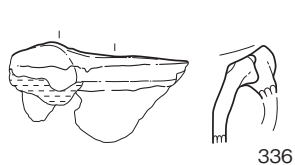
SK419



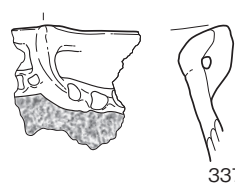
P407



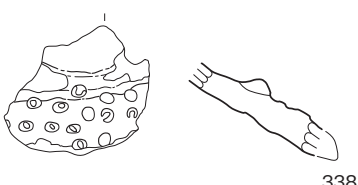
P413



P420



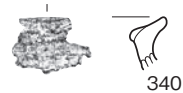
P422



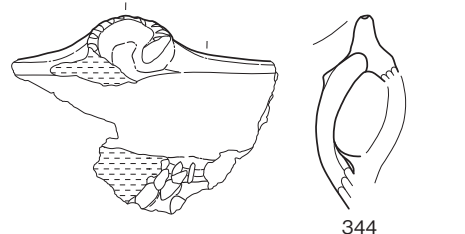
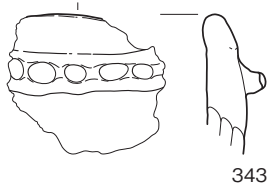
P423



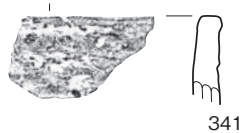
P424



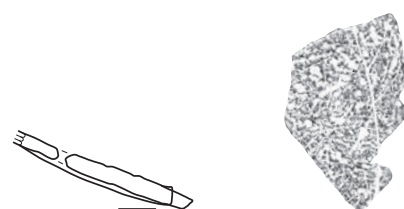
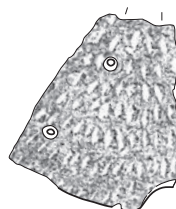
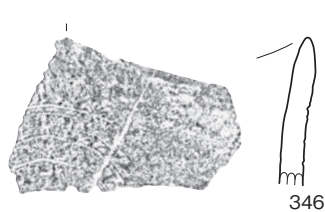
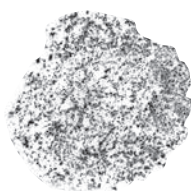
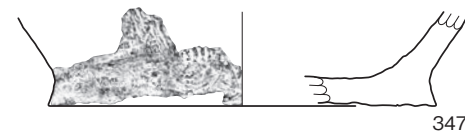
P440



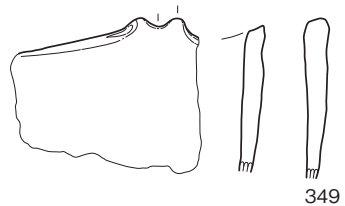
P430



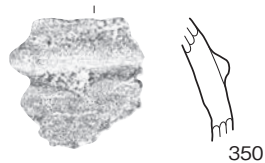
P437



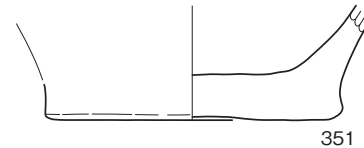
P476



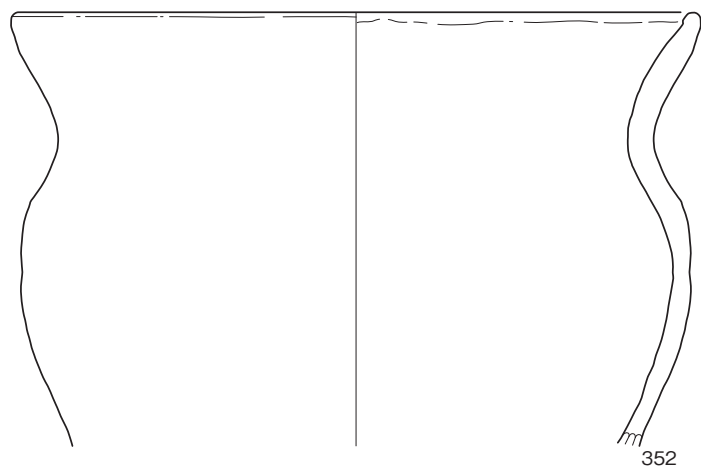
P491



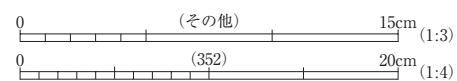
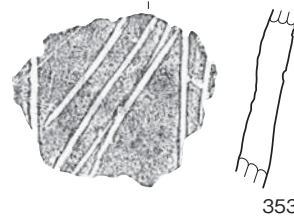
P495



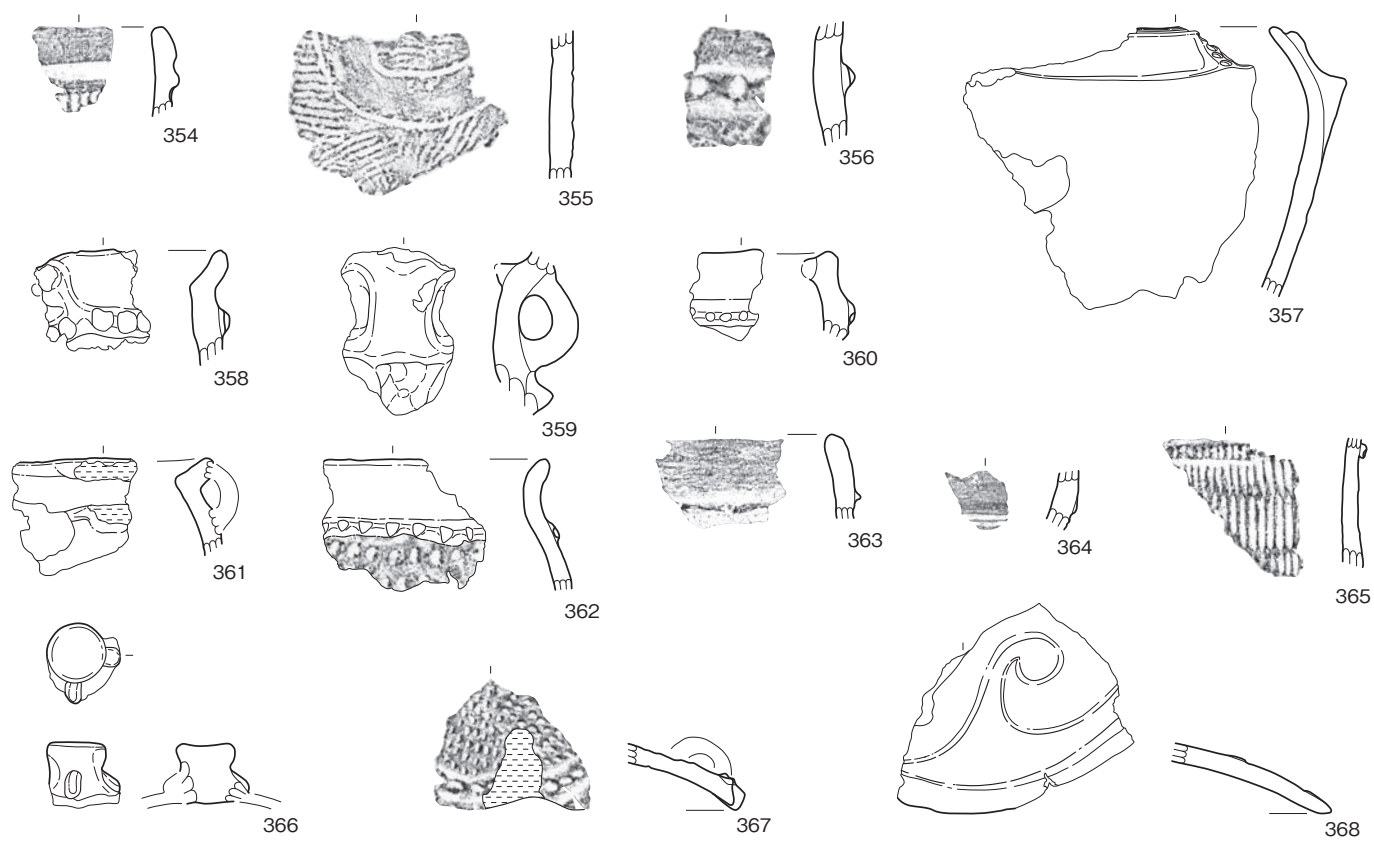
P497



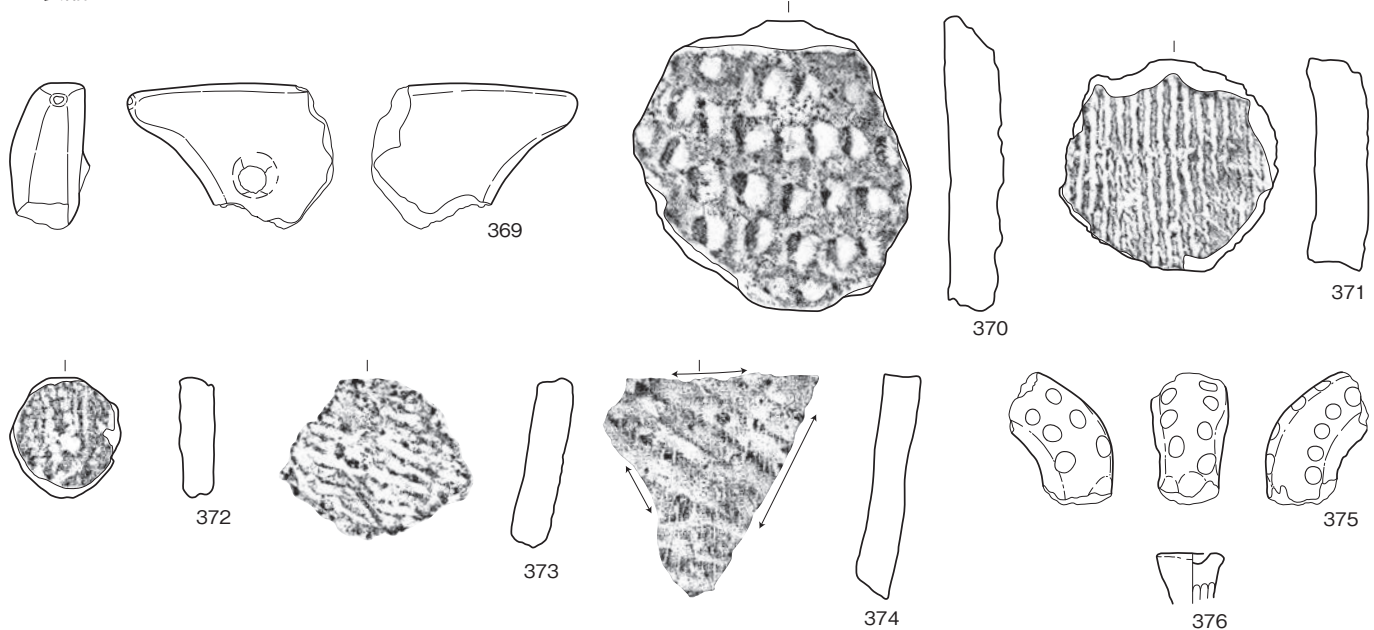
P511



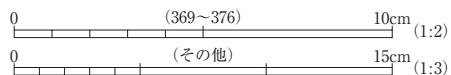
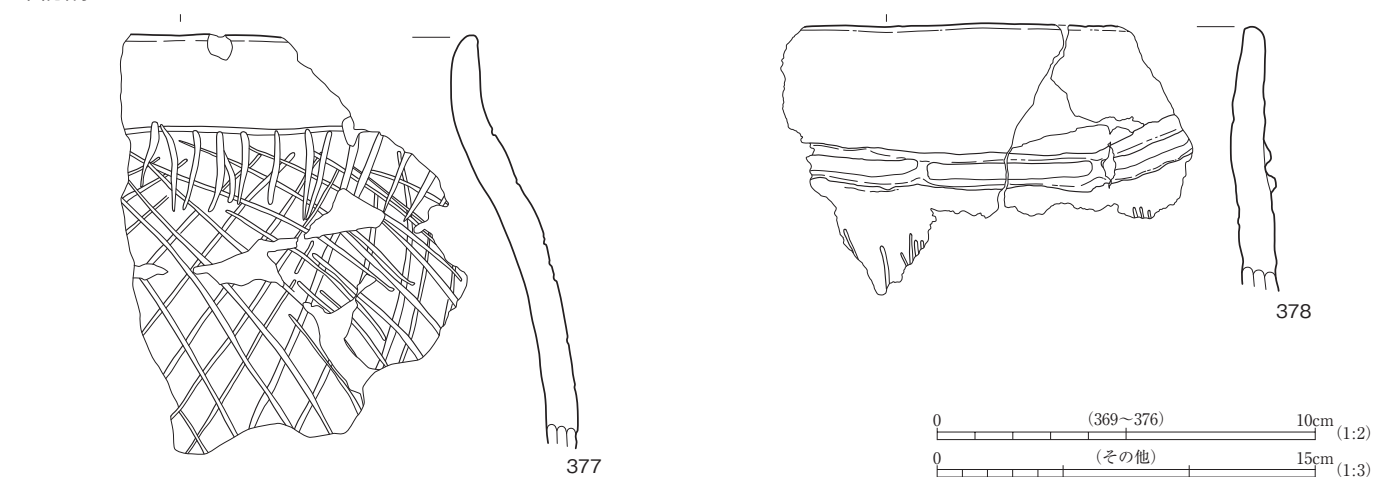
包含層

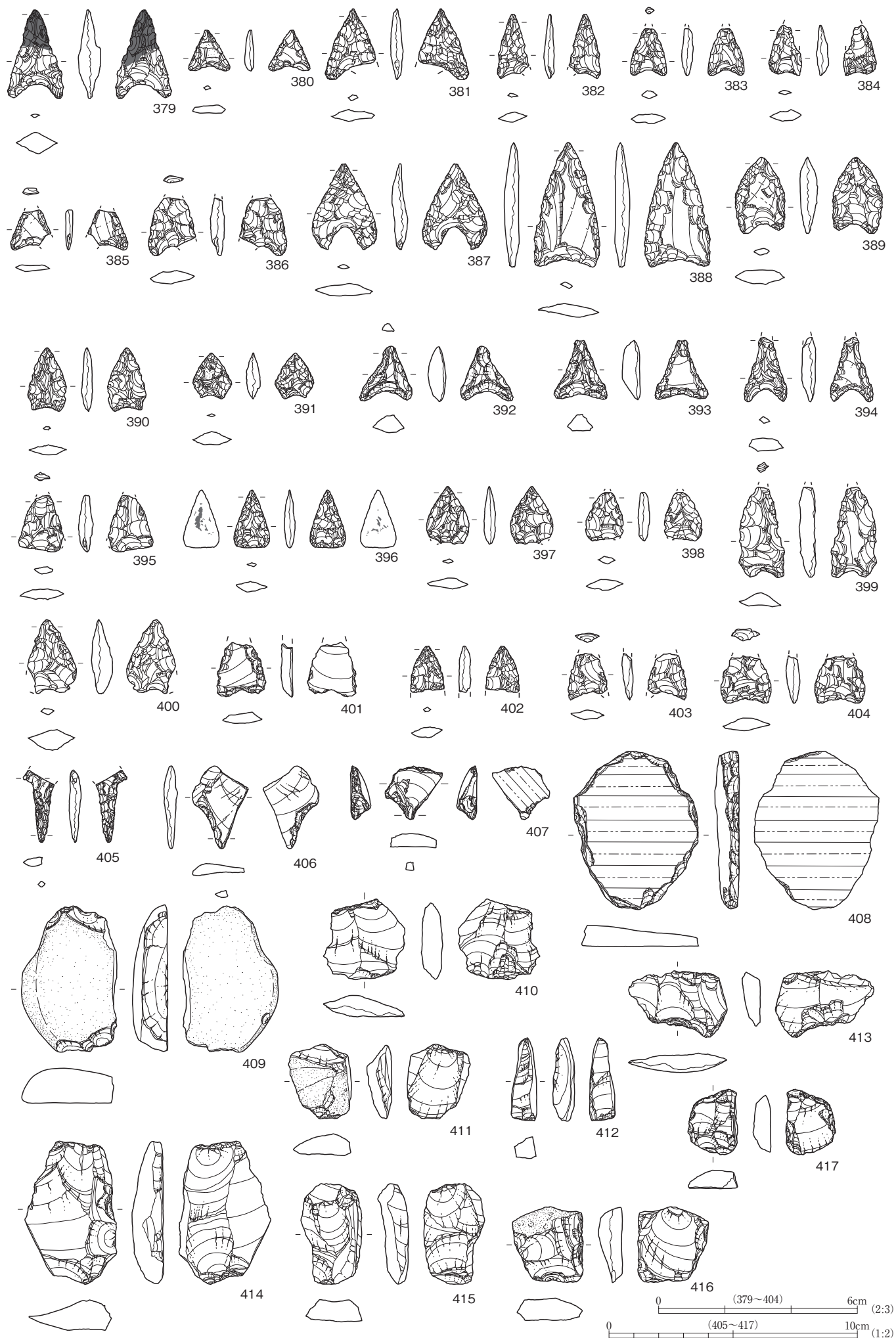


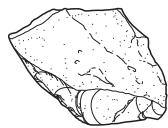
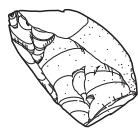
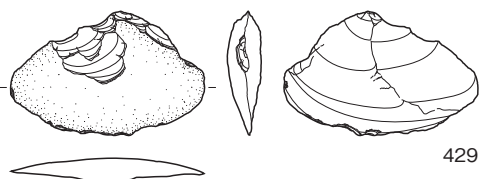
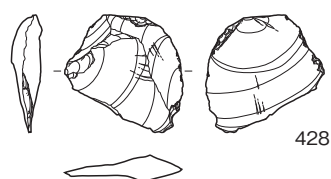
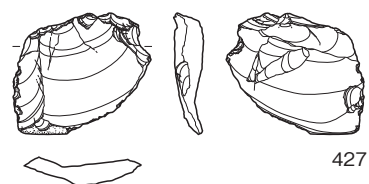
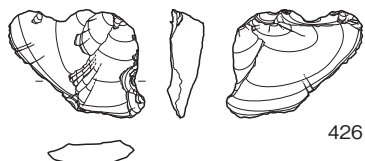
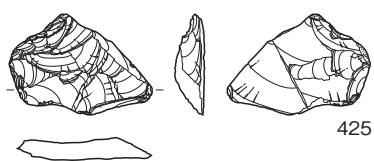
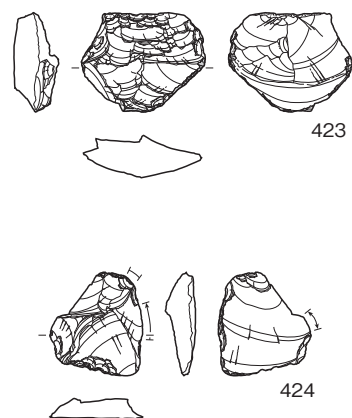
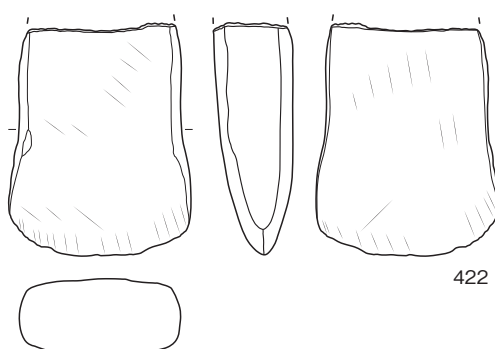
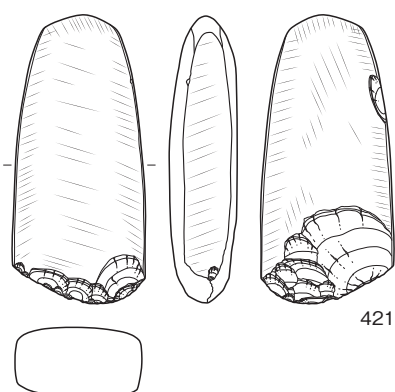
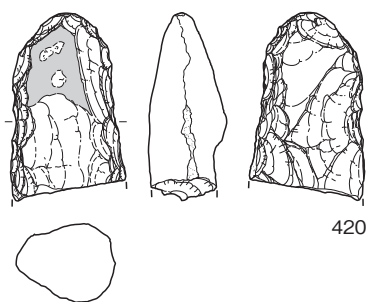
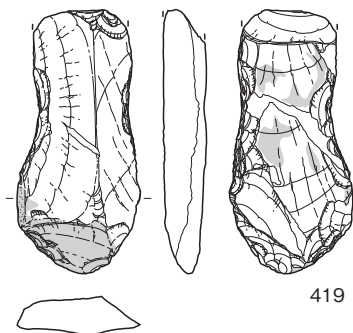
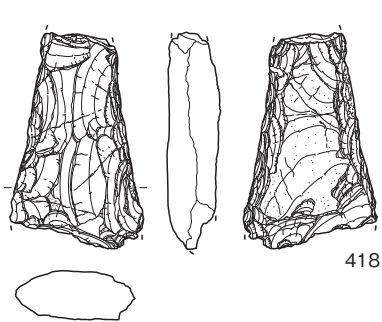
土製品



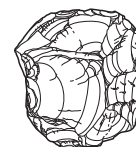
確認調査







431



432





0 (433~435 · 443) 15cm (1:3)
 0 (436 · 437) 20cm (1:4)
 0 (438~442) 25cm (1:5)



調査区全景 上から（右が北）



A区9～16グリッド完掘 上から（左が北）



SI333 完掘 上から (左が北)



SI333 炉検出状況 西から



SI333 炉断面 南東から



SI333-P85 断面 西から



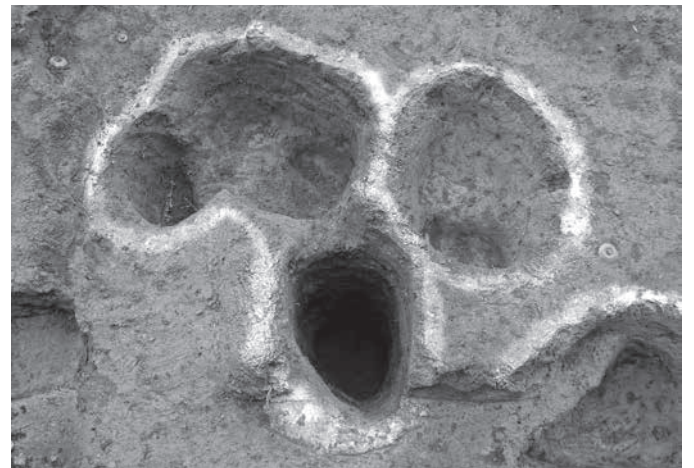
SI333-P85 完掘 東から



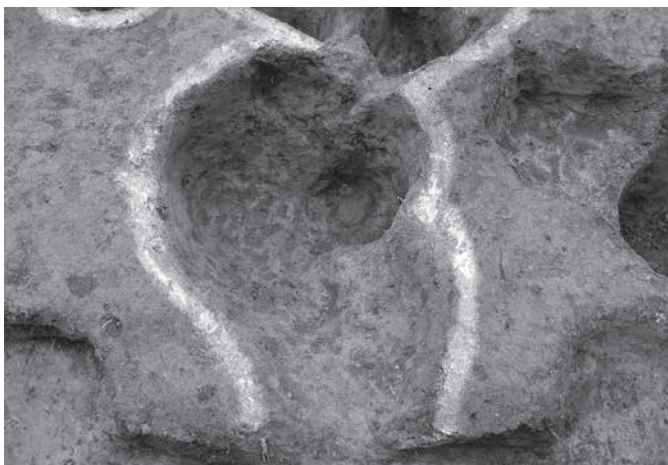
SI1・SI2・SB1 完掘 上から(左が北)



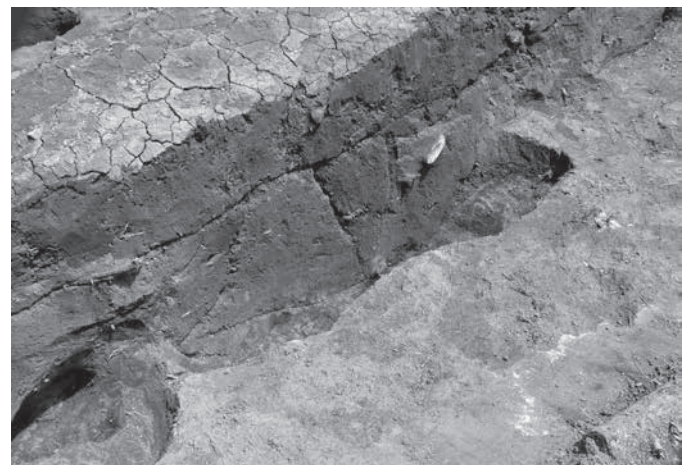
SI1-P125 断面 南から



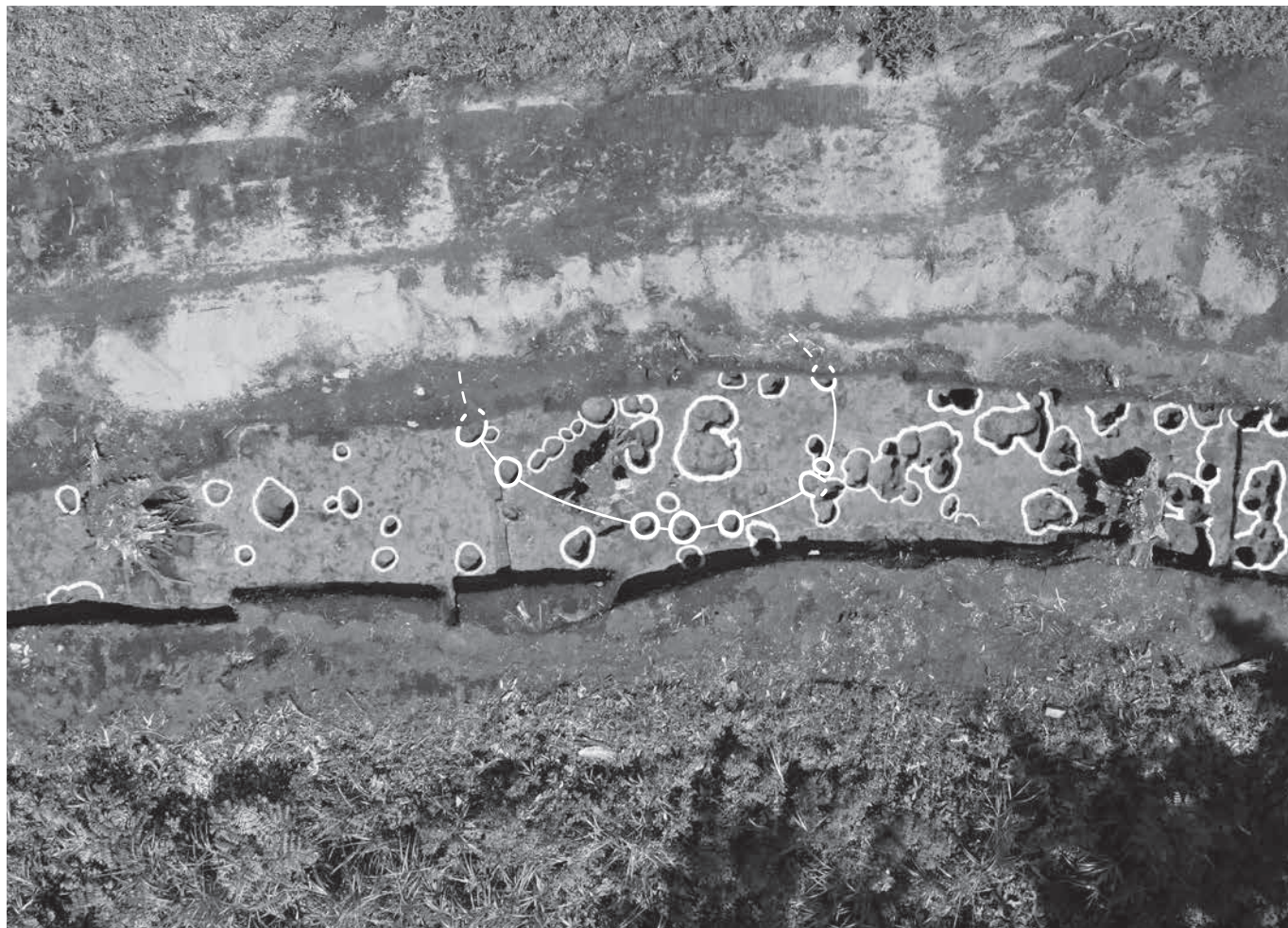
SI1-P125・P126・P337 完掘 西から



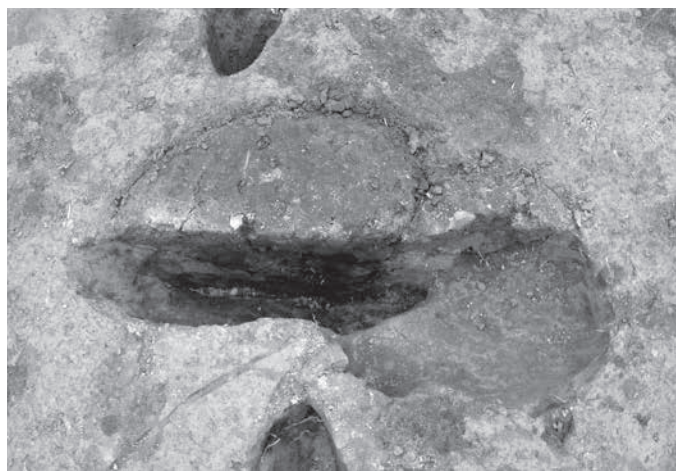
P138 完掘 西から



SI2-P191 断面 南から



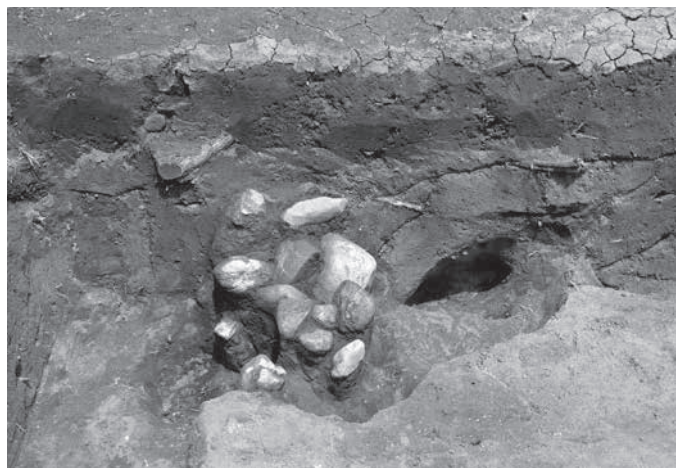
SI3 完掘 上から (左が北)



P229・SI3-P230 断面 南東から



SB1-P180・P181 断面 南東から



SB1-P192 断面 南から



SH341 断面 西から



SH346 検出状況 東から



SH347 断面 西から



SK49 断面 南東から



SK49 完掘 西から



SK54 断面 北西から



SK54 完掘 東から



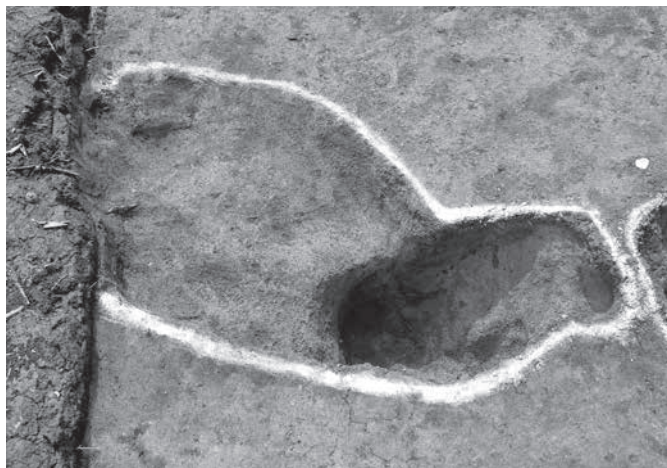
SK67・SK68 断面 南東から



SK67・SK68 完掘 西から



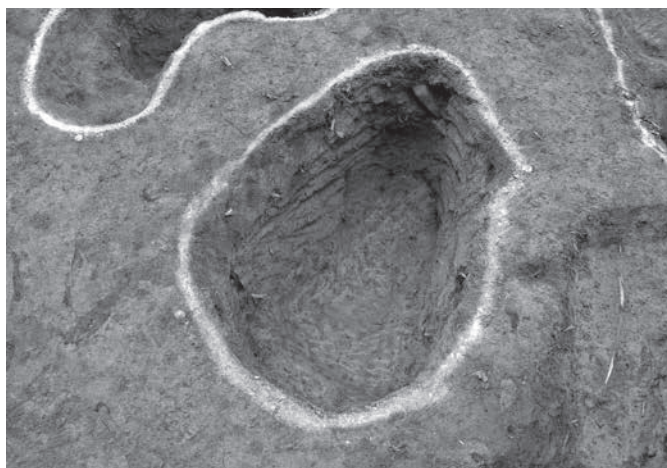
P89・SK90 断面 南から



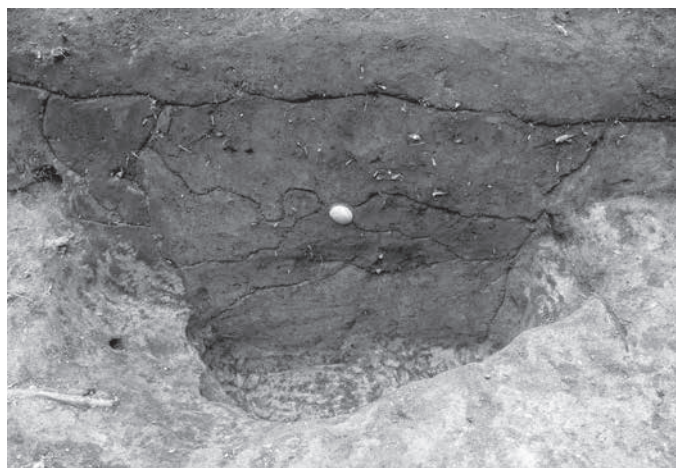
P89・SK90 完掘 北から



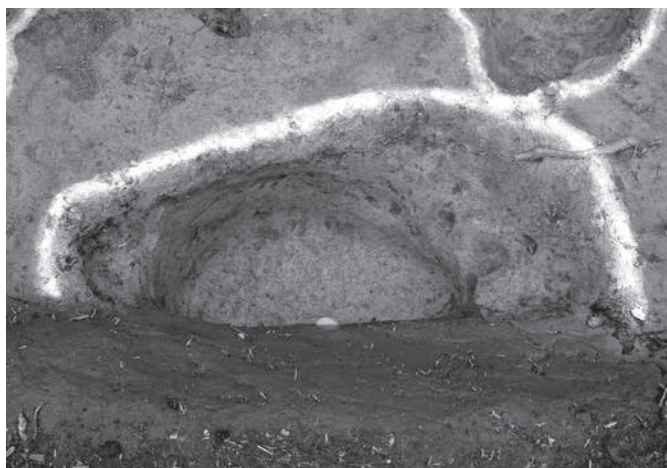
SK95 断面 東から



SK95 完掘 東から



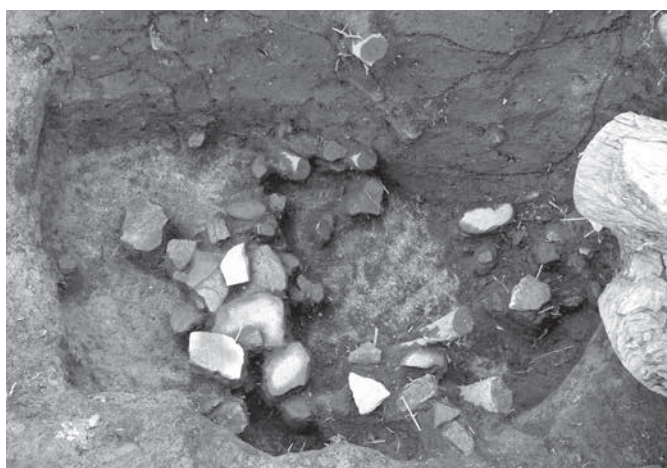
SK150 断面 西から



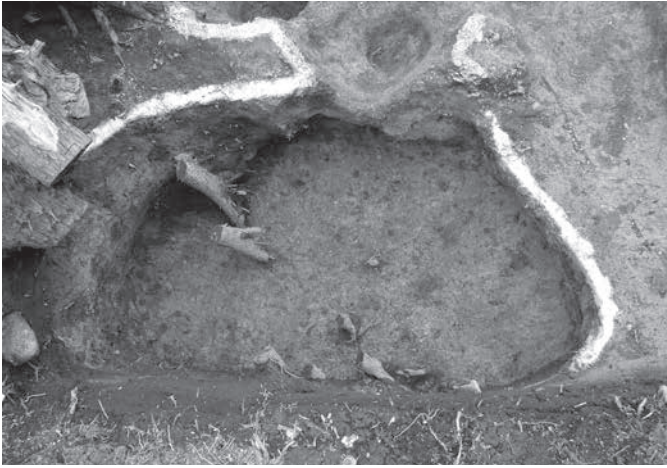
SK150 完掘 東から



SK197 断面 東から



SK197 遺物出土状況 東から



SK197 完掘 西から



P100 断面 南から



P100・P101 完掘 西から



P173・P174 断面 南から



P288 断面 東から



P288 完掘 東から



SD327 西壁断面 南東から



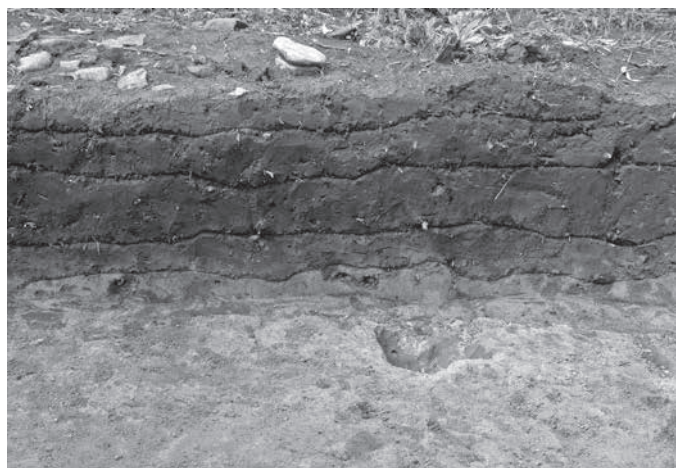
SD327 南壁断面 北から



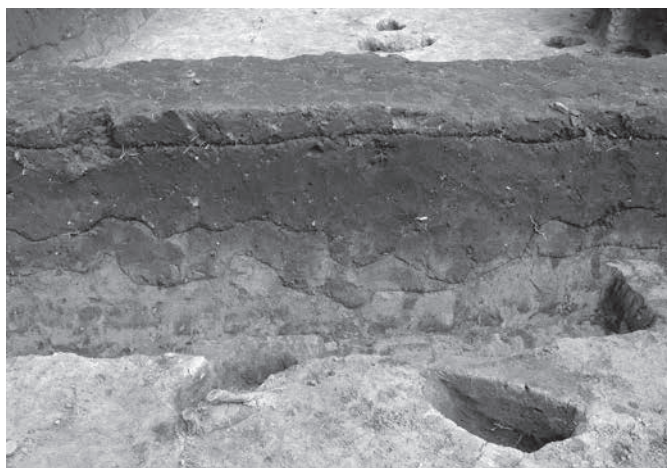
基本層序①断面 東から



基本層序②断面 南から



基本層序③断面 東から



基本層序④断面 南から



基本層序⑤断面 東から



基本層序⑥断面 東から



包含層掘削作業状況 南から



遺構精査作業状況 東から



SI4 完掘 北西から



SI4-P478・P479 断面 南から



SI4-P512 断面 西から



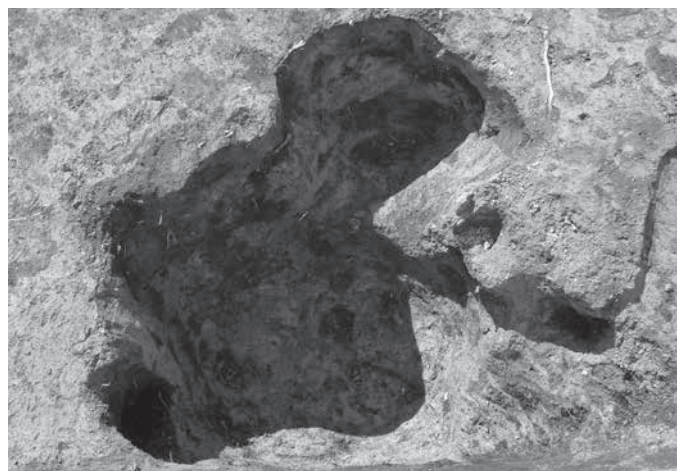
SK480 断面 西から



SK480 完掘 北西から



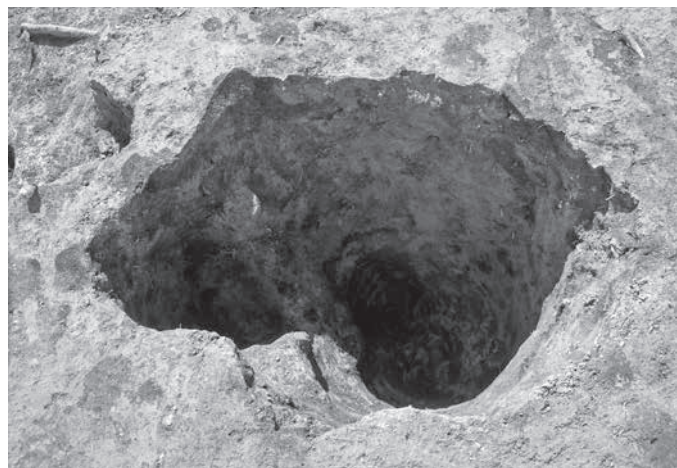
SB2・SB3 付近完掘 北から



SB2-P436 完掘 東から



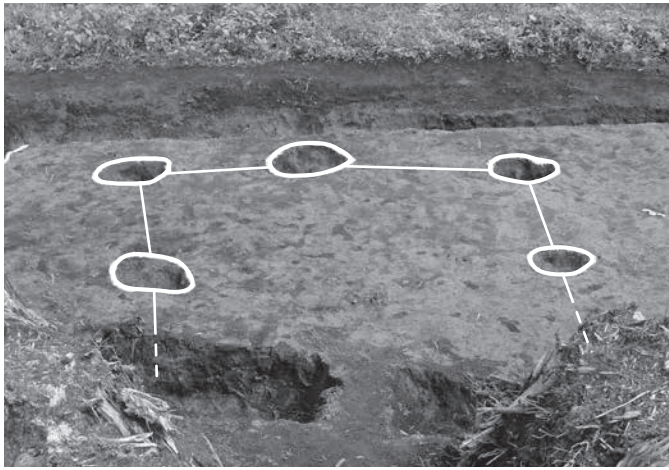
SB2-P470・P550 断面 東から



SB2-P470 完掘 東から



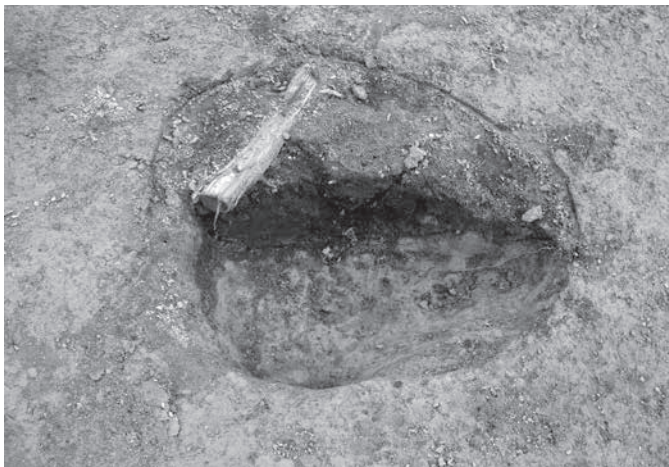
P472・SB2-P474 断面 東から



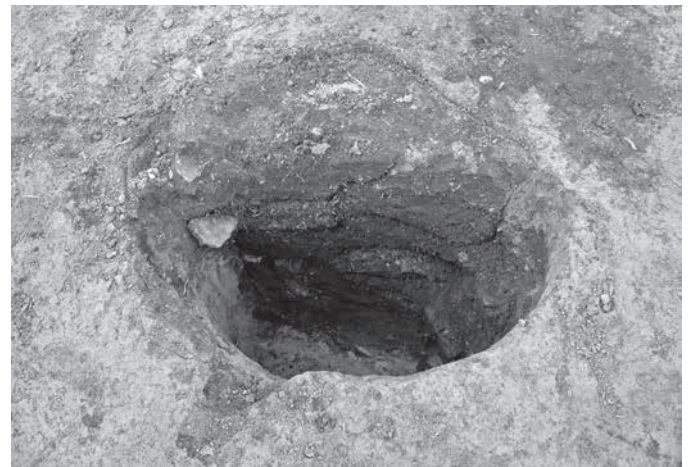
SB4 完掘 西から



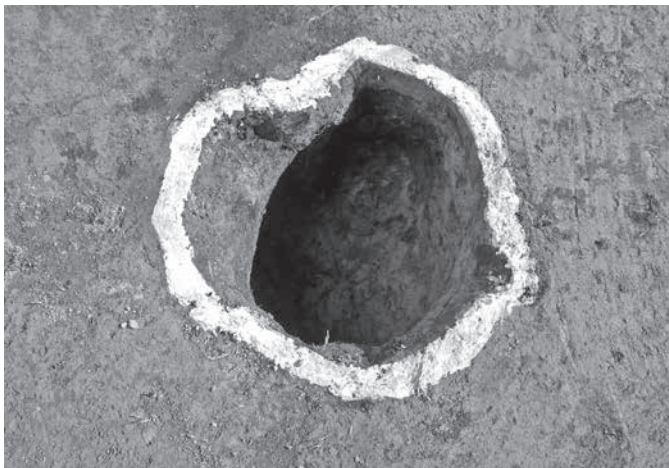
SB4 付近完掘 北から



SB4-P401 断面 南から



SB4-P402 断面 西から



SB4-P402 完掘 北から



SB4-P403 断面 南から



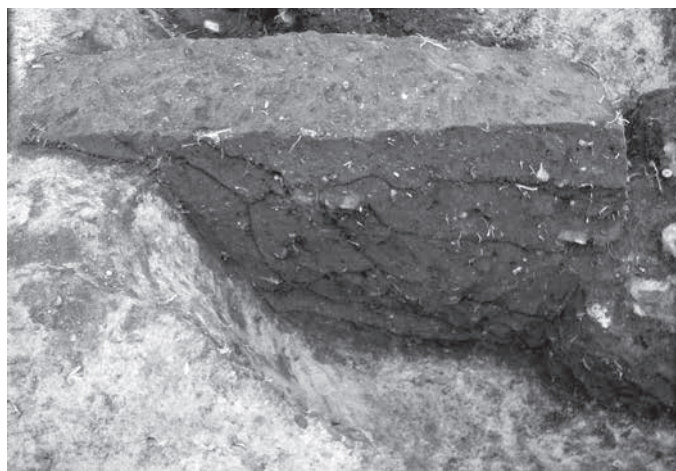
SB4-P404 断面 西から



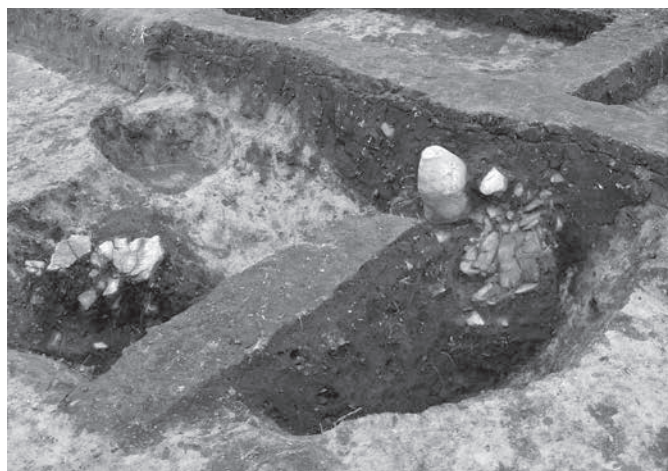
SB4-P405 断面 西から



SK406 断面 (A-A') 西から



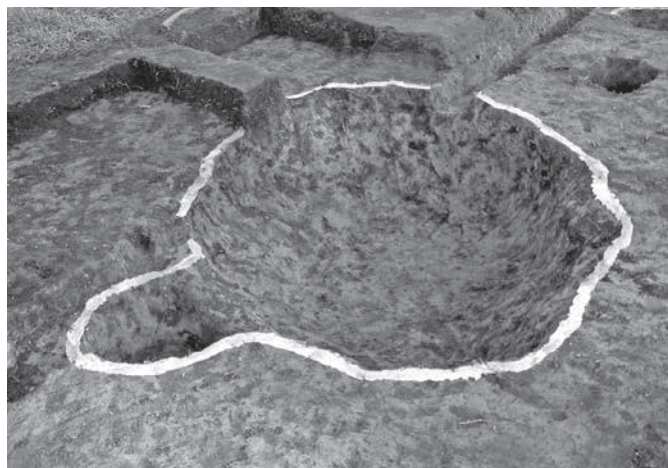
SK406 断面 (B-B') 南から



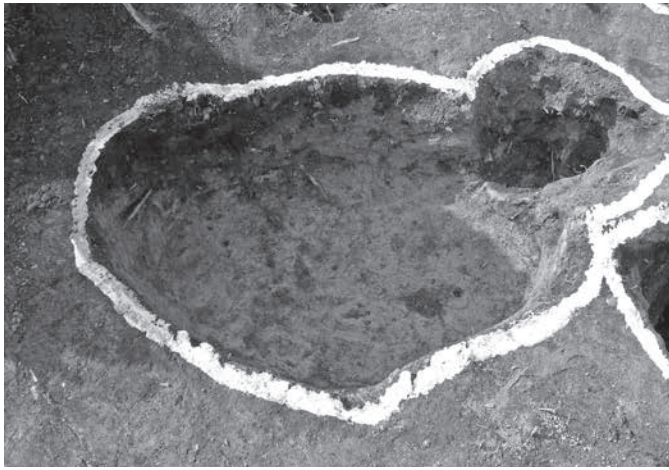
SK406 遺物出土状況 南西から



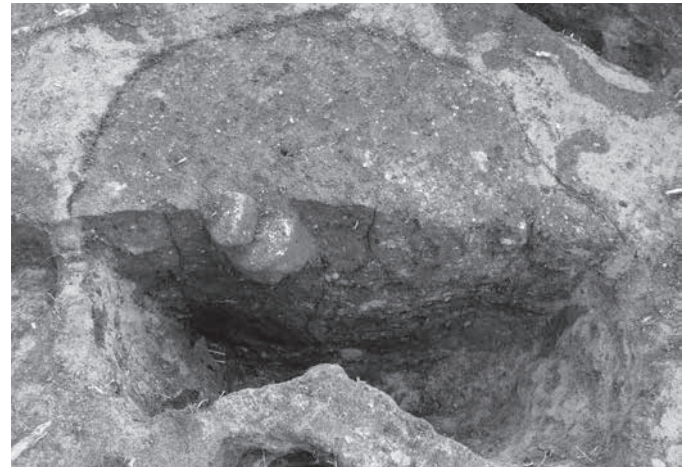
SK406 遺物出土状況 西から



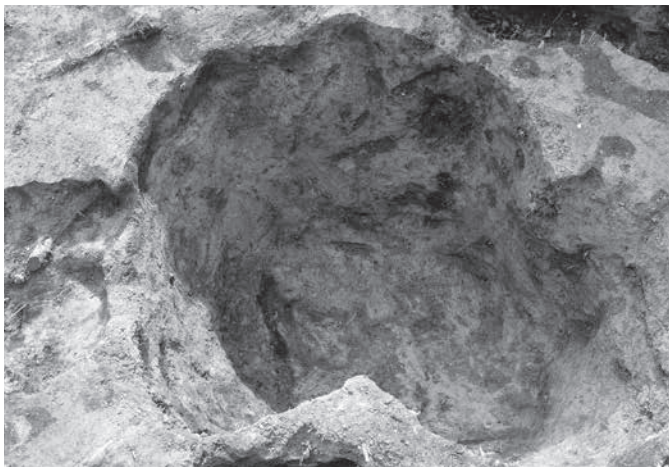
SK406・P549 完掘 北西から



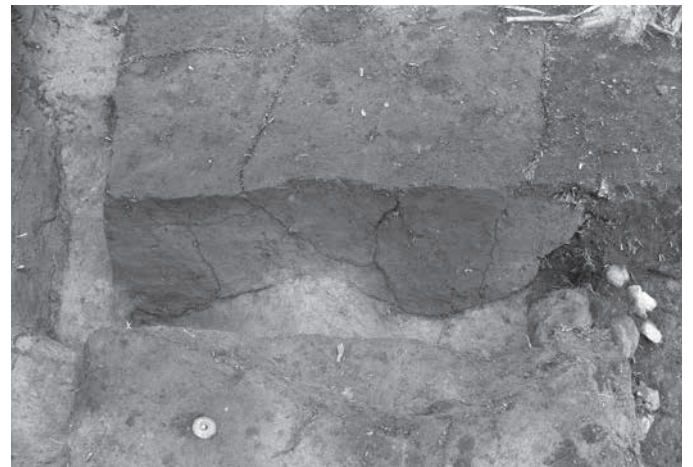
SK410 完掘 南東から



SK419 断面 北から



SK419 完掘 北東から



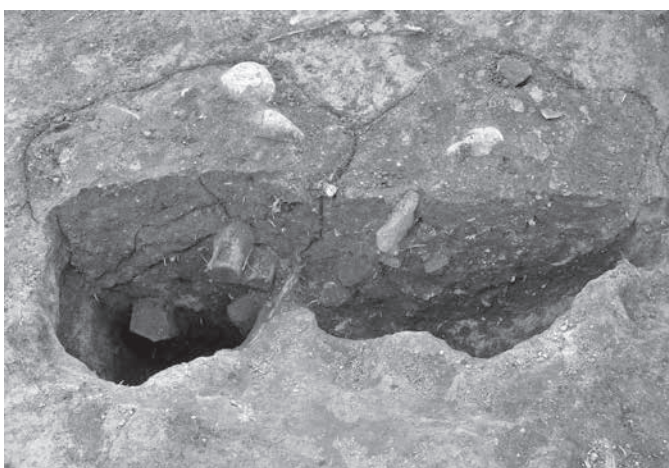
SK524・SK541 断面 南から



SK524・SK541 完掘 北東から



16H・16I・17H・17I グリッド完掘 北から



P413・P531 断面 東から



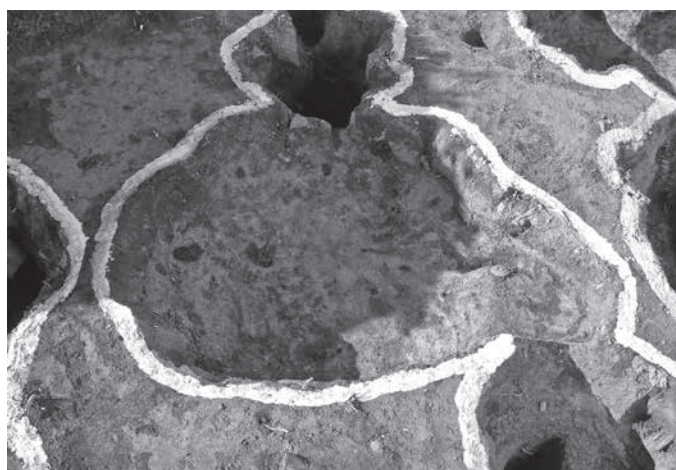
16H・16I グリッド完掘 北から



P422 断面 北から



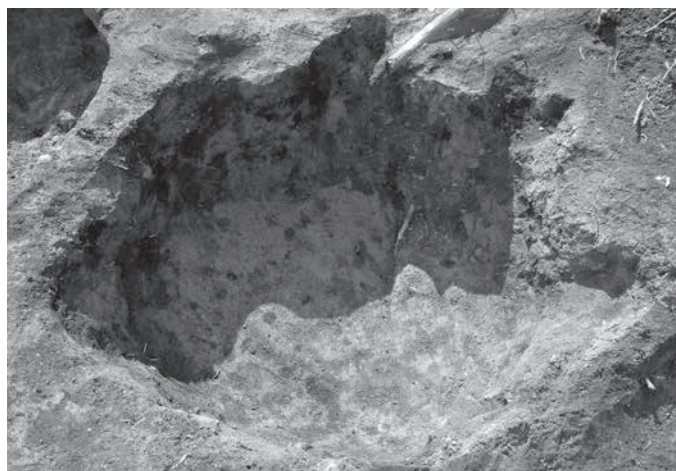
P423 断面 東から



P423・P424 完掘 南から



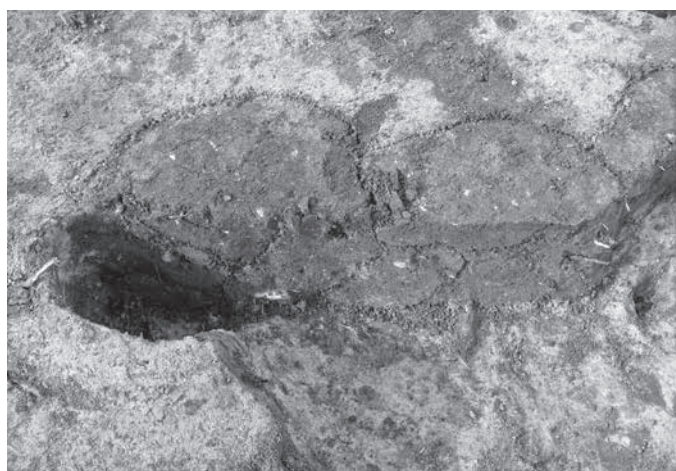
P440 断面 西から



P440 完掘 東から



P471・P495 断面 (A-A') 南西から



P494・P495 断面 (B-B') 南から



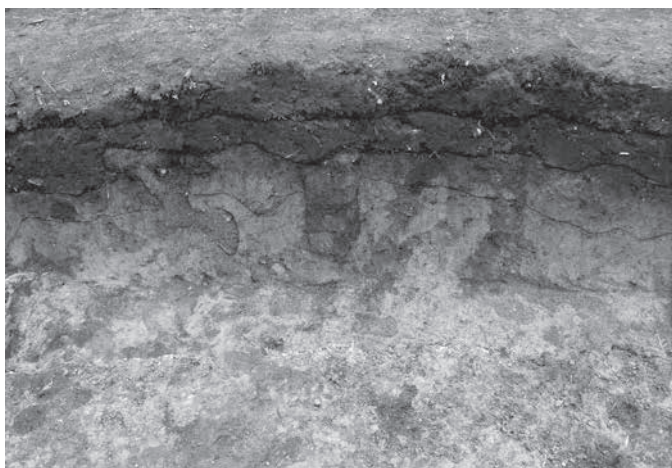
P491・P495 断面 (C-C') 東から



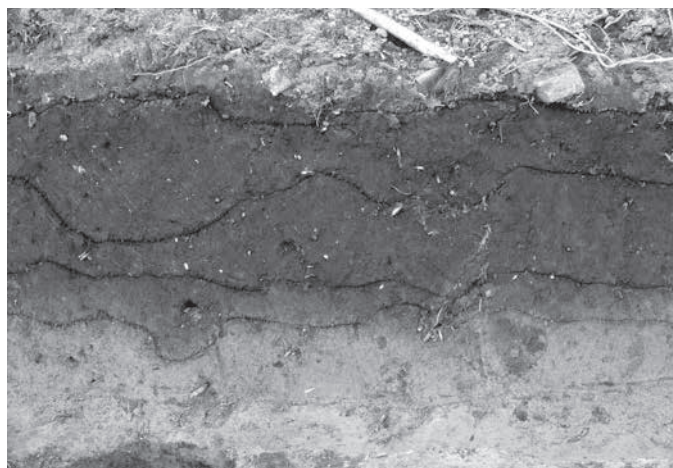
P494・P495 完掘 南から



P497 完掘 東から



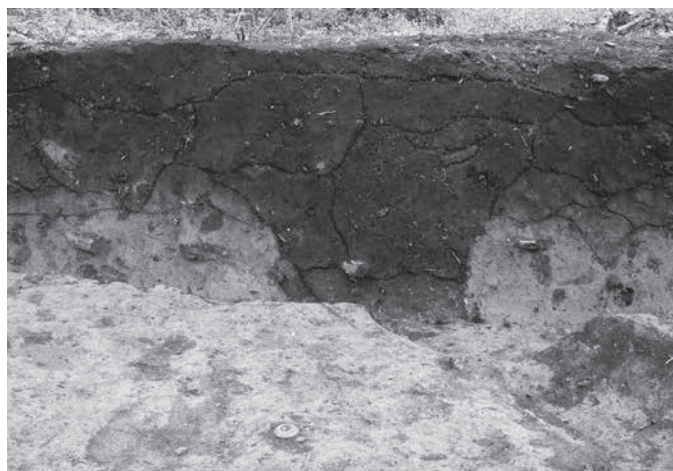
基本層序⑦断面 西から



基本層序⑧断面 東から



調査区西壁断面 東から



調査区南壁(近・現代溝)断面 北から



SK406 掘削状況 西から



調査状況 南から

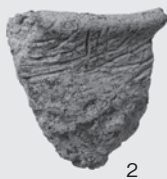
SI333



SH346



SI1



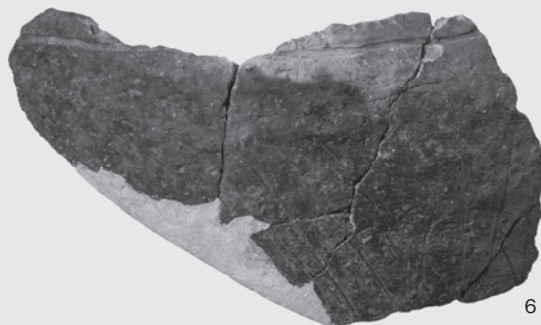
SH341



SH347



SK49



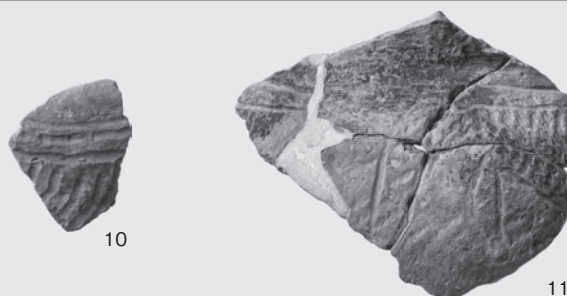
SK54



SK90



SK95



SK197



12



13

P100



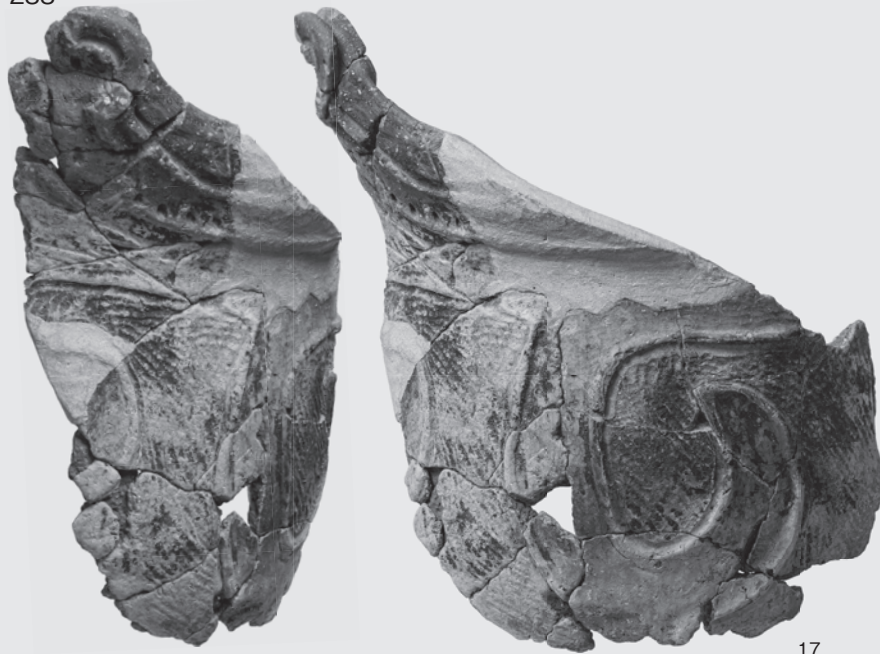
14

P137



15

P288



17

P173



16

SD327



18



21



22



23



19



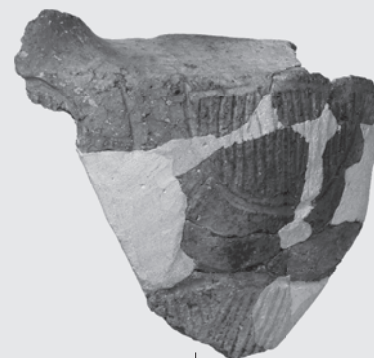
20



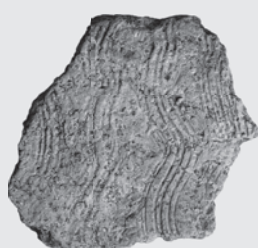
24



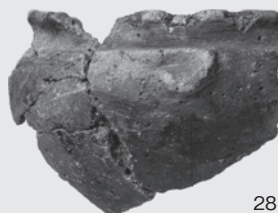
25



26



27



28



29

SD327



SD327

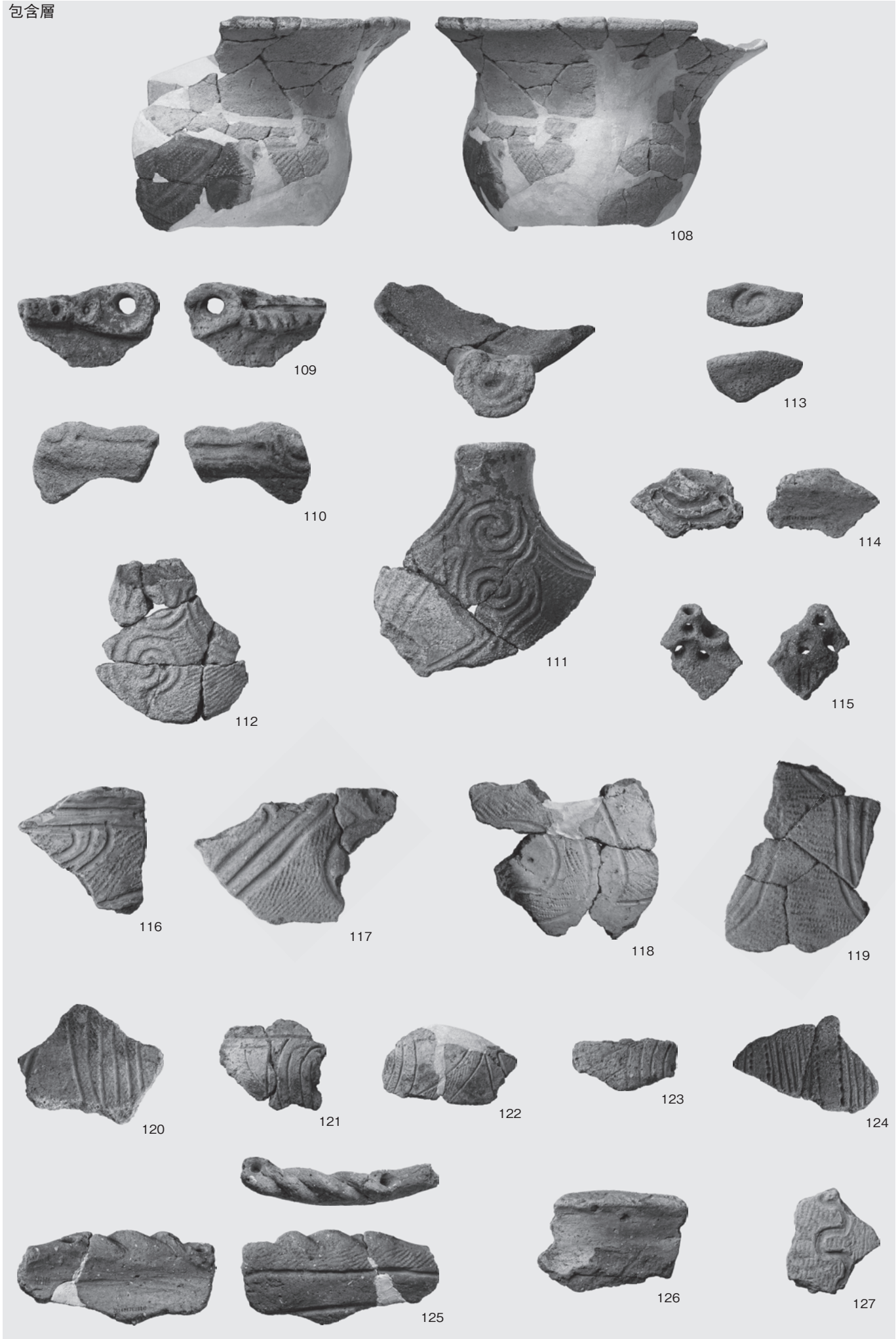


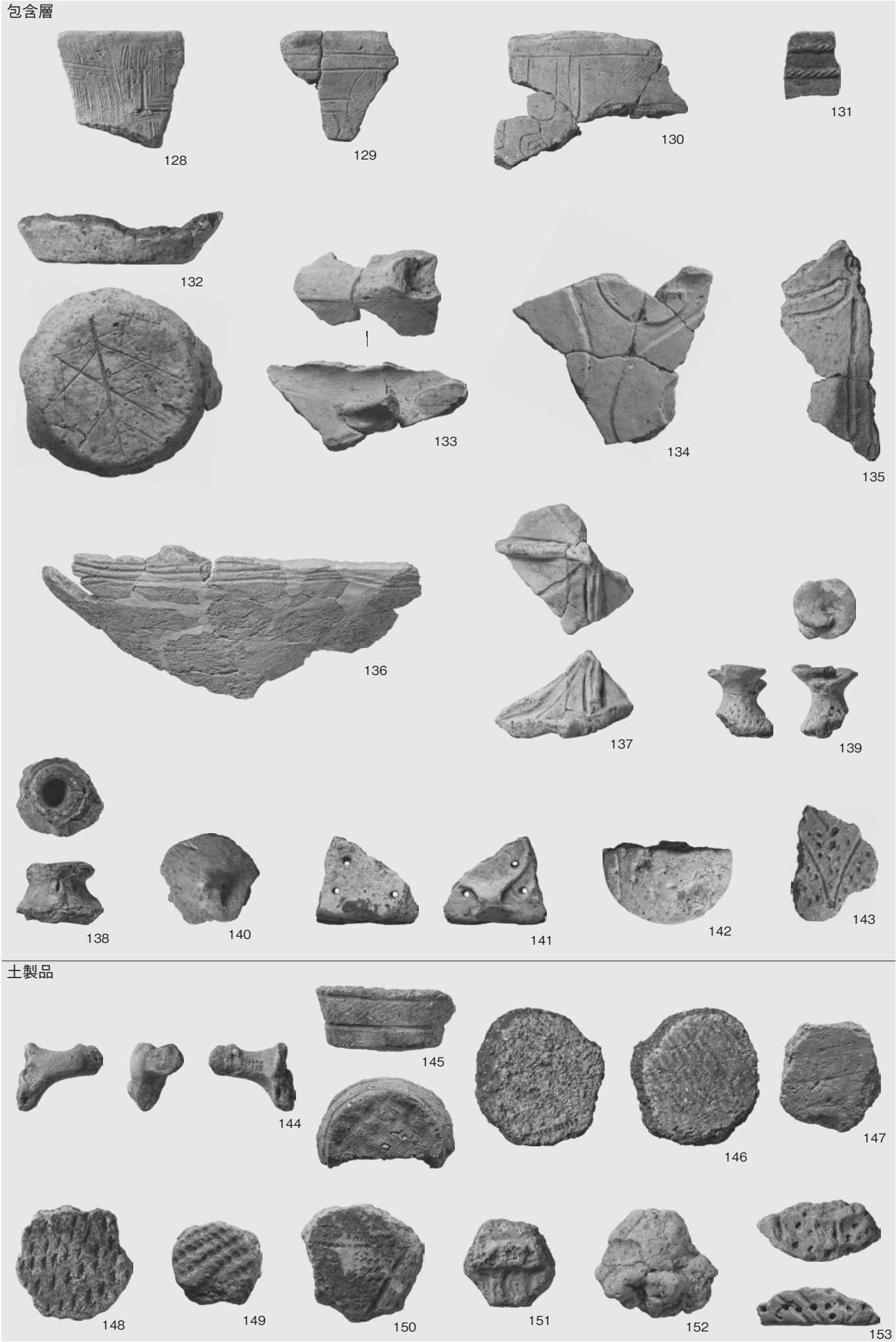
包含層

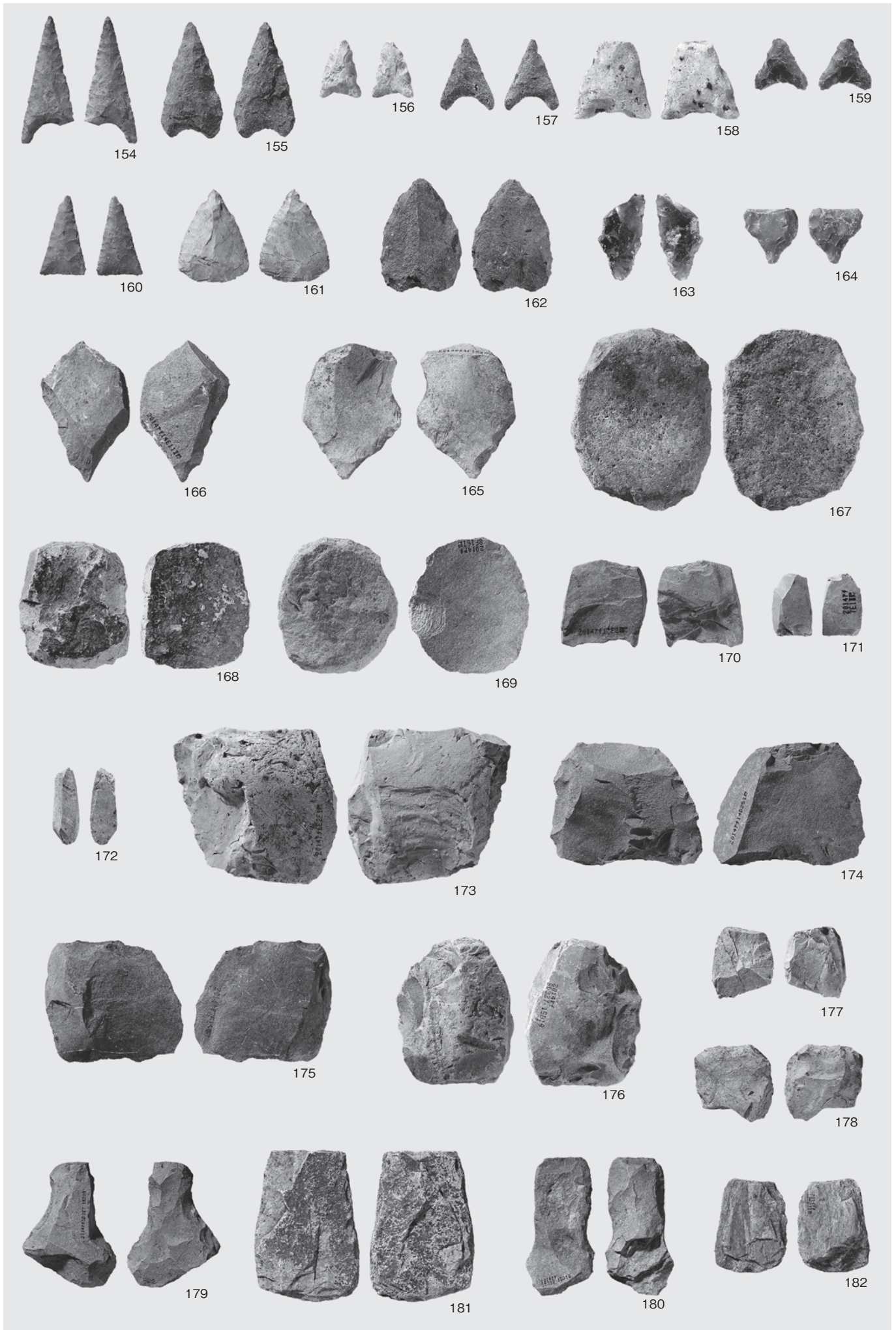


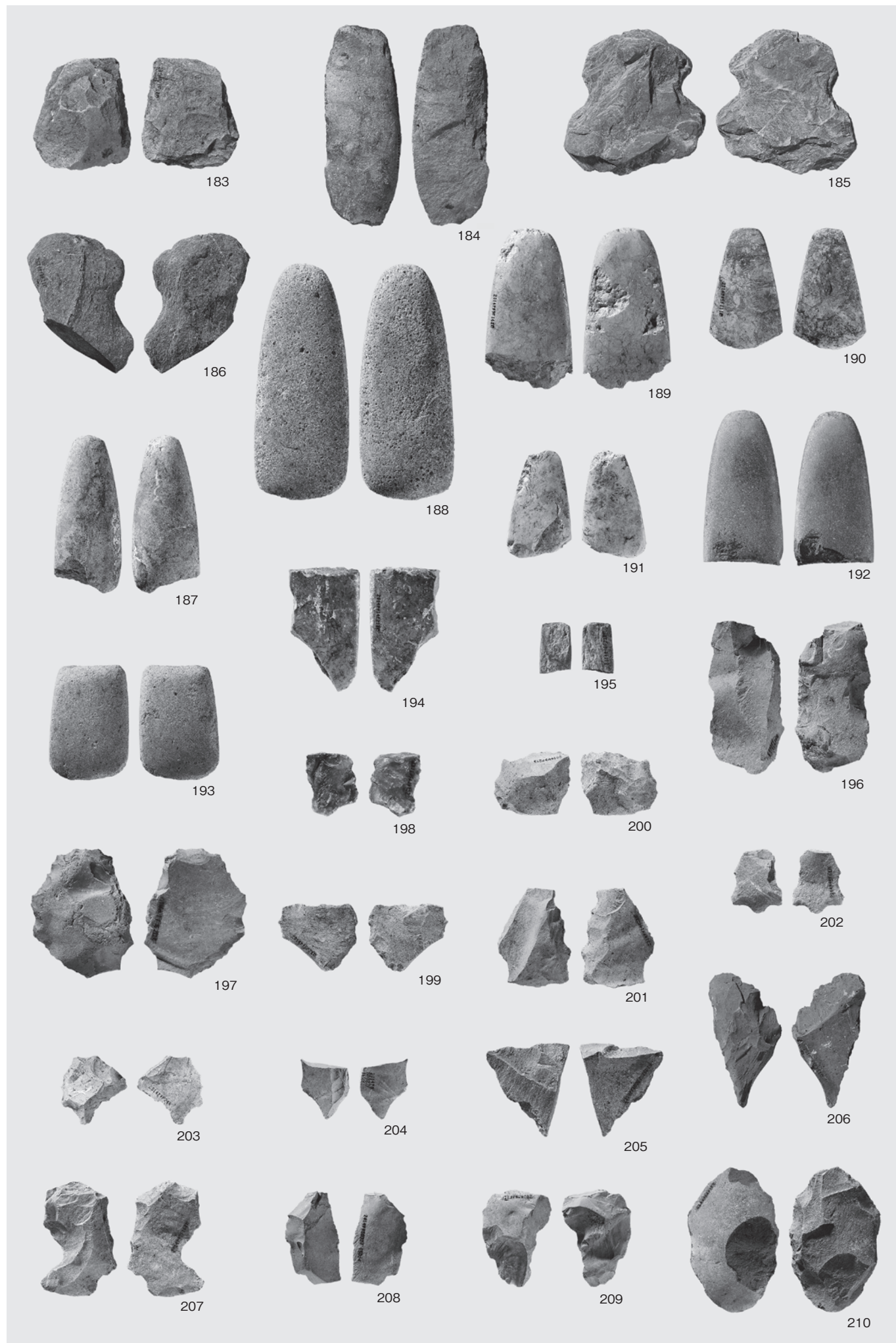


包含層



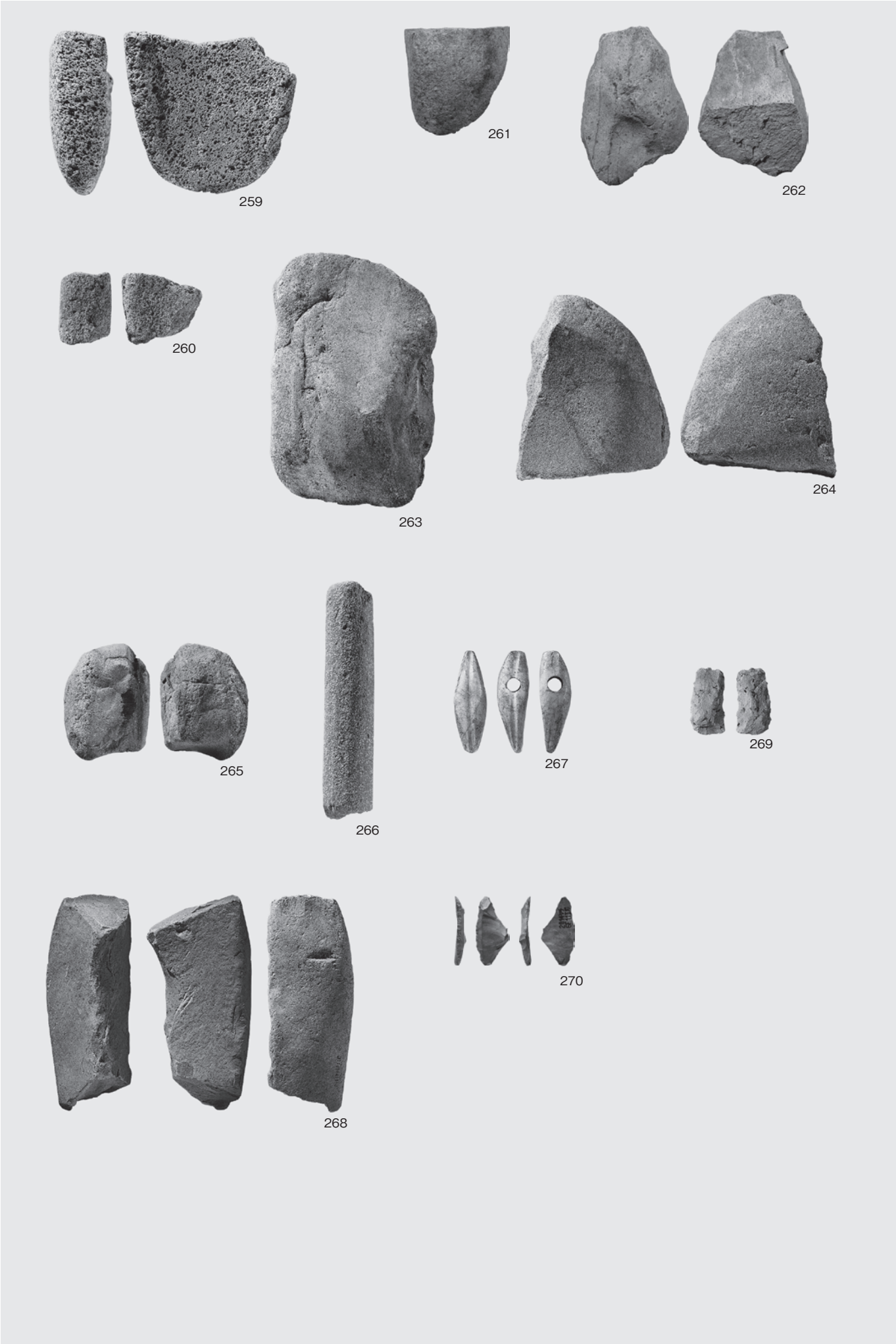


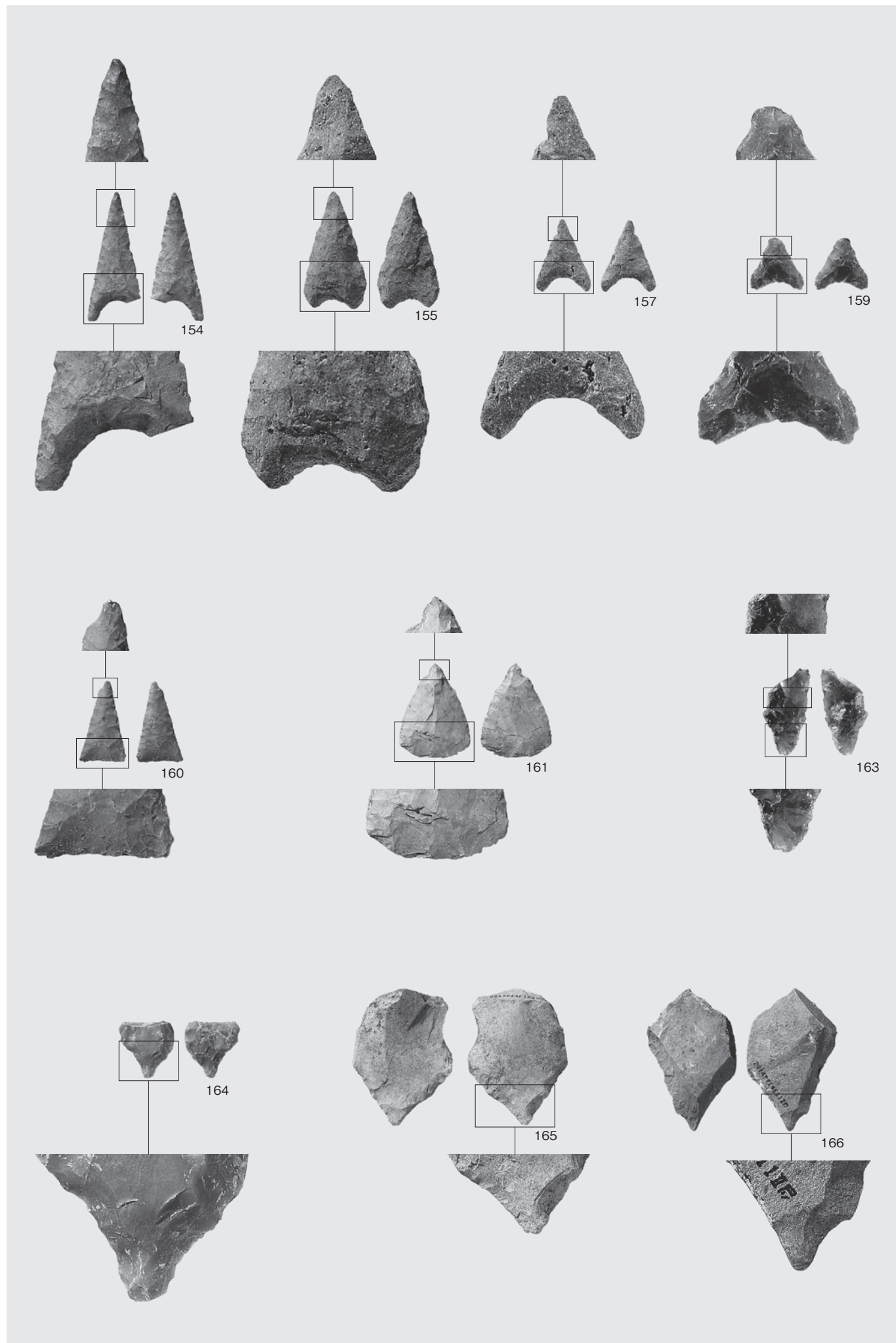


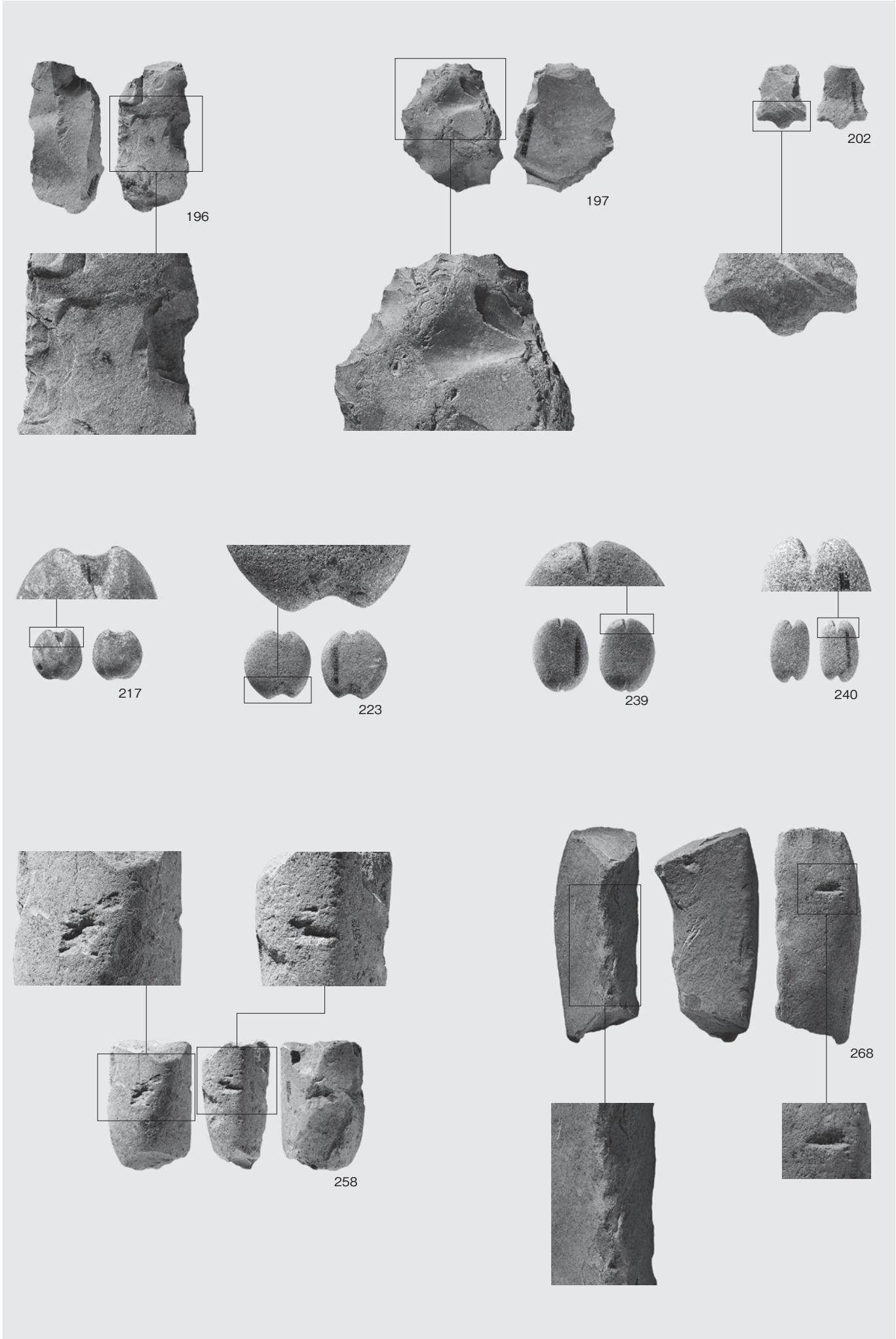




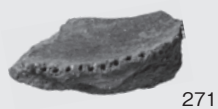








SI4



271

SB2



272



273



275

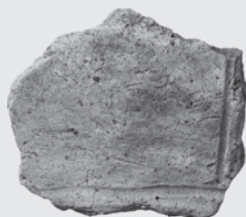
SB4



276



277



274



SK406



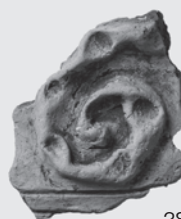
278



279



280



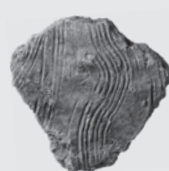
281



282



283



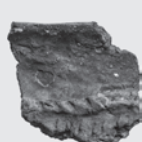
284



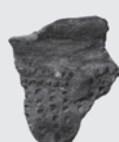
285



286



287



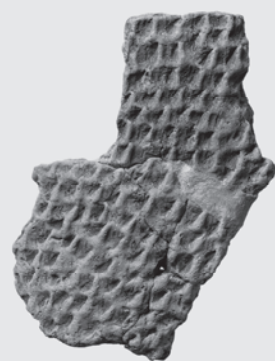
288



289



290



291



293



294



295



292

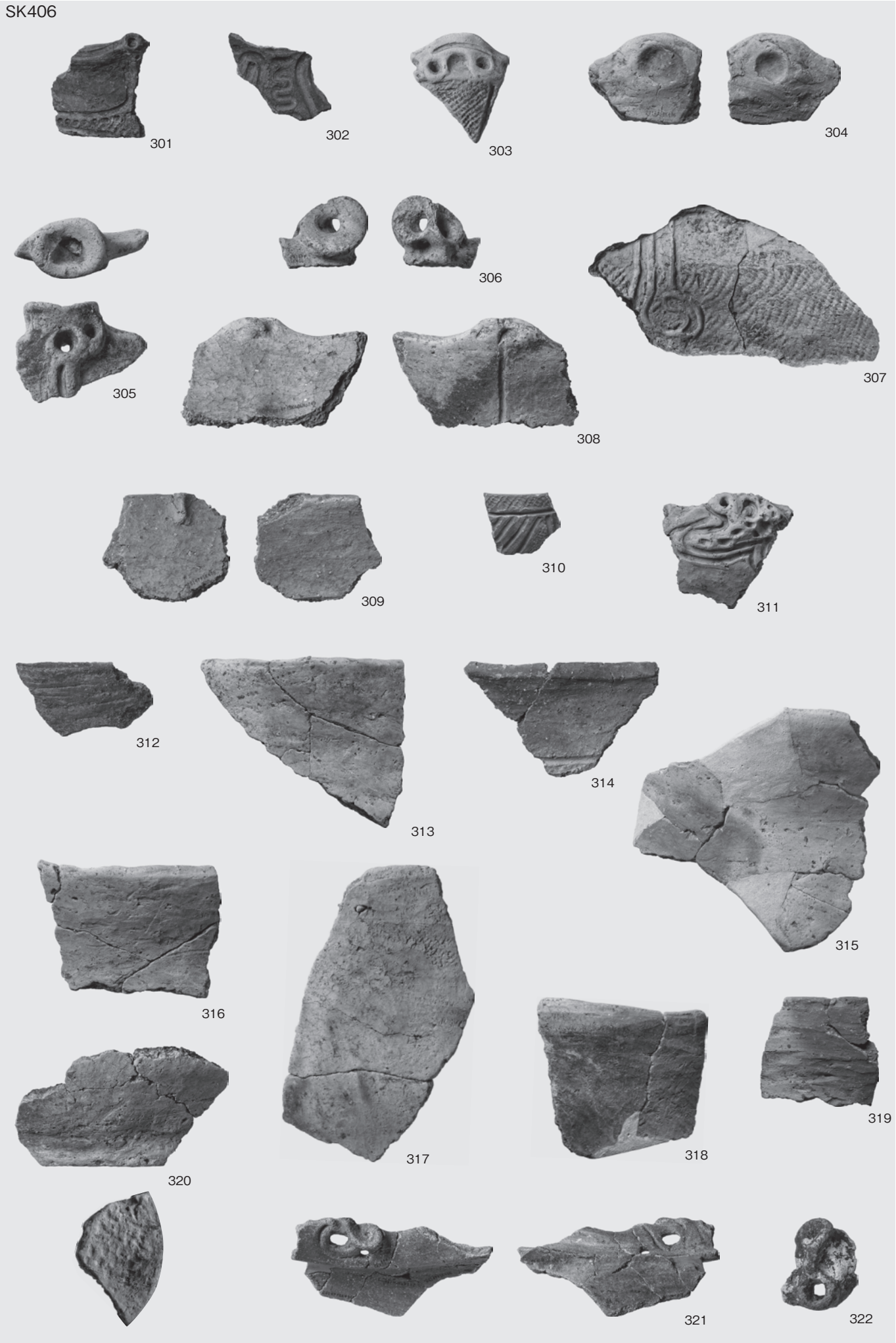


296

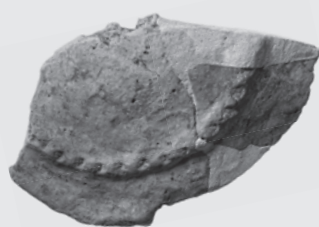
SK406



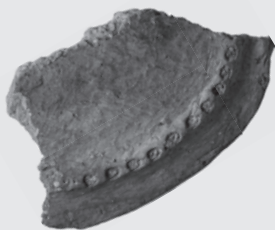
SK406



SK406



323



324



325



326



327

SK410



328

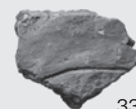
SK419



329



330



331

P407



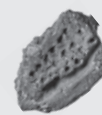
335



332

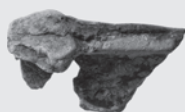


333



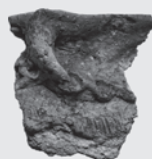
334

P413



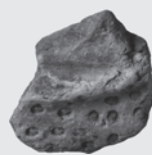
336

P420



337

P422



338

P423



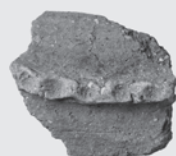
339

P424

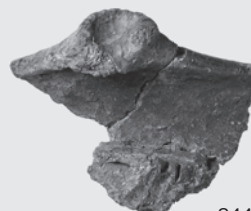


340

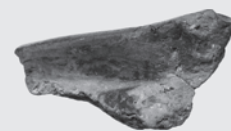
P440



343

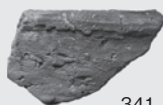


344



345

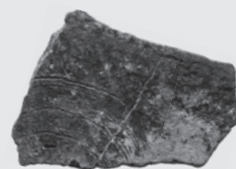
P430



341



347



346



348

P437



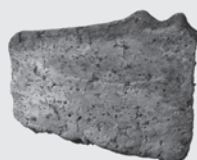
342

P495



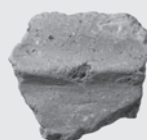
351

P476

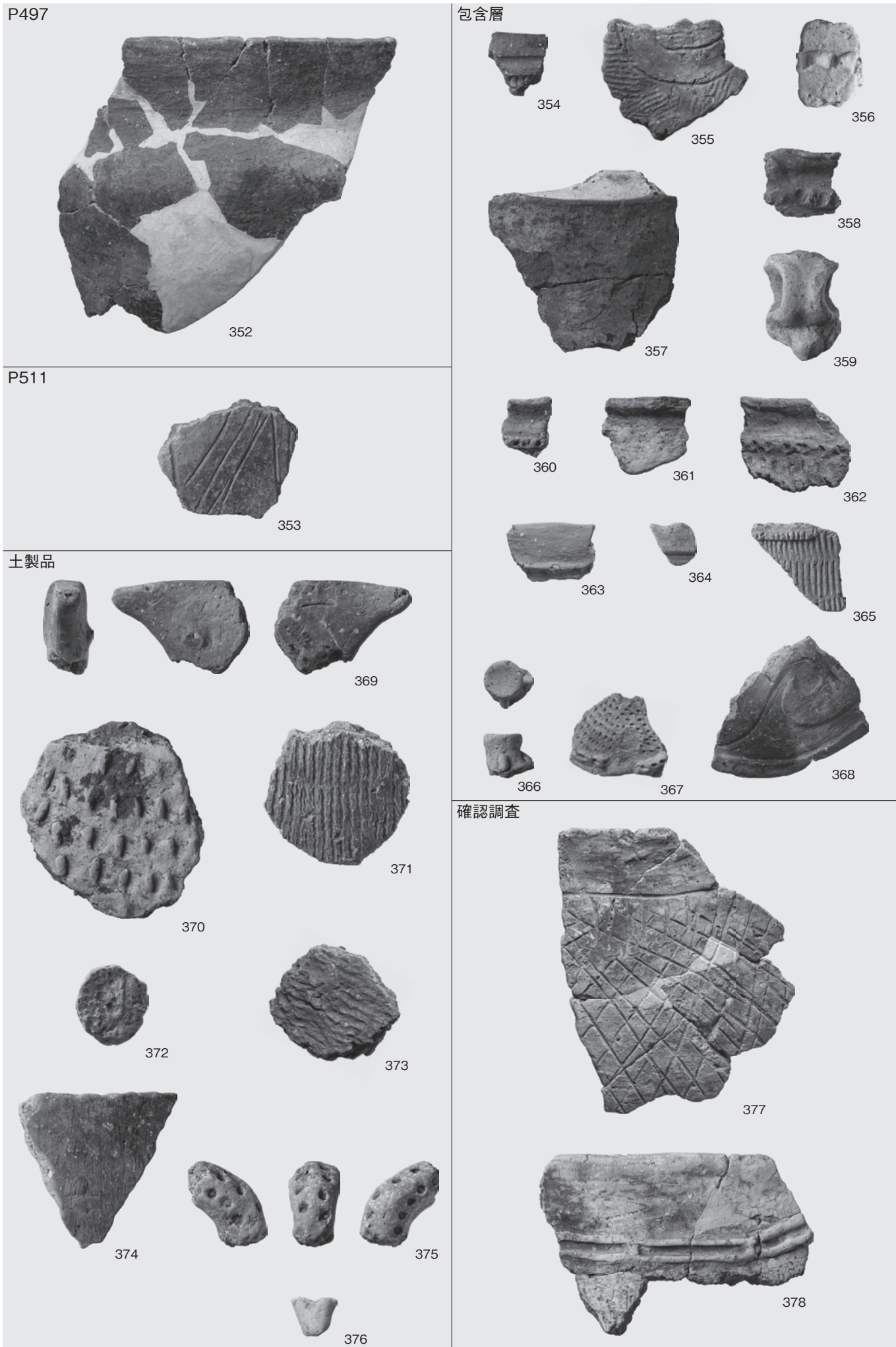


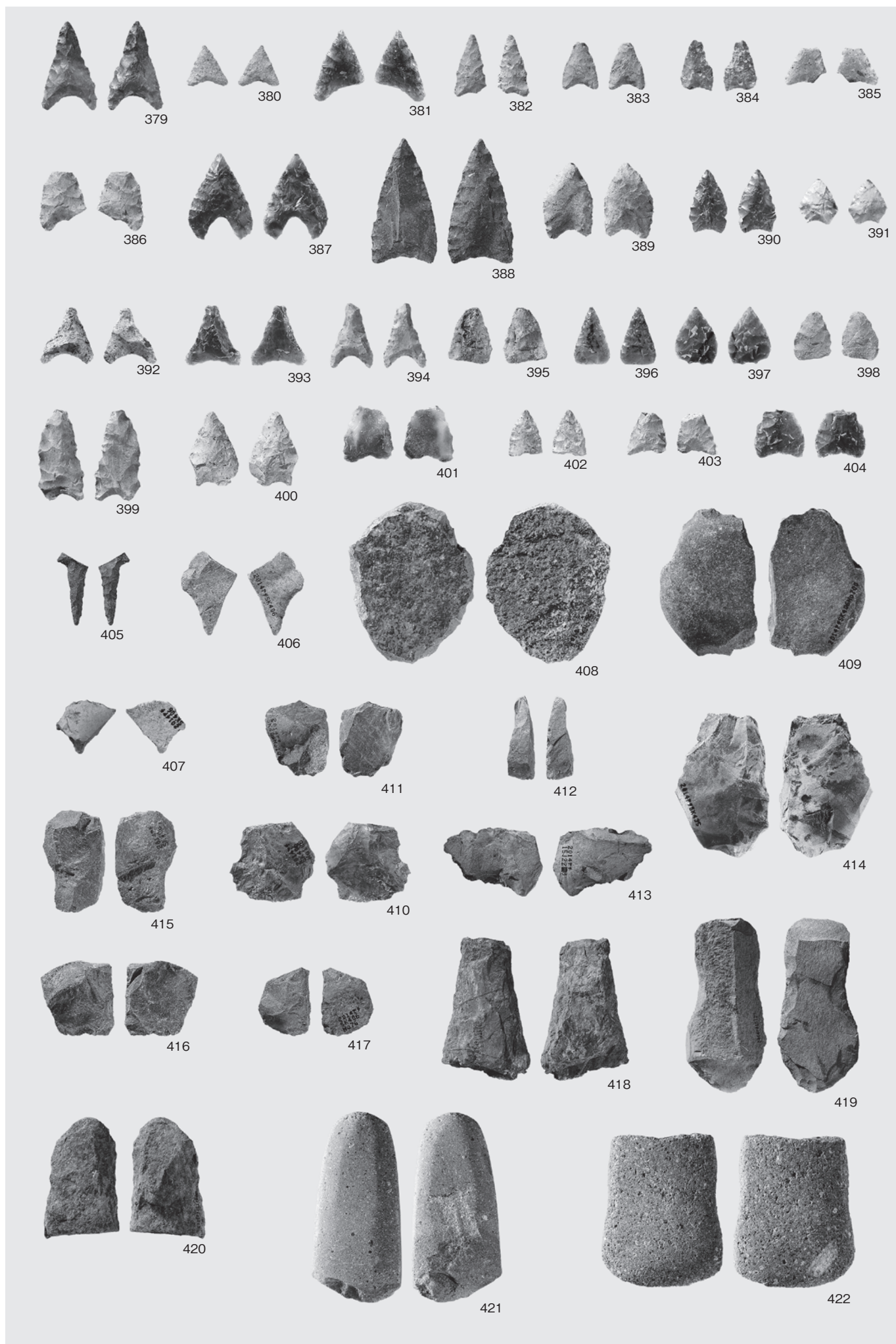
349

P491

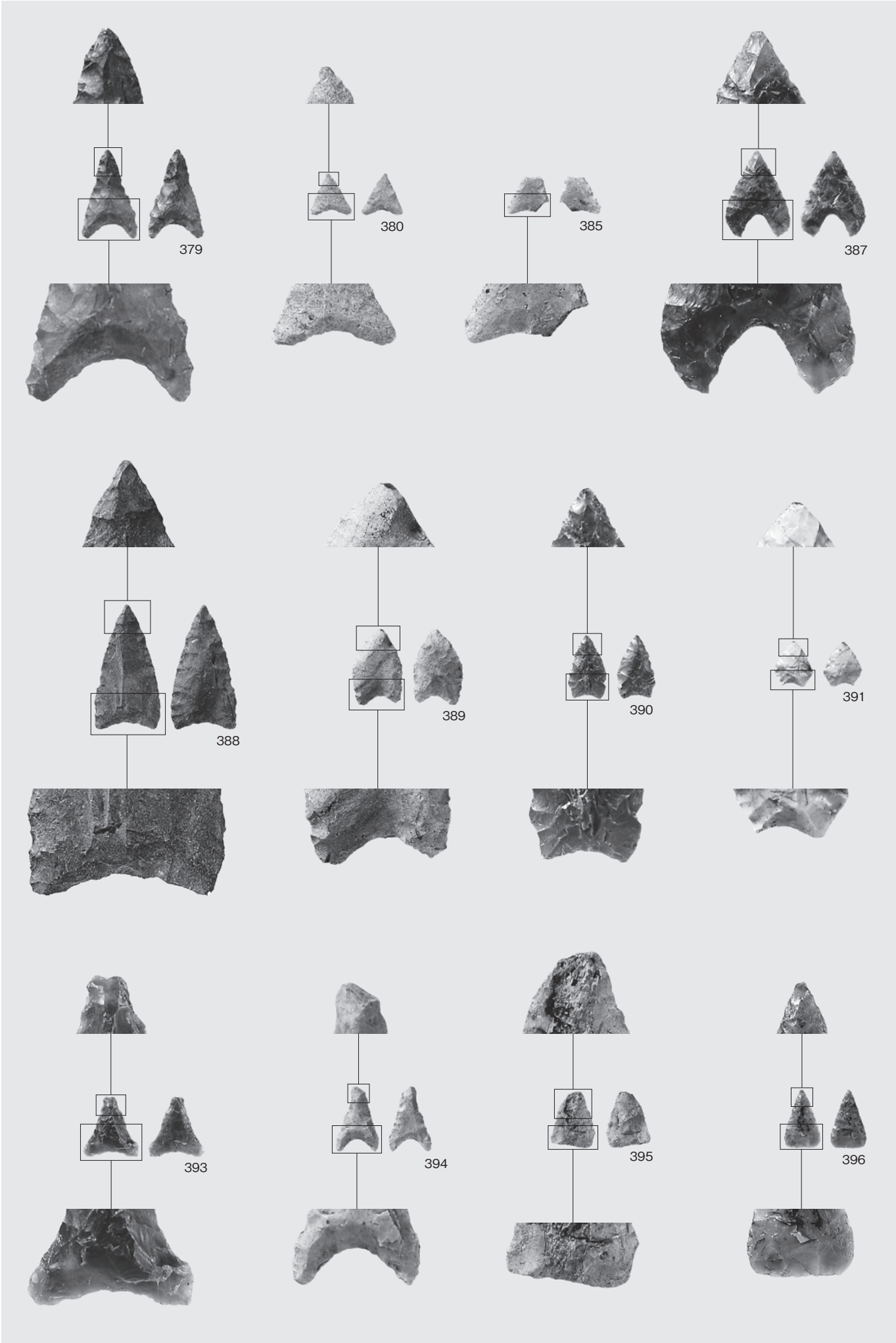


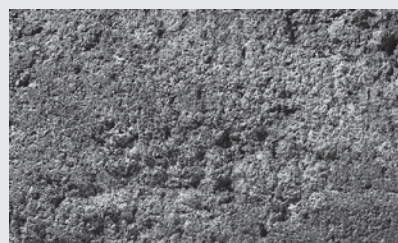
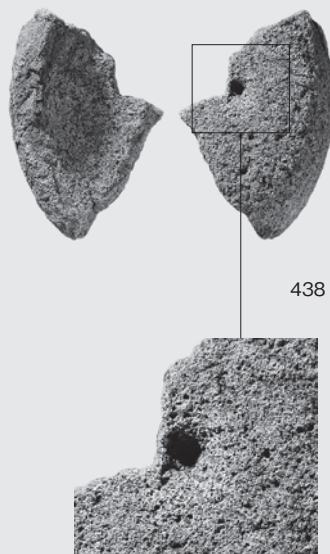
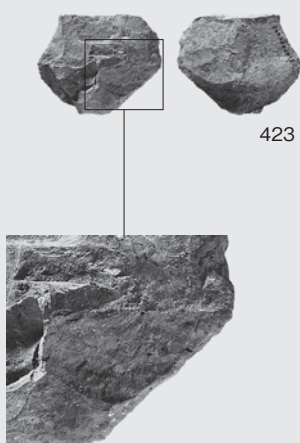
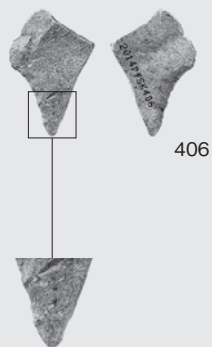
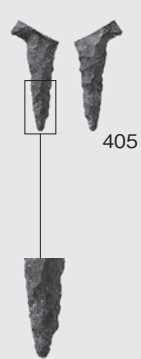
350











報告書抄録

ふりがな	やちいせき							
書名	谷内遺跡							
副書名	－県営畑地帯総合整備事業(舟山地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－							
巻次								
シリーズ名	魚沼市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	高木 公輔 桑原 健 パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	魚沼市教育委員会							
所在地	〒949－7494 新潟県魚沼市堀之内130番地							
発行年月日	西暦2019年3月8日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
やちいせき 谷内遺跡	にいがたけんうおぬましよしみずあざやち 新潟県魚沼市吉水字谷内 1942－2 他	152251	12	37度 12分 51秒	138度 53分 54秒	20140605～ 20140927	655	県営畑地帯総合整備 事業に伴う本発掘調 査
所収遺跡名	種 別	時 期	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
谷内遺跡	集落跡	縄文時代中期中葉 ～後期前葉	竪穴住居5軒、掘立柱建物 4棟、埋設土器4基、土坑 21基、性格不明遺構1基、 自然流路1条、ピット		縄文土器 92箱 石 器 50箱		縄文時代中期末葉～後期前 葉を中心とした集落跡	

魚沼市埋蔵文化財調査報告書 第14集

谷内遺跡

－県営畑地帯総合整備事業(舟山地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行 2019(平成31)年3月8日
 魚沼市教育委員会生涯学習課
 〒949－7494 新潟県魚沼市堀之内130番地
 TEL 025－794－6073
 印刷 株式会社 今 井 印 刷
 〒946－0024 新潟県魚沼市中原446－4
 TEL 025－792－1233